

ゼロの狩人

テアテマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古都ヤーナム

遙か東、人里離れた山間にある忘れられたこの街は、呪われた街として知られ、

古くから、奇妙な風土病「獣の病」が蔓延っている。

主人公は、その街で獣を狩る、

「狩人」だった。

これは、全てを終えた狩人と、ある魔法使いの少女の物語。

目次

01	： 狩人	1
02	： 月	9
03	： ゼロ	23
04	： ルーン	33
05	： 牙	54
06	： 親友	74
07	： 光	93
08	： 反攻	110
09	： 悪夢	131
10	： 依頼	143
11	： 疑惑	166
12	： 記憶	178
13	： 偏在	190
14	： 白の国	205
15	： 手紙	218
16	： 恐怖	230
17	： 胞子	245
18	： 闇	257
19	： 夜	273
20	： 慈悲	287

01：狩人

古都ヤーナム。遙か東、人里離れた山間にある忘れられたこの街では、古くから奇妙な風土病「獣の病」が蔓延していた。

獣の病の罹患者は、その名の通り獣憑きとなり人としての理性を失う。そして夜な夜な「狩人」たちが、そうした、もはや人ではない獣を狩っていた。

ヤーナムは、古い医療の街でもある。数多くの救われぬ病人たちがこの怪しげな医療行為を求め、長旅の末ヤーナムを訪れる。

……俺もまた、そんな救われぬ病人人の1人だった。

正確には、1人だったらしい。俺はこの街に着いてすぐ奇妙な輸血の医療を受けた。それより以前の記憶は、無い。

ただ、俺にその治療を施した男の言葉と、自筆のメモに残された「青ざめた血」という言葉。それだけが鮮明に脳裏に焼き付いていた。

それからはまさに、悪夢のような夜だった。いや、ある意味で悪夢だったのかもしれない。俺は青ざめた血を求め、獣を狩り、血を求め、夢の中をのたうったのだ。

結果として俺は全てを終わらせた。赤子も、ゲールマンも、月の魔物も手にかけて。

全てを狩り終えた俺は……空っぽだった。

感じる事など何もない。今まで散々振り回されて、何も理解する事も出来ずここまで来てしまった。

呆然とする俺の目の前に、突如として光り輝く鏡が現れる。

その淡い光の向こうで、何故だか自分を呼ぶ声が聞こえた気がした。

ああ、きつとこれで終わりなのだろう。これでいい。これでようやく、悪夢のない夜でゆつくりと休むことができる。

俺はその鏡をぐぐり抜け、そこで自分の意識がすうっと霞んでいくのを、感じていた。

*

場所は変わり、ハルケギニア、トリステイン王国。

そのトリステイン魔法学校の第1演習場にて、神聖なるサモン・サーヴァントの儀は執り行われていた。

進級のため使い魔を召喚するこの儀式を、ほとんどの生徒が1回で成功させている中、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、今日10回目の爆発を起こした。

周囲の生徒はすでに召喚を終え、ルイズが成功するのを待たされている。退屈に待たされる生徒たちの我慢も限界を迎えているらしく、爆発のたびにヤジが飛ぶ。

この日の担当教員であるコルベールも、さすがに見かねて声をかける。

「ミス・ヴァリエール、残念ですが今日はここまでにしましょう。あなたの召喚は明日また時間を取らせますので……」

「まっ、待つてください！ あと1度、1度だけでいいのでチャンスをください！」

しかし、ルイズは食い下がった。もともと彼女の気質をよく知るコルベールは、これで諦めることはない悟り、ため息をつきながら「あと1度ですよ！」と念を押した。

一方のルイズからすれば、実質的にこれが最後のチャンス。汗を拭い、ギョツと握りしめた杖を高々と掲げ、これまでで最も高らかに、召喚の呪文を読み上げる。

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ！ 神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！ 私は心より求め、訴える！ 我が導きに……応えなさい!!!」

ルイズが勢いよく杖を振り下ろすと、同時にそれまでとは比べ物にならないほど、大きな爆発が起きた。

あまりの衝撃に、数人の生徒は転げ倒れ、使い魔の動物の何体かが恐慌した声を上げた。

「ゲホッ、ゲホッ！ また失敗かよ、ルイズ！」

「何度やったって同じだよ！ほんとにゼロのルイズだな！」

再び、ヤジと怒号が飛び交う。悔しさのあまり唇を噛み締め、涙を浮かべるルイズ。思わず言い返そうとしたその肩を、コルベールが抱えた。

「え……先生?」

突然のことに、ルイズは目をパチクリさせる。見ればコルベールは、普段のにこやかな表情とはかけ離れた緊張した面持ちで、爆発の煙を睨んでいる。

「……………」

遅れてルイズが感じ取り、また遅れて生徒たちも気がついた。

何か、いる。

「おっ、おい、何かいるみたいだぞ!」

「ルイズがサモン・サーヴァントに成功したのか!」

「何、何が出てきたの!?!」

生徒たちは次々に騒ぎ出す。緊張感を醸し出しているのは、ルイズとコルベールだけ。

ルイズは、自分の使い魔の正体を知りたいが故に。そしてコルベールは、そのあまりに大きすぎる力を感じ取ったが故に。

少しづつ煙が晴れ、中からその正体が姿を現わす。

それは、1人の大柄な男。

狩人だった。

「あんた誰?」

最初に沈黙を破ったのはルイズだった。

幾度となく失敗し、最後に与えられたチャンスでようやく成功したサモン・サーヴァント。その呼びかけに応えたのは、いやに大柄の、黒装束の男。

黒革で出来ていると見られるコート、口元を不気味に覆うマントに、船乗りの船長などが好んで着けるような三角帽子。それらが全て、黒々とした革の色と相待ってなんとも言えないおどろおどろしさを醸し出している。

大男はひどく呆然とした様子で、周囲をぐるりと見渡す。先ほどまで狩人の夢の花畑にいたはずの彼だが、今は一転して青空の下の草原

にいる。

「これは……?」

「ちよつと、聞いている? 誰って言ってるの!」

彼の真正面、コルベールに肩を抱かれたルイズが、パイパイと小鳥のように甲高い声でまくし立てる。

「……………」

男は、懐から鎮静剤を取り出し一気に飲み下す。当然目の前で起きているのは現実であり、狂った彼の幻覚ではなく、それがわかると頭を抱えた。

こう見えて男は、静かにかなり混乱していた。そんな様子に、周囲の生徒たちが興味津々に声を上げた。

「平民だ! ゼロのルイズがサモン・サーヴァントで平民を召喚したぞ!」

「何か飲んでるぞ、行儀がなってないんじゃないか?」

「あはははは! 平民を召喚するなんてさすがはゼロのルイズね!」

「お、おいでもあれ、銃じゃないのか?」

騒ぎ立てていた生徒たちだったが、男の持ち物の仰々しさを見て、次第にまた違う種類のざわめきへと変貌していった。男の腰元には、ハルケギニアではあまり見る事のない無骨な散弾銃のようなものと、ノコギリのような鉋のような、乱暴な鉄の塊がぶら下げられている。「おいルイズ、サモン・サーヴァントが上手くいかないからってそこらへんの木こりを連れてくるなよ!」

しかし、飛び交うヤジの内のこの一言で、多くの生徒は木こりと納得してしまった。

「うるさいわね、ちよつと間違えただけよ」

ルイズはと言えば、そんなヤジに顔を赤らめながら、自分の肩を抱いていたコルベールの手を振り払い、向き直った。

「コルベール先生、やり直しを……」

「ミス・ヴァリエール、下がりなさい」

しかし、その声を、コルベールの低い声が遮った。

ルイズはハツとする。コルベールの様子からはただならぬものが

感じられる。いつもの温厚そうな表情はどこへやら、杖を向け、明らかな警戒心を男へと向けていた。

それもそのはず、コルベールには見えていたのだ。

男の中にある、人とは到底かけ離れたものの気配を。

男もやがてコルベールのそんな様子に気がつき、一転冷静そうな表情で……といっても帽子とマスクで目元しか窺い知れないが……コルベールを睨みつけた。

「あなたは、何者ですか」

「……それはこちらが聞きたいが」

初めてまともに話した声は、まるで獣の唸り声のような響きをたたえる。コルベールは緊張感が高まるのを感じ、生唾を飲んだ。

「私はコルベール、ここトリステイン魔法学校の教師です」

「トリステイン……?」

「ご存知ありませんか」

「聞かん名だが……その学校の教師とやらは、初対面の”人間”にそうも殺意を向けるものなのか?」

「ぐ……」

男はひょうひょうとした様子で、コルベールの警戒心をかわす。そして何かに気づいたようなそぶりを見せ、くくつと低く笑った。

「そうか……」 見えている”わけだな?」

「!!」

その瞬間コルベールは、相手が危険な存在であると判断した。生徒の安全を守るため、目の前の脅威を排除する必要がある。さもないければ、どこまで危険が及ぶか計り知れない。

だが、そんなコルベールの臨戦態勢とは裏腹に、男はそれまで纏っていた異様とも取れる気配を、サツと消してみせた。

「な……?」

「すまん、こちらも動揺している。おかしな話かもしれないが、自分がなぜここにいるのか、そもそもここはどこなのか、全く見当が付かん。ここへ来る直前の事まで曖昧という始末だ。もし説明していただけるなら、わざわざ”人”に戦いを挑むこともない」

男はコルベールが想像するよりもはるかに社交的な態度に打って出ていた。あつけに取られたコルベールだが、先ほど感じた匂い立つ獣の気配が、自分の気のせいだったとは流石に思えない……。

動揺しながらも、コルベールはここは穏便に収めることができると、判断した。

「その、あなたはここにいて、ミス・ヴァリエール嬢の召喚によってここへ呼び出されました」

「ほう、召喚」

「はい。それでその、これはサモン・サーヴァントというとても神聖な儀式であり、もしできるのであれば儀式を最後まで完了させたいのです。その後でよろしければ、こちらが説明しうる全てをお教えすることとができます」

「ふむ……」

男は、先程から不安そうにこちらを見つめる桃色髪の少女を見やる。なるほど悪意や獣性とはとても縁のない、普通の少女だ。狩人同士が鐘で呼び合い、召喚し合うこともあった男にとって、これが召喚だと言われれば納得できない部分もない。何故あの悪夢にいた自分が、などと不可解なことはあるのだが、それでもその要求を断る理由も、特段無いと判断できた。

「いいだろう、では儀式とやらにも協力する。その代わり、洗いざらい教えてもらうぞ」

「ありがとうございます……ミス・ヴァリエール、それではコントラクト・サーヴァントを」

「そんな、でも、ミスタ・コルベール！ 彼は平民の、人間です！」
今度は何か言い争いを始めてしまった。男はため息を吐く。あからさまに面倒なことになったことだけは間違いない。

それに……”臍の緒”を取り込み、体の血をほとんど月の魔物のそれと交換したはずの自分が、何故上位者にならずこうして平然と召喚されているのか。それにこの青空だ。青ざめた血の空に覆われる前だって、こんな空に見覚えはない。夜が明けたということなのかもしれないが……。

そう考えて空を見上げ、蒼穹に浮かぶあるものを見た男は、驚きのあまり目を見開いた。

「あれは……!?!」

「ねえ、ちよつと」

服の裾を引かれて見下げれば、小さな桃色髪。どうやら言い争いは済み、儀式とやらを始めるようだ。

「あんた、名前は？」

「……ジエヴオーダンだ」

「そう……ジエヴオーダン、まずちよつとかがみなさい。あんた、デカすぎ」

言われるがままに身を眺めると、顔をやたら近づけられる。

「……この暑苦しいの、外して」

「……?」

何をする気だ？ と怪訝に感じつつも、瘴気から呼吸を守る革のマントとマスクを下ろす。

少し痩せ気味の薄い顔が露わになると、周囲を取り囲む女生徒から、特に赤髪の娘から、おとお声が上がった。

「こ、ここ、光栄に思いなさい、よね。普通は貴族とこんなこと、できないんだから!」

「……早く済ませてくれ……」

「~~~~!! わかってるわよ!」

そしてルイズは杖を持ち、呪文をブツブツと唱える。そして、少しの躊躇いのあと、自分の唇とジエヴオーダンの唇を、そつと重ねた。

突然の接吻。さすがのジエヴオーダンも、これには面食らった。

長い夜の間、女つ気を求める感覚などとつくに無くしているが、気恥ずかしさまで忘れたわけではない。

が、ほんの1瞬でルイズは唇を離し、プイと振り返る。

「先生、コントラクト・サーヴァントが終わりました」

「うむ、こちらは1回で成功したようだね」

儀式と言っていたが、まさか勝手に婚姻の儀なんぞをされちやあいないだろうか？

ジエヴオーダンがそんな事を考えたのもつかの間、焼けるような痛みが左腕に走る。

「ぐっ……!?!」

慌てて手袋を外すと、そこには奇妙な文様が浮かび上がっていた。何事かと思案していると、コルベールが近づいてきて、その文様を覗き込みながらスケッチをとる。

「ふむ？ 珍しいルーンだな。それにルーンの上にあるこれは……印、かな？ こちらはさらに見たことがない」

「これが、お前らの言う儀式か？」

「ええ、儀式は完了しました。約束通り、お話し出来る限りを。皆さん、これにてサモン・サーヴァントの儀式は終了です。各々教室に戻ってください！」

コルベールがそう言うのと、生徒たちはそれぞれに呪文を唱え、ふわりと宙に浮いた。

「ルイズ、お前は歩いてこいよー！」

「あいつ、『フライ』はおろか『レビテーション』だつてまともにできないんだぜ」

そんな様を、ジエヴオーダンはあつけにとられて見ていた。

「………浮いてる」

「？ 何言ってるの、メイジが浮くのは当たり前じゃない」

「………メイジは人じゃないのか」

「はあ!? 人に決まってるじゃないの！ っていうかあんた、どこの田舎者よ！ こんなのが私の使い魔だなんて……ああもう、最悪だわ！」

理不尽な暴言を吐かれているが、ジエヴオーダンの耳には入らない。トリストテイン、メイジ、宙に浮く人、そして何より……2つの月。「ミス・ヴァリエール、私たちは歩いて行きましょう。ミスタ・ジエヴオーダン、よろしければ歩きながらお話を」

ここへきてジエヴオーダンはようやく、自分の身に何か尋常ではない事が起きたのだと悟った。

02：月

ジエヴオーダンとコルベールが情報を交わし、互いに違和感を感じるのにその時間はかからなかった。

ハルケギニア、トリステイン、魔法、メイジ、使い魔。

ヤーナム、狩人、獣の病、血の医療、医療教会。

お互いの知りうる情報のあまりの食い違い。ジエヴオーダンが、ヤーナムが遙か東の地であると言った時、ロバ・アル・カリイエという名に聞き覚えはあるか尋ねてきたが、それもまた的外れだった。

召喚という行為が珍しいというわけではなかったため、ジエヴオーダンはその点だけはすんなりと受け入れる事ができた。だがそれも、よくよく考えれば召喚される直前の状況からして大きな違和感がある。

そこからジエヴオーダンが導き出した答えは、一つ。

「異なる宇宙、ねえ」

場所は変わり、ルイズの部屋。時間もすっかり夜更け。

ルイズは夜食のパンをかじりながら、ジエヴオーダンの話を聞いていた。

上位者や宇宙のことなど、重要な内容を避けて話していたジエヴオーダンは、魔法もないようなとてつもない異邦の地から来た、ということにされ、夜までには解放されていた。

しかし、自らの主人ということになっただけらしいルイズにまで伏せておくわけには行かず、ジエヴオーダンは自分の考えを話さざるを得なかった

「私もヤーナムなんて土地は聞いた事がないし、そんなにその、医療？

魔法を使わないで病を治そうってそれが発展してる地なんて聞いた事がないし……ほんとにただ遠いところから来ただけじゃないの？」

「確かに、俺も記憶をなくしているせいでヤーナムの外の事までは詳しくくない。単に遠くから召喚されたと考えられなくもないが……問題はアレだ」

ジエヴォーダンが窓の外を指差す。

見れば、星がきらめく雲ひとつない夜空に、2つの月が仲睦まじく浮かんでいる。

「確かに私も『月が1つ』なんて話、聞いたこともないわ」

「月は俺たちの土地にとつてひどく重要な存在だったんだ。ただ見え方が異なるだけなら、遠方と言われても納得できるが、あんなにも小さく、そして2つあるなどというのは……」

ジエヴォーダンは月の魔物が2体で襲いかかってくる様を想像して、ゾツとしてやめた。

「でも……信じられないわ」

「そう言われてもな」

「月が1つなんて、お話なんだとしても支離滅裂すぎるわ。そんな宇宙がどこにあるのよ」

「それは……恐ろしく、遠くかもな」

ジエヴォーダンは窓の外を見つめる。数多の星がきらめくその宇宙が、ジエヴォーダンには美しいものには到底思えない。そこに渦巻くものが何者であるか、知っているからだ。

ルイズはそんなジエヴォーダンの様子を見て、ため息をつきながら続けた。

「何にせよ、もう諦めなさい。私も諦めるから。あなたは私の使い魔として召喚されたの、それが現実。それが異なる宇宙だろうが、異世界だろうがね」

「戻す方法はないのか？」

「戻りたいの？」

ジエヴォーダンは、少し黙り込み、自分が元いた世界と、自分の境遇について思い出した。

「……俺は自分の狩りを全うした。夜明けのために。ただそのために、宇宙の理にすら働きかけて」

「……宇宙の、なんですって？」

「俺は狩りを全うしなければならん。ヤーナムを……夜明けへと導かなければならない」

ジェヴォーダンは、ルーンの浮かび上がった自分の左手を見た。

「あの日、俺は俺で無くなるはずだった。」上に行くはずだったんだ。それがどうだ、今俺はこうして俺のままにいる」

「……………」

「ヤーナムは、まだ夜なのかもしれない……それを終わらせる事は俺の義務だ。狩りを全うするために、俺は帰らなくちゃならない」

ルイズは、ジェヴォーダンの言葉の半分も理解できてはいなかった。だが、それでも深刻そうなジェヴォーダンの様子から、それがただならぬ事情である事くらいは察することができた。

「でも、帰すなんて無理よ。あなた、私の使い魔だし。呼び出す魔法はあっても、帰す魔法なんてないのよ」

「サモン・サーヴァントといったか、あれをもう1度かけたらどうなるんだ？」

「……サモン・サーヴァントを再び使うには、一度呼び出した使い魔が、死なないといけないの」

「なんだと？」

流石に冷や汗が伝う。自分で悪夢の原因を潰した今、夢を見るとも限らないのだから、そこまでのダイスは振れない。

「死んでみる？」

「勘弁してくれ……」

どうやら、事態はジェヴォーダンが想像するよりずっと深刻だ。

上位者たちを相手に立ち回っていたほうが、まだマシだったかもしれない。そもそもこの世界に上位者はいるのか？ 異なる宇宙なのだから、ゴースや月の魔物の影響があつたとは考えにくい……あちらこちらに顔を出していたアメンドーズ程度なら、流れ着いていてもおかしくはない。

「……わかった、こうなつては仕方ない。しばらくはお前の言う使い魔とやらをやつてやろう」

「ちよつと、何よその言い方」

「ん？」

ルイズはジェヴォーダンの前に仁王立ちし、指をさしながら言い

放った。

「口の利き方よ。ご主人様に対してそんな言葉遣いをしていいと思ってるわけ?」

「…………ふむ」

立場上、ジエヴォーダンはルイズの使い魔というものをやると、先ほど明言した。その制約がある以上、行為でそれを裏切るわけにもいかない。

それでは、と、ジエヴォーダンは本来、血の眷属に対して使われる礼拝の姿勢をとった。

「なんなりとお申し付けくださいませ、ご主人様」

そのあまりにも無駄のない、優雅な動きに、ルイズは思わずあんぐりりと口を開ける。

「あ、あんた、爵位でももらったことあるの?」

「あいにく、メイジの称号はもらったことがないがな」

それに、穢れた血の眷属であるなど、知れたらこの小娘になんと言われるか。

それにしても、アンナリーゼをとびきり幼くしたらルイズのようになるだろうか、と、ジエヴォーダンは心の中で少し笑った。

「それで、使い魔というのは何をすればいいんだ?」

「そつ、そうね! まず使い魔は、主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ。使い魔が見たものは、主人も見ることができるようよ」

「…………俺が瞳で見ってきたものをお前が見たら、間違いなく発狂するな」

「…………何見てきたのよ…………ま、あんたじゃ無理みたいね。私、何も見えないもの」

ルイズはさらに続ける。

「次に、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とか」

「秘薬か、これか?」

ジエヴォーダンは懐から青白く光る液体の入った瓶を取り出す。

「えつ、それ秘薬なの!?!」

「ああ、脳を麻痺させる麻酔薬の類だな」

「そんな危ない秘薬ないわよ！ 秘薬つてのは特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……」

「ふむ、魔法への予備知識がないからなんとも言えんが、そこを解決できればなんとかできそうだな」

散々つばらダンジョンで物探しをしたジェヴオーダンにとって、何かを探してくるなど朝飯前のように思えた。

「そして、これが1番なんだけど……使い魔は、主人を守る存在であるのよ！ その能力で、主人を敵から守るのが1番の役目！ あんたは……」

「ああ、それは自信があるな」

ジェヴオーダンが身に付ける、様々な武具の数々。特に腰から下がる大柄な散弾銃と、ノコギリと鉋が合体した狂気の武器。血で浅黒く汚れたそれに、ルイズは少しだけ恐怖心を覚えた。

「でも、そんな敵なんて毎日現れるものでもないわね……だから、普段は雑用ね。洗濯や、掃除よ」

「……全くの専門外なんだが」

「はいはい。そのうち狩りが必要になったら言うわよ。さて、喋ったら眠くなっちゃったわ」

ルイズは、ブラウスのボタンを外し、下着まで露わにする。ジェヴオーダンはその様子に呆れ返ったように言った。

「お前、いくらなんでも不用心なんじゃあないのか」

「なんで？」

「普通は、男の目につくところで女は着替えはしないんじゃないか」

「あんた、使い魔でしょ？ なんとも思わないわよ」

完全に、男として扱わないという発言。ジェヴオーダンはさらに呆れた。ようは使い魔に、主人としての威厳を示しておきたいのだろう。

男扱いされない程度で傷つくようなジェヴオーダンではないが、仮にも自分の主人たる少女の器の大きさについては心配になる。

「じゃあこれ、明日になったら洗濯しといて」

そういうと、ルイズはジェヴオーダンの足元にパンツやキャミソ

ルなどの下着を投げ捨てる。

「……………」

「あ、あんたの寝床はその藁束だから」

ルイズが指差した先は、一応にと積み重ねられた藁束がある。だが、ジェヴオーダンは首を横に振った。

「俺は夜は眠らないんだ」

「え？ いつ寝るのよ」

「寝やしないさ……まあ、ルイズ様に手を伸ばす不屈きものか、それか獣でもないか見張っておくさ」

「……………ふん」

ルイズはそのままベッドにもぐる。本当は、わざわざ毛布まで用意していたというのに。人の好意を素直に受け取らないなんて、きつとろくなやつじゃない！

ルイズはそう決めつけて、パチンと指を弾く。部屋のランプが切れ、夜の帳が下りた。

ルイズがすっかり眠りにふけてからも、ジェヴオーダンは壁にもたれかかり、腕を組んで夜空を見つめた。

2つの月は怪しげな光を放っている。

「異なる宇宙、か……………」

自分は果たして、元の世界に戻り、上位者たることはできるのだろうか。

獣の声のしない夜の静けさに、ジェヴオーダンの心は落ち着かなかった。

月が巡り、夜が明ける頃、ジェヴオーダンは机に向かっていった。

ルイズの部屋にある本のいくつかを読み解こうとしたのだが、異なる宇宙であるためか、全く知らない字で書かれたそれを読み取ることができなかつた。そのためジェヴオーダンは、まずこの世界の字の解析から始めていた。

ルイズに教わる事も考えたが、あの性格を省みるに、スツと教えてくれるとも思えない。必然的に、自力で読む方が早いと判断した。

それに、獣がない故に手持ち無沙汰になってしまった夜の時間を、何かしらで消化してしまいたかった。

ヤーナムの血の医療のせいで肉体的な疲労など知らない狩人にとって、睡眠というのは本来必要ないものだ。

悪夢に囚われている時点で、自分からその理屈を捻じ曲げることはできない。

だからこそ……一息つき、ふと口を開けて眠りこけるルイズの姿を見て、あの鴉羽の狩人と最後に会った時のことを思い出した。

「……………」

考えても無駄なことだ。眠ってしまった彼女は、生きてるか、死んでるかも、わからない。その後の足取りは全く掴めていない。

もし、彼女も誰かに召喚したりされて、こちらの世界に来たりしているだろうか？

……いや、きつとないだろう。余計な考えを振り捨て、ジェヴォーダンは改めて本に向かう。

一晩費やしただけあって、簡単な単語程度なら読み取れるようになっていた。それでも、文書として読み起こすには、まだしばらくかかりそうな様子だ。

今夜は、これぐらいにしよう。ジェヴォーダンは取り出した本や、自前のメモなどを片付ける。そして、床に雑多に置かれた、昨日のルイズの下着を見やった。

「…………ハア」

狩人が、事もあるうに雑用。

様式美などを重視したりする狩人たちは、ある程度自らの狩人たることに誇りを持っている。ジェヴォーダン自身もそうだ。

だからこそこの待遇はあまりに不遇だ。何か、自分の立場を少しでも上げる工夫が欲しい……。

見れば、夜が明けてかなり立つ。そろそろ頃合だろう。

ジェヴォーダンはルイズのベッドに近づき、かかっている毛布を盛大に引っぺがした。

「きゃあああ！ なっ、何!？」

「朝だ」

「あ、ああ、はい……って、だつ、誰……？」

「……お前の使い魔だ」

「え……あ、ああ、そうか……」

ルイズは一瞬思考が停止していた。

ジェヴオーダンは今、いつもの狩人のマスクと帽子をしていない。その内に隠された精悍な顔つきは、よく見なくても恐ろしく美しく整ったものだ。

寝起きでそんな顔に覗き込まれていたものだから、ルイズも一瞬ドキリとしたのだが、すぐに「使い魔に何を！」と頭を切り替えた。

ベッドから起きだし、1つ大きなあくびをして、思いつきり伸びをする。そして気だるそうな顔をジェヴオーダンに向けた。

「着替えさせて」

「……何？」

「着替えさせてって言うてるの。そこの引き出しの中にあるから。早くして」

ジェヴオーダンはとびきり盛大にため息をついた。

「俺を下僕扱いか？」

「……？ 使い魔は下僕でしょ。貴族は下僕がいる時に、自分で着替えなんてしないのよ」

ルイズがそう言うのと、ジェヴオーダンは途端に険しい表情になった。

「なあ、昨日話した通り、俺のいた土地では”人間”と”獣”がいた”それが？”

「俺たち狩人が、扱いの複雑な仕掛け武器を用いたり、いわゆる様式美のようなものを求めたのは、それが自分は獣ではない、人にしかなし得ないことをしていることの誇示になるからだ」

ルイズはさらに首をかしげた。話の主体性がわからないと言う様子で。

ジェヴオーダンはさらに声のトーンを低くして言い放った。

「着替え1つ自分の手でできないというなら、俺はお前を人ではない

と判断するぞ」

「なっ!？」

「別に獣の病に罹患しているわけでないから、わざわざ狩る気もないが……たとえ主従関係が築かれているとしても、俺がお前をどう見るかまではお前に操作できんよ。俺は自分の主人を、着替え1つ自分でできない『畜生』か『犬』程度のやつなんだと判断して扱うことになるが……」

「あ、あんた、ご主人様に向かって……!」

怒りに震えるルイズに、ジェヴオーダンはやれやれという様子で答えた。

「それでいいなら着替えさせてやるぞ? 俺も自分の主人が人間以下で残念だが……」

「ぐううう、わかったわよ! もう! その代わりあんた、朝ごはん抜きだからね!」

主従関係はハッキリさせたい。だが、下僕に獣同然などと思われているのは、もつと気に入らない。使い魔ができれば、散々こき使つてやるつもりだったのに!

仕方なく、ルイズは自分で引き出しを開けるしかなかった。

ルイズとジェヴオーダンが部屋を出ると、近くの扉が開いて、中から燃えるような赤い髪の少女が現れた。

ルイズよりもいくばくか背が高く、シャツの胸元のボタンはいくつかはだけさせ、少女と呼ぶにはいやに大人っぽい雰囲気なたたえて……ルイズを見つけるなり、その印象が消え去り、子供のようにいたずらっぽく笑った。

「おはよう、ルイズ」

ルイズは顔をしかめ、嫌そうに挨拶を返す。

「おはよう、キュルケ」

「あんたの使い魔って、それ?」

「そうよ」

ジェヴオーダンを指差し、キュルケは鈴を転がしたように笑った。

「あつはっは！　ほんとに人間なのね、すごいじゃない！　それになかなか、いえ、かあなり男前じゃないの……」

キュルケはジェヴォーダンの顔をより近くで見ようと、ぐいと身体をすり寄せる。ルイズがギョツとした表情で止めようとするが、キュルケは聞かない。

「ミスタ、お名前をお聞かせいただいてもよろしい？」

「……………」

ジェヴォーダンは答えない。先程からルイズの様子が気にかかっていた。どうやら、この赤毛の娘とは不仲のように見える。

うつとりと顔を覗き込むキュルケを、とうとうルイズが引っぺがした。

「こいつの名前はジェヴォーダンよ！　キュルケ、離れてよ！」

「あーん、邪魔しないでよゼロのルイズウ、あなたには不釣り合いだわこんな男前、ねえミスタ・ジェヴォーダン？　いつそのことこんな胸ゼロ女ほっぽりだして、私の所へ来ませんこと？　きつとこの子のせいで、いろいろと苦労なさってるんでしよう？」

「だだだだ誰が胸ゼロ女かあっ！」

ルイズが血なまこになって怒るが、キュルケは涼しい顔でそれをかわす。

「私も昨日使い魔を召喚したのよ？　どうせ使い魔にするならこういうのがいいわよね、フレイムー」

キュルケが勝ち誇った声で言うと、キュルケの背後から真っ赤で巨大なトカゲが現れた。むんとした熱気が漂い、口からはちろちろと火が漏れている。

「これって、サラマンダー？」

ルイズが悔しそうに尋ねる。

「そうよー、火トカゲよー。素敵でしょー？　私の2つ名、『微熱』のキュルケにぴったりの気品溢れる使い魔だわー……ああ、あなたの使い魔だってあなたの2つ名にぴったりよ？　『ゼロ』のルイズにぴったりの、平民の使い魔でね！　あーっはっはっはっはっはっはっ！」

ああ、こりやあ俺もこいつがいけ好かん。

ジェヴオーダンは確信した。アリアンナの気品あふれた色とは少し毛色の違う、下品な色の匂いと振る舞い。”上”を求めるジェヴオーダンにとつて、これはひどく不快なものだった。

そこでジェヴオーダンは……少し、からかってやることにした。

「ルイズ、先ほどの人と獣の話覚えてるか」

「え？ ……服を着られるのは人だけ、それが獣ではない誇示になる、ってあれ？」

「そうだ、ルイズ……お前は正しく服が着れたから、間違いなく人と言っている。」 ボタンの閉め忘れもない” だろうからな”

そんなジェヴオーダンの言葉の意味を、ルイズは少し置いて理解し、にんまりと笑った。

「ええ当然よ！ 何せ私は獣でなく人だもの、シャツのボタンを1番上まで閉じるなんて、当たり前のようにできるわ！」

「そうだな。俺も自分の身なりは完璧に整えられているつもりだ。ボタンの閉め方を知らない奴など……人以下と言っているいな？」

「ええ……さしずめ『畜生』か『犬』かしら？」

2人が息を合わせて芝居掛かった喋りを展開するのを、キュルケはポカンとして眺めていた。ルイズがそれを見逃すはずもなく、さらに続ける。

「あらキュルケ、どうしたの、そんなにシャツの胸元を開けて？ まさかボタンが閉められないの？」

「複雑な仕組みだからな、人でないものにはそう器用にはできない。所詮は獣だ、人の言葉も解さんだろう」

「違くないわね。ジェヴオーダン、じゃあ目の前にいるこれが獣なら、何かしら？」

「ふむ……浅黒い肌に、赤い毛並み、ブクツと膨らんだ乳房。さしずめ牛だな」

「それね！ きつと、サラマンダーの餌として取り寄せられたに違いないわ。そうでなかったら貴族の、寄宿舎の廊下にいるはずがないものね！」

ルイズはもう笑いを堪えるのが限界だったようで「じゃあね、モー

モー！」と追い討ちをかけると、ジェヴオーダンと共に固まるキュルケの横を素通りして行つた。

「え……え……う？」

自分の身に起きた事がよくわかっていないキュルケは、少しづつ2人の話の内容が読み込めてきて、顔を真っ赤にした。

「だつ、誰が獣よ!? 誰が牛よ! キイイ~~~~!!! ゼロのルイズのくせして~~~~!!!」

キュルケは悔しさに地団を踏みながら、しかしシャツのボタンは1番上まできつちり整え直したのだった。

「ぷっ……くく、あつはっはっはっは!!」

キュルケが見えなくなるところまで来てから、ルイズはこらえきれず吹き出した。

「んひひひひ……あはははははは! ジェ、ジェヴオーダンあんた……やるじゃないの! ぷっくくく、う、牛って……!」

「……実を言えば身なりで色を出せるのも人ならではのな。まあ、あの手の輩にはこういうのが1番効く」

「違くないわね……にしても牛……にやはははははは!」

ルイズはこのことで小1時間笑うつもりのようだ。よほど気分が良かったのだろう。

それにしても……と、ジェヴオーダンは思考を巡らせる。先ほどの様子を見るにルイズは、あのキュルケという娘にさんざんいじくられてきたようだ。

そしてあのキュルケという娘、確か『微熱』とかいう2つ名で呼ばれていた。そしてルイズは『ゼロ』と……。

どうもジェヴオーダンは違和感を感じていた。確かにこの地では魔法が生活の主となっているようだが、ルイズが魔法を使っているところをまだ一度も目にしていない。

そして、『ゼロ』の2つ名。なんとなく察しはついていたが、それを本人に聞くようなマネはさすがにできなかつた。

*

トリスティン魔法学校の食堂は、学園の敷地内で一番背の高い、真ん中の本塔にあった。

食堂の中には、100人は座れるであろう長いテーブルが3つ並べられている。

その真ん中、2年生の生徒が座るテーブル。ルイズの席の後ろ、床に置かれた皿を見て、ジェヴォーダンはどうも何度目かもわからないため息をついた。

「……ほんとなら、あんたみたいな平民はこの『アルヴィースの食堂』には一生入れないの。その上ほんとなら使い魔は外のところを、あんたは私の特別な計らいで、床」

「……俺は『人扱いをしろ』と言っているんだが」

「仮にそうだとして、それと貴族と同じ食事をさせるってのとは違うでしょ?」

それは尤もだがジェヴォーダンが言っているのは床で食えというのがただけじゃないという話だ。この小娘は……と呆れつつ、ジェヴォーダンは皿を拾った。

「ちよつと、どこ行くのよ」

「中庭に行く。ベンチがあったろう。そうでなくたって犬食いはごめんだ」

「あんた、私が特別に計らったって言ったでしょ!? いいからここで食べなさい!」

しかし、ジェヴォーダンは聞く耳を持たず食堂から出て行ってしまった。それどころか、奴のやたらと目立つ背の高さとルイズの声の大ききで、まわりからはクスクスと笑い声上がる始末。

本当はここで少しおこぼれをやって主人としての威厳を示してやろうと思っていたのに……。

ルイズはそんなことを考えたが、先ほどのジェヴォーダンの言葉を思い出す。

『人扱いをしろ』

ジェヴォーダンが元いた宇宙について話した時といい先ほどの

キュルケの時といい、あいつはなぜか人である事を大事にしてる、獣ではないってことを言い張ってる。

それはあいつの言ってた、獣の病つてもものせいかもしれないけど。獣の病つて、一体なんなんだろうか？

考え事が巡ってしまい、ルイズは祈りの言葉が読み上げられているのに気がつかず、ハツとして慌てて手を組んで、また周囲に笑われてしまった。

03：ゼロ

血さえ入れれば大概のことは何とかなる狩人にとって、食事は決して必要不可欠な事ではない。

だが、獣狩りの夜のせいで長らくまともな食事をとっていなかったジエヴオーダンは、この世界の食事を少しだけ楽しみにしていた。

それに、ジエヴオーダンの知る料理というのは……あまり美味しいものではなかったというのも大きい。

だが、悲しいかな皿の上には水のようなスープと固そうなパン2つ。これでは何も変わらない。

結局ジエヴオーダンにとってハルケギニア最初の食事は最悪なものになった。

食べ終えた頃にルイズに呼び出され、向かった先は魔法学院の教室。ジエヴオーダンとルイズが中に入っていくと、先に入っていた生徒たちが一斉に振り返り、クスクスと笑い始める。

先ほどのキュルケもいた。男たちに取り囲まれ、女王のように祭り上げられているが、シャツのボタンはきっちり閉じられていた。

ジエヴオーダンは、様々な使い魔たちが集まる教室でほんの少し緊張を高める。どれか1つでも襲ってくるものなどないか、少し疑問に感じてしまったのだ。

ルイズが席の1つに腰掛け、ジエヴオーダンはすぐ後ろの壁にもたれて腕を組む。見渡せば、なるほど暴れるような使い魔はいなさそうだ。

そもそも今ジエヴオーダンは、ルイズの指示でノギリ鉈を部屋に置いて来ており、コートに隠すならいいと持った銃と、あとは火炎瓶や投げナイフ程度しか持っていない。帽子とマスクも外し、手甲もしていないため、実際戦闘になった場合勝てるかどうか危うい。

そう言った意味での緊張だったが、杞憂だったようだ。

扉が開いて、茶色のローブの女性が入って来た。ふくよかで優しそうな表情を浮かべ、教室を見回すと、嬉しそうに微笑んだ。

「皆さん、春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシユヴルー

ズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

シユヴルーズは再び教室をぐるりと見渡し……壁にもたれて腕を組む、ジエヴオーダンを見つけた。

「変わった使い魔を召喚したものですね、ミス・ヴァリエール」

シユヴルーズがとぼけた声で言うと、教室中がどっと笑いに包まれた。

そんな様子にジエヴオーダンは……半歩前に出たかと思うと、簡易拝謁の姿勢で礼をした。

その優雅で洗礼された動きに、教室の笑い声が消える。シユヴルーズは嬉しそうにルイズを見た。

「気品のある使い魔ですわね。ミス・ヴァリエール、とても良い使い魔を召喚したものです」

「いつ、いえっそんな、そんなことないです！ ジエヴオーダン、余計なことしないでいいから！」

しかし、ルイズがそう謝ると所々からまた笑いが起きた。

「ゼロのルイズ！ 芸を仕込むならちゃんとやっとな、召喚できなかつたからって平民を連れてくるならさー！」

その声にルイズは立ち上がり、可愛らしい澄んだ声で怒鳴る。

「違うわ！ ちゃんと召喚したもの！ こいつは……こ、こういうやつなだけよ！」

「嘘つくな！ 『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろ？」

また、教室の中の男子生徒の何人かが笑う。

「ミセス・シユヴルーズ！ かぜっぴきのマルコリヌがわたしを侮辱したわ！」

握りしめた拳でルイズは机を叩く。

「かぜっぴきだと？ 俺は風上のマルコリヌだ！ 風邪なんか引いてないぞ！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪も引いてるみたいなのよ！」

マルコリヌと呼ばれた男子生徒も立ち上がり、ルイズを睨みつける。シユヴルーズ先生が手に取った小ぶりな杖を振ると、2人とも糸

の切れた操り人形のように、すくとんと席に落ちた。

「ミス・ヴァリエール。ミスタ・マルコリヌ。みつともない口論はおやめなさい。お友達をゼロだのかぜつぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？」

「ミセス・シユヴルーズ。僕のかぜつぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

クスクス笑いが漏れる。シユヴルーズは厳しい表情で教室を見回し、杖を振った。クスクス笑いをする生徒たちの口に、どこから現れたものか、ぴたつと赤土の粘土が押し付けられる。

「あなたたちは、その格好で授業を受けなさい」

クスクス笑いがおさまった。

その様子を見て、ジェヴオーダンは静かに感心していた。なるほどこれは、魔法とは便利なものだ。そしてそれと同時に、自分の主人の扱いもずいぶんと酷いものだ。

「では、授業を始めますよ」

そこから先の授業内容を、ジェヴオーダンはとても注意深く、一言も聞き漏らすまいと耳を立てていた。

魔法の四大系統、『火』『水』『土』『風』、そして今は失われた魔法系統『虚無』の、合わせて5つの系統。

自らを『赤土』と名乗ったシユヴルーズは、その中でも『土』系統はもっとも重要なポジションを占めていると語る。

「土系統の魔法は、万物の組成を司る、重要な魔法であるのです。この魔法がなければ、重要な金属を作り出す事もできないし、加工することもできません。大きな石を切り出して建物を建てることもできません。農作物の収穫も、今より手間取ることでしょう。このように『土』系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのです」

ジェヴオーダンは、なるほどと感嘆を漏らした。この宇宙では、魔法が生活そのものにかなり密接に関係している。単純に生きる術として染み付いているのだ、これは単に、便利になるだとかそういう次元を超えている。

であれば、魔法が使える貴族と、使えない平民の地位の差はなるほ

ど明白だ。これがこの宇宙でのパワーバランスなのだろう。

「今から皆さんには『土』系統の基本である『錬金』の魔法を覚えてもらいます」

シユヴルーズは、机の上に並んだ石ころに向けて杖を振り、短いルーンを唱える。

石が一瞬光り輝いたと思うと、ピカピカと輝く金属に変貌していた。

石が真鍮に変わった……？ ジェヴオーダンが目を見開く。

「ゴゴ、ゴールドですか？ ミセス・シユヴルーズ」

キュルケが身を乗り出して尋ねた。

「いいえ、真鍮です。ゴールドを精製できるのは『スクウェア』クラスメイジだけです。私はただの……『トライアングル』ですから」

ジェヴオーダンは、目の前に座るルイズに耳打ちする。

「スクウェアやトライアングルというのは、メイジとしての位を現す言葉か？」

「何よ、授業中よ……そう、系統を足せる数のことよ。それでメイジのレベルが決まるの。『土』系統の魔法はそれ単体でも使えるけど、『火』の系統を足せば、さらに強力な呪文になるの」

「なるほど。それで3系統足せるものは『トライアングル』、4系統足せるものが『スクウェア』というわけか」

「不気味なほど飲み込みが早いわね、あんた。ちなみに2系統足せるのが『ライン』メイジ。シユヴルーズ先生みたいに『土』『土』『火』、3つ足せるのが『トライアングル』メイジ」

「同じ系統を足すこともできるわけか……興味深いな」

「あんた、そんなに魔法の事知ってどうするつもり？」

「……啓蒙を得るためだ」

「え？」

そんな風に喋っていると、シユヴルーズ先生に見咎められた。

「ミス・ヴァリエール！ 授業中の私語は慎みなさい」

「は、はい！ すいません……」

「おしゃべりする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょう」

「え？ わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてごらん下さい」
しかし、ルイズは立ち上がらない。困ったようにもじもじするだけだ。

「……？ どうした？」

ジェヴォーダンが聞くが、答えない。

「ミス・ヴァリエール！ どうしたのですか？」

シュヴルーズ先生が再び呼びかけると、キュルケが困った声で言った。

「あの、先生、やめておいた方がいいと思いますけど……」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケは、きつぱりと言った。教室のほとんど全員が頷いた。

「危険？ 何が危険だと言うのです？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやってごらん下さい。失敗を恐れていては、何もできませんよ？」

「ルイズ。やめて」

キュルケが蒼白な顔で言う。しかしルイズは、そう言われれば言われるほどワナワナと震え、やがて勢いよく立ち上がった。

「やります」

そして、緊張した顔で、つかつかと教室の前へと歩いていった。

隣に立ったシュヴルーズはにつこりとルイズに笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。鍊金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

ゆつくりと杖を振り上げたルイズを見て、ジェヴォーダンは何やらただならぬ気配を感じた。さきほどのキュルケの様子といい、他の生徒たちといい、何か妙だ。目の前の女子生徒が何故か椅子の下に隠れる。ジェヴォーダンは何となく、何が起きるのかを察して自らも身体を伏せた。

そしてその判断は大当たりだった。ルイズが短くルーンをとまえ、杖を振り下ろした瞬間、強烈な爆発音と衝撃が教室中に響き渡った。爆風をモロに受けたルイズとシュヴルーズは、黒板の下で伸びている。爆風に驚いた使い魔たちが暴れ出し教室はパニック状態となった。

「だから言ったのよ！ あいつにやらせるなって！」

「もう！ ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「俺のラッキーが蛇に食われた！ ラッキーが！」

ジェヴオーダンが身を起こす。教室はもはや阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

シュヴルーズ先生は倒れたまま動かない。たまに痙攣しているから死んではいないようだ。

ルイズは……むくりと起き上がる。見るも無残にボロボロになった制服。煤で真っ黒になり、綺麗だった桃色の髪もグシャグシャ。

しかし、大物ぶりはさすがというかなんというか……。大騒ぎの教室を意に介した風もなく、頬についた煤を、取り出したハンカチで拭きながら、淡々と言った。

「ちよつと失敗したみたいね」

当然、他の生徒たちからは怒号が飛び交う。

「ちよつとじゃないだろ、ちよつとじゃ！」

「いつだって成功確率ゼロじゃないか！」

「ゼロのルイズ！」

ジェヴオーダンは服についた煤を払いながら、ククツと喉で笑った。

「やはりそういう意味でのゼロ、か……大したものだ」

*

爆発の影響でボロボロになった教室を、ルイズとジェヴオーダンが片付けていた。

掃き掃除をルイズに任せ、男手のジェヴオーダンが崩れたガレキや

机を片付ける。

淡々と掃除だけが続ける2人に、会話はなかった。

「……なんで何も言わないの」

沈黙を破ったのはルイズの方だった。しびれを切らしたように、しかしジェヴォーダンの方を見ずに言う。

そんなルイズの様子を知ってか知らずか……ジェヴォーダンも手を止めず、ルイズの方を見ようとはしない。

「……何がだ」

「みんながなんで私をバカにしてるか、わかったでしょ」

ルイズは不安だったのだ。自分が魔法を失敗するたび、必ず自分をバカにする言葉だけが飛んでくる。みんなが自分を蔑み、嘲笑い、去っていく。それが当たり前だった。自分の失敗を初めて見たジェヴォーダンが、何も言わず黙っているのが、耐えられなかった。

「……何がだ」

「……！ ああ、もう！」

そしてとうとう、ルイズの感情は爆発した。

「見てわかるでしょ！ 成功確率ゼロ、出来る魔法はゼロ、とにかくゼロ、ゼロゼロゼロ！ これがあんたのご主人よ！ 『ゼロ』のルイズ！

……あんただって、心の中でバカにしてるんですよ。こんなご主人様で残念だなんて思ってるんですよ！ 黙ってないで、そう言えばいいのよ！」

ジェヴォーダンが、ため息をつきながら振り返る。腰に手を当てながらこちらを見やるその態度に、ルイズはビクリと肩をすくませる。

「不当な評価だな」

「……え？」

だが、ジェヴォーダンの口から出てきた言葉は、そんなルイズの予想とは違っていた。

「魔法というのは全部で何種類あるんだ」

「そんなの……数えきれないほどあるわよ」

「そのうちお前は何種類試したんだ」

「それは……1年の授業で学ぶ魔法の数なんてたかが知れてるわ」

「なら、まだまだお前が使える魔法があるかどうかはわからんな」
「でっ、でも！」

ルイズは、批判をされない事に違和感を覚えていた。だがジェヴォーダンは、あくまで冷静な視点から物事を語る。それがルイズには理解できないでいた。

「それにお前は、成功確率ゼロとは言えないな」

「なっ、なんでよー！」

「俺を呼んだろう」

「……あっ」

ルイズは忘れていた、目の前にいる男は平民だが、間違いなく自分で呼び出した使い魔だ。それに、呼び出すサモン・サーヴァントだけでなく、コントラクト・サーヴァントだつて問題なく成功している。あまりに特殊な使い魔の出現に、それが成功だとすっかり忘れていた。

「それとな、人に向き不向きがあるなどというのは当たり前前的事だ。俺にはまだ魔法というものがわからんが、お前のそれは単に他者と少し性質が違うというだけに過ぎんだらう。そんなにも短絡的な考えをするな」

「……なんで？」

「ん？」

ルイズは顔を背ける。

「なんで、バカにしないの」

「先ほども言ったが、向き不向きがあるなど当たり前前的事だ。それをバカにするということの方が俺には理解できんな」

最後のガレキを軽く持ち上げながら、ジェヴォーダンは続ける。

「探求とは大抵の場合、今現在持ち得ないものや不明の中に追い求めるものだ。こちらでは空にあるとはつきり分かっている宇宙だが、俺のここではかつては地底にあると言ったり、湖にあると言ったりしたのだ。宇宙が空にあると唱えるものは、その中の1つでしかなかった。そういつた探求の果てに、得られるのが啓蒙というものだ」
「……………」

「ふむ。例えばな」

ジェヴォーダンが何か話しそうだったので、ルイズは慌てて目を拭いて振り返る。ジェヴォーダンは懐を漁っていたので、どうやら目撃はされなかった。

「なに?」

「まて、あつた、これだ」

そう言っただけでジェヴォーダンが懐から取り出したのは……巨大なナメクジだった。

「うわあああ!? 何!? 気持ち悪っ!」

「こいつは、俺たちの宇宙で言う『神秘』というものの先ぶれだ。この宇宙でいう魔法のようなものだ。こいつを媒介にする事で、ある上位者の身体の一部を召喚する事ができるんだ」

青白く、ぬらぬらとぬめる軟体生物。ジェヴォーダンの手の上をそれを、ルイズは怪訝そうに見つめた。

「し、神秘って言ったけど……こんなん魔法みたいな事ができるの? 信じられないわね……」

「だがな……俺はこいつが使える」

「ええっ!」

ルイズは驚いて声を上げた。

「な、なんで!? やっぱり平民だから?」

「少し違う。こいつは高貴な血にしか反応しないんだ。どうやら俺の血では気にくわいならしい」

「……なんで持つてるの?」

「……捨てるに捨てられないだろう」

ルイズは思わず吹き出した。ジェヴォーダンにも意外と愛嬌のある部分があったのだ。意外な一面を見たようで、可笑しかった。

「俺からすればあの爆発を起こせるのが羨ましいさ。狩りであるの力が使えたら戦いがどれほど楽だったか知れん。お前は単に戦い向きの魔法使いなんだろう」

「……フフ、まあ、そうなのかもね。いいわ、もしあんたの狩りとかいうのを手伝う機会があつたら試してやるわよ」

ジエヴオーダンが最後のガレキを運び終える。ルイズは、この使い魔への扱いを少し改めなければいけないと思った。図らずも、勇気をもたらしてしまったのだ。今まではゼロと呼ばれる度に劣等感に苛まれていたが、少しはマシになったかもしれない。

「……ああ、そういうえばその神秘つてやつ、どうやって使うの？」

「これか？ こいつはこうやって握って、腕を突き出してだな」

グツと前に突き出したジエヴオーダンの腕が、一瞬にして青白い巨大な触手に変貌し、たつた今彼が片付け終えたガレキの山を木っ端微塵に吹き飛ばした。

巨大な触手は、シウルシウルとジエヴオーダンの腕に戻り、何事もなかったかのように消え去った。ジエヴオーダンの手の中には、あの軟体動物だけが残る。

唾然としたルイズと、ジエヴオーダンが向き合った。

「ああ、そう、いや」

ジエヴオーダンは少し言葉につまり、そして、

「今のは、間違いだ」

ごまかしてみた。

しかし、そうはいかなかった。ルイズは「かひい」とかそんな変な息を鳴らしたかと思うと、白目をむいてそのまま後ろ向きに倒れた。慌ててジエヴオーダンがそれを受け止める。

発狂などしていないかと心配したが、どうやら単に気絶しただけのようだ。よほどショックを受けたのだろう。

ジエヴオーダンは、再び自らの手に握られた軟体動物を見た。今までこんな事は一度も無かった。突然使えるようになるなどおかしい、それにあの触手の大きさ……。

再び、今度はガレキの無い方へ向けて腕を突き出す。再び巨大な触手が出現し、伸びきり、また腕に戻っていった。その大きさをや、本物のエーブリエターズと大差ないほどのものだ。

「どういう事だ……？」

この時ジエヴオーダンは、自らの左手のルーンが輝いている事に、気がつかなかった。

04：ルーン

トリスティン魔法学校の中堅教師、『炎蛇』の2つ名を持つコルベールは、先日の夜から図書館にこもりきりになっていた。

理由は、先日の『春の使い魔召喚』の際に、ルイズが呼び出した平民の青年のこと。正確にいうと、その青年の左手に現れたルーンのことがかかっていた。

コルベールが、初めて彼に対峙した時、コルベールの中の『炎蛇』としての血が叫んだ。「危険だ」と。およそ人に感じるような気配ではなかった。かといって、今まで生きてきて対峙したどんな魔獣とも、違っていた。

そんな彼に現れた使い魔のルーン。珍しいルーンであった。そのルーンの上に浮かんだ印も含め、これまで見たことがないような。しかし、どこかで見たような。

そうして資料を洗いざらい漁っている内……始祖ブリミルが使用した使い魔たちの記述に行き着いた。

そして、その古書の一節と、彼の左手に現れたルーンのスケッチを見比べ、あっ、と声にならないうめきをあげた。

「これだ！　しかし、まさか……」

コルベールは本を抱えると、慌てて走り出す。向かった先は、学院長室であった。

*

気を失ったルイズを自室へと運び、近くにいた教員と思わしき者にルイズの体調を伝え……ジェヴォーダン、中庭のベンチに腰掛けて思案していた。

先ほどの、神秘のこと。血の質が間に合わないはずのジェヴォーダンが、何故エーブリエタースの先触れを呼び出す事が出来たのか。そも、本来この軟体動物を触媒として呼び出せる触手はもつと小さかったはずだ。

「くそ、こんな事なら他の神秘の触媒も持ち歩いておくんだっただけ……」
この先触れも偶然手元にあっただけの事で、基本的なものは夢の中の倉庫の中だ。もう夢を見ない以上、取り出しに行く術もない。

「あの、どうなさいました？」

ジェヴオーダンがうなだれていると、後ろから声をかけられた。

振り向くと、大きい銀のトレイを持ち、メイドの格好をした素朴な感じの少女が、心配そうにジェヴオーダンを見つめている。

「いや、なんでもない。気にしないでくれ」

「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になったっていう……」

彼女は、ジェヴオーダンの左手にかかれたルーンに気がついたらしい。

「む、俺を知っているのか」

「ええ、なんでも、召喚の魔法で平民の木こりを呼んでしまったって、噂になってますわ」

「木こり!？」

ジェヴオーダンは驚きのあまり立ち上がった。

「…………え、そういうことになっているのか？」

「え、ええ。大きな鉈のようなノコギリのような工具と銃を持ち歩いた大男だと……」

「俺は狩人だ」

「まあ、狩人様！これはとんだ間違いだったようですわ、申し訳ございません！」

「いや、いや、いいんだ……」

しかし、木こり……と、ジェヴオーダンは頭を押さえる。

「君も魔法使いか？」

「いえ、私は違います。あなたと同じ平民で、貴族の方々をお世話するためにここでご奉仕させていただいている、シエスタといいます」

シエスタはそう名乗ると、貴族にするように甲斐甲斐しく礼をした。

「俺はジェヴオーダンだ。察しの通り、ヴァリエール嬢の使い魔とし

て勤めている」

「あら、では今は昼食のお時間ですから、外で待機を？」

「いや、あいつは……倒れたんだ」

「ええっ!? 大丈夫なんですか？」

ジェヴオーダンは、やれやれといった感じで手を振る。

「いびきをかいて寝る程度には元気さ。奴が寝ている手前、昼飯は抜きになるがな」

「……お腹がすいているんですか？」

「ん？ まあ、そうかもな」

「でしたら……こちらにいらしてください」

シエスタはジェヴオーダンを案内して歩き出した。

ジェヴオーダンが連れていかれたのは、食堂の裏にある厨房だった。大きな鍋や、オーブンがいくつも並んでいる。コックや、シエスタのようなメイドたちが忙しげに料理を作っている。

「ちよつと待っていてくださいね」

ジェヴオーダンを厨房の片隅に置かれた椅子に座らせると、シエスタは小走りで厨房の奥に行き、しばらくしてお皿を抱えて戻ってきた。皿の中には、湯気の立つシチューが入っている。

「貴族の方々にお出しする料理の余りモノで作ったシチューです。よかったですら食べてください」

「良いのか？」

「ええ、賄い食ですけど……」

望外な申し出に、ジェヴオーダンは素直に甘えることにした。スプーンでシチューを取り、ひと口食べる。ジェヴオーダンは目を見開いた。

「……うまい」

「そう、おかわりもありますから……」

「くれ」

「え？」

そう言っただけでジェヴオーダンが差し出した皿は、既に空だった。

結局ジェヴオーダンはこのまま、とても狩人らしいスピードで3人

前ほどのシチューを平らげた。シエスタは、ポカンとした様子でジェヴォーダンを見つめている。

「……そ、そんなに美味しかったですか？」

「こんな美味しいもの、俺の住んでいた地にはなかった」

「そ、そうなんですか……」

ただの賄い飯なのに……とシエスタは思う。ジェヴォーダンの普段の食生活に興味が湧いた。

「あの、ジェヴォーダンさんの暮らしてた土地の料理というのは？」

「……揚げた魚と芋を組み合わせただけのものや、豆を水で炊いたものなどだ」

「……それは……」

どことなく「おいしい」というビジョンが想像できない言葉の羅列に、シエスタは微妙な気持ちになる。この人、どんな食生活を送ってきたのだろうか？

「……とても美味かった、感謝する」

「よかった。お腹がすいたらいつでも来てください。私たちが食べているものでよかったですら、お出ししますから」

ジェヴォーダンは、なるほどなと思った。おそらくこの世界では、魔法が使えるメイジとそうでない平民の地位的格差がかなり大きい。半ば迫害され奴隷同然の扱いを受ける平民たちの間には、強い仲間意識のようなものがあるのだろう。

これは今後利用できるかもしれない。ジェヴォーダンは、自分の立ち位置を確保しておこうと思った。

「ただ飯は食らわん。俺にできることはあるか？　せめてもの礼だ、手伝いをさせてくれ」

「あら、そうですね？　なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいな」

「承知した」

シエスタはにっこりと微笑んだ。

*

ドアを勢いよく開け、コルベール氏は学院長室に飛び込んだ。

「オールド・オスマン！」

「なんじゃね？」

一瞬、秘書であるミス・ロングビルに蹴り回される、学院長オスマン氏が見えたような気がしたが……いまはミス・ロングビルは何事も無かったように机に座り、オスマン氏は腕を後ろに組んで重々しく乱入者を受け入れた。

「ただ、大変です！」

「大変なことなど、あるものか。すべては小事じゃ」

「これを、見てください！」

コルベールはオスマン氏に先ほど読んでいた書物を手渡した。

「これは『始祖ブリミルの使い魔たち』ではないか。まあたこのような古臭い文献など漁りおつて。そんな暇があるなら、たるんだ貴族たちから学費を徴収するうまい手をもっと考えるんじゃよ。ミスタ……、なんだっけ？」

オスマン氏は首をかしげた。

「コルベールです！ お忘れですか！」

「そうそう、そんな名前だったな。君はどうも早口でいかんよ。で、コルベール君、この書物がどうかしたのかね？」

「これを見てください！」

コルベールはジェヴオーダンの手に現れたルーンのスケッチを手渡した。

それを見た瞬間、オスマン氏の表情が変わった。

「……ミス・ロングビル、すまんが」

「……はい」

ミス・ロングビルが、いくつかの書類を手に部屋を出て行く。彼女の退室を見届け、オスマン氏は口を開いた。

「……詳しく説明するんじゃ、ミスタ・コルベール」

*

大きな銀のトレイに、デザートケーキが並んでいる。ジエヴォーダンがそのトレイを持ち、シエスタがトングでケーキをつまみ、1つずつ貴族たちに配って行く。

様々なメイジがいた。互いの使い魔の自慢をしあうもの、巷で話題の小説について話すもの、恋愛話に花を咲かせるもの。

その中の1人、金色の巻き髪にフリルのついたシャツを着た、気障キザなメイジがいた。薔薇をシャツのポケットに刺した彼を、周りの友人が口々に冷やかしている。

「なあ、ギーシュ！ お前、いまは誰と付き合っているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ ギーシュ！」

ギーシュと呼ばれた少年は、すつと唇の前に指を立てた。

「付き合う？ 僕にそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

自分を薔薇にたとえるナルシストぶり。しかし、周囲の様々な貴族を観察するジエヴォーダンの眼中にはない。

そのため、ギーシュのポケットから小壘が落ち、コロコロと転がるも……それを知る由もないジエヴォーダンは、小壘をグシャリと盛大に踏み潰した。

「……ん？」

「……!? んがあっ!? おっ、おい君！」

途端に立ち上がる華やかな芳香に気づいたジエヴォーダンとギーシュが、その香りの出所に気がつく。ギーシュは顔面蒼白になって小壘にすがりよった。

「な、な、なんてことをするんだ君は！」

「気づかなかった。落とされたのか？」

「そう……あ、いや、その」

何故か、自分の持ち物であることを濁すギーシュ。

すると、その小壘の出所に気づいたギーシュの友達が、大声で騒ぎ始めた。

「おお？ その香水は、もしや、モンモランシーの香水じゃないのか

？」

「そうだ！ その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調査している香水だぞ！」

「そいつがギーシュ、お前のポケットから落ちてきたってことは、つまりお前は今モンモランシーとつきあっている。そうだな？」

「違う。いいかい？ 彼女の名誉のために言っておくが……」

ギーシュが何か言いかけたとき、後ろのテーブルに座っていた茶色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの前に向かってコツコツと歩いてきた。

栗色の髪をした可愛らしい少女は、ポロポロと涙を零していた。

「ギーシュさま……やはり、ミス・モンモランシーと……」

「彼らは誤解しているんだ、ケティ。僕の心の中に住んでいるのは、君だけ……」

しかし、ケティと呼ばれた少女は、思いつきりギーシュの頬をひっぱたいた。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！ さようなら！」

かけて行ってしまう少女。

変わって遠くの席から一人の見事な巻き髪の女の子が立ち上がった。厳しい顔つきで、かつかつとギーシュの席までやってくる。

「モンモランシー、誤解だ。彼女とはただいっしょに、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただけで……」

「やつぱり、あの1年生に手を出していたのね？」

「お願いだよ、『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りでゆがませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

冷静な態度を装って弁明するギーシュだったが、モンモランシーはテーブルに置かれたワインの壺を掴むと、中身をどぼどぼとギーシュの頭からかけた。

そして……、

「うそつきー！」

と怒鳴って去って行った。

沈黙が流れる。

ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭いた。そして、首を振りながら芝居がかった仕草で言った。

「あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

と、一連の流れを全く見ていなかったジエヴオーダンは、心配そうにこちらを見るシエスタを促し、再び歩き出した。

「待ちたまえ」

「……？」

そんなジエヴオーダンをギーシュが止めた。椅子の上で体を回転させると、すさっ！ と足を組む。

「君が不注意に、香水の壘なんかを踏み潰したりしてくれたおかげで、2人の女性の名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

ジエヴオーダンは呆れてため息をついた。

「二股などかけてるからだろう」

ギーシュの友人たちが、どつと笑った。

「その通りだギーシュ！ お前が悪い！」

ギーシュの顔に、さつと赤みが差す。

「いいかい、給仕君。君が少し気を利かせて、小壘を拾い上げるなりすればよかつたろう。機転をきかせて話を合わせることもできたはずだ」

「くだらんな。俺がそこまでする義理はない。それと、俺は給仕ではない」

「ふん……。ああ、君は……」

ギーシュは、バカにしたように鼻を鳴らした。

「確か、あのゼロのルイズが呼び出した、平民の木こりだったな。木こりに貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

明らかに相手を馬鹿にし、見下すような言葉に、ジエヴオーダンは足を止めた。

「俺は木こりではない、狩人だ」

「狩人？ ほう、銃と鉈は狩り道具だったか。ふん、なら、毛皮の1つ

でもこしらえてくれよ。貴族の命なのだから聞けるだろう？」

「あいにく、俺が狩るのはそういう獣ではない。貴公のような、人皮の獣だ」

「何……？」

ジェヴォーダンは、振り返って冷たい目をギーシュに向ける。その瞳の不気味な視線に、ギーシュは冷や汗を流した。

「小娘に欲情でもしていたものか。それで二股をかけるなど、浅ましいものだな」

「……っ！ どうやら、君は貴族に対する礼を知らないようだな」

「あいにくと、獣相手に礼節も何もないのでな」

「よかろう。そこまでコケにされて、僕も黙っているわけにはいかない。君に礼儀を教えてやろう、丁度いい腹ごなしだ」

ギーシュは立ち上がった。

「決闘だ。逃げるとは言わせん」

「……ふん、ここでやるのか？」

「ふざけるな。貴族の食卓を平民の血で汚せるか。ヴェストリの広場で待っている、ケーキを配り終わったら来たまえ」

ギーシュの友人たちが、ワクワクした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。1人は、テーブルに残った。ジェヴォーダンを逃さないよう、見張るつもりようだ。

シエスタが、ぶるぶる震えながらジェヴォーダンを見つめている。

「あ、あなた、殺されちゃう……貴族を本気で怒らせたら……！」

「……シエスタ、残りのケーキを頼む」

「え？ あ……」

ジェヴォーダンは、シエスタにトレイを渡す。シエスタは少し迷ったような表情を見せ、やがてだーっと走って逃げてしまった。

そして、入れ替わるように……ルイズが走って来た。

「あんた！ 何してんのよ！ 見てたわよ！」

「なんだ、起きたのか」

「……さ、さっきのは、あんたの言う通り間違いつてことにしといてやるわ！ そんなことより、なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

あれを見て、ショックで気絶しておいて、ほんとに間違いで済ましてケロッとしているあたり、本当にこいつは大物になるだろう。

「謝ってきなさい」

「おい、一度部屋に準備に戻る。その後そのヴェストリの広場とやらに行く。ついてきて案内してくれ」

「いいだろう、平民」

しかし、ジェヴォーダンはすっかりルイズを無視し、監視役の貴族に話しかける。

「ちよつと！ 聞きなさい、メイジに平民は絶対に勝てないの！ 怪我で済んだら運がいい方なのよ！」

そしてジェヴォーダンは、かけらも聞く耳を持たずに歩いて行ってしまった。

「ああもう！ほんとに！ 使い魔のくせになんで勝手なことばかりするのよ！」

ルイズは、ジェヴォーダンの後を追いかけた。

ルイズの部屋、ジェヴォーダンが1人、決闘の準備をしていた。

外していた手袋と手甲を装着し、いつもの防疫マスクとマントをつけ、胸のホルスターに水銀弾を装填し、懐の持ち物を確認する。

ルイズに言われコートの内側に隠していた獣狩りの散弾銃をいつもの腰元に、そして部屋に置いていたノコギリ鉋を手に。

そのノコギリ鉋を振り抜く。ガチンと音を立て、開かれていた刃が閉じた。

そしてジェヴォーダンは、狩人の象徴でもある鋭い三角帽子をかぶると、ゆっくりと暗い廊下を歩いて行った。

*

ヴェストリの広場は、魔法学院の敷地内、『風』と『火』の塔の間にある、中庭である。西側にある広場なので、日中でも日があまり差さない。決闘にはうってつけの場所である。

広場は、噂を聞きつけた生徒たちで溢れかえっていた。

「諸君！ 決闘だ！」

ギーシュが薔薇の造花を掲げると、うおーっ！ と歓声が巻き起る。

「ギーシュが決闘するぞ！ 相手はルイズの木こりだ！」

ギーシュは腕を振って、歓声に答えている。

集まっている観客は皆、決闘が見られる事というより、ギーシュが平民を一方的に打ち倒す様が見られる事に期待し、湧き上がっていた。そのためギーシュの相手が何者であるかなど、彼らにとつてはどうでもいいことだった。

しかし……そんな群衆の後ろの方で、やにわに小さな悲鳴が上がり、人垣がわらわらと割れていく。

歓声に答えていたギーシュもそれに気がついた。そして割れきつた人垣から現れたのは……ヤナムの狩人装束に身を包んだ、ジェヴォーダンだった。

腰元には無骨な大砲のような銃と冷たく重たい刃の集合体を携え、目元だけを出した見慣れない装束と、特徴的な帽子。

まさに狩人たるその姿に、湧いていた広場の群衆は、むしろどよめきの色を強くした。

ただ、召喚の儀の日にその姿を見ていたギーシュは、変わらぬ様子で手を振った。

「とりあえず、逃げずに来たことは誉めてやろうじゃないか」

「……………」

「さてと、では始めるか」

ジェヴォーダンは返答しない。

決闘とは言うが、勝負を一瞬で終わらせる事は可能だった。ジェヴォーダンが左手の散弾銃の引き金を引けば、重たい水銀の散弾が、ギーシュを物言わぬ冷たい肉塊に変えるだろう。

だが、それでは意味がない。それでは、銃が強いということの誇示にしかない。

ジェヴォーダんに必要だったのは、自分が、『狩人』が『メイジ』よ

り強いこと、それを証明することだった。

その意味で、この群衆の多さは都合がいい。

「フン……言葉は不要というわけかい。ではさっさと始めるとしようか！」

ギーシユは、そんなジエヴオーダンを余裕の笑みで見つめ、薔薇の花を振った。

花びらが1枚、宙に舞ったかと思うと……次の瞬間、硬い金属製と見られる、甲冑を着た女戦士の形をした人形になった。

「ほう……これが魔法か」

「そう……僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？ 言い忘れたな。僕の2つ名は『青銅』。青銅のギーシユだ。

従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

「ふん、なるほど、メイジが魔法を使うのは道理だ」

そしてジエヴオーダンは……ノコギリ鉋を右手に、散弾銃を左手に、それぞれ腰から抜いた。

「ならば俺は狩人だ。狩人の武器で戦う。文句はなからう」

そうして武器を構えた時……ジエヴオーダンの左手のルーンが、光り輝いた。

*

学院長室。ミスタ・コルベールは、オスマン氏に全てを説明していた。

春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の使い魔を呼び出してしまったこと。

その青年に、ただならぬものの気配を感じ取ったこと。

ルイズがその青年と『契約』した証明として現れたルーン文字を調べていたら……始祖ブリミルの使い魔、『ガンダールヴ』に行き着いたこと。

オスマン長老は、コルベールが描いたルーン文字のスケッチをじつと見つめ、ふーむと唸り髭をいじくった。

「ふむ、確かに同じじや。ルーンが同じということは、ただの平民だったその青年は、『ガンダールヴ』になった、ということになるんじゃないかな」

「どうしましょう」

「しかし、それだけでそうと決めつけるのは早計かもしれんが……ん？　これは？」

ふと、オスマン氏は、ルーン文字のスケッチと同じ紙に描かれたもう一つのスケッチに気が付いた。

「ああ、こちらはその青年の左手にルーンと共に刻まれた印なのですが、こちらはどんなに資料を探しても該当するものを見つけることができませんで……」

オスマン氏は、その印を改めてまじまじと見つめる。そして、それまでのどこか余裕そうな表情が一変、目を見開いた。

「ミスタ・コルベール！　こつ、これは！」

「ど、どうかなさいましたか？」

その時、ドアがノックされた。扉の向こうから、ミス・ロングビルの声が聞こえてくる。

「私です、オールド・オスマン」

「なんじや？」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるようです。大騒ぎになっています。止めに入った教師がいましたが、生徒たちに邪魔されて、止められないようです」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、たちの悪い生き物はおらんわい。で、誰が暴れておるんだね？」

「1人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「あの、グラモンとこのバカ息子か。オヤジも色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじや。おおかた女の取り合いじやろう。相手は誰じや？」

「……それがメイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の青年です」

オスマン氏とコルベールは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めてお
ります」

「アホか。たかが子供のケンカを止めるために、秘宝を使ってどうす
るんじや。放っておきなさい」

「わかりました」

ミス・ロングビルが去っていく足音が聞こえた。

コルベールは、唾を飲み込んだ。

「オールド・オスマン」

「うむ」

オスマン氏は、杖を振った。壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリ
の広場の様子が映し出された。

*

ジエヴオーダンは、武器を握った瞬間左手のルーンが光り輝きだし
たことに気がついた。そして、ほのかに身体が軽くなったのを感じ
る。

ギーシュの青銅のゴーレムが拳を振り上げる。青銅の塊、戦乙女ワ
ルキューレの姿をした像が、ゆっくりとした動きでジエヴオーダンに
向かってくる。

その動きは、もはや止まって見えた。

ジエヴオーダンがノコギリ鉋を振りかざすと、ゴーレムはまるで紙
細工のように、ひしゃげてしまった。

真つ二つになったゴーレムが地面に落ちる。ギーシュは声になら
ないうめきをあげた。

「くっ………ま、まだだー！」

ギーシュはブンブンと薔薇を振る。花びらが舞い、新たなゴーレム
が6体現れる。

全部で7体のゴーレムが、ギーシュの武器だ。一体しか使わなかつ
たのは、それには及ばないと思っていたためである。

ゴーレムが、ジエヴオーダンを取り囲み、一斉に躍り掛かる。

ジエヴオーダンは冷静だった。

ルーンが光りだした途端、わずかにではあるが身体が軽くなった。普段通りでさえ遅れをとることはない相手だ、今なら、やれる。

横から飛びかかってきていたゴーレムの腹部に蹴りをいれる。吹き飛んだゴーレムのほうにステップすると同時に、別の2体のゴーレムを袈裟斬りにする。

さらに、横から殴りかかってきたゴーレムの攻撃を体勢を低くしてかわし、武器を変形させながら引き裂く。

展開したノコギリ鉋で、起き上がろうとしていたゴーレムを叩き潰す。

背後から殴りかかろうとしていたゴーレムに……散弾銃を打ち込んだ。強烈な衝撃に、ゴーレムは体勢を崩して膝をつく。

ジエヴオーダンはとっさにノコギリ鉋を地面に刺し、空いた右腕を、ゴーレムの腹部に叩き込んだ。

血も肉もない、空っぽの鎧。ジエヴオーダンは冷たい目でゴーレムを見ると……素手で、ゴーレムを、引き裂いた。

まるで紙でもやぶくかのように、引き裂いてしまったのだ。グロテスクにひしゃげたゴーレムは、背後にふらふらと数歩あるいて、力なく倒れた。

ほんの一瞬のうちに、ギーシュ自慢のゴーレムが、まるで土クズのように打ち捨てられた。絶望するギーシュに、ジエヴオーダンがゆっくりと、歩いて迫ってくる。

咄嗟に残りの1体を、ギーシュは自分の盾に置いた。

その瞬間に……ゴーレムはそのノコギリ状の刃でズタズタに引き裂かれた。

「ひ、ひい、いっ……いっ……」

ゴーレムの亡骸が崩れ、あの狩人が姿をあらわす。ギーシュは恐怖のあまり尻餅をつく。そのギーシュに向けて、ジエヴオーダンは展開したノコギリ鉋を振りかざす。

ギーシュは、覚悟した。頬を涙がったうのを感じながら、頭を抱えた。

ズシャツと音がして……。

おそるおそる目を開けると、ギーシユの右頬、涙が届くほどの距離に、ノコギリ鉋が突き立てられていた。

恐怖と絶望が、ギーシユの心臓を握り潰す。がくがくと震えながら、ギーシユは言った。

「ま、参った……」

ノコギリ鉋を握ったジエヴオーダンは、冷たい目でギーシユを見下した。そして、獣のように低く恐ろしげな声で言い放った。

「いや、まだだ」

「……え？」

ギーシユの表情が、絶望に歪む。

ジエヴオーダンは、懐から何かを取り出した。

それは、ボロボロにひび割れた、頭蓋だった。内側からは、軟体生物のような形を象った、青白い光が漏れている。

ジエヴオーダンの表情が変わった。防疫マスクに隠れて見えないその顔は、しかし、笑っているようだった。

「……お前に礼儀を教えてやる」

そしてその頭蓋を、ギーシユの鼻面の目の前で、握り砕いた。

*

ギーシユは夢を見ていた。

ちらつく炎、襲い来る獣たち。

瞳を纏う脳。その瞳がこちらを見つめ、世界が歪んでいく。

足元が泥に沈み、ぬかるんで動くことができない。

目の前の暗がりから、女性が歩いて来る。ギーシユは必死で助けを求めた。

だが、それは人間ではなかった。ブヨツと膨らんだ頭部には、大量の瞳、瞳、瞳。

その瞳がギーシユを見た。気づけば、ギーシユは血まみれだった。その血が自分の体から流れ出ているものと気がついて、ギーシユ

は悲鳴をあげた。

瞳の女が、動けないギーシユを抱擁する。恐怖に泣き叫ぶギーシユを、女特有の柔らかい身体が、優しく抱きしめる。

歌声が聞こえた。大きな瞳が、ギーシユを見つめた。

ギーシユは見た。瞳に反射して映る自分の姿を。

そこには、青白く膨らんだ頭の、奇怪な生き物が映し出されていた。

*

ヴェストリの広場が、わっと歓声に包まれた。

あの木こり、やるじゃないか！ ギーシユが負けたぞ！ 見物していた連中が、口々に声を上げる。

群衆の多くは、ジェヴォーダンが最後にギーシユに何をしたのか、気づいていなかった。ジェヴォーダンがノコギリ鉋を引き抜く。ギーシユは、泡を吹いて気絶していた。

異変に気付いた群衆の歓声が、しだいにどよめきが変わる。

そんなギーシユの様子に気がついた少女が2人、駆け寄ってきた。先ほどギーシユに浮気を食らっていた2人、ケティとモンモランシーだ。

「ギーシユさまー！」

「ギーシユ!?!」

ジェヴォーダンは、無言で振り向き、歩き出した。もう彼に、用はなかった。

入れ替わるように、数人の生徒がギーシユの側に集まり、『水』系統のメイジが、気つけの治癒の魔法をかける。

「う……?」

「ギーシユ！ 大丈夫?」

「ギーシユさま……」

「モンモランシー……ケティ……?」

ギーシユが、自分を呼ぶ声に目を覚ます。聞きなれた、愛しい人の声。

うつすらと目を開け……そして見開いた。

2人の人影が、自分を覗き込んでいた。膨らんだ頭部に生えた、無数の瞳で。

「うわああああああお!!!」

「ギーシユ!?!」

夢の光景がフラッシュバックし、ギーシユは恐怖のあまり悲鳴を上げた。

当然、ケティとモンモランシーは、瞳の化け物になどなっていない。ただ様子のおかしいギーシユを、心配そうに見るだけだ。

だがギーシユには、それが違うものに見えているのだ。

「こっ、こないでくれ……! 嫌だ、うわああ!!」

「ちよつと、ギーシユ!?! どうしちやつたのよ、ねえ!」

再びモンモランシーが叫ぶ。ギーシユは、その瞳の化け物がモンモランシーの声で話しかけてきていることに気がつき……再び気を失った。

ジェヴオーダンはそんな様子に目もくれず、ざわめく群衆の中を歩いた。

その先に、ルイズがいた。

「……あんた、ギーシユに何をしたの?」

様子を見ていたのだろう。ルイズはジェヴオーダンが頭蓋を砕いたのを見ていたようだ。ジェヴオーダンはフンと鼻を鳴らした。

「啓蒙の片鱗を、少しばかり覗かせてやった。安心しろ、死にはしない」

「啓蒙って……ギーシユ、様子がおかしかったけど。本当に大丈夫なの?」

「俺の手で砕いた智慧の片鱗を見せてやっただけだ。ほとんどは俺の方に入った、あいつはかけらを見たに過ぎない。あれは一時的な狂気だ。数日もしないうちに収まるだろう」

「そう……」

ルイズが聞きたかったのは、まったくそう言う事ではなかった。あの頭蓋は何だったのか。智慧とは何か。そも、そんな片鱗を見ただけ

でギーシュがああなっているような物なのに、それを取り込んだジェヴォーダンは、なぜ平気な顔をしているのか。

だが、ジェヴォーダンの様子から、それを問うてもまったく答えてくれるつもりはないのだろうとわかり、ルイズは聞くのを諦めるしかなかった。

ジェヴォーダンは、そのままルイズを素通りして歩いて行こうとする。ルイズは振り返った。

「ジェヴォーダン！ あんた……何者なの」

「……………」

先ほど神秘を見せつけられて、ルイズはすぐに気を持ち直した。今回の事といい、おそらく、ジェヴォーダンがただの人間ではないと、気が付いたのだろう。

こいつなら、啓蒙のひとつくらい訳無いだろう。あるいは、瞳を得る事も造作無いかもしれん。ジェヴォーダンは、楽しげにククツと笑った。

「少なくとも、木こりではないからな」

そしてジェヴォーダンは行ってしまった。どよめく群衆の中、ルイズだけがただ黙って、ジェヴォーダンの背中を見つめていた。

*

オスマン氏とコルベールは、『遠見の鏡』で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。

コルベールは、震えながら声を絞り出す。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいましたか」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』のメイジですが、それでもただの平民に遅れをとると思えません。そしてあの動き！ あんな平民見たことない！ やはり彼は『ガンダールヴ』！」

「……………」

オスマン氏は、フーツとため息をつくど、手を顔につけた。そしてゆっくりと顔を撫で、続いて白い髭をなでる。

そして重苦しく呟いた。

「……彼は、ただの平民なんぞではないよ」

「え？ それはどういう……」

ミスタ・コルベールは、意味がわからないという風に首をかしげた。「それは確かに、彼を呼び出した際には異様な気配を感じました。しかし、その際に念のため『ディタクト・マジック』で確かめたのですが、真正正銘、ただの平民の青年でした」

「……メイジか平民か、ということであれば、そうかもしれん。だが、事はそう単純ではない。彼は『狩人』じゃ」

「……狩人、ですか」

重苦しく語るオスマン氏とは相対的に、コルベールはポカンと口を開けた。

「しかし、狩人がただの平民でないというのは……？ 言うなれば、平民ならではの業者かではありませんが……」

「ああ、そうではない。ワシが言う『狩人』とは、野山でウサギなどを射る者のことではない……『炎蛇』よ、あれは夜の狩人じゃ。人皮を被る、おぞましい獣を狩る者じゃ」

「!? いや、しかし、そんな……」

コルベールは、即座にその言葉の意味を理解する。あの時の、異様な気配も説明がつく。

「あ、暗殺者の類ということですか？」

「少し違うのう。何せ彼が狩るのは……既に人でないものじゃ」

コルベールは、背筋に悪寒が走るのを感じた。それは一体どういう意味か。

「……ミスタ・コルベール、このことは、決して口外してはならん。特に王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい。そんなオモチャを与えてしまっては、またぞろ戦でも引き起こすじやろうて。宮廷で暇を持て余している連中はまったく、戦が

好きじゃからな」

「……学園長の深謀には恐れ入ります」

オスマン氏は杖を握ると窓際へと向かった。目を閉じ、はるか宇宙の彼方へ、想いを馳せる。

「……狩人よ。どのような夜を駆け抜けてきたのかのう」

コルベールが描いた、ジェヴオーダンの左手のルーンのスケッチ。その紙に描かれた、もう1つの印。

それは吊り下げられた逆さまのルーン。

全ての狩人たちの心の中にある、ハンターのシンボル。狩人の徴であった。

05：牙

ジェヴォーダンがトリステイン魔法学院でルイズの使い魔として生活を始めてから1週間が経った。

相変わらず、ジェヴォーダンは夜眠らない。夜通し机に向かい、文字を解読し続けた事で、ルイズの部屋の本はすでに読み切ってしまった。

もはやこの世界の文字はほとんど読み解けるようになっていた。だが現状では、資料が少なすぎる。ルイズに頼めば、新しい本を用立ててくれるだろうか。

やがて夜が明け、朝になる。ジェヴォーダンの朝一番の仕事は、ルイズを起こすことだ。

ルイズは起こされると、まず着替える。最初にジェヴォーダンがしっかりと釘を刺したおかげで、再び着替えさせるよう要求してくることはなかった。

黒いマントと白のブラウス、グレーのプリーツスカートの制服に身を包んだルイズは、顔を洗って歯を磨く。流石にそこは使い魔の仕事、ジェヴォーダンは下の水汲み場まで行って、ルイズが使う水をバケツに汲んでこなければならぬ。だが、そこから先の顔を洗う行為は、言わずともルイズ自身で行なっていた。ルイズはそれが不満な様子だった。

だが、『人として自分ですべき最低限の行動はすべき、でなければ人以下と判断する』というジェヴォーダンのポリシーは理解できたし、それ以外のジェヴォーダンの仕事は完璧だった。

朝起こす時間も均一、部屋にはチリ一つ落ちておらず、洗濯物も抜かりない。食事時に姿を消すのは不可解だが、腹を空かしている様子もない。

何より、彼の基準で『使い魔の仕事』としている物事に関して、文句も言わず、礼儀作法もしっかりしている彼を批判することは、ルイズにはできなかつた。フラストレーションが溜まるかどうかは別として。

ではジェヴオーダンの方は嬉々として仕事をこなしてるのかといえば、そんなことは全くない。

ルイズが朝食を食べ、授業に出向けば、楽しい楽しい洗濯の時間が待っている。これがジェヴオーダンにとって最も苦痛な時間だ。

やはり狩人としての誇りが、激しい不満を漏らしてくる。それでも、それが義務である以上投げ出すわけにもいかず、結局最善策は「さっさと終わらせること」。

忌まわしい洗濯をテキパキと終わらせると、午前中にすべきことは大体終わってしまう。そこで数日前からジェヴオーダンは、学生用の図書館を利用させてもらっていた。

午前の、学生が授業に出ていてほとんどいない時間であれば、大した問題もないだろうと、先生方も半ば放任気味にジェヴオーダンに許可をくれた。

結果としてジェヴオーダンは様々な情報を凄まじいスピードで吸い込んでいくことになった。未だ文字の全てを解読したわけではないにしても、ほとんど文章を読むのに差し支えないレベルに来ている。

そんなわけで、この日も図書館へ向かったのだが……珍しく、先客がいた。

「……………」

深みを持った青い髪の少女。異様なまでに小柄で、一見すると幼児のようにすら見える。だがその制服はルイズたちと同じトリスティン魔法学校のもので、マントの色からして2年生のようだった。

身の丈を超える、大きなレッドオークの杖を立てかけ、眼鏡越しに一瞬ジェヴオーダンの方を見て驚いたような表情を見せたが、またすぐに本の世界に戻っていった。

まだ午前中は授業中の筈だが……とジェヴオーダンが思案を巡らすも、見渡せばその少女以外に生徒らしき人影もない。

それに、彼女の方も自分と目的は同じなようだ。ならば、わざわざ改めて関わる必要があるわけでもない。

ジエヴオーダンも手頃な一冊を手に取ると、自前のメモ帳と共に机に置く。青髪の少女の眉が、ピクリと動いた。

そこからは、お互いに本の世界に飛び込む。ただ無音と、時々ジエヴオーダンが万年筆を滑らす音だけが、図書館をより一層静まり返った場所にしていった。

そしてそのうち、正午の鐘が鳴った。

*

ルイズを教室に迎えに行く。探すまでもなく現れたジエヴオーダんに、なぜかルイズは少し悔しそうな顔を見せた。

「……お前、何でもいいから俺を叱る判断材料を探しているだろう」

「なっ!? そ、そそ、そんな事ないわよ!」

顔を赤くしたルイズは大股でズケズケと歩いていく。なんとというかここまでわかりやすいといっそ清々しいくらいだな、とジエヴオーダンは笑う。

「ああそうだ、青髪の小柄な娘はお前のクラスメートか?」

「青髪? ……ああ、タバサのことかしら。そういえば体調が悪いって早退してたわね、いつものことよ」

「そうか。図書館にいたから、単なるサボりかもな」

ルイズは「そう……」と空返事し、ワントンポ遅れて眉をひそめた。「いや、ちよつと待ちなさい。なんであんたが図書館にいるタバサを見たの」

「図書館にいたからな」

「あんたが貴族の図書館に何の用があるの」

「本を読むためだな」

「あんたこの世界の字が読めないんじゃないの!？」

ルイズは、訳がわからないという様子でジエヴオーダんに詰め寄る。

「食堂だぞ。昼飯にしてい」

が、目的地についたルイズを軽くあしらって、ジエヴオーダンはま

た何処かへ歩いて行ってしまった。

「くうくう……」

ルイズは、いずれジエヴオーダンに字を教えてやり、主人の器の大きさを示そうなどと考えていた。これまた、ジエヴオーダンとの上下関係を示す機会がなくなってしまったのだった。

そのジエヴオーダンはというと、相変わらず厨房の賄い食に世話になっていた。

食事をしなければならぬ身体というわけでもないというのに、ジエヴオーダンはこの世界の料理にすっかり魅了されていた。

アルヴィースの食堂の裏にある厨房に赴き、シエスタに頼めば、シチューや骨つきの肉なんかを寄越してくれる。

その何れもが絶妙に味付けされたものであり、狩人の痩せた味覚をも満足させてくれる。そんなわけで、ジエヴオーダンは会ったこともない女王陛下や始祖ブリミルの百倍、シエスタと厨房を敬愛しているのであった。

この日もジエヴオーダンは、厨房の扉を叩いた。ヴェストリの広場で、貴族のギーシュを倒したジエヴオーダンは、大変な人気である。

『『我らの牙』が来たぞ！』

そう叫んでジエヴオーダンを歓迎したのは、コック長のマルトー親父である。もちろん貴族ではなく平民であるのだが、魔法学校のコック長ともなれば、収入は身分の低い貴族なんかは及びもつかなく、羽振りもいい。

丸々と太った体に、立派なあつらえの服を着込み、厨房を一手に切り盛りしているマルトー親父は、羽振りのいい平民の例に漏れず、貴族と魔法を毛嫌いしていた。

彼はメイジのギーシュを倒したジエヴオーダンを『我らの牙』と呼び、まるで王様でも扱うようにもてなしてくるのであった。ジエヴオーダンはそれがなんともくすぐったかった。何せヤーナムにいた頃は、狩人なんぞは不吉の象徴のようなものだ。彼らの枯れたトリコーン帽子を見れば、民衆は恐怖におののき、扉の鍵を締めるのだ。

『その『我らの牙』というの、やめてくれないか』

「何を言うか！ 俺たちだつて貴族どもには腹がたつても黙ってるしか無かつたんだ、それをあんたは奴らの鼻面に噛み付いて、打ち倒してしまつたんだ！ まさに我らにとつての『牙』そのものさ！」
「そうか……」

ジェヴオーダンはため息を吐いて諦めた。こりゃあ、どう言つても呼び方を変えることはないだろう。

改めて、自分専用の席に座ると、シエスタがさつと寄つてきてにっこりと笑いかけ、温かいシチューの入つた皿と、ふかふかの白パンを出してくれた。

「今日のシチューは特別ですわ」

シエスタは嬉しそうに微笑んだ。ジェヴオーダンはひと口シチューを頬張ると、うんうんと唸つた。

「うまい。流石だな、親父」

「そうだろう。そのシチューは、貴族連中に出してるのと同じもんさ」
「素晴らしい味付けだ。俺の土地の料理とは本当に大違いだな」

「……なあ、よくそれを言っているが、お前んとこの料理はそんなに不味いのか？ どんなもんなんだ？」

マルトー親父はジェヴオーダンの土地の食事に興味を湧いたようだ。シエスタが、ああ、という顔をする。

「……親の仇の様に火を通したマツシユポテトや、ウナギをゼラチンで固めたものなどだ」

「……ああ、それは……」

目を細めるジェヴオーダんに、マルトー親父も渋い顔になる。料理人の観点から言えば、どうしても美味しくする事のできる世界ではないとわかつたのだろう。

「だが、この地の料理は違う。食材を様々な形に変え、美しく彩り、味付ける。貴族でなくとも、これも立派な魔法と言えるものだ」

「おお、おお、『我らの牙』よ！ お前はいい奴だ！」

マルトー親父は、ジェヴオーダンの首根っこにぶつとい腕を巻きつけた。

「なあ、『我らの牙』！ 俺はお前の額に接吻するぞ！ こら！ いい

な！」

「……!? やめろ、その呼び方も接吻も勘弁してくれ！」

獣とは全く違う悪寒に、ジエヴオーダンはマルトー親父の顔を押しつけた。

「どうしてだ？」

「背筋が凍る」

マルトー親父はジエヴオーダンから体を離すと、両腕を広げてみせた。

「お前はメイジのゴーレムを切り裂いたんだぞ！ わかっているのか！」

「ああ」

「なあ、お前はただの木こりなんかじゃあないんだろ？ 狩人だと言ってたじゃないか！ どうやったらあんな風に戦えるのか、俺に教えてくれよ！」

「何の事はない、俺は普段通りの事をしたまでだ。特別な事をしたわけでもない」

ヤーナムの夜を生き延びる力があれば、あの程度の相手に遅れをとる事はない。だがマルトー親父は、嬉しそうに目を見開く。

「お前たち！ 聞いたか！」

マルトー親父は、厨房に響くよう怒鳴った。若いコックや見習いたちが、返事を寄越す。

「聞いてますよ！ 親方！」

「本当の達人というのは、こういうものだ！ 決して己の腕前を誇ったりしないものだ！ 見習えよ！ 達人は誇らない！」

コックたちは嬉しげに唱和する。

「達人は誇らない！」

するとマルトー親父はくるりと振り向き、ジエヴオーダンを見つめる。

「やい、『我らの牙』。俺はそんなお前がますます好きになっただぞ。どうしてくれる」

「そう言われてもな……」

本当の事なのだが、マルトー親父はそれを謙遜と受け取っている。それに……と、ジエヴォーダンは左手のルーンを見つめた。武器を握った時だけ光るこのルーン。あの時、やにわに身体が軽くなった。それに、ルーンの上に刻まれた狩人の徴。こちらはひかるでもなく、ただ刻まれているだけ。カレル文字と何か関係があるのだろうか？

ジエヴォーダンが考え込んでしまう。しかしマルトー親父は、それをジエヴォーダンの控えめき、と受け取ってしまうのだ。

マルトー親父は、シエスタの方を向いた。

「シエスタ！」

「はい！」

2人の様子を、ニコニコしながら見守っていた気のいいシエスタが、元気よく返事を返す。

「我らの勇者に、アルビオンの古いのを注いでやれ」

シエスタは満面の笑みになると、ぶどう酒の棚から言われた通りのヴィンテージを取り出してきて、ジエヴォーダンのグラスに並々と注いでくれた。

ジエヴォーダンも「ほう」とグラスを手取る。そんな様子を、シエスタはうっとりとした面持ちで見つめている。

そして、ジエヴォーダンはグラスをクルクルと回して、スツと香り確かめ……眉をひそめた。

「……？ 血が入っていないのか」

「……血？」

厨房の空気が凍りついた。しまった、とジエヴォーダンは思う。それを決して表には出さず、冷静に取り繕った。

「……乳だ。俺のここでは、ワインに乳を入れることがあった」

「……あ、ああ！ 乳！ ミルクですね！ すいません私、変な空耳しちゃって……」

シエスタが笑うと、みんなも緊張を解いた。ジエヴォーダンも頭の中で汗を拭う。血を嗜む文化はヤーナム特有のものだ。こういうところで、人にボロを見せるのは良くない。

「……それにしてもワインにミルクって……」

「……忘れてくれ」

マルトー親父が、別の理由で顔を青くする。申し訳ない嘘をついたと、ジエヴオーダンは一飲みグラスを乾かした。

*

朝食、掃除、洗濯のあとは、ルイズの授業のお供を務める。

基本的にルイズは教室の最後尾、最も壁に近い席を利用する事が多いため、ジエヴオーダンは基本的にその壁にもたれて授業を聞いていた。

授業の内容を注意深く聞き、自前のメモに万年筆を滑らせる。今やジエヴオーダンの授業態度はそこらの生徒以上だ。

水からワインを作り出す魔法、秘薬を調合して特殊なポーションを作り出す講義、目の前に現れる大きな火球や、空中に箱や棒やボールを自在に浮かべ、それを窓の外に飛ばして使い魔に取りに行かせる授業など。

どれもジエヴオーダンの世界には存在しない技術や概念だ。一言一句すら見逃すまいと、ジエヴオーダンは知識を飲み込むようにメモを取った。

ルイズとしては、ジエヴオーダンのこの授業態度は気に食わなかった。平民が貴族の授業を受けるなんて！ と怒鳴りつけてやりたいところなのだが、教室中には誰かしらの使い魔がひしめいていて、今更ジエヴオーダンだけ追いつくなんてわけにも行かない。それに少なくとも講師はジエヴオーダンのこの態度を気に入っていた。普段からまともな授業態度を取っている生徒など数える程度しかいないのだ、好印象に決まっていた。

「なあ、ルイズ」

ジエヴオーダンは、ルイズに声をかける。以前注意を受けた事がきっかけで大事になった為、声を潜めてひっそりと。だが、ルイズは怪訝そうな顔でジエヴオーダンを振り返る。

「なに」

「魔法を使えるか否かはどうやって決まる？」

「貴族か平民か。以上」

会話をすっぱり切り上げて授業に向き直るルイズ。しかしジェヴォーダンはまたひそひそと話しかける。

「平民でも杖を握れば魔法が使えるものもいるのか？」

「授業の後にして。平民は平民、貴族は貴族、それ以上も以下もないわ」

「ふむ」

この世界の本を何冊か読み込んだジェヴォーダンは、この世界では探求というものがあまり深められていない事に気がついていた。そしてそれは、大半の事が魔法でどうにかなってしまいうため、科学的探求が発展しなかったのだろう。

まるで何者かから思考の停止を促されているようだな……と、ジェヴォーダンは考えた。

上位者と呼ぶべきでは無いだろうが、何者かからの監視のある世界なのは確かなのかもしれない。魔法の存在はそれほどまでに、人に都合が良すぎた。

「平民出の貴族というのはいないのか」

「ええ……そんなの、調べた事もないしわかんないわよ。けど私は聞いた事ないわ」

「そうか。1度平民を集めて杖を握らせてみたいものだ」

「あんた、何考えてるの？」

「科学的見地にもとづけば……」

「そこっ！」

授業を取っていた先生が杖を振ると、黒板の台からチョークが2本、弾丸のように飛び出し、1発をジェヴォーダンがかわし、1発はルイズの額に直撃した。

*

ルイズがジエヴオーダンに怒りの声を上げている頃、学園長室で、秘書のミス・ロングビルは書き物をしていた。

ミス・ロングビルは手を止めるとオスマン氏の方を見やった。オスマン氏は机に伏せて居眠りをしている。

ミス・ロングビルは薄く笑い……低い声で『サイレント』の呪文を唱える。オスマン氏を起こさぬよう、音を消して学園長室を抜けた。

ミス・ロングビルが向かった先は、学園長室の1番下にある、宝物庫がある階である。

階段を下りて、鉄の巨大な扉を見上げる。扉には太い門が刺さり、門はこれまた巨大な錠で守られている。

ここには、魔法学院成立以来の秘宝が収められているのだ。

ミス・ロングビルは慎重に周囲を見渡し、ポケットから杖を取り出した。ミス・ロングビルが杖を手持ち、クイツと振ると、短く小さかった杖は指揮者のタクトほどの長さになった。

低く呪文を唱え、詠唱が完成すると同時に杖を錠前に向けて振る。

しかし……錠前からは何の音もしない。

「まあ、この錠前に『アンロック』が通用するとも思えないけどね」
くすつと、妖艶に笑うと、ミス・ロングビルは自分が得意とする魔法を唱え始めた。

『錬金』の呪文。朗々と呪文を唱え、分厚い鉄のドアに向かって杖を振る。

呪文は扉に届いたが……しばらく待っても、変わったところは見られない。

「スクウェアアークラスのメイジが『固定化』の呪文をかけているみたいね」

『固定化』の呪文は、物質の酸化や腐敗を防ぐ呪文である。これがかけられた物質は、あらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続ける。

『固定化』をかけられた物質には『錬金』の呪文も効力を失う。呪文をかけたメイジが『固定化』をかけたメイジの実力を上回れば、その限りではないが。

しかし、この扉に『固定化』の呪文をかけたメイジは相当強力なメイジであるようだ。『土』系統のエキスパートであるミス・ロングビルの『錬金』を受け付けられないのだから。

ミス・ロングビルはかけたメガネを持ち上げ、扉を見つめていた。その時に、階段の方からの足音に気づく。

杖をたたみ、ポケットにしまう。

現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル、ここで何を？」

間の抜けた声で尋ねるコルベールに、ミス・ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが……」

「はあ、それは大変だ。1つ1つ見て回るだけで1日がかかりますよ。何せここにはお宝ガラクタひつくるめで所狭しと並んでますからな」
「でしようね」

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルは微笑んだ。

「それが……ご就寝中なのですまあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

「なるほど、ご就寝中ですか。あのジジイ、じゃなかったオールド・オスマンは寝ると起きませんからな。では、僕も後で伺うことにしよう」

ミスタ・コルベールは歩き出し……思い出したように立ち止まり、振り向いた。

「その……ミス・ロングビル」

「なんでしよう？」

照れくさそうに、ミスタ・コルベールは口を開いた。

「もし、よろしかったら、なんです……昼食を一緒にいかがですか
な」

ミス・ロングビルは少し考えたあとに、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

2人は並んで歩き始めた。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ちよつとくだけた言葉遣いになって、ミス・ロングビルが話しかけた。

「は、はい？　なんででしょう」

自分の誘いがあつさり受けられたことに気を良くしたミスタ・コルベールは、跳ねるような調子で答えた。

「宝物庫の中に、入ったことはありませんか？」

「ありますとも」

「では、『破壊の杖』をご存知？」

「ああ、あれは……」

柔らかかったコルベールの表情が、かすかに強張る。宝物庫の中でそれを初めて目にした時のことを思い出していた。

「……あれは、不気味な代物でしたなあ」

ミス・ロングビルの目が光った。

「と、申されますか？」

「説明のしようがありません。不気味としか……杖として、変わった形というわけではないのです。むしろ南東の国にならあんな形の杖は多くあるのですが……」

コルベールが目を伏せる。その先を言うべきか迷って、やめた。杖から、血の気配を感じたからなどと。

それは彼の『炎蛇』としての目線から見た話であったからだ。

だが、ミス・ロングビルはその目をまた光らせた。

「しかし、宝物庫は、立派なつくりですわね。あれでは、どんなメイジを連れてきても、開けるのは不可能でしょうね」

「そのようですな。メイジには、開けるのは不可能とされます。なんでも、スクウエアクラスのメイジが何人も集まって、あらゆる呪文に對抗できるよう設計したそうですから」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらっしやる」

ミス・ロングビルは、コルベールを頼もしげに見つめた。

「よろしければ、もつと宝物庫のことについて知りたいわ。私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

「コルベールはミス・ロングビルの気を引きたい一心で、頭の中を探った。宝物庫、宝物庫と……。」

「やつとミス・ロングビルの興味を引けそうな話しを見つけたコルベールは、もつたいぶつて話し始めた。」

「では、ちよつとご披露いたしましょう。大した話ではないのですが……。」

「是非とも、伺いたいわ」

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが、1つだけ弱点があると思うのですよ」

「はあ、興味深いお話ですわ」

「それは……物理的な力です」

「物理的な力？」

「そうですね！ 例えば、まあ、そんなことはありえないのですが、巨大なゴーレムが……」

「巨大なゴーレムが？」

「コルベールは、得意げにミス・ロングビルに自説を語った。聞き終わったあと、ミス・ロングビルは満足げに微笑んだ。」

「大変興味深いお話でしたわ。ミスタ・コルベール」

*

授業中、私語が原因でチョークをかつ食らった日の夜……。

ルイズはジェヴォーダンを、廊下にほっぽり出した。

「なにをする」

「罰よ、罰。どうせ寝ないんでしょ、廊下に立ってなさい」

怒られたことを根に持っているらしい。ルイズの額には、綺麗に赤い点ができています。

「お前、だから人として……」

「人なら悪い事すると罰受けるの！ あんたチョークかわしたんだか

ら1回は1回よ！」

ルイズは扉をピシヤリと締め、中からガチャリと鍵をかける音が聞こえてきた。

扱いに不満はあるものの、今回はジェヴオーダン自身も責任があるとは思っているため、仕方ないかのため息をついた。

仕方ない、この時間でも図書館は開いているのだろうか。そう考えていると……隣の部屋の扉が、がちやりと開いた。

出てきたのは、サラマンダーのフレイムだ。ジェヴオーダンはつい癖で一瞬身構えたが、それがキュルケの使い魔だと気付いて緊張を解いた。

サラマンダーはちよこちよこことジェヴオーダンの方に近づいてくる。ジェヴオーダンは小首を傾げた。

「お前は……？」

きゆるきゆる、と人懐こくサラマンダーは鳴いた。害意はないようだった。

サラマンダーはジェヴオーダンのコートを、くわえるとグイグイと引っ張った。

「ついて来いと言うのか？」

キュルケの部屋のドアは開けっ放しだ。あそこに引っ張り込むつもりのようなだ。

サラマンダーの気まぐれじゃなかったら、いったいキュルケが俺に何の用だ？

先日の朝からキュルケが気に入っていないジェヴオーダンは、怪訝そうな顔でキュルケの部屋のドアをくぐった。

部屋の中は真っ暗だった。ジェヴオーダンは松明を取り出そうとして、奥からの声に手を止める。

「扉を閉めて？」

ジェヴオーダンは言われた通りにする。そしてコツコツと奥へ歩いて行くと、それについてくるように周りのロウソクに火が灯り、その灯にキュルケの悩ましい姿が浮かび上がる。誘惑するための下着だろう、それしかつけていない。

おおよその目的がわかり、ジエヴオーダンはため息をついた。

「俺に何の用だ」

「あなたは、あたしをはしたない女だと思うでしょうね」

「何の、用だ」

しつかりと、解らせるように、ジエヴオーダンは繰り返す。キュルケは目を細め、上気した顔でジエヴオーダンを見やった。

「恋してるのよ。あたし。あなたに。恋はまったく、突然ね。あなたが、ギーシュを倒したときの姿……かつこよかったわ。まるで伝説のイーヴアルデイの勇者みたいだったわ！ あたしね、それを見て……」

ジエヴオーダンは振り返り、扉を抜けて帰ろうとした。すかさずキュルケが杖を振るい、扉に『ロック』の呪文をかける。

だが、それがジエヴオーダンを引き止めるどころか、さらに怒りに火を注いだのだろう。

彼はコートの下に隠していた散弾銃を取り出し、ドアノブに容赦なく銃弾を打ち込んだ。キュルケも、こつそり窓から様子を見ていた。キュルケのボーイフレンドも、これには面食らう。

数発の散弾がドアノブを襲ったが……こうした学校の建物の内、ドアノブのように壊れやすいものには『固定化』がかけられていたようだ。ドアノブはびくりともしない。ジエヴオーダンの機嫌はさらに悪くなった。

「荒っぽいのね、あなた。でもそんなワイルドなもの、嫌いじゃないわ」

そんな彼の心持ちを知ってか知らずか、いつの間にか背後まで迫ったキュルケが、ジエヴオーダンの背後からスルツと腕をからめて抱きしめる。これでもかというくらい自慢の胸を押し付ける、キュルケの必殺技だ。

「キュルケ！ そいつは誰なんだ！」

窓からこつそり覗き込んでいたキュルケのボーイフレンドたちが抗議の声を上げるが、キュルケが杖を振るうと、立ち上った炎とともに落下していった。

「…………ふう、これで邪魔者はいないわ。とにかく！ 愛してる！」

改めてキュルケはジェヴォーダンを抱きしめ、誘惑の言葉を次々に投げかける。しかしジェヴォーダンはキュルケの肩を引き離すと、冷たい目で見下ろした。

マスクを外したジェヴォーダンの顔は、薄暗いロウソクの灯に影を落とし、それがキュルケにはこの上なく魅力的に見えた。

「…………みろ」

「あら、ダーリン…………見つめ合うのも素敵だわ」

「違う…………」 啓ろ」

「…………え？」

ジェヴォーダンの声のトーンは、どこまでも低く冷淡で、キュルケが期待していたような気配など微塵も感じられない。

そんなキュルケに、ジェヴォーダンはぐいと顔を寄せる。瞳と瞳が近づく。キュルケは、ジェヴォーダンの瞳の中を、見た。

「……………っ」

「見えるか？」

キュルケは、全身に鳥肌が立つのを感じた。冷たい汗が流れ、呼吸も荒くなる。

「見えるだろう」

「あ…………あ……………」

全身がガクガクと震える。それなのに、その瞳から目を逸らす事が出来ない。恐ろしいのに、逃げる事ができない。

「これがお前が手を出そうとしているものだ。おぞましいもの…………俺の中の獣だ」

「ああ……………」

「あの色小僧の事でも、こちらは腹を立てているんだ…………これ以上、余計なことをするな」

ようやく、ジェヴォーダンはキュルケから顔を放してやる。キュルケは顔面蒼白で、へたり込み、自分の肩を抱いてふるふると震えていた。

もうこれで、用などない。

ジエヴオーダンが振り返り、扉を開けようとする、唐突に向こうから扉が開かれた。

立っていたのは、ルイズだった。

「ジエヴオーダン！」

どうやら、銃声を聞いて慌てて駆けつけたようだ。ルイズは部屋に駆け込み、青くなったキュルケを見つけて息を飲んだ。

「あんた、ツエルプストーに何を……」

「あの色小僧と同じ目に合わせたまでだ」

「さっきの銃声は何!？」

「鍵を持ってなくてな」

ジエヴオーダンはそうとだけ言うと、さっさと部屋を出て行ってしまふ。ルイズはへたり込むキュルケとジエヴオーダン、どちらを優先するか迷い、しかしキュルケの様子に気がついて窓から乗り込んで来ようとするキュルケのボーイフレンドを見て、やむなく部屋を飛び出した。

2人が出て行った後、キュルケは数人のボーイフレンドに介抱を受けていたが……おもむろに杖を振りかぶり、ロウソクの火から立ち上った炎の蛇が彼らを窓の外へ吹っ飛ばした。

「……ふふ、うふふふふふ」

残念ながら、ジエヴオーダンの読みは外れていた。

「うふふ、あんなに、ワイルドなヒト、初めてだわ……燃え上がる恋でなく、こんなにもクールで凍えるような恋もあるのね……」

キュルケは、燃えていた。

「絶対モノにしてやるわー！ オホホホ!!」

ルイズはジエヴオーダンが戻った自室に駆け込み、慌てて後ろ手に扉を閉める。大きく息を吸い、また大きく吐き出すと、キツとジエヴオーダンを睨みつけた。

「あんたねえ！ 何があったのか知らないけど、学校の中で銃を撃つなんて何考えてるの!？」

「言ったらう、鍵を持っていなかったと。扉を閉められて、仕方なくド

アノブを撃った」

「銃弾は鍵じゃな——い!! なにが『獣でなく人である証』よ、あんたこそ見境なくバンバカ撃ちまくる獣じゃないの!!!」

怒り任せの軽率な行動だった事はジエヴオーダン自身にもわかっていたため、ジエヴオーダンは思わず返答に詰まってしまふ。

しかしそれがルイズの怒りをさらに延焼させることとなる。

「しかも、なんで、あんたが、あの、ツエルプストーの部屋にいるのよ おおおお!!! 何をしてたの!!!」

「奴の火トカゲに引つ張り込まれた。ロクな話ではなかったがな。軽々しい色恋など、俺には無縁だ」

「……まあ、あの女の誘惑に引つかかんなかった事だけはいいわ。でもね、他に理由があったとしても、あの女だけはだめ。ツエルプストーの家と、ヴァリエール家には、深い深い因縁があるんだから!」
そこから、ルイズによる数世代に渡る両家の下らない争いについての演説がちらちらと並べられるが、ジエヴオーダンは相槌すら打たずに聞き流し、ノコギリ鉋の調整などに手を伸ばしていた。

肩で息をするルイズがハー——ツとため息をし、そんなジエヴオーダンの頭を掴んでグリーンと無理やり向き直させる。

「それにね、あんたも見たでしょう。あいつの男の数。あんた、顔が割れてるんだからね。もしツエルプストーに、ただの平民の使い魔が手を出したなんて知れたら、あんた4、5人に背中を狙われるわよ」

「何も問題ない話だな」

「私には問題よ!」

そうは言いつつ、ジエヴオーダンはふむ、と唸った。背中を狙われる事などヤーナムでは日常茶飯事だったし、今更驚くような事柄ではないが、ここでの生活に支障が出るとなると話は違う。

自分を狙うものを2度3度ほど振り返りにすれば、自分自身を狙っても意味はないと流石にわかるはずだが、あまりしつこくそういった連中につけ狙われるのは単に気分が悪い。

であれば、ジエヴオーダンには身を守る術がある。

「ルイズ、剣をくれ」

出した結論は、抑止論だった。

「剣？ それがあるじゃないの」

「これか。お前が持ち歩くなと言ったんだろう」

グロテスクな見た目のノコギリ鉋に、ルイズはうーんと顔をしかめる。確かに、この見た目の刃物はできれば持ち歩いて欲しくはない。

「丸腰でいたら狙われても文句は言えん。お前としても、使い魔が剣を携えておけばれっきとした力の誇示になる」

「……ん、確かにそうね。いいわよ、剣買ってあげる」

「恩に着る」

「明日は虚無の曜日だから、街まで降りましょう。それにしてもあんた、剣なんか扱えるの？ 戦いぶりは確かにすごかったけど、剣士っていう感じでもないわ」

「ものによるな。俺たち狩人は、何かしらの仕込みのある武器しか使わない。様式美を重んじ、扱いこなすことを人の誇示とするために」

「……前から思ってたんだけど」

ルイズは少し首をかしげ、ジェヴオーダンに向き直る。

「あんたのその、異様なまでに人であることに固執するのはなんなの？ 別にあんたはただの人に見えるんだけど」

「俺の宇宙で、獣の病というものが蔓延したことは話したな」

「ええ。人が獣になっちゃうとかつていう。それを、狩ってたんでしよう」

「言うなれば獣とて元は人さ。人狩りなど、おぞましいと思わんか？」

「それは……」

ルイズは言葉に詰まった。人殺し、などと言う気はないが、何も感じないとも言えない。ジェヴオーダンは一息つくとかすかにうつむいた。

「ガスコインという狩人がいた。異邦から来た男で、俺も彼について詳しく知る訳ではないが、優秀な狩人だった。だが彼はやがて狩りに溺れた。獣の愚かに浸り、ただ狩る事だけを選んだんだ……自分の妻さえ、手にかけて」

「……！」

「彼にはもう人と獣の区別がつかなくなっていた。見境なく狩り、ただ殺し回るだけの獣なんぞと、同じものにはなりたくない。人でありたいと思うのは、真つ当だと思いがね」

フーツと息を吐き、ジェヴオーダンはそれから、ノコギリ鉋を手に持ってそれをまじまじと見やった。

「……ああ、それと、剣を買ってほしい理由はもう一つある」

「何?」

「これだ」

ジェヴオーダンがノコギリ鉋を振りかざし、変形させ……そのノコギリ状の刃が柄から離れてかつ飛び、ルイズの顔の横をかすめて後ろの壁に突き刺さった。美しい桃色の髪が2、3本ほど、月の光を反射して神秘的に輝く。

ルイズは白目を剥き、気絶しそうになりながらもなんとか意識を留めた。

「あんたは、ご主人様に、何を」

「すまん、ここにくる前にかかなりの激戦があつて酷使しててな、先日
のギーシュとの決闘で限界だったようだ。本来なら工房の道具がな
いと直せないものだから、改めて剣は必要だ」

「それと、この、所業に、なんの、関係が」

「さて、夜も遅いぞ。寝たらどうだ?」

ジェヴオーダンなりの茶目つ気だったのだが、当然そんな狩人
ジョークが貴族に通じるはずもなく、鞭を取り出したルイズの説教は
夜更けまで続く事になった。

06：親友

キュルケは、昼前に目覚めた。今日は虚無の曜日、授業はない。窓を眺めて、窓ガラスが入っていないことに気付いた。周りが焼け焦げているのを寝ぼけまなこで見つめて、昨晚の出来事を思い出した。

「そうだわ、ふあ、色んな連中が顔を出すから、吹っ飛ばしたんだっけ」
そして、窓の事などまったく気にせずに、起き上がると化粧を始めた。今日は、どうやってジエヴオーダンを口説こうか、と考えるとウキウキしてくる。キュルケもある意味、生まれつきの狩人なのだ。化粧を終え、自分の部屋から出て、ルイズの部屋の扉をノックした。自分の顎に手を置いて、にっこりと笑う。

ジエヴオーダンが出てきたら、抱きついてキスをする。
ルイズが出てきたら、部屋の奥にいろであろう、ジエヴオーダンに流し目を送って中庭でもブラブラしていれば、向こうからアプローチしてくるだろう。

キュルケは、よもや自分の求愛が拒まれるなどは露ほども思っていないかった。しかし、ノックの返事はない。あけようとするも鍵がかかっているの、キュルケはなんの躊躇いもなく『アンロック』の呪文をかけた。学院内で『アンロック』の呪文を唱えることは重大な校則違反であるが、キュルケは気にしない。恋の情熱は全てのルールに優越する、というのがツエルプストー家の家訓なのだ。

しかし、部屋はもぬけの殻だった。2人ともいない。

「相変わらず色気のない部屋で……え、なんで？」

おかしな点と言えば、壁に深々と突き刺さるノコギリ状の刃。当然女子の部屋にこんな物騒なアクセサリーがあるはずもない。

そしてその脇、机のそばの鞆かけにルイズの鞆がない。どこかに出かけたのかと、窓から外を見まわした。

すると、門から馬に乗って出て行く2人が見えて目を凝らす。果たしてそれは、ルイズとジエヴオーダンだった。

「なにより、出かけるの？」

キュルケはつまらなそうに呟いた。それから、ちよつと考え、ルイ

ズの部屋を飛び出した。

タバサは寮の自分の部屋で、読書を楽しんでいた。青みがかった髪と、ブルーの瞳を持つ彼女は、メガネの奥の目をキラキラと海のように輝かせて本の世界に没頭していた。

タバサは年より4つも5つも若く見られることが多い。身長は小柄なルイズより5センチも低く、体も細い。しかし、そんなことは気にも留めない。

他人からどう見られるかなどより、とにかく放っておいてほしいと考えている。

タバサは虚無の曜日が好きだった。自分の世界に、好きなだけ浸っていられる。彼女にとって他人は、自分の世界に対する無粋な闖入者だ。数少ない例外に属する人間でも、よほどの場合でない限り鬱陶しく感じてしまう。

その日も、どんどんとドアが叩かれたのでタバサはとりあえず無視し、音が激しくなると杖を振る『サイレント』の魔法を唱えた。その間、表情はぴくりとも変わらない。

彼女が無音の世界に落ちると同時に、ドアが勢いよく開かれた。入ってきたのは、キュルケだった。彼女は大げさに何かを喚いたが、『サイレント』の呪文が効果を発揮しているため、タバサには届かない。

キュルケはタバサの本を取り上げた。そして、タバサの肩を掴んで自分に振り向かせる。タバサは、無表情にキュルケの顔を見つめた。

招かれざる客ではあるが、入ってきたのはキュルケである。これが他の相手なら、なんなく部屋から『ウインド・ブレイク』でも使って吹き飛ばすところなのだが、キュルケは数少ない例外だった。

しかたなく、タバサが『サイレント』の魔法を解くと、いきなりスイッチを入れたオルゴールのように、キュルケの口から言葉が飛び出した。

「タバサ、今から出かけるわよ！ 早く支度をしてちょうだい！」

タバサは短くボソツとした声で自分の都合を述べた。

「虚無の曜日」

それで十分だと言わんばかりに、タバサはキュルケの手から本を取り返そうとした。キュルケが本を掲げると、背の高さのせいでタバサの手は本に届かない。

「わかってる、あなたにとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしは痛いほどよく知ってるわよ。でも。今はね、そんなこと言ってもらえないの！ 恋なのよ、恋！」

それでわかるでしょ？ と言わんばかりのキュルケの態度であるが、タバサは首を振った。キュルケは感情で動くが、タバサは理屈で動く。対照的な2人だが、そんな2人は、なぜか仲が良い。

「そうね、あなたは説明しないと動かないのよね！ ああもう！ あたしね、恋をしたのでね？ その人が今日、あのにっくいヴァリエールと出かけたの！ あたしはそれを追って、2人がどこに行くのか突き止めなくちゃいけないの！ わかった？」

タバサは首を振った。それでどうして自分に頼むのか、理由がわからなかった。

「出かけたのよ！ 馬に乗って！ あなたの使い魔じゃないと、彼に追いつけないの！ ヴァリエールの使い魔の彼よ！」

その言葉に、タバサの眉がピクツと動いた。

『ヴァリエールの使い魔』。サモン・サーヴァントで平民を召喚したという噂は聞いていたが、タバサはその男を学校の図書室で見たことがあった。

本を読むふりをして、彼のメモを覗き見て驚愕した。見たことのない文字で書かれたメモだったが、彼は間違いなくこちらの世界の文字の分析を行っていた。召喚の日から1週間ほどしか経っていないというのに、あのメモを見る限り、解説はかなり進んでいたように思える。

異国から来たのなら文字が違うのも頷ける。だが、どこの世界に、1週間で異国の文字を覚えられる者がいようか。タバサはそれ以来、彼に興味があったのだ。

その男に、キュルケが恋をした。自分の使い魔で追いかけてほしい。タバサは頷いた。なるほど自分も、彼を追いかけてほしい理由ができた。

トリスティンの城下町を、ジェヴオーダンとルイズは歩いていった。乗ってきた馬は町の門のそばにある駅に預けてある。ジェヴオーダンも流石に乗馬の経験はなく、腰を痛めてしまった。

「くっ、なかなか痛むな……」

「意外ね、あんたなんでも卒なくこなすから、乗馬くらい平気かと思っただ」

「馬車には乗ったことがあるがな。尤も、死に馬の引く馬車だったがね」

ジェヴオーダンは、物珍しそうに辺りを見回した。白い石造りの街はどれもヤーナムにはない造形ばかり。道端で声を張り上げて、果物や肉や、籠などを売る商人たちの姿。にぎわう人々の喧騒。どれもこれも、ジェヴオーダンにとっては初めてのことだ。

「すごい人だな」

「ブルドンネ街。トリスティンで一番大きな通りよ。この先にトリスティンの宮殿があるわ」

「宮殿か。王女陛下とやらもそこか？」

「たぶんね。それよりあんた、上着の中の財布は大丈夫でしょうね？」

「このへんはスリが多いから」

「ああ、何人が仕掛けてきたな」

ジェヴオーダンが手に持った剃刀の返り血を袖で拭くと、ルイズはぎよつとした。

「あ、あんた何したの!？」

「手を伸ばして来た奴の、手の腱をな。かわいそうだが、2度とスリなご働けない身体になったろう」

涼しい顔でそう言うてのけるジェヴオーダンに、もはやこういう事にもなれてきたルイズは呆れ顔で答える。

「ほんと、とんでもない事するわねあんた……」

「人が清く正しく生きる道に戻る手助けをしてやったんだ、感謝してほしいくらいだな」

「でも、それが効くのは手を伸ばすスリだけね。魔法を使われたら1発だわ」

辺りを見渡すが、メイジのような姿のものはいない。ジエヴォーダンは魔法学院で、メイジと平民を見分ける術を覚えた。メイジは、とにかくマントをつけているのだ。

「平民しかいないのではないか?」

「だって、貴族は全体の人口の1割いないのよ。あと、こんな下賤なところ滅多に歩かないわ」

「貴族もスリを働くのか」

「貴族は全員がメイジだけど、メイジのすべてが貴族ってわけじゃないわ。いろんな事情で、勘当されたり家を捨てたり……」

「わかった、もういい。要は没落ということだろう。それを貴族の前に語らせる義理はない」

「……そう、それならいいわ」

改めて、2人は歩き始める。と、ジエヴォーダンが何かの気配に気がついて振り向いた。

「ん……?」

群衆の中を見渡すと、チラと、見覚えのある赤髪。フンとジエヴォーダンは鼻で笑うと、もはや追跡者を意にも留めず、ルイズと共に武器屋を目指した。

店の中は昼間だというのに薄暗く、ランプの灯りがともっていた。壁や棚に、所狭しと剣や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾ってあった。

店の奥で、パイプをくわえていた50がらみの親父が、入ってきたルイズを胡散臭げに見つめた。紐タイ留めに描かれた五芒星に気がつくつくと、慌ててパイプを離し、ドスの利いた声を出した。

「旦那。貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまっさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

「客よ」

「こりやあおったまげた。貴族が剣を！ おったまげた！」

「どうして？」

「いえ、若奥さま。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖をふる、そして陛下はバルコニーから手をおふりになられる、と相場は決まっておりますんで」

「買うのはわたしじゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今は貴族の使い魔も剣をふるようで」

主人は、商売つ気たつぷりにお愛想を言い、それから、ジェヴオーダンをじろじろと眺めた。

「剣をお使いになるのは、この方で？」

ルイズは頷いた。ジェヴオーダンは、棚に並べられた武器を代わる代わる手に取り、ふむーと唸っている。店先にあるものは、どれも武器として単純に過ぎる。気にいるものはないようだ。

ルイズはそんなジェヴオーダンを無視して言った。

「わたしは剣のことなんかわからないから、適当に選んでちょうだい」
主人はいそいそと奥の倉庫に入り、聞かれないよう小声でククツと笑った。

「こりや、鴨がネギしよってやってきたわい。せいぜい、高く売りつけるでしょう」

彼は1メートルほどの長さの、細身の剣を持って現れた。

随分華奢な剣であり、片手で扱うものらしく、短めの柄にハンドガードがついている。主人は思い出すように言った。

「そういや、昨今は宮廷の家族の方々の間で下僕に剣を持たすのがはやっておりますね。その際にお選びになるのが、このようなレイピアでさあ」

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのがはやってる？」

ルイズが尋ねると、主人はもっともらしく頷いた。

「へえ、なんでも、最近このトリステインの城下町を、盗賊が荒らしております……」

「盗賊？」

「そうでき。なんでも『土くれ』のフーケとかいう、メイジの盗賊が、貴族のお宝を散々盗みまくってるって噂で。貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

ルイズは盗賊には興味がなかったもので、じろじろと剣を眺めた。しかし、すぐに折れてしまいそうなほどに細い。

「もつと太くて大きいのがいいわ」

「お言葉ですが、剣と人には相性ってもんがございます。男と女のように。見たところ、若奥さまの使い魔とやらには、この程度が無難なようで」

「太くて大きいのがいいと、言ったのよ」

ルイズが強くなる。ペこりと頭を下げ、主人は奥に入った。その際、小声で「素人が！」とつぶやきながら。

今度は立派な剣を油布で拭きながら、主人は現れた。

「これなんかいかがです？」

見事な剣だった。1.5メートルはあろうかという大剣で、柄は両手で扱えるように長く、立派な拵えになっている。ところどころに宝石も散りばめられ、諸刃の刀身は鏡のように輝いている。見るからに切れそうな、頑丈そうな大剣であった。

「店一番の業物でさ。貴族のお供をさせるなら、このくらいは腰から下げて欲しいものですな。といっても、こいつを腰から下げるのは、よほどの大男でないと無理でさあ。やつこさんなら……まあ、ギリギリいけるかどうかというところすなあ」

「おいくらっ..」

「何せこいつを鍛えたのは、かの有名なゲルマニアの錬金術師シユペー卿で。魔法がかかっている鉄だって一刀両断でさ。ごらんなさい、ここにその名が刻まれているでしょう？ おやすかあ、ありませんで」

「わたしは貴族よ」

ルイズが胸をそらして言うので、主人は淡々と値段を告げた。

「エキユー一金貨で二千。新金貨なら三千」

「立派な家と、森付きの庭が買えるじゃないの」

「名剣は城に匹敵します。屋敷で済んだらやすいもんでさ」

「新金貨で、百しか持ってきてないわ」

ルイズは貴族なので、買物物の駆け引きが下手であった。あつけなく財布の中身をばらしたルイズに、主人は話にならない、というように手を振った。

「まともな大剣なら、どんなに安くても相場は二百でさ」

ルイズは顔を赤くした。剣がそんなに高いとは知らなかったのだ。

だがそこへ、ジエヴオーダンが身を乗り出して剣を覗き込み……防疫マスク越しに、ため息をついた。

「これでは、ダメだ」

えっというふうに、ルイズと主人がジエヴオーダンを見る。ジエヴオーダンは刀身を指先でコンコンと叩きながら、つまらなそうに言った。

「メツキの真鍮製などでは話にならない。名剣だつて？ 見ろ、シユペー卿とやらの銘が刻まれていると言ったが、こんなエングレーブは素人以下の手のものだ。さしずめまともな客として見てないもの向けの商品だろう」

ルイズが冷たい目で主人に向き直る。禿げ上がった親父の頭に、大粒の脂汗が浮かんでいた。貴族の方は素人で合っていたのだが、使い魔の方はとんでもない食わせ物であったことに、今になって気が付いたのだ。

だがジエヴオーダンは、さして責める様子もなく淡々と、己のニーズだけを伝えた。

「すまんが、事情があつて単純な武器を使うわけにいかない身でな。扱いの複雑なものや、願わくば暗器のようなものが望ましい。大きさは問わん、ただ、扱いが難しければ難しいほどいいんだ。難しい要望だと思うが、用立てできるか？」

「へえ、へえ、すぐお持ちします」

主人は慌てて裏に入り、額の汗をぬぐった。

「ごりや、鴨ネギだなんてとんでもない。ありやあたい客だ、しつかりしたものを立ててせにや」

次に主人が持ってきたのは、複雑に湾曲した曲剣だった。まるで三日月のような独特のフォルムに、ルイズが眉をひそめる。

「なあに、それ」

「これは、北の果ての国、カリム伯アルスターの作の1つでさ。扱いの難しさで言えば確たるもので、普通に振り回して扱うようなものではございやせん。このカギ状の刃が、相手の首を刈るのに適してるだけでなく、盾や障害物を越えて敵に刃を届けさせるといふものでさあ、へえ」

「ふむ」

ジェヴオーダンは歪んだ刀剣を手に取り、手先でくるくると回してみせる。主人の説明通りの作りであれば確かに簡単に扱えるものではない、だが、それに勝る利点もとても多いように思える。

「なるほど、これなら『人』たりえるな」

そう呟いたときだった。乱雑に積み上げられた剣の中から、声が出た。低い、男の声だった。

「生意気言うんじゃねえ、木偶の坊」

ルイズとジェヴオーダンは声の方を向いた。主人が、頭を抱える。

「おめえ、そんなもんを振り回してまともに立ち回れるのか？ まともな剣を扱えるようにも見えねえぞ！ おでれーた！ 冗談じゃねえ！ おめえにや棒つきれがお似合いさ！」

「……言ってくれるな」

ジェヴオーダンが眼光を鋭くし、声の主を探す。しかし、どこを探しても、人の姿は見えない。

「わかったら、さつきと家に帰りな！ おめえもだよ！ 貴族の娘っ子ー！」

「失礼ね！」

ジェヴオーダンが声のする方に近づく。

「どこにいる？」

「おめえの目は節穴か！」

ジェヴオーダンは驚きのあまり声を失った。声の主は1本の剣だった。錆び付いたボロボロの剣から声は発せられていたのである。

「剣が言葉を……？」

ジェヴオーダンがそう言うと、主人が怒鳴り声をあげた。

「やい、デル公！ お客様に失礼なことを言うんじゃねえ！」

「デル公？」

デル公と呼ばれたこの剣、先ほどの大剣と長さは変わらないが、刀身が細い、薄手の長剣だった。表面の錆のせいで、お世辞にも見栄えがいいとは言えないが。

「お客様？ 身の丈にあつた剣もふれない木偶の坊がお客様？ ふぎけんじやねえよ！ 耳をちよんぎつてやらあ！ 顔を出せ！」

「それって、インテリジェンスソード？」

ルイズが、当惑した声をあげた。

「そうでき、若奥さま。意思を持つ魔剣、インテリジェンスソードでさ。いったい、どこの魔術師が始めたんでしようかねえ、剣をしゃべらせるなんて……。とにかく、こいつはやたらと口は悪いわ、客にケンは売るわで閉口してまして……。やいデル公！ これ以上失礼があつたら、貴族に頼んでてめえを溶かしちまうからな！」

「おもしれ！ やつてみる！ どうせこの世にやもう、飽き飽きしてたところさ！ 溶かしてくれるんなら、上等だ！」

「やつてやらあ！」

主人が歩き出すのを、ジェヴオーダンが手を上げて静止した。

「溶かすだど？ とんでもない、これは凄い剣だ……。こいつは、どんな仕掛けなんぞよりも上等だ」

ジェヴオーダンは、その剣を手に取りまじまじと見つめた。

狩人に仕掛け武器が必要なのは、その仕掛けが動かせる事こそ人の誇示になるため。その仕掛けを扱いこなせることが、まだ獣に落ちていない何よりの証拠になる。

であれば、会話のできる剣は？ それこそ、究極の『人の誇示』を備えていると言える。

「デル公と呼ばれていたが、貴公の名は？」

「俺はデルフリンガーさまだ！ おきやがれ！」

「名前だけは、一人前でさ」

「俺はジエヴオーダン。デルフリンガー、俺には貴公の価値がわかる。俺は貴公が気に入ったぞ」

「ほーう、言いやがるじゃねえか。褒められるっつーのは慣れんぞ、俺様照れっちまう」

ふと、剣は黙りこくった。じつと、ジエヴオーダンを観察するよう

に。
息を飲むように剣がささやき、小さな声で話し始めた。

「おで、れーた。おめ、『使い手』か。いや、それだけじゃない」

その声は、先ほどまでの威勢とは打って変わり、震えていた。

「『使い手』？」

「それだけじゃねえ。お前の中にある、これは……いや、これはお前自身か？ てめ、一体何者だ？」

「……ふん、なるほど、『見える』か。ますます気に入ったぞ、俺はお前を買う」

ジエヴオーダンが言うと、剣は黙りこくった。

「ルイズ、これにする」

ルイズはいやそうな声をあげた。

「えくくく、そんなのにするの？ もっと綺麗でしゃべらないのにしなさいよ」

「これ以外ない。この上ない素晴らしい剣だ」

「褒めるねえ、俺様、感激」

「そうは見えないけど……」

ルイズはぶつくさ文句を言ったが、あまりにも気に入っているようなので、主人に尋ねた。

「あれ、おいくら？」

「あれなら、百で結構でさ」

「安いじゃない」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ。」

ジエヴオーダンは、思いついたように振り返り、主人に歩み寄ると耳打ちをした。

「主人、貴公の目利きは確かなようだ。今後、武具を用立てする際は、

貴公に頼みたい」

「……へへ、旦那さんは、目利きだけでなく商売まで上手と見える。結構でさ、ではこの剣は九十でお売りいたしやす」

「感謝する。ついでに浮いた10で用立てて欲しいものがある」

ジェヴオーダンはさらに小さな声で主人に耳打ちをする。主人はギョツとしたような顔をして、それから店の裏に入り、小さな包みを持って出てきた。

「仰られているものに似たものですと、うちではこちらしか……」

ジェヴオーダンは包みを確認し、コクリと頷く。

「塗りたくるだけで、仰るような使い方ができるかと思えます」

「恩に着る」

ジェヴオーダンは、ルイズに持たされていた財布から金貨をカウンターにぶちまけた。主人は慎重に枚数を確認すると、頷いた。

「毎度」

剣を取り、鞘に収めるとジェヴオーダンに手渡した。

「どうしても煩いと思つたら、こうやって鞘に入れればおとなしくなりませあ」

ジェヴオーダンは頷いて、デルフリンガーという名の剣を受け取つた。

*

『土くれ』の二つ名で呼ばれ、トリスティン中の貴族を恐怖に陥れているメイジの盗賊がいる。

土くれのフーケ。北の貴族の屋敷に、宝石が散りばめられたティアラがあると聞けば、早速赴きこれを頂戴し、南の貴族の別荘に先帝から賜りし家宝の杖があると聞けば、別荘を破壊してこれを頂戴し、東の貴族の豪邸に、北の国の細工師が腕によりをかけて作った石咬みの指輪があると聞いたなら一も二もなく頂戴し、西の貴族のワイン倉に、値千金、百年ものヴィンテージワインがあると聞けば喜び勇んで頂戴する。

まさに神出鬼没、メイジの大怪盗。それが土くれのフーケだった。フーケの盗みは行動パターンが読めず、トリステインの治安を預かる王室衛士隊の魔法衛士たちも振り回されているのだった。

しかし、盗みの方法には共通する点があった。フーケは狙った獲物が隠されたところに忍び込む時には、主に『錬金』の魔法を使い、扉や壁を粘土や砂に変え、穴を開けて潜り込むのだ。

貴族も当然対策は練る。屋敷の壁やドアは、強力なメイジに頼んでかけられた『固定化』の魔法で『錬金』の魔法から守られている。しかし、フーケの『錬金』は強力であり、たいていの場合『固定化』の呪文などものともしないのであった。

忍び込むばかりでなく、力任せに屋敷を破壊するときは、フーケは30メートルはあろうかという巨大な土ゴーレムを使う。

城でも壊せるような巨大な土ゴーレムである。集まった魔法衛士たちを蹴散らし、白昼堂々とお宝を盗み出したこともある。

そんな土くれのフーケの正体を見たものはいない。男か、女かもわかっていない。わかっているのは、おそらくトライアングルクラスの『土』系統のメイジであること。

そして、犯行現場の壁に『秘蔵の○○、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』と、ふざけたサインを残していくこと。

そして……いわゆるマジックアイテム、強力な魔法が付与された数々の高名なお宝が何より好きということであった。

巨大な2つの月が、五階に宝物庫がある魔法学院の本塔を照らしている。

その塔の壁、垂直に立った人影。土くれのフーケであった。

フーケは足から伝わってる壁の感触に舌打ちをした。

「さすがは魔法学院本塔の壁ね……物理衝撃が弱点？　こんなに厚かったら、ちよつとやそつとの魔法じゃどうしようもないじゃないの！」

足の裏で、壁の厚さを測っているのだ。『土』系統のエキスパートであるフーケにとって、そんなことは造作もない。

「確かに『固定化』の魔法以外はかかってないみたいだけど……これじゃ私のゴーレムの力でも、壊せそうにないね……」

フーケは、腕を組んで悩んだ。

「やっとここまで来たってのに……かといって、『破壊の杖』を諦めるわけにやあいかないね……」

フーケの目がきらりと光り、腕を組んだまま、じっと考え始めた。

フーケが本塔の壁に足をつけて悩んでいる頃……ルイズの部屋では、軽い騒動が持ち上がっていた。

ルイズとジエヴオーダンは、ぽかんとしてキュルケが差し出した剣を見ていた。

ピカピカと輝きを放つ長剣。それはまさしく、昼の武器屋で見つめたもの。キュルケは得意げな顔でその剣をジエヴオーダんに送りつけて来たのだ。

「ねえどう？ ダーリンによりお似合いの剣を見つけたから、あたしプレゼントしたくて買って来たのよ」

ルイズとジエヴオーダンを付けていたキュルケは、ルイズがジエヴオーダんに剣を買っていたのを見ていたのだ。そのすぐ後に武器屋に入ったキュルケは、店主をたぶらかしてその大剣を買っていた。当然、その剣の正体を知る由もなく。

「知ってる？ この剣を鍛えたのはゲルマニアの錬金術師シュペー卿だそうよ？ ねえ、あなた、よくって？ 剣も女も、生まれはゲルマニアに限るわよ？ トリステインの女ときたら、このルイズみたいに嫉妬深くって、気が短くって、ヒステリーで、プライドばかり高くって、どうしようもないんだから」

胸をはり、声高にそう語ってみせるキュルケ。しかし……そんな様子を見たルイズとジエヴオーダンは、キュルケの予想とは違い、必死で笑いをこらえているようだった。

「……何がおかしいの？」

「いいや、何でもないわよ。ジエ、ジエヴオーダン、あんたその剣貰ってあげなさいよ、ちよつと可哀想じゃない、ぷぷ」

「そうだな、クク」

なんとも可笑しそうな様子の2人に、キュルケは意味がわからないという風に首をかしげる。

「なんなのもう!?! 何がそんなに面白いのよ!」

「なんでもないわよ、いやほんと……ひひひ、げ、ゲルマニアの女ってみんなそうなの? 抜けてるっていうか、単にバカって言うか。あんたこの剣にいくら払ったのよ……にひひひひ」

キュルケの眉がピクピクと動く。相当頭にきているようだ。

「言つてくれるわね、ヴァリエール……」

「何よ、ホントのことでしょう? 物の価値のわからない、お牛さん」

2人は同時に自分の杖に手をかけた。

が、2人の手元につむじ風が舞い上がり、杖を吹き飛ばす。

「室内」

それまでじつと本を読んでいたタバサが、杖を掲げて言った。ここですら危険であると言いたいのだろう。

「で、なんでこの子ここにいるの」

「あたしの友達よ」

「なんで、あなたの友達が私の部屋にいるのよ」

「いいじゃない」

ふと、思い出したように顔を上げたタバサがジュエヴォーダンを見る。気付いたジュエヴォーダンも、「ん?」と目を合わせる。

「……メモ」

「なに?」

「あなたのメモ」

ルイズとキュルケも、ハテナを浮かべて2人の様子を見る。ジュエヴォーダンは不思議そうに自前のメモ帳を取り出し、タバサに手渡した。

タバサはこれまで読んでいた本を傍らに置き、ジュエヴォーダンのメモを開く。そしてそれまでの本と同じように、内容に目を凝らしはじめてしまった。

「……なんにせよね」

キュルケとルイズが改めて睨み合う。いつものタバサだ、という判断だった。

「なによ」

「そろそろ、決着をつけませんか?」

「そうね」

「ただのメモだぞ」

「ただのメモじゃない」

「あたしね、あんたのこと、だいつきらいなのよ」

「わたしもよ」

「こんな凄い物、見た事がない」

「そう言われてもな」

「気があうわね」

「文脈まで、どうやって?」

「言語の解読なら、先ず接続詞を見つけて……」

「うるさいわねさつきから!」

ルイズが叫び、またキュルケと睨み合う。

キュルケは微笑んだ後、目を吊り上げた。

ルイズも、負けじと胸をはり、2人は同時に怒鳴った。

「決闘よ!」

「パズルと変わらない、繋がりが合うポイントを見つけたら、両サイドの……」

「この方法、他の言語でも応用が効く?」

「恐らくいける」

語り合うジエヴォーダンとタバサに、怒りをむき出しにして睨み合う2人はすでに全く見えていなかった。もちろん2人にも、ジエヴォーダンとタバサの会話は聞こえていない。

「もちろん、魔法ですよ?」

キュルケが勝ち誇ったように言った。

ルイズは唇を噛み締めたが、すぐに頷いた。

「ええ、望むところよ」

「いいの? ゼロのルイズ……魔法で決闘で、大丈夫なの?」

小ばかにした調子で、キュルケがつぶやく。ルイズは頷いた。自信はない。もちろん、ない。でも、ツエルプストー家の女に魔法で勝負と言われては、引き下がれない。

「もちろんよ！ 誰が負けるもんですか！」

本塔の外壁に張りついていたフーケは、誰かが近づくと気配を感じた。

とんつと壁を蹴り、地面へと降り立つ。『レビテーション』を唱えて勢いを殺し、羽毛のように音もなく着地する。そしてすぐに植え込みの中に消えた。

中庭に現れたのは、ルイズとキュルケと、タバサ、ジェヴオーダンであった。

「じゃあ、始めましょうか」

キュルケが言った。ジェヴオーダンは、呆れ返りながらも心配そうに言う。

「お前ら、本当に決闘などする気か？」

「そうよ」

ルイズもやる気満々である。

「文法解説は？ 単に当て読みでは？」

「グループ化して、説文数で判断していた……タバサと言ったか、貴公もすごいな」

全く別のベクトルではあるが、タバサもやる気満々である。メモ帳から目を話すことなく、あれやこれやとジェヴオーダンに質問を飛ばしてくる。

「でも、怪我するのもバカらしいわね」

キュルケがそう言うのと、ルイズも「そうね」と頷く。そしてキュルケは辺りをきよきよと見渡し、近くの木を見つけ、指差した。

「アレなんかいいんじゃない？」

見れば、離れたところにある木に、1つの赤々としたリングゴが成っていた。白い石造りの本塔を背に、暗闇の中でいやに赤く、強く主張

しているように見えた。

「そうね、あれがいいわ」

話をほとんど聞いていなかったタバサとジエヴオーダンも、2人が木になったリングゴを見る様子で、なんとなくどんな勝負になるのか、察しがついた。

2人が横に並び、キュルケが腕を組んで言う。

「いいこと？ ヴァリエール。あのリングゴを地面に落とした方が勝ちよ。そうね、ダーリンは勝った方のもの、ってことでいいかしら？」
「……なに？ いや、ちよつと待て！」

「……わかったわ」

ジエヴオーダンが口を挟もうとするも、2人には聞こえていない。ジエヴオーダンは頭を抱えた。タバサがぼそつと「もの扱い」と呟く。「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのぐらいはハンデよ」

「いいわ」

「じゃあ、どうぞ」

ルイズは杖を構えた。タバサが杖を軽く振ると、頬を撫でる風が吹く。とても強い風とは言い難いが、枝先のリングゴをゆらゆらと揺らすには十分なものだ。『ファイヤーボール』等の魔法の命中率は高い。動かさなければ、簡単にリングゴに命中してしまう。

しかし……ルイズには、命中するかしないかを気にする前に、問題があった。魔法が成功するかしないか、である。

ルイズは悩んだ。どれなら成功するのか。キュルケのファイヤーボールはリングゴを難なく落とすだろう。失敗は許されない。

悩んだ挙句、ルイズは『ファイヤーボール』を使う事に決めた。小さな火球を目標めがけて打ち込む魔法である。

短くルーンを呟く。失敗したら……ジエヴオーダンを取られてしまう。そんな事は、絶対に許すわけにはいかない。

呪文詠唱が完了する。気合を入れて、杖を振った。

呪文が成功すれば、火の玉がその杖先から飛び出すはずであった。しかし、杖の先からは何も出ない。一瞬遅れて、リングゴの背後、本塔の壁が爆発した。

強烈な爆風に、ジエヴオーダンが改めて感心する。蔑んでいるわけでも馬鹿にしているわけでもなく、素直にこの爆発を起こせることを評価していた。

爆風でリングが落ちるか、とも思ったが、そう甘くはないようだ。本塔の壁にはヒビが入っている。キュルケは……腹を抱えて笑っていた。

「ゼロ！ ゼロのルイズ！ リングじゃなくて壁を爆発させてどうするの！ 器用ね！ あなたってどんな魔法を使っても爆発させるんだから！ あっはっは！」

ルイズは悔しそうに拳を握り締めると、膝について俯いた。

「さて、わたしの番ね……」

キュルケは余裕の笑みでリングを見据えた。風で揺れるリングに向け、ルーンを短く呟き、手慣れた仕草で杖を突き出す。

小さな標的であるため、『ファイヤーボール』も小さめに。さながら火線とも呼べる鋭い炎が、リングと枝の間のヘタを見事に打ち抜き、リングには傷一つ付けることなく、落下させた。

リングが落ちる。宇宙を司る力、重力になぞらって。

「あたしの勝ちね！ ヴァリエール！」

フーケは、中庭の植え込みの中から一部始終を見届けていた。ルイズの魔法で、本塔の壁には大きなヒビが入っていた。

あの魔法はいったいなんだ？ 唱えた呪文は確かに『ファイヤーボール』だったのに、火球は飛ばず、壁が爆発した。

あんな風に物が爆発する魔法など、聞いたことがない。いや、それどころではない。フーケは頭を振った。このチャンスを、逃すわけにはいかない。

長い長い、詠唱を唱える。呪文が完成し、杖の先端から雫のような魔法が、ポタリと地面に落ちる。

フーケは、薄く笑った。『土くれ』の、本領を發揮する時が来たのだ。音を立て、地面が盛り上がった。

「残念ね！ ヴァリエール！」

勝ち誇ったキュルケは大声で笑った。ルイズは勝負に負けた悔しさからか、膝をついて肩を落とした。

ジエヴオーダンはなんとも言えない気持ちでルイズを見つめた。

「ああ、ダーリン！ これで邪魔者はいないわあ！」

唇を尖らせて飛びつこうとしたキュルケの頭を、ジエヴオーダンの長い腕が押さえる。

「あん！ でもそんないけずなところもステキ！」

「お前、あれだけの目に遭ってまだ……」

「あいにく、恋の前にはどんなものも脅威にはならないの！ そんな所もひつくるめて愛してこそよ！」

ここまで清々しいとこれはこれで感心してしまう。さてどうあらったものかと思案し、異様な気配を感じて顔を上げた。

「！ あれは何だ！」

「え？ な、なにこれ！」

見れば、天にそびえる巨大なゴーレムがこちらへた歩いてきていた。

「きゃあああああ！！」

キュルケは悲鳴を上げて逃げ出した。ジエヴオーダンはルイズをかばい、身構える。

「くっ……！」

「あ、あんた何してるの！ 逃げなさい！」

ゴーレムの足が持ち上がる。ジエヴオーダンはルイズを抱えて逃げようとするが、間に合いそうにもない。

ゴーレムの足が落ちてくる。ルイズは目をつむった。

が、ごうつと一陣の風が吹き抜け、間一髪でタバサのウィンドドラゴンが滑り込んだ。ジエヴオーダンとルイズを拾い上げ、ひらりと飛び抜ける。

直後、ジエヴオーダンたちがいた場所にゴーレムの足がずしんとめ

り込んだ。

ウインドドラゴンの足にしがみついたジェヴオーダンはとルイズは、息を飲んでその様子を見ていた。

「なんて大きな土ゴーレム……あんな大きい土ゴーレムを操れるなんて、トライアングルクラスのメイジに違いないわ」

ルイズは唇を噛み……先ほど、ジェヴオーダンは危険をかえりみずルイズを助けようとしてくれていた事を思い出した。

「あんた……なんでさっき、逃げなかったの」

ジェヴオーダンは、きつぱりと言った。

「主人を見捨てて逃げる使い魔がいるものかよ」

ルイズは驚いて、ジェヴオーダンの横顔を見た。なんだか、ジェヴオーダんがとても眩しく見えた。

「あのゴーレム、壁を破壊したようだが……」

「宝物庫」

ウインドドラゴンの背中にまたがったタバサが、ジェヴオーダンの疑問に答えた。見れば、ゴーレムが拳をぶつけた事で本塔にあいた穴に、黒いローブを着たメイジが滑り込んでいく。

「なるほど……『土くれ』か」

「土くられて、あの土くれのフーケ？」

「そのようだ。トライアングルクラスの『土』系統のメイジなのだろう？ 噂の通りのようだ」

「流石ダーリン！ よく知ってるわね」

キュルケの声。どうやら彼女もドラゴンの背中にいるようだ。ジェヴオーダンの懸念はなくなった。

「タバサ、2人を頼む」

えっ、とした表情になる3人をよそに、ジェヴオーダンは、しがみついていたウインドドラゴンの足から手を離した。

背後から聞こえてくるルイズの悲鳴をよそに、ジェヴオーダンはキュルケから受け取った剣を引き抜く。

左手のルーンが、淡く光り輝いた。

フーケは、壁に掛けられた『破壊の杖』を見て薄い笑いを浮かべた。聞いていた通り、見た目は平凡な杖そのものだった。1メートル弱の長さで、見たことのない金属でできていた。柄の先端に大きな球体を取り付けられた、俗に『ワンド』などと呼ばれる杖の形。しかし、どうにも球体が大きくアンバランスな出で立ちで、あまりに飾り気のない無骨な姿はどこか異様な雰囲気醸し出している

その下には『破壊の杖、持ち出し不可』の文字。フーケの笑いがますます深くなった。

フーケは『破壊の杖』を取った。

金属製の杖らしいズツシリとした重さが手に伝わる。

フーケは急いでゴーレムの肩に乗る。去り際に杖を振る。すると、壁に文字が刻まれた。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

『土くれ』だな」

聞こえるはずのない、声。フーケが飛び乗ったゴーレムの肩に、先客がいた。

月の光に照らされ影を落とした後ろ姿。獣の耳のような出で立ちの帽子に、右手には煌びやかな装飾の施された優美な長剣。

いったい、どうやって登ってきたのか。そう考えた時、上空を先程からチョロチョロしているドラゴンが旋回した。まさか、飛び降りてきたのか？

「……よもや、学園の宝物庫に盗みを働くとはな。貴公もメイジなのだろう。貴族だというに、誇りもないのか？」

「……っ……」

フーケは歯を食いしばった。憎悪が腹の底からふつふつと沸き起こるが、声で正体を悟られないために、必死で堪える。

己の素性を知るはずはない。だからこの男は当てずっぽうを言ってるに過ぎない。落ち着け。冷静になれ。怒りに身をまかせな。

「……杖を捨てて投降しろ」

フーケは杖に手を伸ばす。男の足元に向けて、ペツと唾を吐いた。

フーケなりの挑発だった。男が何かしらにでも行動に移せば、すぐにでもゴーレムを動かしてこいつをゆすり落としてやる。それくらい造作もない

しかし、そんなフーケの思案に反し……男は低く、笑っていた。

「……獣め」

唸るような声。フーケの背筋に、ゾツと悪寒が走る。

男は懐の包みの中に手を入れ、『何か』を1つ、取り出した。フーケからはそれが何であるか、夜の暗がりにも紛れてよく見えない。

フーケが知る由もない。それは男が昼間、武器屋との商談で仕入れたものだ。

「こんなにも早く使う気はなかったのだがな」

そして男は、左手に持った『何か』を、右手に持った長剣の刀身に、べたつと押し付けた。

「俺も『ヤニ』というのは初めてだ」

月光を淡く反射していた長剣が、突如として怒りの様な炎の光に包まれた。

一瞬、フーケは血の気の引いた思いで身構えた。『炎』系統のメイジが来たのだと思ったからだ。

だが、炎が上がってすぐ、鼻をツンとついた臭いで、これが『松脂』によるものだと思いがついた。

虚仮威しだ。フーケは表情を険しくする。こんなものにも、一瞬でも恐れをなした自分が馬鹿馬鹿しかった。

だが、フーケはすぐに考えを改めることになった。

ジェヴォーダンは風の様な速度でフーケに詰め寄ると、炎を纏った大剣を躊躇なく振りかざして来た。

フーケがすんでのところでそれをかわし、ルーンを唱えながら杖を払う。ゴーレムが大きく上体をゆすりながら歩き始め、ジェヴォーダンを振るい落としかかった。

だが、ジェヴォーダンはまるで言うようにゴーレムの動きに対応し、なおもフーケへと距離を詰めてくる。

舌打ちをしながら、さらに次のルーンを唱え杖を振る。ゴーレムの

体の何箇所かが盛り上がり、土塊になって飛び出した。ジェヴォーダンはそのいくつかをかわし、いくつかを燃えたぎる剣で払いのけた。接近を止められない。ゴーレムの肩の反対側にまで追い込まれてしまえば終わりだ。飛び降りてレビテーションなど使っても、この男なら飛び降りてくるだろう。

逃げられない。逃げれば死ぬ。

その上、どれだけゴーレムを揺らして足場を不安定にしても、どういうわけかこいつにはそれが通用しない。

そうでなくたって不安定なゴーレムの上だ。自分で生み出したものとは言え、自分にとってもある程度不安定であることに変わりない。相対的に、足場の状態では負けている。

しかも、片手には布で包んだ『破壊の杖』を持ったままなのだ。重い金属製の杖であることがここで響いてきてしまう。

「……………」

「っ……………」

刃がローブの裾をかすめる。燃え移った炎を手で慌てて払った。そう、極め付けにフーケを追い込んでいるのが、あの剣にまとわせた炎だ。単なる虚仮威しかと思ったがそうではない。

フーケは『土』系統のスペシャリストであり、それは金属に対する知識でも変わらない。土塊をはじき返された時点でわかった。熱を持った金属というのは、それが想像させるよりはるかに殺傷性が増すのだ。一太刀でも食らえば、恐らく命はない。

さらに悪い条件を重ねてくる、炎の光。素性を隠さなければならぬ。フーケにとって暗闇に紛れる黒いローブは生命線だ。軽くなびいたフードの中を見られるだけで命取りだというのに、あの炎は武器としての強みだけでなく、灯りとしての機能で追い立ててくる。

足場、獲物、武器、光。全てが相手に有利に働いている。早すぎる猛攻に、長い詠唱を唱える余裕もない。かといって、短い詠唱ではジリ貧を誘発する。

フーケは、完全に相手の術中にはまっていたことにここへ来てよう

やく気がついた。

まるで雪山で狼に囲まれているように、逃げ場のない恐怖と、冷たい絶望。

「……………」

「っ、フツ……………」

刃が迫る。かわす。それしかできない。反撃の糸口がない。

こいつ、まさかこの為に、ゴーレムの上で待ち構えていたのか。

飛び降りて来るなら、上から不意打ちもできたはず。追いついて来たのなら、『破壊の杖』を手に取られる前に仕留めに来る方が良くないはず。

そう、これらは全て『破壊の杖』を守るなら。それなら、ベターな選択肢なのだ。

だがそうでなく、『殺す』ためなら。ただ『狩る』為なのなら。

賭けるべきではない、わずかなりリスクにでも。

「……………」

「くっ…………ハ、ハアツ、ハアツ」

剣の熱気が迫る。なんとか詠唱を完成させ、巨大な土塊を形成し飛ばす。

土塊は勢いよく男に迫り…………真つ二つに割れた。

その間から燃えたぎる刃が迫り…………気づけば、もう後ろに逃げ場はなかった。

「……………」

「う……………」

眼前に、燃えたぎる剣先が突きつけられている。

ゴーレムを歩かせていたため、すでに学園からそれなりに離れた場所。月が浮かぶ空を、ドラゴンが見下すように、優雅に旋回している。

「…………どうした、息が上がっているようだが」

「ハー…………ハー……………」

「何も、恐れることはない。獣に、恐れなど無縁なはずだ」

男が、ゆっくりと燃える剣を振りかざす。月を背に、その姿は、人のようには見えない。

「死ぬ時間が来たただけだ」

フーケは賭けに出た。とても短い詠唱を足元に伝え、ゴーレムを動かす。

剣をかざしていた男は身構える。その男がいる、ゴーレムの『肩』に、ゴーレムの拳を振るわせたのだ。直撃の直前、拳を鉄に変質させるのを忘れない。

ジエヴオーダンは冷静に身を翻しながら、拳を剣でいなした。

その瞬間、キーンと高い音が夜空にこだまする。

「なっ……!?!」

「……!」

剣が、折れた。根元からぽつきりと。

ジエヴオーダンが見誤っていたわけではない。真鍮製とはいえ、力の加減を間違えなければ力を逃すのは容易い。

ジエヴオーダンが読み誤ったのは松脂とメッキの質だった。酸化した金属が、彼が思う以上に劣悪な作りだった剣を、より弱めてしまっていたのだ。剣が折れてからそれに気づいたジエヴオーダンは歯噛みして己の甘さを呪った。

そしてフーケは、思いもよらず賭けに勝利し……薄ら笑いを浮かべ、ルーンと共に杖を振った。

ゴーレムが、崩壊する。土くれと共に落下しながら、ジエヴオーダンはとっさに左手に銃を取り、フーケのいるであろう場所に目測を定め引き金を引いた。

ジエヴオーダンが地面に激突するまでに、5発の銃声が鳴り響き……ゴーレムは、文字通りただの土くれとなって完全に沈黙した。

「ダーリー……!」

「ジエヴオーダン! 嘘……!」

タバサのウィンドドラゴンが地面に降り立ち、キュルケとルイズが土の山に向けて走り出す。……少し遅れて、土の中からもこりと、ジエヴオーダンが立ち上がった。

「キャッ! ……ジエ、ジエヴオーダン!」

「ハァ……ハァ……!」

肩で息をするジエヴオーダン。どう見ても普通ではないその様子に、ルイズが心配そうに手を伸ばした。

「ジエヴオーダン……？」

「ハア、ハア……アアツ!!」

だが、ジエヴオーダンはそんなルイズには目もくれず、フーケがいたであろう方角めがけ、吠えた。

「獣め……獣め!! 土くれ、どこだ! 出てこい! 狩ってやる……狩ってやるぞ!」

激昂する、ジエヴオーダン。ルイズも、タバサも、キュルケでさえ、そのあまりの変わり様に狼狽する。

だが、ジエヴオーダンは血走った眼で、虚空に向け散弾銃の引き金を引きながら、フーケを探すばかり。

土埃が舞う闇の中、黒ローブの盗賊の姿は、どこにもなかった。

「やりよるのお」

オールド・オスマン氏は、宝物庫の壁に書かれた『土くれ』のフーケの犯行声明を見て、感心したように呟いた。

『破壊の杖、確かに領収いたしました』

学園中の教師が集まり、宝物庫の壁にあいた大きな穴を見て愕然としている。

教師たちは、次々に好き勝手なことをわめいている。

「土くれのフーケ! 貴族たちの財宝を荒らしまくってるという盗賊か! 魔法学院にまで手を出しおつて! ずいぶんとナメられたもんじゃないか!」

「衛兵はいったい何をしていたんだね?」

「衛兵などあてにならない! 所詮は平民ではないか! それより当直の貴族は誰だったんだね!」

それを聞いたミセス・シュヴルースは震え上がった。彼女が当直だったが、まさか魔法学院を襲う盗賊がいるなどとは思わず、当直をサボって自室で寝ていたのだ。

それを指摘されたシュヴルースは、目に大粒の涙を浮かべてうろた

えた。

「も、申し訳……」

「泣いてもお宝は戻ってこないのですぞ！ それともあなた、『破壊の杖』の弁償をできるのですかな！」

「わたくし、家を建てたばかりで……」

とうとうミセス・シュヴルースはよよと床に伏した。

そんな様子を、オスマン氏がなだめる。

「これこれ、女性を苛めるものではない」

「しかしですな、オールド・オスマン！ ミセス・シュヴルースは当直なのに、ぐうぐう自室で寝ていたのですぞ！」

オスマン氏はつまらなそうに髭を撫で、ポケットとしたように聞き返した。

「ミスタ……なんだっけ？」

「ギトーです!!! お忘れですか!」

「おっほほ、そうそうギトー君、そんな名前じゃったな。君は怒りっぽくていかん。さて、この中でまともに当直をしたことがある教師は何人おるかな？」

オスマン氏が辺りを見渡す。教師たちはお互い顔を見合わせ、恥ずかしそうに顔を伏せた。まともに当直をしたことがあるものなど、1人もいなかった。

「さて、これが現実じゃ。責任があるとすれば、我々全員じゃ。この中の誰もが……、もちろん私も含めてじゃが……まさかこの魔法学院が賊に襲われるなどと夢にも思っていなかった。何せここにいるのはほとんどがメイジじゃからな。誰が好き好んで虎穴に入るかと思っとなったが、それは間違いじゃったようじゃ。このとおり、敵は大胆にも忍び込み『破壊の杖』を奪っていきおった。つまり、我々は油断していたのじゃ。責任があるとすれば、我々全員にあるといわねばなるまい」

ミセス・シュヴルースは感激してオスマン氏に抱きついた。

「おお、オールド・オスマン！ あなたの慈悲のお心に感謝いたします！ わたくしはあなたをこれから父と呼ぶことにいたします！」

オスマン氏はそんなシュヴルースの尻を撫でた。

「ええのじゃ。ええのよ、ミセス……」

「わたくしのお尻でよかったですら！ そりやもう！ いくらでも！ はい！」

オスマン氏はこほんど咳をした。場を和ませるために尻を撫でたが、みんな一様に真剣な眼差しでオスマン氏の言葉を待っていた。

「で、現場の犯行を見ていたのは誰だね？」

オスマン氏が尋ねた。

「この3人です」

コルベールが進み出て、自分の後ろに控えていた3人を指した。ルイズ、キュルケ、タバサの3人。使い魔であるジェヴオーダンは数に入っていない。

ジェヴオーダンは、昨夜の我を忘れたように激昂した様子はどこへやら、涼しげな顔でそこに佇んでいた。背中には、折れてしまったキュルケの剣の代わりにデルフリンガーを携えている。

「ふむ……君たちか」

オスマン氏は、興味深そうにジェヴオーダンを見つめた。ジェヴオーダンもそれに気がつく。流石に学園長クラスともなれば、自分の正体が見えても狼狽えまではしないのだろうと、ジェヴオーダンは変わらぬ様子で立っていた。

「詳しく説明したまえ」

ルイズが進み出て、見たままを述べた。

「あの、大きなゴーレムが現れて、ここの壁を破壊したんです。肩に乗っていた黒いメイジがこの宝物庫から何かを……その、『破壊の杖』だと思えますけど、盗み出したあと、またゴーレムの肩に乗りました」
「そこまで話して、ルイズはジェヴオーダンの方を見やった。はたしてここを話していいか迷ったが、ジェヴオーダンも特に反応しないため、重く口を開いた。

「その……私の使い魔がゴーレムの上に飛び乗って、黒いメイジを追いました。ゴーレムは城壁を越えて歩き出して……こいつがあと少しまで追い詰めたみたいなんです、ギリギリのところまでゴーレムが

崩れて土になっちゃいました」

「ほう、使い魔がメイジを追い詰めた……」

ルイズの説明に、にわかに教師たちがざわざわとざわめく。彼らからすればジェヴオーダーはただの平民、まして使い魔。それがメイジであるフーケを追い詰めたなどと、にわかには信じがたい。

「それで後には、土しかありませんでした。肩に乗っていた黒いローブを着たメイジは、影も形もなくなっていました」

「ふむ……」

オスマン氏だけがさして驚いた様子もなくひげを撫でた。

「後を追おうにも、手がかりナシというわけか……」

それからオスマン氏は、気づいたようにコルベールに尋ねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「それがその……今朝から姿が見えませんでした」

「この非常時に、どこに行ったのじゃ」

「どこなんでしょう？」

そんな風に話していると、見計らったようにミス・ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル！ どこに行っていたんですか！ 大変ですぞ！

事件ですぞ！」

興奮した様子でコルベールがまくし立てる。しかし、ミス・ロングビルは落ち着き払った様子で、オスマン氏に告げた。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」

「調査？」

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこのとおり。すぐに壁のフーケのサインを見つけたので、これが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をいたしました」

「仕事が早いのも、ミス・ロングビル」

コルベールがあわてた様子で促した。

「で、結果は？」

「はい。フーケの居場所がわかりました」

「な、なんですと!」

コルベールが、素っ頓狂な声を上げた。

「誰に聞いたんじゃね? ミス・ロングビル」

「はい。近所の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に入っていた黒ずくめのローブの男を見たそうです。おそらく、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

ルイズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ? それはフーケです、間違いありません!」

「それはどうだろうな」

次いで口を開いたのは、ルイズの後ろに立つ使い魔だった。

その場にいた全員が、驚いてジェヴオーダンの方を見る。

オスマン氏だけが落ち着いた様子で聞き返した。

「どういうことじゃね?」

「……実際に相手したからこそ言えることだが、奴はローブを使って顔を隠していた。明かりを灯された状態でなお見られないよう立ち回るほどの慎重さだ。そのフーケが農民ごときに素性がバレるよう動き回るとも思えん。疑うなら、その農民か……」

ジェヴオーダンは、鋭い視線でその報を伝えた人物をにらんだ。

「その女かだ」

ミス・ロングビルの顔が引きつり、冷や汗が流れる。

だが、それを破るように先ほどの教員ギトーが声を荒らげた。

「貴様、平民の、それも使い魔の分際でメイジに向けて何を言うか!

しかも、貴様ごときがメイジであるフーケを追い詰めたなどという話も不自然だ! 貴様こそフーケのグルなのではないか!」

「……フン」

ジェヴオーダンは目もくれない。そんな様子をオスマン氏がなだめ、ジェヴオーダンに向き直った。

「まあまあ、彼がフーケと対峙したのは夜じゃ。明かりがあるとはいえ、素性を知るには限界がある。日中ともなれば、フーケも油断して隙を見せる事もあるうて。ミス・ロングビル、そこは近いのかね」

「はい。徒歩で半日、馬で4時間といったところでしょうか」

ジエヴオーダンは、誰にも聞かれないよう小さく、鼻で笑った。

「すぐに王室に報告しましょう！ 王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては！」

コルベールが叫んだ。が、オスマン氏は首を横に振ると、年寄りとは思えない迫力で怒鳴った。

「ばかもの！ 王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまわ！ その上……身にかかる火の粉を己で払えぬようで、何が貴族じゃ！ 魔法学院の宝が盗まれた、これは魔法学院の問題じゃ！ 当然我らで解決する！」

オスマン氏は咳払いをすると、有志を募った。

「では、捜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ」

誰も杖を掲げようとはしない。困ったように、顔を見合わせるだけだ。

ルイズは俯いていたが、それからすつと、杖を顔の前に掲げた。

「ミス・ヴァリエール！」

ミセス・シュヴルースが、驚いた声をあげた。

「何をしているのです！ あなたは生徒ではありませんか！ ここは教師に任せて……」

「誰も掲げないじゃないですか」

ルイズがきつと唇を強く結んで言い放つので、シュヴルースも言い返せない。

ルイズがそのように杖を掲げているのを見て、しゅしゅキュルケも杖を掲げた。

「ツエルプストー！ 君は生徒じゃないか！」

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ」

キュルケが杖を掲げるのを見て、タバサも掲げた。

「タバサ、あんたはいいのよ。関係ないんだから」

「心配」

キュルケは感動した面持ちでタバサを見つめた。ルイズも唇を噛み締めて、お礼を言った。

「ありがとう、タバサ」

そんな3人の様子を見て、オスマン氏は笑った。

「そうか、では、頼むとしようか」

「オールド・オスマン！ わたしは反対です！ 生徒たちをそんな危険にさらすわけには！」

「では、君が行くかね？ ミセス・シユヴルース」

「い、いえ……わたしは体調が優れませんので……」

「彼女たちは、敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くしてシユヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」

返事もせずにはげつと突っ立っているタバサを、教師たちは驚いて見つめた。

「本当なの？ タバサ」

キュルケでさえ驚いた。王室から与えられる爵位としては最下級の『シユヴァリエ』の称号ではあるが、タバサの年齢で与えられることは驚きだ。金で買うことはできない、純粋に業績に対して与えられる、実力の爵位だ。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？」

キュルケは得意げに、髪をかきあげた。

それから、ルイズが自分の番だとばかりに可愛らしく胸を張った。

オスマン氏は困って咳払いをすると、少し目をそらした。

「その……ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、なんだ、将来有望なメイジと聞いているが？ しかもその使い魔は！」

それからジエヴォーダンを熱っぽい目で見つめた。

「平民ながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが」

「当然だ」

「ほっほほ！ 言うではないか」

オスマン氏は思った。彼が、本当にあの伝説の『ガンダールヴ』なら……。

「そうですぞ！ なにせ、彼はガンダー……」

興奮した様子のコルベールの口を、慌ててオスマン氏が押さえる。
「むぐー！ はあ！ いえ、なんでもありません！ はい！」

この場で、もはやオスマン氏に反論するものなど誰もいなかった。
オスマン氏は威厳のある声で言った。

「この3人に勝てるという者がいるなら、前に一步出たまえ」

誰もいなかった。当然だった。これほどの戦力は教師陣では揃わないものだし、これほどの太鼓判を押された面々を蹴落としてなおフーケを捕まえに行こうとするものなどいるはずもない。

オスマン氏もそれをわかって、誰もいないとわかっていてこの質問をしたのだ。

だがその予想は裏切られた。

静かにジエヴオーダンが一步、前に踏み出した。教師陣も、ルイズやキュルケ、タバサでさえ、そして誰よりオスマン氏が、驚愕のあまり目を見開いた。

「つ、使い魔君！ 君は、君はこの3人に勝てるというのかね！ メイジでない君が！」

「……当然だ」

「ちよつとジエヴオーダン！」

ルイズがジエヴオーダンの服の裾を引っ張り引き戻そうとするが、まるで杭か何かで固定されているかのように動かない。ジエヴオーダンは変わらず涼しい顔で佇んでいる。

「ちよつとダーリン、いくらあなたの言葉でもそれはちよつとナメすぎでなくって……？」

「傲り」

キュルケとタバサも、静かに怒りを燃やしているのがうかがえる。己の実力に自信があるのもそうだが、何より貴族としての誇りがそこまで言わせる事を許さない。しかしジエヴオーダンは相変わらぬ様子で

「言ってるだろう、当然だ」

そう断言してのけるだけ。

「あら、そう……」

キュルケが電光石火の速さで杖を引き抜き、聞き取れないほどの速さでルーンを完成させる。火球が一瞬で杖先から飛び出す。

キュルケとしても、最速の一撃。しかしジェヴォーダン、体勢を低く跳ねるようにステップし、瞬時にキュルケとの距離を詰める。

あつ、と反応しかけたキュルケよりも早く、ジェヴォーダンの魔の手が伸び……その頬をがっしと掴んだ。

あまりに一瞬の出来事に、教師陣やルイズはあつけにとられてそれを見ていた。ただタバサとキュルケ、数人の教師だけが、背筋を凍らせていた。

一瞬、ほんとうにほんの一瞬ではあったが、あの手が狙っていたのは頬などでなく……キュルケの、腹部だった。

何をしようとしたかまではわからない。単に拳をめり込ませるつもりだったのかもしれない。だがその刹那の一瞬に感じられたのは、常軌を逸した殺意だった。

「う……」

キュルケは青い顔で、自分の頬を掴む大きな手を見る。そしてジェヴォーダンはマスクの下で薄く笑うと、手を離してやり、それまでと同じように淡々と続けた。

「当然だ、と言っている」

オスマン氏は身震いした。恐怖で、というのもあったが、それ以上に武者震いが勝った。

この男は、もしや本当に……。そんな想像が、深く刻まれたシワの奥に潜む瞳を輝かせた。

「改めよう。この“4人”に勝てるという者がいたら、前に一步出たまえ」

当然、誰もいなかった。オスマン氏は、ジェヴォーダン含む4人に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

ルイズとタバサとキュルケは、真顔になって直立すると、「杖にかけて！」と同時に唱和した。それからスカートの裾をつまみ、恭しく礼をする。

そしてオスマン氏は、ジエヴオーダンをしつかりと見つめ、微笑んだ。

「彼女達を守ってやってくれ、心強き牙よ」

「……我が血にかけて」

ジエヴオーダンもまた、狩人の儀礼で応えた。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじや。魔法は目的地にくまで温存したまえ。ミス・ロングビル、彼女達を手伝ってやってくれ」

ミス・ロングビルは頭を下げた。

「もとよりそのつもりですわ」

08：反攻

4人はミス・ロングビルを案内役に、早速出発した。屋根のない荷車のような馬車で、薄暗い山道を進む。

御者を買って出たミス・ロングビルに、キュルケが話しかけた。「ミス・ロングビル……手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルはにっこりと笑った。

「いいのです。わたくしは、貴族の名をなくした者ですから」

「だって、貴女はオールド・オスマンの秘書なのでしょ？」

「ええ、でも、オスマン氏は貴族や平民だということに、あまり拘らないお方です」

「差し支えなかったら事情をお聞かせ願いたいわ」

ミス・ロングビルは困ったように優しい微笑みを浮かべた。

「いいじゃないの。教えてくださいいな」

キュルケは興味津々で行った顔で、御者台に座ったミス・ロングビルににじり寄る。ルイズがその肩を掴んだ。キュルケはそんなルイズを睨みつける。

「なによ、ヴァリエール」

「よしなさいよ。昔のことを根掘り葉掘り聞くななんて」

キュルケはふんと呟き、荷台の柵に寄りかかって頭の後ろで腕を組んだ。

「暇だからおしゃべりしようと思っただけじゃないの」

「あなたのお国じゃどうか知りませんが、聞かれたくないことを、無理やり聞き出そうとするのはトリスティンじゃ恥ずべきことなのよ」

キュルケはそれには答えず、足を組んだ。

「つたく……あなたがカツコつけたおかげで、とぼっちりよ。何が悲しくて、泥棒退治なんか……」

「とぼっちり？ あなたが自分で志願したんじゃないの」

「あなたが一人じゃ、ダーリンがかわいそうなもの」

そしてキュルケは、タバサと何やら話をしていたジエヴオーダンに

しなだれるようによりかかる。

「こおんなうるさいゼロのルイズと2人つきりにされたら、ダーリンだってめんどくさいものねえ?」

「……お前の方がよほど面倒くさいがな」

「ああん、つれないわねえ。でもそんなクールなところも素敵!」

タバサはといえば、ジェヴォーダンが持っている様々な知識に興味があるらしい。

「それから?」

「……聖剣のルドウィークは、教会の英雄として永遠に語り継がれるようになった。奴の狩道具は今でも多くの狩人の基本的な装備になるほどに、伝説的な英雄だ」

「……イーヴアルデイのよう……」

「とはいえ、現実はそのままで物語らしい話でもない。英雄と呼ぶには……醜いかもしれないからな」

特にタバサが興味を示したのは、教会の狩人ルドウィークについての物語。ヤーナムであれば子供でも知っているような昔話に、特に反応した。

「なあに? ダーリンの住んでた場所の話?」

「は? あんたそんなこと私にだって話したことないくせに!」

「聞いてこなかっただろう?」

頬を膨らますルイズに、新たな暇つぶしを見つけたキュルケ。そして、さらに話をねだるタバサ。

「もつと、ルドウィークの話を」

「奴に限るとなると、俺も多くは知らないが……英雄とまで呼ばれた奴が狩りの中に見出したのは、『月光』だったと言われている」

「月光?」

キュルケが聞き返す。ジェヴォーダンは首を振った。

「それが何を意味するものかまでは、俺にもわからない。だが確かに奴は月光を剣に纏わせ振るった。獣の愚かに墜ちるまで、奴は心折れなかった」

「……? 本物のルドウィークを見たことがあるの?」

タバサが首をかしげる。ジェヴオーダンはその様子が可笑しくて、笑いながら答えた。

「何、悪夢に出てきたのさ」

馬車はさらに深く森に入ってしまった。森の中は昼間だというのに薄暗く、鬱蒼としている。

馬車がある程度の場所で止め、一行は歩いて森の中を進むことにした。森を通る小道を進んでいく。

「なんか、暗くて怖いわ……いやだ……」

キュルケがジェヴオーダンの腕に手を回す。ジェヴオーダンは無視して少し歩くスピードを速めた。

「あん！ もう、ダーリンたらあ」

キュルケは変わらぬ調子で続けてくる。呆れ返っていたジェヴオーダンも、そんな様子を見ていたルイズも、ため息をついた。

やがて、道は開けた場所に出た。森の中の空き地といった風勢で、真ん中には情報通りの小屋があった。木こり小屋か何かだったのだろうか、朽ち果てた炭焼き窯と、壁板の剥がれた物置が並んでいる。「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

5人は少し離れた茂みの中で作戦を練り始めた。とにかく、あの中にいるのなら奇襲が1番だ。寝ていてくれたらなおさらである。

タバサはちよこんと地面に正座すると、自分のたてた作戦を説明するため杖を使って地面に絵を描き始めた。

まず、偵察兼囿が小屋のそばに赴き、中の様子を確認する。中にフーケがいれば、挑発しこれを外に出す。

小屋の中にゴーレムを作り出すほどの土はないため、外に出る必要がある。ここを魔法で一気に攻撃し、ゴーレムを作り出す暇を与えずに、集中砲火でフーケを沈める、というもの。

「偵察兼囿は……俺か」

ジェヴオーダンがそう言うのとタバサが頷く。

ジェヴオーダンも頷いて答えると、茂みの中から音もなく飛び出

し、すつと一足跳びに小屋のそばに近付いた。窓に近づき、慎重に中を見渡す。

蚊帳の中はひと部屋で、たいそうに荒れていた。もう長らく誰も使っていないようで、人の気配はうかがえない。

ここにはいない。ジエヴオーダンは皆に合図を送った。

「無人だ。隠れている様子もない」

「……ワナも、ないみたい」

小屋に向けて杖を振ったタバサがつぶやき、中に入っていった。キュルケとジエヴオーダンは後に続き、ルイズが外で見張りをすると、言って後に残った。

ミス・ロングビルは辺りを偵察してきますと言って、森の中に消えた。

窓から、森に消えていくミス・ロングビルを目で追いながら、ジエヴオーダンは小屋の中を調べた。

フーケが残した手がかりがないかを調べ始め、タバサが開けたチェストの中から……

「破壊の杖」

なんと、『破壊の杖』を見つけ出した。

「あつけないわね！」

キュルケが叫ぶ。

そしてジエヴオーダンは、その『破壊の杖』を見て、面食らって目を丸くした。

「こ、これが、『破壊の杖』だど!？」

「そうよ。あたし、見たことあるもん。宝物庫を見学したとき」

「いや、しかし、これは……」

ジエヴオーダンは近寄って、『破壊の杖』をまじまじと見つめた。全体が金属で出来ており、棒状の柄の先端に鉄球が取り付けられたフォルム。

間違いない。これは……。

「きゃああああ!!」

その時、外で見張りをしていたルイズの悲鳴が響き渡った。

「ヴァリエール、どうしたの!？」

「……来たか」

突然、ジエヴオーダンはタバサとキュルケを小脇に抱き抱え、小屋を飛び出した。瞬間、小屋の屋根が吹っ飛ぶ。

青空をバツクに、小屋を破壊したものの正体が、ありありと見えた。

「ゴーレムー」

キュルケが叫んだ。

一定の距離を置いたところで、ジエヴオーダンは2人を降ろす。タバサが杖を振るい、呪文を唱えた。巨大な竜巻が舞い上がり、ゴーレムにぶつかっていく。

キュルケも胸に刺した杖を引き抜き、呪文を唱えて炎を打ち出す。しかし、どんな攻撃を食らっても、ゴーレムはびくりともしない。

「無理よこんなのー」

「退却」

キュルケとタバサは一目散に逃げ出し始めた。

ジエヴオーダンは、背に携えていたデルフリンガーを引き抜いた。

「おう、相棒、出番かい」

かっとな手のルーンが熱を持ち、身体がほのかに軽くなるのを感じる。

「ああ、力を借りるぞ」

ジエヴオーダンは駆け出した。目指すはゴーレムの背後に立っているルイズだ。

ルイズは杖を振り回し、ルーンを唱えている。ゴーレムの表面がパツと炸裂し、気づいたゴーレムが振り向く。

「くっ……」

どう考えても、勝ち目のある相手じゃない。

相手は大きすぎるし、自分の魔法も成功しない。仮に成功したとしても、それで倒せるような甘い相手ではないことは、先程キュルケとタバサが証明したばかりだ。

ゴーレムが振り返る。完全にルイズに狙いを定めたようだ。

ルイズの額に汗が流れる。息が上がり、緊張が高まっているのがわかる。だがそれでも、ルイズは強い眼差しで、ゴーレムを睨んだ。こいつを、倒す。フーケを捕らえれば、誰も自分をゼロだと呼ばなくなる。

無理だとわかっていても、そんなの、やってみなければわからない。ルイズの貴族としての誇りが、意思が、ルイズの脚の震えを止めた。己を鼓舞し、立ち向かわせた。

「魔法が使えるものを、貴族と呼ぶんじゃないわ」

ゴーレムが拳を振り上げる。ルイズは杖を振り上げた。

「敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ！」

振り下ろされる拳に向けてルーンを唱え、杖を振るった。ゴーレムの腕が炸裂し、土埃が舞う。が、精々が小指ほどの土をえぐっただけ。ゴーレムの拳は止まらない。

ルイズの視界が振り下ろされる拳で埋め尽くされる。ルイズは目をつぶった。

「その心意気や良し。やはりお前は、誇りある良い貴族だ」

聞こえるはずのない、声。ルイズは身体が、ふわりと浮いたような感覚を覚え……目を見開くと、自分を抱きかかえるジェヴオーダンの姿があった。

「そうだ。どんな敵が相手でも、立ち向かうこと。戦いの中で、心折れず、何度でも立ち向かうことだ。それだけが、ただ戦いの中で俺たちの縁よすがになる」

「ジェヴオーダン……」

「だが、死ぬな。死ぬば終わりだ。心折れず、死なず、狩りを成就しろ」
風竜が、2人を救うために飛んできた。

「乗って！」

風竜に跨ったタバサが叫ぶ。ジェヴオーダンは抱き抱えていたルイズを風竜の上に押し上げた。

「あなたも早く」

タバサが、珍しく焦った様子でジェヴオーダンに言う。が、ジェヴオーダンは迫り来るゴーレムに向き直った。

「ジエヴオーダン！」

「行け」

タバサは無表情にジエヴオーダンを見つめていたが、迫るゴーレムが拳を振り上げたのを見て、仕方なく風竜を飛び上がらせた。

音を立て、ジエヴオーダンがいた場所にゴーレムの拳がめり込む。ジエヴオーダンは余裕でそれをかわし……デルフリンガーに炎を纏わせていた。

「おお、こりやおでれーた！ 剣にこんな事をする奴は相棒、おめーが初めてだ！」

「熱くないか？」

「剣だからなー！ こりやおおもしれえ、おもしれえよ」

ゴーレムが拳を持ち上げる。ジエヴオーダンは帽子を被りなおし、冷たい目でゴーレムを睨んだ。

「土くれめ。あまり人をナメるなよ」

振りかぶる拳をくぐり抜け、剣を振るった。

「こちとら、ゼロのルイズの狩人だ」

「ジエヴオーダン！」

ルイズは上昇する風竜の上から飛び降りようとした。タバサがその体を抱きかかえる。

「ジエヴオーダンを助けて！」

ルイズが怒鳴るが、タバサは首を振った。

「近寄れない」

近寄ろうとすると、やたらとゴーレムが拳を振り回すので、風竜を近づけることができないのだ。

「ジエヴオーダン！」

ルイズは再び叫んだ。ジエヴオーダンが、燃え盛る剣を片手にゴーレムと対峙しているのが見える。

ジエヴオーダンは、ゴーレムと戦いながらも、実際には全く別の事に意識を集中していた。

ゴーレムの拳が唸りを上げて飛んでくる。拳は途中で鋼鉄の塊に

変わる。

だが、遅すぎるのだ。並みの剣士などならともかく、ジェヴオーダンにとっては止まって見えるほどに。

余裕でそれをかわしながら、探しているのは、そこにいるはずの術者の影。

確実に、近くにいるはずだ。

周囲を探しながら戦うその様子は、ルイズには苦戦しているように見えていた。なんとか自分が手伝える方法はないかと探し、タバサが抱える『破壊の杖』に気づいた。

「タバサ！ それをー！」

タバサは頷いて、『破壊の杖』を手渡す。

ただ、手渡したただけであった。それ以外の特別なことなど何もしていない。にもかかわらず……『破壊の杖』がルイズの手に渡った瞬間、その杖の先端の球体から、バリツ！ と、青白い電流がほとばしった。

「ぎゃっ!?!」

「っ!?!」

ルイズも、タバサも、それに驚き……思わず、『破壊の杖』が手からこぼれる。慌ててそれを掴もうとしたルイズは、風竜の背から滑り落ちた。

落下するルイズに、タバサが『レベテーション』を唱える。

ルイズの身体はゆっくりと地面に降りていくが……『破壊の杖』の方は、そのまま落下して地面に突き刺さった。

それにいち早く気がついたのは、ジェヴオーダンの方だった。

術者の姿が見えず、かといってゴーレムを倒せるわけでもなく、埒のあかない状態をどうするか思案していたところに、思わぬ助け舟が来た。

それに……と、先日自分が『エーブリエタースの先触れ』を使用した時に起きた異変のことを思い出す。今の自分があれを使えば、もしや……!!

ジェヴオーダンは『破壊の杖』と、地面に降り立ったルイズの元に駆け寄った。

「ジエヴオーダン！」

ジエヴオーダンは『破壊の杖』を地面から引き抜いた。

「それ、変なの！ 使い方が、わかんない！」

だがジエヴオーダンは迷うことなく杖を手に取り、先端についた鉄球の、上半分をスライドさせて外す。内部の機械構造に見えたシリンダーに、水銀弾をきっちり6発、装填した。

そんな様子を、ルイズは唾然として見つめている。

蓋を閉め、『破壊の杖』を握ったジエヴオーダンは、ゴーレムに向き直った。

ゴーレムが、地響きのような音を立てて迫る。

ジエヴオーダンは、破壊の杖の鉄球部分を掴み……棒状の柄を、地面に突き刺した。

「これはな……こうやって使うんだ」

球体をひねり、スイッチを作動させる。瞬間、強烈な落雷が、ゴーレムめがけて炸裂した。

ゴーレムと変わらぬ程に巨大な青白い雷光が、列を連ねて走り抜ける。巨大ゴーレムであるがゆえ、複数の雷撃に巻き込まれてしまう。土くれが炸裂し、弾け飛ぶ。

一瞬にして、ゴーレムは粉々に砕け散った。土の塊が、雨のように周囲に振り落ちる。

下半身だけが残ったゴーレムが一步前に踏み出そうとしたが……膝が折れ、そのまま崩れ落ちた。

バラバラと、ゴーレムがただの土の塊に戻っていく。

この前と同じように、後には土の小山が残された。ルイズは突然の雷撃に耳を押さえて呆然としていたが、やがて腰が抜けたのか、へなへなと地面に崩れ落ちた。

木陰に隠れていたキュルケが駆け寄ってくるのが見えた。

ジエヴオーダンは『破壊の杖』を引き抜き、それをまじまじと見やった。

「ジエヴオーダン！ すごいわ、やっぱりダーリンね！」

キュルケが抱きつこうとする。が、ジエヴオーダンはそれをさらり

とかわした。

否、キュルケが抱きつこうとした場所に、既にジエヴオーダンはいなかったのだ。

「……え？」

ジエヴオーダンは瞬時に駆け出して……木陰から現れたミス・ロングビルを押し倒し、その喉元に刃を当てていた。衝撃で、杖が手から離れ地面を転がっていった。

「動くな。首が飛ぶぞ」

あまりに突然の出来事に、ルイズもキュルケも、風竜とともに降り立ったタバサも面食らう。

「ちよつとジエヴオーダン！ 何やってるの!？」

ルイズが叫ぶが、ジエヴオーダンは変わらさずロングビルを睨んでいる。ロングビルも、さほど驚いた様子もなくジエヴオーダンを見つめていた。

「お前を狩ってやると言ったろう。忘れたか、『土くれ』」

「……やっぱり今朝、気づいてたのかい」

えっ、と誰からともなく声上がる。ジエヴオーダンはさらに刃をロングビルの首筋に近づけた。

「お前が現れて、フーケが男だと語った時点では、さほど疑っていたわけではない。だがお前は、フーケの隠れ家が学園から4時間もかかる場所にあると語った。『朝早くから調査をしていた』と話したのにな」
「……あら」

「随分と初歩的だ。詰めが甘いようだな」

ジエヴオーダンはゴーレムと戦っている間ずっと、フーケの姿を探していた。偵察に行くと森に消えた時点で、襲撃があることはわかっていたのだ。

「だが……それなら今朝すぐわたしを捕まえればよかつたじゃないかい。乗せられてついて来たのはなぜだい？」

「残念だが全て仮説だった。確証が欲しかった。そのために『破壊の杖』を確保する必要があった。お前がなぜ俺たちを引っ張り出す必要があつたのか。だが実物を見て理由はすぐわかつた。お前はアレの

使い方がわからなかったんだ」

「くっ……い！」

フーケは忌々しくジェヴォーダンを見つめた。キュルケが驚いて声をあげる。

「じゃあ、私たちに『破壊の杖』を使わせて、使い方を探ろうとしていたってこと？」

「だろうな。杖として使おうとしてもうんともすんともしないのは、ただの鉄のオブジェだ。だが、残念だが……あれは杖などではない、魔法など出はしない」

「何……？ どういう意味よ！」

叫ぶフーケに、ジェヴォーダンではなく、ルイズが答えた。

「あれは『神秘』の触媒……魔法の杖なんかじゃない。そうよね、ジェヴォーダン」

皆が驚いてルイズを見る。ジェヴォーダンだけがニヤリと笑い、それに答えた。

「そうだ。あれは『小さなトニトルス』、俺たちの宇宙の狩り道具だ。ついでに言えば、あれは高貴な血を練りこんだ水銀がなければ作動せん。お前では使い物にならないよ」

衝撃の事実を告げられ、フーケは完膚なきまでに打ちのめされてしまったようだ。うなだれてしまい、もはや反抗の意思も、戦意もなかった。

ジェヴォーダンはフーケの首筋に手刀を叩き込む。気絶したフーケを拾い上げ、呆然とする3人に振り返った。

「フーケを捕まえて、『破壊の杖』を取り返したぞ」

*

学園長室で、オスマン氏は戻った4人の報告を聞いていた。

「ふむ……ミス・ロングビルが土くれのフーケじゃったとはな……美人だったもので、なんの疑いもなく秘書に採用してしまった」

「いったい、どこで採用されたんですか？」

隣に控えたコルベールが尋ねる

「街の居酒屋じゃ。私は客で、彼女は給仕をしておったのだが、ついこの手がお尻を撫でてしまっただけで？」

コルベールが冷めた目で促す。オスマン氏は照れたように告白した。

「おほん。それでも怒らないので、秘書にならないかと、言ってしまった」

「それで？」

まったく理解できない、という様子でコルベールが訪ねた。

「カアーツ！」

オスマン氏は目を見開いて声を上げた。が、まったくごまかされていない。それがわかるとオスマン氏は、ひとつ咳をして真顔になった。

「おまけに魔法も使えるというもんでな」

「死んだほうがいいのでは？」

コルベールが小さく呟いた。

オスマン氏は重苦しく咳払いをすると、コルベールにむきなおり深刻そうな表情を浮かべた

「今思えば、あれも魔法学院に潜り込むためのフーケの手じやったに違いない。居酒屋でくつろぐ私の前になんどもやってきて、愛想よく酒を進める。魔法学院学園長は男前でしびれます、などとなんども媚を売り売り言いよって……終いにや尻を撫でて怒らない。惚れてる？ とか思うじゃろ？ なあ？ ねえ？」

コルベールは、思えば自分もフーケのその手にやられ、宝物庫の壁の弱点について語ってしまったことを思い出した。

「そ、そうですね！ 美人はただそれだけで、いけない魔法使いですな！」

「そのとおりじゃ！ 君は上手いことを言うなコルベール君！」

そんな2人の様子を、4人は呆れて見つめていた。生徒たちのそんな視線に気づき、オスマン氏は恥ずかしそうに咳払いをすると、切り

替えて厳しい顔をした。

「さてと、君たちはよくぞフーケを捕まえ、『破壊の杖』を取り返してきた。フーケは、城の衛兵に引き渡した。そして『破壊の杖』は、無事に宝物庫に収まった。一件落着じゃ」

オスマン氏はそうして嬉しそうに、1人ずつ頭を撫でた。

「君たちの『シユヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろう。といっても、ミス・タバサはすでに『シユヴァリエ』の爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた」

3人の顔がぱつと輝いた。キュルケが驚いた声をあげる。

「ほんとうですか?」

「ほんとじゃ。いいのじゃ、君たちは、それぐらいのことをしたんじやから」

ふとルイズは、先ほどからつまらなそうな顔で立っているジエヴオーダンを見つめた。

「……オールド・オスマン。ジエヴオーダンには、何もありませんか?」

「……残念ながら、彼は貴族ではない」

ジエヴオーダンは言った。

「使い魔の功績は主人のものだ。素直に受け取れ」

「……でも」

「よかったな、ルイズ」

ジエヴオーダンは、ルイズの使い魔として召喚されてきてから、初めて見せる優しい表情を浮かべた。ルイズもそれに答え、すこし不器用に笑った。

それを見て、オスマン氏は満足そうに微笑むと、ぽんぽんと手を打った。

「さてと、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。このとおり、『破壊の杖』も戻ってきたし、予定通り執り行う」

キュルケがパツと顔を輝かせた。

「そうでしたわ! フーケの騒ぎで忘れておりました!」

「今日の舞踏会の主役は君たちじや。用意をしてきたまえ。せいぜ

い、着飾るのじゃぞ」

3人は、礼をするとドアに向かった。ジェヴオーダンだけが動かず、そこに立っている。ルイズはそんなジェヴオーダンをちらと見つめた。

「先に行っている。後で俺も向かう」

ジェヴオーダンがそう言うので、ルイズは心配そうに彼を見つめたが……そのまま頷いて、部屋を出た。

オスマン氏は、そんなジェヴオーダンをじつくりと見やった。

「なにか、私に聞きたいことがあるようじゃな、狩人よ」

「……!？」

『狩人』。その言葉自体は珍しい言葉でもなんでもない。だが、そこに込められた意味をいちはやく察知したジェヴオーダンは、驚いて息を飲んだ。

この老人は、自分が何者かを知っている。おそらく、これまでもずっと。

ジェヴオーダンは思わずデルフリンガーに手をかけ……オスマン氏は慌てて手をあげてそれを静止した。

「さてさて、落ち着くのじゃ。少なくとも私は君の敵ではない。少々縁があつて、君が何者かを知っているというだけじゃ。深いことは知らない。だからこそ、君が気にしていることを言つてごらんさい、できるだけ力になろう。君に爵位を授けることはできんが、せめてものお礼じゃ」

優しく、静かな声だった。ジェヴオーダンはその中に確かに他意がないことを感じ、デルフリンガーから手を離れた。

それからオスマン氏は、コルベールに退室を促した。わくわくしながらジェヴオーダンの話を待っていたコルベールは、しぶしぶ部屋を出ていった。

コルベールが出て行ったあと、ジェヴオーダンは口を開いた。

「……あの『破壊の杖』は、俺が元いた宇宙の狩り道具だ」

オスマン氏の目が光った。

「ふむ、元いた宇宙とは？」

「俺は、この宇宙の人間ではない」

「本当かね」

「本当だ。俺は、あのルイズの『召喚』に応え、果てしない宇宙の向こうから来た」

「ふむ……」

オスマン氏は眼を細める。さらに、ジェヴオーダンは続けた。

「もつと言えば……俺はすでに人間じゃない」

「……………」

「俺の体に流れる血は、人間のそれじゃない。ここに来る直前、すっかり『上位の者』の血と取り替えてしまった。あなたは、俺を知っている。なぜだ？ あれの『小さなトトルス』はなぜここにある!? あなたは一体……………」

「まあ待て、落ち着きたまえ」

オスマン氏はフーツとため息をつき、ゆっくりと髭を撫でた。

「1つずつ答えよう。あれを私にくれたのは、私の命の恩人じゃ」

「その狩人は？」

「死んでしまった。今から、もう30年も前の話じゃ」

「なんだと!？」

「30年前、森を散策していた私は、ワイバーンに襲われた。そこを救ってくれたのが、あの『破壊の杖』の持ち主じゃ。彼はあの『破壊の杖』でワイバーンを吹き飛ばすと、ぼつたりと倒れおった。……普通の人間なら、死んでいる怪我じゃった。私は彼を学園に運び込み、手厚く看護した。しかし、看護の甲斐なく……………」

「そんな……………」

オスマン氏は俯いた。

「私は、彼が使った道具を『破壊の杖』と名づけ、宝物庫にしまいこんだ。恩人の形見として……………」

そう語り、オスマン氏は遠くを見つめるように眼を細めた。

「彼は、不思議なほど落ち着いていた。瀕死の重傷を負っているとはとても思えないほど。そして彼は語ってくれた、自分が『狩人』という存在であること、『上位者』の存在、『逆さ吊りのルーン』…………君の

左手に現れたそれじゃ」

ジェヴオーダンはハツとして左手のルーンを見る。自分には読めない文字の上に浮かび上がったのは、狩人なら誰もが知る徴だった。「彼は自らを教会の狩人だと語っていた。死に際に彼は安心した様子だった。『これで悪夢を見ることなくゆつくりと眠れる』と……。彼がどこから来たのか、どのような方法でこの地に来たのか、最後までわからなかった」

「くそつ、手がかりを見つけたと思っていたが……」

ジェヴオーダンは齒噛むしかなかった。見つけた手がかりは、あつという間に消えてしまったのだ。

おそらく彼は医療教会の名もなき狩人だったのでだろう。何かしらの方法でこちらの世界へ来たのだろうが、今となつては知るすべはない。

オスマン氏は、次にジェヴオーダンの左手を掴んだ。

「おぬしのこのルーン……」

「……こちらについても聞きたかった。これが光ると、どういうわけか体が軽くなる。それだけでなく、本来なら俺が使えないはずの狩り道具まで、自在に扱うことができた」

オスマン氏は、話そうかどうかしばし悩み、仕方ないとばかりに口を開いた。

「これなら知っておるよ。ガンダールヴの徴じゃ。伝説の使い魔の印じゃよ」

「伝説の使い魔？」

「そうじゃ。その伝説の使い魔は、ありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ。だがお主は、並大抵の武器ならすでに扱いに長けておる。だから身体能力の向上、そして、本来使えるはずのない武器を使いこなせたのじゃろう」

ジェヴオーダンは、思わず息を飲んだ。

「……伝説の、使い魔だど？　だとすれば、俺の主人のルイズは」

「それは、わからん」

その意図を汲み、オスマン氏が先手を打って答えた。

「お主も知ってるであろうが、彼女はとても素晴らしい人物じゃ。強くしたたかな芯のある人間じゃ。それと同時に、決して優秀なメイジとは言い難い。なぜ彼女の使い魔であるお主が伝説の『ガンダールヴ』を持って召喚されたのかはわからん。だが、おぬしがこちらの宇宙にやってきたことと、そのガンダールヴの印は、何か関係があるのかもしれん」

ジェヴォーダンはため息をついた。どれも有益な情報ばかりだったのだが、かといってこの現象の全体像は決して見えてこない。かつてこの地にやってきた狩人のことも、よくわからないままだった。

「力になれんですまんの。ただ、これだけは言っておく。私はおぬしの味方じゃ、狩人よ」

そういうと、オスマン氏はジェヴォーダンを抱きしめた。

「よくぞ、恩人の杖を取り戻してくれた。改めて、礼を言う。『破壊の杖』、いや、『小さなトニトルス』というのか？ これはお主が持って行きたまえ」

なんとオスマン氏は、懐から件の『小さなトニトルス』を取り出した。ジェヴォーダンが驚きの声をあげる。

「これは!? いや、宝物庫に戻したはずでは?」

「ふふ、よいのじゃ。宝物庫にはよく似た鉄製のワンドを飾っておる。何、誰も彼も興味など持たずに眺めておったものじゃ、気付くまいて」
「しかし、あなたの恩人の……」

「よいのじゃ。言うたであろう、せめてもの礼じゃ。おぬしがどういう理屈でこちらの宇宙にやってきたのか、私なりにしらべるつもりじゃ。だが、何もわからんでも恨まんでくれよ。なに、こちらの宇宙も住めば都じゃ、嫁さんだつて探してやる」

ジェヴォーダンは、『小さなトニトルス』を受け取り、静かに礼をする。帰る手がかりは、簡単に指の間からすり抜けていつてしまった。

*

アルヴィースの食堂の上の階が、大きなホールになっており、舞踏

高貴さをいやになるくらい演出し、胸元のあいたつくりのドレスが、ルイズの小さい顔を宝石のように輝かせる。

主役が全員揃ったことを確認した楽士たちが、小さく、流れるように音楽を奏で始めた。

ルイズの周りには、これまでゼロのルイズとからかっていたノーマークの女の子の美貌に気づいた男たちが、いちはやく唾をつけておこうと慌てて群がり、さかんにダンスを申し込んでいる。

ホールでは、貴族たちが優雅にダンスを踊り始めた。ルイズは誰の誘いも断り、バルコニーで月を眺めるジェヴオーダンに近づいた。

ルイズが隣に来て2つの月から目を離さないジェヴオーダンに、ルイズは首をかしげた。

「……楽しんでるみたいね？」

「そう見えるか？」

ジェヴオーダンはため息をつき、いい加減にと帽子を外した。銀色の髪が月光を反射し、鈍く光っている。

「……何が見える？」

「……『月』。あんたは？」

「『月』と『空』が見える」

ルイズは、息を飲んだ。啓蒙の本質を、垣間見たのだ。

そしてルイズは重苦しく俯くと、ジェヴオーダンの声色を真似たのか、低い声で言った。

「何が見える？」

「……『月』と『空』。お前は」

「……空に開いた穴かもしれないわよ」

思わぬ返答に、ジェヴオーダンは吹き出した。つられてルイズも吹き出し……ジェヴオーダンにとっては、もうどれほどぶりか思い出せないほど久しぶりに……2人で、笑った。

「……お前は踊らないのか」

「相手がいらないのよ」

「……？ あれほど誘われていたろう」

ジェヴオーダンのその問いかけに答えず……ルイズは、手を差し伸

べた。

「踊ってあげても、よくつてよ」

ジェヴォーダンは驚き……そして帽子をかぶり直すと、薄い笑みを浮かべてその手を取った。

「喜んでお受けいたします、ご主人様」

2人は並んで、ホールへと向かった。

ジェヴォーダンのエスコートで、ルイズは軽いステップを踏む。ダンスまでこなせるなんて、この男はどこまで有能なのだろうかと思わず関心してしまった。

「……ねえ、ジェヴォーダン。信じてあげるわ」

「? 何をだ」

「……あなたが別の宇宙からやってきたってこと」

ルイズはステップを踏みながら、そう呟いた。

「なんだ、信じていなかったのか」

「今まで、半信半疑だったけど……あの『破壊の杖』、あれを見せられちゃったら、さすがに信じるしかないわね」

それからルイズは、少し俯いた。

「ねえ、帰りたい?」

「……帰りたい、というのとは、少し違う。もし自分の願いだけを唱えるなら、帰りたいくはない。ずっとここにいて、お前の使い魔をするのも悪くはない」

ルイズの顔が一瞬明るくなった。だがその文脈を読み取れば、そう都合のいい話じゃないことがすぐわかり、また俯いた。

「俺は、帰らなくちゃならない。狩りはまだ、終わっていない。狩りを、成就しなければならぬ」

そうよね……、と呟いて、ルイズはしばらく無言で踊り始めた。

背の高いジェヴォーダンのエスコートで、ルイズはくるくると廻る。また向き直って踊り始め……ルイズは顔を赤らめると、思い切ったように口を開いた。

「ありがとう。その……フーケのゴーレムに潰されそうになった時、

助けてくれて。良い貴族だって、言ってくれて」

ジェヴオーダンは、答えない。ルイズは何か誤魔化すように呟いて、俯いた。

楽士たちが奏でる曲のテンポが上がり始め、2人も軽やかになっていく。ジェヴオーダンは正直、こういう時に返すべき言葉がよくわからなかったのだ。だから今は、少しでもこの小さな娘が楽しめるようにしてやればいい。軽いステップを踏みながら、そう思えるだけで十分な気がした。

「当然だ」

「どうして?」

「俺は、お前の使い魔だからな」

ジェヴオーダンはそう言って、ルイズをエスコートした。

そんな様子をバルコニーから見ていたデルフリンガーが、こそつと呟いた。

「おでれーた!」

2つの月がホールに月明かりを送る。何者の意思もない、溶け出すような月明かりを。

何も潜まない、静かな宇宙を辿ってやってくる月明かりを。

「相棒! てーしたもんだ!」

踊る相棒とその主人を見つめながら、デルフリンガーは、おでれーた! と繰り返した。

「おでれーた! 主人のダンスの相手をつとめる使い魔なんて、初めて見たぜ!」

09：悪夢

ルイズは、夢を見ていた。

生まれ故郷のラ・ヴァリエールの領地にある屋敷。夢の中の幼いルイズは、屋敷の中庭を逃げ回っていた。

「ルイズ、どこに行ったの？　まだお説教は終わっていませんよ！」
そう行つて騒ぐ母。出来のいい姉たちと魔法の成績を比べられ、説教をされる毎日。

ルイズは歯噛みをして、逃げ出した。そして、彼女自身が『秘密の場所』と呼んでいる、中庭の池へと向かった。

あまり人の寄り付かない、うらぶれた中庭の池。真ん中には小さな島があり、白い石造りの東屋が建っている。

島のほとりには小舟が一艘浮いていた。今やもう、この池で舟遊びを楽しむものはいない。ルイズは叱られると、決まってこの小舟の中に逃げ込むのだった。

夢の中の幼いルイズは、小舟の中に用意してあつた毛布に潜り込む。そんなふうにしてしていると、中庭の島にかかる霧の中から、一人のマントを羽織つた立派な貴族が現れた。

「泣いているのかい？　ルイズ」

つばの広い、羽根つき帽子に隠れて顔は見えない。だがルイズにはそれが子爵だとすぐにわかった。最近、近所の領地を相続した歳上の貴族。夢の中のルイズにとっての、憧れの子爵。父と彼の間で交わされた約束……。

「子爵さま、いらしてたの？」

「今日はきみのお父上に呼ばれたのさ。あのお話のことだね」

「まあ！」

ルイズは恥ずかしさに顔を隠してうつむいた。

「いけない人ですわ、子爵さまは……」

「ルイズ、僕の小さなルイズ。きみはぼくのことを嫌いかい？」

おどけた調子で、子爵が言った。

「いえ、そんなことはありませんわ。でも……わたし、まだ小さいし、

よくわかりませんわ」

ルイズがはにかんで言うと、帽子で顔が隠れたまま、子爵は手をそつと差し伸べてくる。上質な革手袋に包まれた、大きな手。

「子爵さま……」

ルイズが手を取ると、子爵は顔を上げ……ルイズは、その姿を見て青ざめた。

そこに、子爵の姿はなかった。文字通り「姿がなかった」。

まるで透明人間が子爵の服と帽子を着ているかのよう。帽子と襟口の内側の布地が見える。

「ひっ……!?!」

思わずその手を振り払う。すると、まるで初めから中身などなかったかのように服がぺしやりと潰れ、ルイズに覆いかぶさってきた。

慌てて空っぽの子爵の服を払いのける。中から出てきたルイズは、幼い姿のルイズではなく、トリステイン魔法学校に通う今の姿のルイズだ。

「え……? どっ、こっ」

周囲の景色も様変わりしていた。一面の白い花畑。そよ風に揺れる可愛らしい花びらが一面に広がり、不思議な香りが鼻腔をくすぐる。

突然の事にルイズは困惑し、ゆつくりとあたりを見渡していた時だった。

『はっはっはっはっはっ……なるほど、君も何かにのまれたか。狩りか、血か、それとも悪夢か?』

しやがれた声のする方へ振り返る。燃える家と、見上げるほど大きな樹と、その下で車椅子に腰掛ける老人、そして……見慣れた姿があった。

「……ジエヴオーダン?」

顔は、帽子と防塵マントに隠れて見えない。それでもそのいでたちでそれが自分の使い魔だとすぐにわかった。

だが、ジエヴオーダンは呼びかけには応えない。ただ、車椅子からゆつくりと立ち上がる老人を睨みつけている。

『まあ、どれでもよい。そういう者を始末するのも、助言者の役目というものだ……』

老人は、傍らから巨大な刃を引き抜いた。そして独特の構えで、それを背負った仕掛けと組み合わせて展開する。

『ゲールマンの、狩りを知るがいい』

そして、老人とジェヴオーダンは一斉に跳ねた。

あまりの衝撃に思わずルイズは頭を抱える。だがなんとか薄く目を開け、己が使い魔の様子を見ていた。

それは、まさしく死闘だった。攻撃に次ぐ攻撃、回避に次ぐ回避。全てをかわしきるのではなく、時には被弾をしても、肉を切らせて骨を断つ戦いが互いに繰り広げられる。

ジェヴオーダンの動きは、ギーシユと決闘を繰り広げた時のそれとは、比べ物にならないほど凄まじいものだった。

いつのまにか、ルイズはその闘いに静かに見とれていた。白い花弁が嵐のように舞い上がり、青い月明かりに照らされて眩く輝いている。

ルイズは戦う2人の背後にある大きな1つの月を見て、確信した。

これはジェヴオーダンの記憶なのだ。

使い魔と主人は様々なものを共有する。ルイズはジェヴオーダンのその瞳で見た景色を観ているのだ。

ジェヴオーダンの脇腹を、老人が振るう鎌がかすめる。鮮血が撒き散らされるがジェヴオーダンは気に止める様子も見せず、むしろノコギリを老人めがけ振り下ろす。老人の脇腹をノコ刃が捉え、吹き出した返り血を目いっぱい浴びる。

血みどろの戦い。白い花を赤く染める。ほんの一瞬の間合いが空いたのち……2人の影が重なった。

ジェヴオーダンの喉を捉えたように見えた鎌の刃を、ジェヴオーダンは手で握って受け止めていた。刃を掴んだ指から大量の血が滴り落ちる。

そして、ジェヴオーダンのノコギリ鉋は、老人の肩口から胸にかけて、深くえぐるように突き刺さっていた。

勝負が、決する。老人は両手をやにわに掲げ、どこか満足そうな表情を浮かべた。

『全て、長い夜の夢だったよ……』

そしてそのまま倒れこみ……老人の姿は、まるで夢のように消えてしまった。

静けさだけが残る。返り血にまみれ、月光を浴びて立つジェヴォーダン。そのあまりに壮絶な姿は、なぜかルイズの心を何よりも強く打った。

「ジェヴォー……」

応えないとわかっていても、ルイズは呼びかけた。だが、不意に挿した影にそれは遮られた。

ルイズは、そして夢のジェヴォーダンは、月を見上げた。真っ赤に染まった月が、降りてくる。巨大な何か、触手を携えて、月から降りてくる。

「あ、ぐうっ?」

突然、強烈な耳鳴りと頭痛を覚える。水音が絶えず聞こえ、頭の中を何かか蠢いているのを感じる。

ルイズにはそれが何なのかわからない。だがジェヴォーダンは、月から降りてきたそれに向かって、迎え入れるように歩いていく。

「ジ、ジェヴォーダン! だ、め、行っちゃ……!」

ぐらつく頭を押しさえてジェヴォーダンを止めようとするルイズだったが、しかしジェヴォーダンは、そんなルイズの様子とは打って変わって、動揺した素振りは見せなかった。

むしろまるでつまらなそうに、幼子が遊び飽きたおもちゃを見るような目で、その巨大な怪物と向かい合う。

その怪物の両手がジェヴォーダンを掴んだ。怪物の顔とジェヴォーダンの身体が近づく。

怪物が、ジェヴォーダンを抱き寄せる。触手に絡め取られて行くその姿に、ルイズは短く悲鳴を漏らす。

その直後……ジェヴォーダンの身体から光が炸裂し、触手と腕を弾き飛ばした。

地面に降り立つジエヴオーダンを、ルイズと怪物は驚愕して見やった。ジエヴオーダンは至極つまらなそうに、怪物をにらみつける。

『……お前は、頭の中に瞳があるのか』

夢の中で初めて、ジエヴオーダンが口を開いた。それは今のジエヴオーダンと同じ声なのに、何故か今よりもずっと人間的に聞こえた。

怪物が触手を鬣のようにたなびかせて立ち上がる。目の前のものを敵と、判断したようだ。

『そうか』

そして、ジエヴオーダンもノコギリ鉋を振るい、ガチンと変形させる。

『なら、俺の勝ちだ』

そして、戦いではなく、「狩り」が始まった。

*

ルイズがうーんうーんと唸るので、壊れたノコギリ鉋を弄っていたジエヴオーダンは怪訝そうに振り返る。

どうやら悪夢を見ているようだ。他人事としても、いい気はしない。ジエヴオーダンがそんなことを考えてると、傍らに置いたデルフリンガーがカチカチと金属音を鳴らす。

「ひどくうなされてやがるな。どんな夢見てるんだ？」

「さあな。ロクなものじゃなさそうだが……」

そんなことを話していると、突然ムクツと、ルイズが起き上がる。「……ジエヴオーダン！ だから行くなって言ったのに！ 何であるたはいっつも言うこと聞かないの、バカッ！」

驚きのあまり固まるジエヴオーダンとデルフリンガー。ルイズはそれだけ喚くとまたパタリと倒れ、また寝息と唸り声を上げ始める。どうやら寝ぼけていただけのようだ。

「……相棒お前、娘っこの夢の中で何してんだ？」

「俺が知るかよ……」

ジエヴオーダンは少し悩み、ルイズの枕元に忍び歩く。

そして、懐から小さな木箱を取り出した。

箱の底にあるゼンマイを幾分か巻き、蓋をあける。押し込まれていたスイッチが作動して、オルゴールから静かなメロディが流れ始めた。

ヤーナムでは、ごく一般的に聞かれる、子守唄のメロディだ。

そのままオルゴールを枕元に置いてやる。唸り声を上げていたルイズだったが……しばらくして、かすかな寝息を立て始めた。どうやら落ち着いたようだ。

「ほーお、相棒、変なもん持ってんだな。おでれーた」

机に戻ったジエヴオーダンはひと息置くと、分解したノコギリ鉋のパーツを手取る。

「で、直せそうかい」

「うーん、厳しそうだ。機関の故障というだけならまだなんとかなったかも知れないが、やはり機関部が断裂している。工房の道具なしではどうにもならないな」

「俺様も長生きしてきたが、こんな複雑な武器は初めて見たぜ。確かにこりや、まともな道具なしで手を加えるもんじゃねえよ」

デルフリンガーはそれから、また鍰をカチカチと鳴らし、誰かに聞かれてはまずいというかのように、声を潜めた。

「それにな、相棒。こう言っちゃなんだが、この宇宙に、相棒がその武器使ってまで戦うような相手はおそらくいねーよ。相棒と『同種』がいねーだろうからな。過ぎた力だぜ、それは」

「……『過ぎたるは及ばざるがごとし』か。まあ、お前がいればしばらくは平気だろうな」

分解されていたノコギリ鉋をテキパキと組み立て直す。それを布でくるんで部屋の隅に置くと、机に置いた携帯ランタンの火を消して椅子に深くもたれた。

「……少し疲れたな」

「なんだ相棒、寝るのか？」

「ああ、少し、気が抜けたようだ」

狩人である以上夜に眠ることなどなかったが、獣のいないこの世界。ずっと張り詰めていた殺意がすっかり緩みきり、ジエヴオーダンも無自覚に、自分が変わりつつあることを知る。

眠気を覚えるなど、あの輸血を受けた日ぶりかもしれない。それも、血に眠らされるのではなく自分から感じる眠気など……もはや、記憶が消える前の事だったはずだ。

「まあ、相棒は寝なすぎだからな。少し休んだ方がいいだろうよ。娘つこが毛布かなんかくれてるんだろ、それで……って、なんだ、寝ちまったか」

だから、ジエヴオーダンは自分がそんなことを自覚するよりも先に、すっかりと深い眠りに落ちていた。

「おやすみ、相棒」

きつと全ての狩人が望んだ、悪夢のない眠りのはずだろう。異なる地でジエヴオーダンはあつさりとして、それを手に入れていた。

*

時を同じくして、遠く離れたトリステイン城下町の一角、チエルノボーグの監獄で、土くれのフーケがぼんやりとベッドに寝転んでいた。

これまで散々貴族のお宝を荒らし回ってきた名うての怪盗だったフーケも、城下で最も監視と警備が厳重なこのチエルノボーグに入られてしまつては手詰まりだ。

裁判は軽い刑にはならないだろう。脱獄は不可能、杖を取り上げられ、金属にまつわるものは近くに一切置かない徹底ぶり。壁や鉄格子には魔法の障壁が張り巡らされ、たとえ杖があつてもどうにもならない。

「かよわい女ひとり閉じ込めるのにこの物々しきはいかがなもんかねえ」

苦々しげにそう呟き、続いて自分を捕まえたあの男のことを思い出していた。

「たいしたもんじゃないの、あいつは！」

思い返すほどに妙な男だった。身なりのおかしさから、その身のこなしまで。凄まじい身のこなしで自分を追い詰め、罨を張れば頭でも出し抜かれた。完敗とはこのことである。

一体あいつは何者だったのだろうか。

しかし、今となつては自分には関係のないこと。とりあえずは寝よう。そう思つて目をつぶり……またすぐ開いた。

上の階から、誰かが歩いてくる音がする。かつ、こつという音の中に、ガシヤガシヤと拍車の音が混じる。上階に控える牢番なら、拍車をつけているわけがない。フーケは飛び起きた。

鉄格子の向こうに、長身の黒マントの人物が現れた。白い仮面に覆われて顔が見えないが、マントから突き出た魔法の杖でメイジだとわかった。

「おや、こんな夜更けにお客さんなんて、珍しいわね」

フーケは、おそらく自分を殺してきた刺客だろうと当たりをつけた。どうせこれまで盗みを働いた貴族のうち、明るみになるとまずいものを取られたことへの口封じだろう。

「あいにくだけど、見ての通りここには客人をもてなすような気の利いたものはございませんの」

フーケは身構えた。囚われたとはいえ、むぎむぎとやられてやるつもりはない。魔法だけでなく、体術にもいささかの心得はある。鉄格子越しに魔法を使われたら終わりなので、なんとか油断させて牢に引き込まねば。

「この痩せた体以外、何も得るものはないでしょうがね」

だが、黒マントの男はそれを無視し、口を開いた。

『土くれ』だな」

「誰がつけたか知らないけど、そう呼ばれているわ」

「話をしにきた」

「話？ 弁護でもしてくれてっていうの？ 物好きね」

「なんなら弁護してやっても構わんが。マチルダ・オブ・サウスゴータ」

「……あんた、何者？」

平静を装ったが無理だった。震える声でフーケは聞き返す。それはかつて捨てた、捨てることを強いられた貴族の名だった。その名を知るものは、もうこの世にいないはず。

男はその問いには答えず、笑った。

「再びアルビオンに仕える気はないかね、マチルダ」

「まさか！ 父を殺し、家名を奪った王家に仕える気なんかさらさらないわ！」

フーケが怒鳴り声を上げるが、男は態度を変えない。

「勘違いするな、何もアルビオンの王家に仕えろと言っているわけではない。アルビオンの王家は近いうちに倒れる。革命によってね。無能な王家はつぶれ、我々有能な貴族が政まつりごとを行うのだ」

「でも、あんたはトリステインの貴族じゃないの。アルビオンの革命とやらと、なんの関係があるっていうの？」

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を超えて繋がった貴族の『連盟』さ。我々に国境はない。ハルケギニアは我々の手で1つになり、始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ」

「バカ言っちゃいけないわ。で、その国境を超えた貴族の『連盟』とやらが、このコソ泥に何の用？」

「我々は優秀なメイジが1人でも多く欲しい。協力してくれないかね？ 『土くれ』よ」

「夢の絵は、寝てから描くものよ」

フーケは話にならないとばかりに手を振った。

ハルケギニアを1つにする？ たいそうなスローガンではあるが夢物語だ。数多くの王国が未だ小競り合いを繰り返している中、それらを1つにするなどできるはずがない。

おまけに『聖地』を取り返すとき。彼らは、あの強力なエルフたちにまで挑むつもりか。

「わたしは貴族は嫌いだし、ハルケギニアの統一なんかには興味がないわ。おまけに、『聖地』を取り返す？ エルフどもがあそこにいたってんだから、好きにさせればいいじゃない」

黒マントの男は腰に下げた長塚の杖に手をかけた。

『土くれ』よ。お前は選択することができる。我々の同胞となるか……』

「ここで死ぬか、でしょ？」

フーケが引き継ぐ。男は薄ら笑いを浮かべた。

「その通りだ。我々の事を知ったからには、生かしてはおけんからな」
「ほんとに、あんたら貴族つてやつは、困った連中だわ。他人の都合なんか考えやしない。つまりは選択じゃない、強制でしょ。だったらはつきり、味方になれつて言いなさいな。命令もできない男は嫌いだわ」

「我々と一緒に来い」

フーケは腕を組む。

「あんたらの貴族の『連盟』とやらは、なんていうのかしら」

「味方になるのか？ ならないのか？ どっちなんだ」

「これから旗を振る組織の名前は、先に聞いておきたいのよ」

男は鍵を取り出し、鉄格子の錠前に差し込む。そして細い声で、しかしはつきりと言った。

「レコン・キスタ」

*

『狩人様』

柔らかな光に包まれた庭。並んだ墓石の根元から伸びる草花が風に揺れ、穏やかな空気が漂う空には、無数の柱が地平まで伸びている。空には、月ではなく、柔らかな光。見慣れたはずの景色は、だがしかしどこまでも暖かく優しげだった。

『これは、夢か』

ジェヴォーダンの目の前には、一体の人形が立っていた。球体関節の浮き出た指を重ね、虚ろな目でジェヴォーダンを見やるその姿は、ぞっとするような美しさをたたえ、しかしジェヴォーダンが知るそれよりも、ずっと優しげな表情を浮かべていた。

『はい、これは、狩人様の夢です』

『そうか。俺の、夢か』

『ええ。狩人様の心は、すでにこの夢を離れていらつしやいます』

振り返れば、見慣れた工房の姿。炎に包まれていたはずの姿も、すっかりと美しさを取り戻していた。

『……すまなかつたな』

『……う？』

人形が、首をかしげる。

『俺は成功したはずだった。月の魔物も殺し、瞳を得て、上位者になるはずだったが……こんなにも穏やかな夜を享受するに至っている。俺は、あんたらの望む狩人には、なれなかつたようだ』

光に包まれる工房の建物は絵画のように美しかった。人形は薄い笑みを浮かべ、長い睫毛を何度か瞬かせた。

『いいえ、狩人様。あなた様は、確かに狩りを全うされました。かつてここを去っていったどの狩人様にもなし得なかつたことを、成し遂げました』

『俺が、ここであいつの使い魔として生きていてもか？』

『はい』

『ゲールマンは？』

工房を見やる。誰も乗っていない空の車椅子が、寂しげにそこに置かれてるのが見えた。

『ゲールマン様も、きつと理解しておいでです。あの方は、ずっとこの夢から醒めることを望み、しかし最後には狩人様を解放しようとした』

『俺が解放されることを望む、か』

『私には、やはり人が人を愛する気持ちは理解できません。ですが、貴方がルイズ様を愛し、大切に思う気持ちに偽りがないということだけは、わかります』

『……そうか』

人形は、かつて受け取った小さな髪飾りを、そつと指でなぞつた。『夜が月を抱くように、私も貴方を愛しています、狩人様。そして、貴

方のハルケギニアでの目覚めが有意なものであることを、ずっとずっと祈っております』

これは、自分の夢だ。全て、自分に都合のいい夢だ。

それがわかっていてもジェヴォーダンは……人形に背を向けた。

『……もう行く』

『はい』

ジェヴォーダンは歩みだした。光の先に、何が待っているのだろうか。

『行ってらっしゃいませ、狩人様』

狩人の姿がすっかり見えなくなってから、人形は……空に浮かんだ、赤い赤い月を見た。

『狩人様、ご安心ください。幼年期は、すでに始まっています』

10：依頼

ボサボサの頭で目覚めたルイズの目に飛び込んできたのは予想外の光景だった。

あのジェヴォーダンが、寝てる。

ここに来てもうどれくらいの時が経ったかしかないが、彼は一晩たりとも眠ったことはなかった。最初のうちほど毎晩気になってしようがなかったが、いつのまにか「そういうものなのだろう」くらいの認識に収まっていた。

それがどうだろうか、今ルイズの目の前で、ジェヴォーダンは朝日を浴びながらくたびれるように目を閉じている。

なんだか気になって、ルイズはベッドから出る。起こさないよう、足音をあまり立てずゆっくりと近づく。

椅子にしなだれて目を閉じる様は、寝息さえたてていなければまるで死んでいるかのように見えたかもしれない。それくらい静かに、動きを感じさせずに眠ってる。

不思議とその姿が気になって、ルイズは思わず手を伸ばした。その手が体にゆっくりと伸び……突然手首を掴まれた。

「うっ!?」

そしてぐいっと、力任せに引き寄せられる。強引に顔を近づけられたジェヴォーダンの目は、まっすぐルイズを見ていた。

(ち、かい)

ルイズは狼狽したが、実はジェヴォーダンも驚いていた。いかんせんつつきの対応だったのだ。

「……寝ていたのか、俺は」

「え、え、ええそうよ……ってちよつとあんだ、まず離しなさい!」

「ああ」

ルイズの手が、するりと離れる。ジェヴォーダンは立ち上がると、ひとまずとばかりに伸びをした。

背骨がボキボキバキバキと凄まじい音を立てるのでルイズは目を丸くする。いや、そんな音出ないだろ普通。

「お前、昨晚だいたいぶうなされてたようだが」

「え？ ああ……なんか変な夢見てた気がしたけど……忘れちゃった」

「うーむ、俺も何か見ていた気がしたが。一眠りだったな、忘れた」

全身をバキバキと音を立てながら伸ばすジエヴォーダン。なんだから関節を無視した曲がり方までしている気がするがこの場は何も言わないことにする。ルイズは怪訝そうな顔をした。

「あんた、寝るのね。意外だったわ」

「ああ、どうも気が抜けていたようだ。ただやはり、俺は気分良く眠るのは無理だな。今もとつきに反応してしまった。あまり寝込みに手を出すな、感心せんぞ」

「へ？ あ、いや、てっていうかご主人様の手をいきなり掴んでるんじゃないわよ！」

まさかジエヴォーダンの寝姿に見とれて思わず手が出たなんて口が裂けても言えないだろう。ルイズはさつきと朝の仕度に取り掛かろうとして……枕元に置かれた小箱に気がついた。

「なに、これ？ オルゴール？」

「ああ、それはお前にやろう」

「え？ いいの？」

見れば、ハルケギニアではあまり見ない精巧な作りのオルゴールだ。貴族生まれで目が肥えているルイズからしても美しい品だとわかる。

「うなされるよりよかろう。俺にはもう不要な品だ」

「ふーん？ ま、使い魔の忠義の心がけとしては褒めてあげるわ」

そう高飛車に言っただけのけるが、心なしかにやつきながら朝の準備をするルイズの足取りはわかりやすいほど軽やかだった。

*

朝食を終えたルイズたちが教室で待っていると、扉がガラツと開き、漆黒のマントのメイジが入ってきた。じやれていたルイズとキユ

ルケを含め、生徒たち全員が一斉に席に着く。

ミスタ・ギトー。フーケの一件の際、当直をほっぽり出して寝ていたミセス・シユヴルーズを責め、オスマン氏に怒りっぽいと指摘されていた教師だ。

長い黒髪に漆黒のマントを纏った姿は、まだ若いのに不気味さと冷たい雰囲気があり、生徒たちからは不人気だ。が、この場にいる多くの生徒がちらつとジエヴォーダンを見る。

なんとなく似てるが、絶対あつちのほうが怖い。そう思われていた。

「では授業を始める。知つてのとおり、私の二つ名は『疾風』。疾風のギトーだ」

教室中が、しんと静まり返る。満足気に、ギトーは言葉を続けた。

「最強の系統は知つているかね？ ミス・ツエルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いてるんだ」

「……火に決まってますわ。ミスタ・ギトー」

いちいち癩に触る言い方にカチンと来つつ、キュルケが言い放つ。

「ほほう。どうしてそう思うね？」

「全てを燃やし尽くせるのは、炎と情熱。そうじゃございせん事？」

「残念ながらそうではない」

ギトーは腰に差した長柄の杖を引き抜くいた。

「試しに、この私に君の得意な火の魔法をぶつけてきたまえ」

キュルケはギョツとした表情を浮かべた。この教師はいきなり何を言い出すのか。

「どうしたね？ 君は確か、『火』系統が得意ではなかったかな？」

その口調は、明らかにキュルケを挑発していた。キュルケが目を細める。

「火傷じゃすみませんわよ？」

「構わん。本気で来たまえ。その有名なツエルプストー家の赤毛が飾りではないのならね」

瞬間、キュルケの顔から笑みが消える。

胸の谷間から杖を引き抜き振るう。目の前に差し出した右手の上に小さな炎の玉が現れる、キュルケがさらに呪文を詠唱し続けるにつれて膨れ上がる。直径一メートルほどの大きさになった火球を見て、ジエヴオーダンを除く生徒達が慌てて机の下に隠れた。

キュルケは手首を回転させ、右手を胸元に引きつけて、火球をギトーめがけ押し出した。

唸りを上げて飛んでくる炎の玉を避ける仕草すら見せずに、ギトーは長柄の杖を剣を振るうようにして薙ぎ払う。

烈風が火球を掻き消し、そのまま向こうにいたキュルケを吹き飛ばした。

とつさにその身を、ジエヴオーダンが受け止める。悠然とした態度でギトーは言い放った。

「諸君、風が最強たる所以ゆえんを教えよう。簡単だ。風は全てを薙ぎ払う。火も、水も、土も、風の前では立つ事すらできない。残念ながら試した事は無いが、虚無さえ吹き飛ばすだろう。それが風だ」

キュルケは不服そうな顔を浮かべたが、自分を抱きとめるジエヴオーダンを見てうっとり「ありがとうダーリン」と呟く。ジエヴオーダンはキュルケを落つこととした。猫を踏み潰したような声をする。

「目に見えぬ風は見えずとも諸君らを護る盾となり、必要とあらば敵を吹き飛ばす矛となるだろう。そしてもう一つ、風が最強たる所以は……」

ギトーは杖を立てた。

「ユビキタス・デル・ウインデ……」

低く、呪文を詠唱する。しかしその時……教室の扉がガラツと開き、いやに緊張した顔のミスタ・コルベールが現れた。

かなり珍妙ななりをしていた。頭にやたらと馬鹿でかい、ロールした金髪のかつらをのっけ、ローブの胸にはレースの飾りやら刺繍をつけている。

「ミスタ？」

あまりにも奇妙なその姿に、ギトーが眉をひそめた。

「あややや、ミスタ・ギトー！ 失礼しますぞ！」

「授業中です」

ギトーが重々しく言う。コルベールは咳払いをひとつした。

「おっほん。今日の授業は全て中止であります」

コルベールは重々しい調子で告げる。教室から歓声が上がったが、それを抑えるように両手を振りながら、コルベールが言葉を続けた。

「えー、皆さんにお知らせですぞ」

もったいぶった調子で、コルベールは仰け反った。その拍子に頭に乘せた馬鹿でかいカツラが、床に滑り落ちた。ギトーのおかげで重苦しかった教室の雰囲気が一気にほぐれ、教室中がくすくす笑いに包まれる。

一番前に座ったタバサが、コルベールのつるつるの禿げ頭を指差して、ぽつんと呟いた。

「滑りやすい」

教室が爆笑に包まれた。キュルケがひーひーと笑いながらタバサの肩をぽんぽんと叩く。

「あなた、たまに口を開くと、言うわね！」

コルベールは顔を真っ赤にさせると、大声で怒鳴った。

「黙りなさい！ ええい！ 黙りなさい小童共が！ 大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行い！ 貴族はおかしいときは下を向いてこっそり笑うものですぞ！ これでは王宮に教育の成果が疑われる！」

コルベールのその剣幕に、とりあえず教室中がおとなしくなった。「皆さん、本日はトリステイン魔法学院にとって、良き日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります。恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエツタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます」

その言葉に、教室中がざわめいた。

「したがって、粗相があつてはいけません。急な事ですが、今から全力を挙げて歓迎式典の準備を行います。そのために本日の授業は中止。

生徒諸君は正装し、門に整列すること」

生徒達は緊張した面持ちになると一斉に頷いた。コルベールはうんうんと重々しげに頷くと、目を見張って怒鳴った。

「諸君が立派な貴族に成長した事を、姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！ 御覚えがよろしくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい！ よろしいですかな！」

*

魔法学院の正門をくぐって王女の一行が現れると、整列した生徒達は一斉に杖を掲げた。しゅん！ と小気味よく杖の音が重なる。

正門をくぐった先、本塔の玄関。学園長オスマン氏が、王女の一行を迎える。

馬車が止まると、召使い達が駆け寄り、馬車の扉まで緋毛氈ひもうせんのじゅうたんを敷き詰めた。

呼び出しの衛士が、緊張した声で王女の登場を告げる。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーりーっ！」
がちやりと扉が開いて現れたのは枢機卿のマザリーニだった。

生徒達は一斉に鼻を鳴らした。マザリーニは意に介した風もなく馬車の横に立つと、続いて降りてくる王女の手を取った。生徒の間から歓声上がる。

王女はにっこりと薔薇のような微笑を浮かべると、優雅に手を振った。

「あれがトリステインの王女？ ふん、あたしの方が美人じゃない」
キュルケがつまらなさそうな口調で言った。

「ねえ、ダーリンはどっちが綺麗だと思う？」

「気品はあちらが上だ」

「ああん！ じゃあ顔は私が上？」

ジェヴォーダンからすれば、先ほどの枢機卿の様子と生徒たちの様子から、あつというまにこの王女が置かれた力関係の構図がわかってしまった。少し前に読んだ記事の内容から、この王国が置かれている

状況はわかっていたため、おそらく王女の立場は相当に苦しいものだろう。

そんなことを考えながら、ふと横にいるルイズの方を見た。

真面目な顔をして王女を見つめていたが、その横顔が突然はつとした顔になった。そして顔を赤らめる。ジェヴオーダンは、その変化が気になってルイズの視線の先を確かめる。

彼女の視線の先には、見事な羽帽子を被った凛々しい貴族の姿があった。驚の頭と獅子の体を持った獣にまたがっている。

ルイズはぼんやりとその貴族を見つめている。様子から察するにただ男前だから見とれているというわけではなさそうだ、何か縁のある人間なのだろう。

「……許嫁か？」

「へあっ!？」

ルイズが跳ね飛ぶ。ジェヴオーダンは「冗談だ」と呟くと、王女一行に視線を戻した。

*

そしてその日の夜。

すっかりこの世界の文字の解説を終えたジェヴオーダンが読書にふけていた。ルイズはどうも、激しく落ち着きがない。立ち上がったと思ったら再びベッドに腰掛け、枕を抱いてぼーっとしている。昼間、王女一行の様子を見てからこの調子だ。

かといってジェヴオーダンがそれを気にかけることもないため、こうして読書にふけているわけである。

その時だった。突然ドアがノックされた。

ノックは規則正しく叩かれた。初めに長く二回、それから短く三回……。

突如、ルイズの顔がはつとした表情になった。急いで立ち上がる、と、ドアに駆け寄って開く。

そこに立っていたのは、真っ黒な頭巾をすっぽりと被った少女だっ

た。辺りを窺うように首を回すと、そそくさと部屋に入ってきて後ろ手に扉を閉める。

「……あなたは？」

ルイズは驚いたような声をあげた。頭巾をかぶった少女は、しつと言わんばかりに口元に指を立てる。それから、頭巾と同じ色のマントの隙間から杖を取り出すと軽く降った。ルーンを短く唱えると、光の粉が部屋に舞う。

「……探知ディテクトマジック？」

「どこに耳が、目が光っているかわかりませんかね」

そう言って少女は頭巾を取った。

現れたその姿に、ルイズもジェヴォーダンも驚愕して息を飲んだ。そこにはつい先ほどの式典で目にした、アンリエッタ王女の姿があったのだ。

「姫殿下！」

ルイズが慌てて膝をつく。ジェヴォーダンも、同じように礼拝の姿勢をとる。何が何だかわからない、なぜここに一国の王女がいるのか。

そんな思惑をよそに、アンリエッタは涼しげな、心地よい声で言った。

「お久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ」

そして王女は、今度は感極まったような表情を浮かべ、膝をついたルイズを抱きしめた。

「ああ、ルイズ、ルイズ！ 懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へ、お越しになられるなんて……」

「ああ、ルイズ！ ルイズ・フランソワーズ！ そんな堅苦しい行儀はやめてちょうだい！ あなたとわたくしはおともだち、おともだちじゃないの！」

「もったいないお言葉でございます。 姫殿下」

ルイズが緊張した様子で言う。ジェヴォーダンは、神経を尖らせた。どう言う意図で彼女はこの部屋を訪れたのか。どこに耳が目が

あるかと先ほど行っていたが、その探知魔法とやらは信用に値するのか。どの窓から、どの影からこちらを狙う影がないかと、周囲を見ていた。

「やめて！……ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をしてよってくる欲の皮の突っ張った獣のような宮廷魔術師たちもいないのですよ！

ああ、もう、わたくしに心を許せるおともだちはいないのかしら。昔なじみの懐かしいルイズ・フランソワーズ、あなたにまでそんなよそよそしい態度を取られたら、わたくし死んでしまおうわ！」

「姫殿下……」

ルイズが頭を持ち上げた。

「幼い頃、一緒になって宮廷の中庭で蝶を追いかけたじゃないの！泥だらけになって！」

はにかんだ表情で、ルイズは応えた。

「……ええ、お召し物を汚してしまって、侍従のラ・ポルト様に叱られました」

「そうよ！　そうよルイズ！　ふわふわのクリーム菓子を取り合つて、掴み合いになった事もあるわ！　ああ、喧嘩になるといつもわたくしが負かされたわね。あなたに髪の毛を掴まれて、よく泣いたものよ」

「いえ、姫様が勝利をお収めになった事も、一度ならずございました」

ルイズが懐かしそうに言った。

「思い出したわ！　わたくし達がほら、カインの包囲戦と呼んでいるあの一戦よ！」

「姫様の寝室で、ドレスを奪い合った時ですね」

「そうよ、『宮廷ごっこ』の最中、どっちがお姫様をやるかで揉めて取っ組み合いになったわね！　わたくしの一発が上手い具合にルイズ・フランソワーズ、あなたのお腹に決まって」

「姫様の御前でわたし、気絶いたしました」

それから二人は、と顔を見合わせて笑った。おしとやかに見えた王女だが、中身はとんだお転婆娘なようだ。

「その調子よ、ルイズ。ああいやだ、懐かしくて、わたくし涙が出てし

まうわ」

「……2人は、その、どういった間柄で？」

ジェヴォーダンが尋ねると、ルイズは懐かしむように目を瞑る。「姫様がご幼少のみぎり、恐れ多くもお遊び相手を務めさせていたのだよ。でも、感激です。姫様が、そんな昔の事を覚えてくださってるなんて……。わたしの事など、とつくにお忘れになったかと思いました」

ルイズの言葉に王女はため息をつくど、ベッドに腰掛けた。

「忘れるわけではないじゃない。あの頃は、毎日が楽しかったわ。なんにも悩みなんかなくて」

深い、憂いを含んだ声だった。

「姫様？」

そんなアンリエッタの様子が心配になり、ルイズは彼女の顔を覗き込んだ。

「あなたが羨ましいわ。自由って素敵ね。ルイズ・フランソワーズ」

「何をおっしゃいます。あなたはお姫様じゃない」

「王国に生まれた姫なんて、籠に飼われた鳥も同然。飼い主の機嫌一つで、あっちに行ったり、こっちに行ったり……」

アンリエッタは窓の外の月を眺めて、寂しそうに言う。それからルイズの手を取ると、にっこりと笑いながら言った。

「結婚するのよ。わたくし」

「……おめでとうございます」

アンリエッタの声の調子に、何か悲しいものを感じたルイズは沈んだ声で言う。

なるほど、とジェヴォーダンは思った。何か策略のあつて訪れたものかと思っていたが、要するにその結婚とは政略結婚のことであろう。マリッジブルーに、傷心を癒すため旧友を訪ねた。そんなところのようだ。

そんな風に思考を巡らせているジェヴォーダンに、アンリエッタは気づいた。

「あら、ごめんなさい。もしかして、お邪魔だったかしら」

「お邪魔？ どうして？」

「だって、そのの彼、あなたの恋人なのでしょう？ いやだわ、わたくしったら。つい懐かしきにかまけて、とんだ粗相をいたしてしまっただけみたいね」

「はい？ 恋人？ あの獣が？」

「おい」

ジェヴオーダンが無然とした声で言うが、ルイズは首をぶんぶんと振ってアンリエッタの言葉を否定した。

「姫様！ あれはただの使い魔です！ 恋人だなんて冗談じゃないわ！」

「使い魔……？」

アンリエッタはきよとんとした表情で、ジェヴオーダンの顔をじつと見つめる。

「人に見えませんが……」

「……数奇なことではございますが、彼女の使い魔を努めさせていただいております。殿下」

ジェヴオーダンの、ひとまずは礼節をわきまえた態度にルイズもほっと胸をなでおろす。これでとんでもなく失礼な態度を取られたりしたらたまったものではない。

「そうよね。はあ、ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずね」

「好きであれを使い魔にしたわけじゃありません」

ルイズは無然とした。アンリエッタが再びため息をついた。

「姫様、どうなさったんですか？」

「いえ、何でもないわ、ごめんなさいね……嫌だわ、自分が恥ずかしいわ。あなたに話せるような事じゃないのに、わたくしってば……」

「おっしゃってください。あんなに明るかった姫様が、そんな風にため息をつくって事は、何かとんでもないお悩みがおありなのでしょう？」

「……いえ、話せません。悩みがあると言った事は忘れてちょうだい。ルイズ」

「いけません！ 昔はなんでも話し合ってたじやございませんか！ わたしとお友達と呼んでくださったのは姫様です。そのお友達に、悩みを話せないのですか？」

ルイズがそう言うと、アンリエッタが嬉しそうに微笑んだ。

「わたくしをお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とても嬉しいわ」

アンリエッタは決心したように頷くと、真剣な表情を浮かべる。

「今から話す事は、誰にも話してはいけません」

ジェヴォーダンが黙って部屋を出ようとしたら、アンリエッタがそれを止めた。

「メイジにとつて使い魔は一心同体。席を外す理由はありません」

そして物悲しい調子で、アンリエッタは説明を始めた。

「わたくしは、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐ事になったのですが……」

「ゲルマニアですって！」

ルイズは驚いた声を上げた。たしかルイズは、大のゲルマニア嫌いであつたはずだ。

「あんな野蛮な成り上がり共の国に！」

「そうよ。でも、仕方がないの。同盟を結ぶためなのですから」

アンリエッタは現在のハルケギニアの政治の情勢を、ルイズに説明した。

アルビオンの貴族達が反乱を起こし、今にも王室が倒れそうな事。反乱軍が勝利を収めたら、次にトリステインに侵攻してくるであろう事。

それに対抗するために、トリステインはゲルマニアと同盟を結ぶ事になった事。

同盟のために、アンリエッタ王女がゲルマニア皇帝に嫁ぐ事になった事……。

「そうだったんですか……」

ルイズは沈んだ声で言った。アンリエッタがその結婚を望んでいないのは、口調から明らかであつた。

「良いのよ、ルイズ。好きな相手と結婚するなんて、物心ついた時から

諦めていますわ」

「姫様……」

「礼儀知らずのアルビオンの貴族達は、トリステインとゲルマニアの同盟を望んでいません。二本の矢も、束ねずに一本ずつなら楽に折れますからね」

アンリエッタは一息つき、そして呟いた。

「従って、わたくしの婚姻を妨げるための材料を、血眼になって探しています」

「もし、そのような物が見つかったら……」

トリステインは、アルビオンに侵攻される。

ジェヴォーダンはこれまでの情報収集で、トリステインとアルビオンにどれほどの戦力差があるのかおおよその見当がついていた。貴族の身分にあぐらをかき、ろくに戦力を育てて来ていなかったアダはここで出てしまった、というところだろう。

「で、もしかして姫様の婚姻を妨げるような材料が？」

ルイズが顔を蒼白にして尋ねると、アンリエッタは悲しそうに頷いた。

「おお、始祖ブリミルよ……。この不幸な姫をお救いください……」

アンリエッタは顔を両手で覆うと、床に崩れ落ちた。まるで芝居がかった仕草であり、ジェヴォーダンにはすでにその意図がわかったが、あえて閉口していることにした。

「言って！ 姫様！ 一体、姫様のご婚姻を妨げる材料って何なのですか？」

ルイズもつられたのか、興奮した様子でまくしたてる。両手で顔を覆ったまま、アンリエッタは苦しそうに呟いた。

「……わたくしが以前したためた一通の手紙なのです」

「手紙？」

「そうです。それがアルビオンの貴族達の手に渡ったら……彼らはすぐにゲルマニアの皇室にそれを届けるでしょう」

「どんな内容の手紙なんですか？」

「……それは言えません。でも、それを読んだらゲルマニアの皇室は、

このわたくしを許さないでしょう。ああ、婚姻は潰れ、トリステインとの同盟は反故。となると、トリステインは一国にてあの強力なアルビオンの立ち向かわねばならないでしょうね」

ルイズは息せきって、アンリエッタの手を強く握った。

「一体、その手紙はどこにあるのですか？ トリステインに危機をもたらす、その手紙とやらは！」

その言葉に、アンリエッタは首を振った。

「それが、手元にはないのです。実は、アルビオンにあるのです」

「アルビオンですって！ では！ すでに敵の手中に？」

「いえ……その手紙を持っているのは、アルビオンの反乱勢ではありません。反乱勢と骨肉の争いを繰り返している、王家のウエルズ皇太子が……」

「プリンス・オブ・ウエルズ？ あの凛々しき王子様が？」

アンリエッタはのけぞると、ルイズのベッドに体を横たえた。

「ああ！ 破滅です！ ウエルズ皇太子は遅かれ早かれ、反乱勢に囚われてしまうわ！ そうしたら、あの手紙も明るみになってしまう！

そうなたら破滅です！ 破滅なのです！ 同盟ならずして、トリ

ステインは一国でアルビオンと対峙せねばならなくなります！」

ルイズは息を呑んだ。ジエヴォーダンだけが、心中で確信を得る。

「では姫様。わたしに頼みたい事というのは……」

「無理よ！ 無理よルイズ！ わたくしったら、なんて事でしょう！

混乱しているんだわ！ 考えてみれば、貴族と王党派が争いを繰り返しているアルビオンに赴くなんて危険な事、頼めるわけがありませんわ！」

「何をおっしゃいます！ 例え地獄の釜の中だろうが、竜のアギトの中だろうが、姫様の御為とあらば、何処なりと向かいますわ！ 姫様とトリステインの危機を、このラ・ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズ、見過ごすわけには参りません！」

ルイズは膝について恭しく頭を下げた。

『『土くれ』のフーケを捕まえたこのわたくしめに、その一件是非ともお任せくださいますよう』

「このわたくしの力になってくれるというの？ ルイズ・フランソワーズ！ 懐かしいお友達！」

「もちろんですわ！ 姫様！」

ルイズがアンリエッタの手を握って、熱した口調でそう言うと、アンリエッタはぽろぽろと泣き始めた。

「姫様！ このルイズ、いつまでも姫様のお友達であり、まったく理解者でございます！ 永久に誓った忠誠を、忘れる事などありませんか！」

「ああ、忠誠。これが誠の友情と忠誠です！ 感激しました。わたくし、あなたの友情と忠誠を一生忘れません！ ルイズ・フランソワーズ！」

「ルイズ。友情を確かめ合っているところ恐縮だがな」

そんな熱のこもった二人の舞台が、突如冷たい声に裂かれた。背筋も凍るような、冷たい声だった。

ルイズが振り返る。ジェヴオーダンが、氷のように冷たい目を二人に向けていた。

「なによ」

「お前はその任務のためにアルビオンに行くつもりでいるのか？」

「そんなの、当たり前じゃないの！ あんた、今の私たちの話聞いてたの!？」

「聞いていたさ。だからこそ聞いている」

ジェヴオーダンはため息をつく、静かに、だが諭すように語り始めた。

「わかっているかどうか知らんが、アルビオンは今現在、戦地になっている。単に手紙を取りに行くと言うだけの話ではない、戦地に赴き、敵と戦いを繰り返している皇太子一人を見つけて出し、手紙を受け取り、そして無事に帰ってこなければならぬ。はつきり言って普通の任務じゃあない、恐ろしく難しく、そして特殊な依頼だ。当然、お前一人にこなせるものではないだろう。戦場の女など、どこまでも無力だ」

ジェヴオーダンのその言葉に、ルイズは思わず声に詰まった。彼の

言っていることは全て事実であり、言い返せる余地などひとつもない。

そしてジェヴオーダンは視線をアンリエッタに向ける。啞然とするアンリエッタにも、ジェヴオーダンは変わらぬ声で言った。

「この依頼をルイズに頼むのは、そんな特殊な依頼をこなせるほどの精鋭や特殊な兵士にも、明るみにすることができない内容だから。違いますか。極秘裏に、誰にも知られないで済む人間に依頼し、しかし手紙の内容は明かせないという。おそらく手紙の内容は、トリステインとゲルマニアの同盟を揺るがすだけのものではない。今のトリステインの内政を根底から破壊してしまうもの……ただでさえ政治の実権をほとんど枢機卿に握られているあなたの立ち位置は地に堕ちる、そういう種類のものだ」

アンリエッタが息を飲む。今、目の前にいるこの男は、一体何者なのか。自分とルイズのほんのわずかな会話とその依頼内容だけで、核心である手紙の内容にまでたどり着いてしまった。

「さらに言えば、あなたはルイズを『おともだち』と言うが……この依頼がどう考えても失敗する可能性の高いものであることを考えれば、ルイズは『失っているいい駒』というところだろうか」

「え……？」

その言葉に、今度はルイズが反応する。

「ちよつと、何言ってるのよあんた！ 姫殿下は私に……」

「ルイズ、この依頼をお前が受けてアルビオンに向かい、任務に失敗して死んだとしよう。依頼内容はお前と姫殿下しか知らないこと、今日ここに彼女が訪れていることを知るものもない。お前は不審死として扱われる程度で、このことは公に出ない」

ルイズは顔面蒼白になってジェヴオーダンを見た。認めたくないが、構図としてはその通り。自分をお友達と呼んでくれるはずの姫殿下が、自分を利用しようとしている？

恐る恐る、アンリエッタに視線を移す。アンリエッタのほうも青ざめた表情でうつむくばかりで、口をあうあうと震わせている。

「ルイズ失敗の報が入れば枢機卿が次の手を打つのだろうか？ どう

せ、そんなにも重要な内容の手紙なのであれば、実権を握る枢機卿が知らないわけもない。ルイズに任せるのは、実際それでルイズが手紙を取り返してくれば僥倖だった、とだけの話だからな」

アンリエッタの肩が、かくんと落ちる。緊張の糸がはち切れてしまったようだ。ルイズはわなわなと震え、涙を流し始めた。

だが、その次にジェヴォーダンの口から発せられた言葉は、さらに二人が予想だにもしなかったものだった。

「……それで、いつ出発するんだ」

何を言っているのかわからなかった。ルイズも、アンリエッタも、ぽかんとした表情でジェヴォーダンを見る。

厳密には何を言っているかはわかる。いつ出発するか。わからないのは意味の方だ。これまで散々、この任務の危険性を謳っておいで、何を言っているのか？

「その、使い魔さん？ この任務を、その……受けていただけののですか？」

「ジェヴォーダン!? だったら、今の話は何だったのよ!」

当然とばかりに両手をあげてため息をつく。

「重要な任務であるのに、芝居めいた自分たち語りで話の主体を逸らしたのはどこの誰だ。だいたい、重要な任務であるのにその内容を知らずに受けることができるわけがないだろう」

「それは、そうだけど……」

「そして、 姫殿下」

呼び止められてびくりと肩をすくませるアンリエッタを、ジェヴォーダンがまっすぐ、しかし力強く見つめながら言った。

「その手紙回収の任務、この俺にお任せください」

アンリエッタは驚愕した。しかし、ジェヴォーダンは続ける。

「この任務の危険性がいかなるものであるか、先ほど述べた通り。しかし、その危険な任務にルイズを連れて行くわけにはいきません。であれば、少なくともこの場でその依頼を耳にした俺が、その依頼を受けるのがスジというものかと」

「あんだ、何勝手なことを言ってるのよ!」

ルイズはジェヴオーダンの意図がようやくわかり目を釣り上げた。この使い魔は、要は一人でアルビオンに乗り込もうというのだ。

もちろん、アンリエッタもそれはわかっていた。だからこそ、疑問だった。

「先ほど、あなたの話を聞く限りあなたが私を信用してくれたとは思えませんわ。その……どうしてこの依頼を受けてくださるの？」

「先ほどの言い回し、俺にも失礼な点があった。『おともだち』と思っていなければ、あれほど思い出話が出てくるはずもない。傷心に頼れるものがほかにいないというのは、事実だったのだろう。その時に俺の主人であるルイズを思い出し、そして頼る選択をしてくれたことを、信じます」

ジェヴオーダンの力強い言葉に、青ざめていたアンリエッタの表情に血の気が戻ってくる。

恐ろしい男ではあった。しかしそれはルイズを思えばのこと。まことの忠誠を誓う使い魔の姿そのものだったのだ。

この男になら、任せてもいいかもしれない。アンリエッタの心にいちまつ光が見え始めていた。

だが、二人はそのやりとりの後ろで、ルイズが悪鬼のごとき表情を浮かべて毛を逆撫でているのに、気づかなかった。

「そういうわけだ、ルイズ。お前は一人で……」

「……さい」

「何？」

ジェヴオーダンが振り返った瞬間。

「黙りなさいーい!! あんた、いい加減にしなさい!! 姫さまは……姫さまはあんたに頼みをしに来たんじゃないのよ! わたしに頼みに来たの!」

猛烈な剣幕に、二人が固まる。そしてジェヴオーダンを押しつけて前に立ったルイズは胸を張った。

「姫様、今回の任務はこのルイズ・フランソワーズにお任せください。必ず手紙を手に入れてみせます」

「え……?」

「おい、ルイズ!？」

ジェヴオーダンは驚いてルイズの肩を掴んだ。あれほどこの任務の危険性を説明したのにこいつはまだ……と思ったが、ルイズはその手を払いのけた。

「何度も言わせないで！ あんたは使い魔で、私が主人なの！ 私が行くと言ったら行くのよ！ あんたは黙って、私に付いて来たらいいの！」

「お前……」

きつぱりと、ルイズは言い放つ。反論は無駄だど目が語っていた。ジェヴオーダンはため息をつき、アンリエッタの困り顔を見た。

「……俺への任務は『ルイズを守る』に変更してくれ」

「！で、では……！」

「ああ」

ジェヴオーダンの言葉なき返答に、アンリエッタは表情を明るくした。

「しかし……本当に構わないのですか？ ルイズ。彼の言ったことも正しい。私は……あなたを利用している……」

「よいのです、姫さま、一命にかけても、必ずアルビオンに無事に赴きウエールズ皇太子を捜し、手紙を取り戻してみせます」

ルイズのきつぱりとした言葉に、アンリエッタはどこか切なそうに笑顔を浮かべると、ゆっくりとうなずいた。

「アルビオンの貴族達は、王党派を国の隅っこまで追い詰めていると聞き及びます。敗北も時間の問題でしょう。一刻も早く、アルビオンに向かってもらう必要があります」

「では早速、明日の朝にでもここを出発いたします」

アンリエッタは、それからジェヴオーダンを見た。

「恐ろしいけど、でもとても賢く、そして強い使い魔さん」

「……」

「わたくしの大切なおともだちを、どうか、守ってあげてください。どうか、おねがしいたします」

そして、すっと左手を差し出した。ルイズが驚いた声をあげる。

「そんな、いけません姫さま！ 使い魔にお手を許すなんて！」
「いいのです。彼の忠誠は……わたくしにむけてのものではありませんが……ですが、本物です。だからこそ、報いるところがなければなりません」

ジェヴオーダンは跪き、恭しく左手をとると、穢れの女王にそうするのように、手の甲に唇を落とす。

「……我が血に賭けて」

ジェヴオーダンは深く礼拝の姿勢をとる。アンリエツタは微笑んだ。

そしてジェヴオーダンはやにわに立ち上がると、ドアの方に視線を向けた。

「さて、いい加減出て来たらどうだ」

「え？」

突然の言葉に二人は驚いてドアを見つめる。するとドアが開き、金髪の少年が頭をかきながら入って来た。

「は、はは、こ、こんばんわ……」

「ギーシュ！」

ルイズが声を張り上げる。入って来たのは以前、ジェヴオーダんと決闘を繰り広げたギーシュ・ド・グラモンだった。相変わらずの薔薇の造花を手に、しかしばつが悪そうによたよたと入ってくる。

「あ、あんたまさか、立ち聞きしてたの！ 今の話を！」

「薔薇のように見目麗しい姫さまの後を付けてきてみればいつの間にかこんなところへ……それでドアの鍵穴から盗賊のように様子がかがえば……」

ヘラヘラとそう言うギーシュだったが、突然シャキッと背筋を伸ばすと、アンリエツタに向き直って膝をついた。

「姫殿下！ その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せ付きますよう！」

「え？ あなたが？」

「ダメに決まってるでしょ、なんでよギーシュ!？」

ルイズ尋ねると、ギーシュは頬を赤らめた。

「姫殿下のお役に立ちたいのです……」

ジェヴオーダンは頭を抱えた。こいつ、あの決闘騒ぎであれほどの目にあってもこの調子なのか……。

「……王女に欲情でもしているのか」

「よっ……！　しっ、失礼な事を言うんじゃない。僕はただただ、姫殿下のお役に立ちたいだけだ」

そう言いながらも、ギーシュは激しく顔を赤らめている。アンリエッタを見つめる熱っぽい目つきといい、惚れてるのは確かだろう。

「彼女はどうした。ああ、決闘騒ぎの後フラれでもしたか」

「ふん、君の妖術の類にはもう騙されんぞ。あの後二人とも普通の姿に戻ったんだ、大方催眠術か何かだろう」

ジェヴオーダンは、ギーシュについて考えるのをやめた。変わってアンリエッタが口を開く。

「グラモン？　あの、グラモン元帥の？」

「息子でございます。姫殿下」

ギーシュは立ち上がり、恭しく一礼する。

「あなたも、わたくしの力になってくれると言うの？」

「任務の一員に加えてくださるなら、これはもう望外の幸せでございます」

熱っぽいギーシュの口調に、アンリエッタは微笑んだ。

「ありがとう。お父様も立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるようね。ではお願いしますわ。この無力な姫をお助けください、ギーシュさん」

「姫殿下が僕の名前を呼んでくださった！　姫殿下が！　トリストインの可憐な花、薔薇の微笑みの君がこの僕に微笑んでくださった！」

ギーシュは感動のあまり、仰け反って失神した。

ルイズはその騒ぎには目もくれず、真剣な声で言った。

「では明日の朝、アルビオンに向かって出発するといえます」

「ウェールズ皇太子は、アルビオンのニューカッスル付近に陣を構えていると聞き及びます」

「了解しました。以前、姉達とアルビオンを旅した事がございますゆ

え、地理には明るいかと存じます」

「旅は危険に満ちています。アルビオンの貴族達は、あなたがたの目的を知ったら、ありとあらゆる手を使って妨害しようとするでしょう」

アンリエッタは机に座るとルイズの羽ペンと羊皮紙を使い、さらさらと手紙をしたためた。

そして自分が書いた手紙をじっと見つめ、その内悲しげに首を振った。

「姫様？ どうなさいました？」

アンリエッタの様子を怪訝に思ったルイズが声をかけた。

「な、なんでもありません」

アンリエッタは顔を赤らめると決心したように頷き、末尾に一行付け加えた。そして小さな声で呟く。

「始祖ブリミルよ……この自分勝手な姫をお許してください。でも、国を憂いても、わたくしはやはりこの一文を書かざるを得ないので……自分の気持ちに、嘘をつく事は出来ないのです……」

密書だというのに、まるで恋文でもしたためたようなアンリエッタの表情だった。ルイズはそれ以上何も言う事が出来ず、ただじつとアンリエッタを見つめるばかり。

アンリエッタは書いた手紙を巻くと、杖を振るう。するとどこから現れたのか、巻いた手紙に封蝋がなされ、華押が押された。その手紙をルイズに手渡す。

「ウェールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡してください。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう」

それからアンリエッタは、右手の薬指から指輪を引き抜くと、ルイズに手渡した。

「母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。お金が心配なら、売り払って旅の資金にあててください」

ルイズは、深々と頭を下げた。

「この任務にはトリスティンの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風からあなた方を護りますように」

そしてアンリエッタは、今度はジェヴオーダンに向きなおる。

「ルイズを、私のおともだちをお願いします、使い魔さん」

ジェヴオーダンはニヤリと笑うと、目を細めた。

「真実には。ジェヴオーダンは、笑いをこらえるのに必死だったのだ。」

「狩人は、ただ仇なす獣を、狩るだけだ」

戦場が、狩場がくる。もうすぐ、行ける

狩りが、始まる。

11：疑惑

朝もやの中で、ジエヴォーダンとルイズとギーシュは馬に鞍をつけていた。ジエヴォーダンはすっかり完全装備の狩人装束に、後ろ腰には銃とデルフリンガーをぶら下げている。ルイズは制服姿だったが、長距離を馬で移動するため、乗馬用のブーツを履いていた。

そんな風に出発の準備をしていると、ギーシュが困ったような口調で言う。

「お願いがあるんだが……」

「何だ？」

ジエヴォーダンは馬の鞍に荷物をくくりつけながら訊ね返した。ギーシュは少し萎縮気味に答える。どうやらやはり少しジエヴォーダンが怖いようだ。

「ぼ、僕の使い魔を連れて行きたいんだ」

「……？　好きに連れて行けばいいんじゃないか。どこにいる？」

「ここにいるよ」

ギーシュが地面を指差した。

「いないじゃないの」

ルイズがそう言うと、ギーシュはにやつと笑って足で地面を叩いた。

すると、モコモコと地面の一箇所が盛り上がり、茶色の大きな生き物が顔を出した。

「うおっ……!?!」

「ヴェルダンテ！　ああ！　僕の可愛いヴェルダンテ！」

ギーシュはすさっ！　と膝をつく、地面から出てきたその生き物を抱きしめた。

「な、何だそれは」

「何だそれは、などと言ってもらっては困る。大いに困る。僕の可愛い使い魔のヴェルダンテだ」

「あんたの使い魔、ジャイアントモールだったの？」

ギーシュの使い魔は、子グマほどもある巨大なモグラだった。

「そうだ。ああ、ヴェルダンデ、君はいつ見ても可愛いね。困ってしま
うね。どばどばミミズはいっぱい食べてきたかい？」

ギーシユの言葉に答えるように、ヴェルダンデはモグモグモグと嬉
しそうに鼻をひくつかせる。

「そうか！ そりゃ良かった！」

ギーシユはヴェルダンデに頬を擦り寄せた。その様子を見て、ルイ
ズが呆れたように言う。

「ねえ、ギーシユ。ダメよ。その生き物、地面の中を進んで行くんで
しょう？」

「そうだ。ヴェルダンデはなにせ、モグラだからな」

「そんなの連れていけないわよ。わたし達、馬で行くのよ」

「結構、地面を掘って進むのも早いんだぜ？ まあ、ヴェルダンデ」

ヴェルダンデがうんうんと頷くが、ルイズは困り顔になった。

「わたし達、これからアルビオンに行くのよ。地面を掘って進む生き
物を連れていくななんてダメよ」

ルイズの言葉に、ギーシユはよよよと地面に膝をついた。

「お別れなんて辛い、辛すぎるよ……ヴェルダンデ……」

その時、巨大モグラが鼻をひくつかせ、くんかくんかとルイズに擦
り寄る。

「な、何よこのモグラ！」

ルイズが思わず叫んだ直後、ヴェルダンデは何故かルイズを押し倒
し、鼻で体をまさぐり始めた。

「や！ ちょっとどこ触ってるのよ！」

ルイズは体をヴェルダンデの鼻でつつきまわされ、地面をのたうち
回った。スカートが乱れ、派手にパンツをさらけ出しながら、ルイズ
は暴れ続ける。

ジェヴォーダンは、付き合っていられないとばかりに馬の準備を再
開した。

「……君、使い魔なんだよな？ 一応」

「一応な」

「一応でも使い魔なら助けなさいよ！ きゃあ！」

ヴェルダンデはルイズの右手の薬指に光るルビーを見つけ、そこに鼻を擦りよせた。

「この！ 無礼なモグラね！ 姫様に頂いた指輪に鼻をくつつけないで！」

すると、ギーシュが頷きながら呟いた。

「なるほど、指輪か。ヴェルダンデは宝石が大好きだからね」

「ほう？」

「ヴェルダンデは地面に潜って貴重な鉱石や宝石を僕のために見つけてきてくれるんだ。『土』系統のメイジの僕にとって、この上ない素敵な協力者さ」

「……!? 素晴らしい！ 最高だ、最高の使い魔じゃないか！」

思わずジェヴォーダンはギーシュの肩を掴む。一瞬こわばったギーシュだったが、すぐに意味を理解してペアツと顔を明るくした。

「わかるか!? わかってくれるのか！」

「ああ！ こいつがいれば、もうデブどもの臍物を嫌という程見なくても済むじゃないか！」

「え、なんて……？」

「ちよつと！ いい加減！ 助けなさいよお！」

2人をよそにルイズが暴れていると……突然、突風が吹き荒れ、ヴェルダンデを吹き飛ばした。

「だれだっ！」

ギーシュが叫ぶと、朝もやの中から1人の長身の男が現れた。羽帽子をかぶったその男の姿に、ジェヴォーダンは見覚えがあった。

「貴様、ぼくのヴェルダンデに何をするんだ！」

ギーシュが薔薇の造花を引き抜く……が、それよりも早く羽帽子の貴族が杖を振り抜き、その造花を散り散りに吹き飛ばした。

「僕は敵じゃない。姫殿下より、きみたちに同行することを命じられてね。きみたちだけではやはり心もとないらしい。しかし、お忍びの任務であるゆえ、一部隊つけるわけにもいかぬ。そこで僕が指名されたワケだ」

長身の貴族が、その羽帽子を取り一礼する。

「紹鷗陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

文句を言うため口を開きかけたギーシユも、さすがの相手の悪さになだれる。魔法衛士隊といえば全貴族の憧れであり、ギーシユも例外ではない。

ワルドはギーシユの様子を見ると首を振った。

「すまない、婚約者がモグラに襲われているのを見て見ぬふりはできなくてね」

「……なんだと?」

驚きのあまりジェヴォーダンはルイズを見やる。まさか、本当に婚約者だったとは。

「ワルドさま……」

「久しぶりだな、ルイズ! 僕のルイズ!」

ワルドは人懐っこい笑みを浮かべながらルイズに駆け寄り、その体を抱え上げた。

「お久しぶりでございます」

「相変わらず軽いなきみは! まるで羽のようだね!」

「……お恥ずかしいですわ」

「彼らを、紹介してくれたまえ」

ワルドはルイズを下ろすと、再び羽帽子を目深にかぶった。

「あ、あの……ギーシユ・ド・グラモンと、使い魔のジェヴォーダんです」

ルイズは交互に指差しながら言う。ギーシユは深々と頭を下げ、ジェヴォーダンもそれに習う。

「きみがルイズの使い魔か? 人とは思わなかったな」

気さくにそう言いながら、ジェヴォーダんに近づくとワルド。

「ぼくの婚約者がお世話になっているよ」

「……ええ」

「しかし、すごい重装備だな? 顔もほとんど見えないじゃないか」

口髭と帽子の僕が言えたことじゃないがな、と高笑いする。ジェヴォーダンはといえば……正直なところ、ワルドを見定めかねていた。

上から下までその貴族を見る。ぱつと見、人当たりの良さそうな顔をしているが……この男は、その身振り手振り、口調、表情、何もかもに、嘘が紛れている。

当然、それを詮索しようとする者にもいち早く気づけるような、防衛線を張った上である。おそらく自分の嘘を暴こうとするものが現れれば、その時点で完全に全てを閉ざしてしまうだろう。

もつとも、それに気づいたことを悟られるようなジエヴオーダンではないが。ワルドはこれまでと変わらぬ様子でジエヴオーダンの肩をぽんぽんと叩いた。

「どうした、もしかしてアルビオンに行くのが怖いのかい？　なあに、何も怖いことなんかあるもんか。君はあの『土くれ』のフーケを捕まえたんだろう？　その勇気があれば、なんだってできるさ！」

ジエヴオーダンは、悟られないようクスリと笑った。

「……『土くれ』を捕らえたのは、俺ではありません。ルイズたちですよ」

「ん？　そうなのかい？　しかし確か君が……」

「使い魔の功績は主人のもの。大々的に報じられたのも、『トリステイン魔法学園の生徒3人がお手柄』、『生徒にシユヴァリエの称号授与』という話だったはずですんでね……公には」

「……！」

ワルドの表情が、わずかに硬くなる。ジエヴオーダンはその鋭い視線をさらりとかわし、斜に構えてワルドを見やった。

「流石、魔法衛士隊の隊長ともなればお耳も早い。ですが、そのネタはルイズを褒めるのに取っておくのが得策です」

「ふふふ、やるなあ君は！　こりやあ一本取られた！　なるほどルイズ、面白い使い魔を召喚したものだね」

「お、お恥ずかしい限りですわ」

ワルドに悟られないよう、ルイズがジエヴオーダンを睨む。サラリとそれをかわしたジエヴオーダンは、再びワルドと向き直った。

「君とは仲良くなれそうだよ、ジエヴオーダン君」

「……それはどうも」

ワルドが口笛を吹くと、朝もやの中からグリフォンが降り立った。ワルドはひらりとそれに跨ると、ルイズに手を伸ばす。

「おいで、ルイズ」

そして、恥ずかしがるルイズをグリフォンの上へと抱え上げると、手綱を握り、杖を掲げ叫んだ。

「では諸君！ 出発だ！」

*

魔法学園を出発してから、ワルドはグリフォンを疾走させ続けた。ジェヴオーダンたちは途中の駅で馬を交換していたが、ワルドのグリフォンは疲れを見せずに走り続けていた。

「ちよつと、ペースがはやくない？」

抱かれるような格好でワルドの前に跨るルイズがいう。

「ギーシュもジェヴオーダンも、へばってるわ」

ワルドが後ろを向くと、たしかにギーシュは半ば倒れる様な格好で馬にしがみついているし、ジェヴオーダンも何やら恐ろしい目つきでこちらを睨んでいる気がする。

「ラ・ロシエールの港町まで、止まらずに行きたいんだが……」

「無理よ、普通は馬で2日かかる距離なのよ」

「へばったら、置いていけばいい」

「そういうわけにはいかないわ」

「どうして？」

「だって、仲間じゃない。それに……使い魔を置いて行くなんて、メイジのすることじゃないわ」

「やけにあの2人の肩を持つね。どちらかが君の恋人かい？」

ワルドが笑いながら言う。ルイズは頬を赤らめた。

「こ、恋人なんかじゃないわ」

「そうか、ならよかった。婚約者に恋人がいるなんて聞いたたら、シヨックで死んでしまうからね」

そう言いながらも、ワルドは笑っていた。

「お、親が決めたことじゃない」

「おや？ ルイズ！ 僕の小さなルイズ！ 君は僕のことを嫌いに
なったのかい？」

昔と同じ、おどけた口調でワルドが言った。

「も、もう小さくないもの。失礼ね」

「僕にとつては、まだ小さな女の子だよ」

小さい頃。ルイズは先日見た夢を思い出した。生まれ故郷のラ・
ヴァリエールの屋敷の中庭。忘れ去られた池に浮かぶ、小さな小舟
……。

ルイズは、はつと息を飲んだ。あの夢のあと。ジエヴオーダンが出
てきたその夢の内容が、チラリと頭の中に蘇ったのだ。

「……ん？ どうしたんだい、ルイズ？」

突然押し黙ったルイズを不思議に思ったのか、ワルドがそう聞く。

「い、いえ！ なんでもないわ、なんでも……」

そう言っつてルイズは前に向き直る。あとは一人ごちるワルドの言
葉も、ルイズの耳には入ってこなかった。

「もう半日以上、走りっぱなしだ。魔法衛士隊の連中は化け物か」

ぐったりと馬に体を預けたギーシュが呻くように言う。

「君も君ですごいな、平気なのか」

「そうでもないぞ……さすがに、これは堪える」

乗馬慣れしていないジエヴオーダンにしてみれば、体力がある分ま
だマシであるが、感じている苦痛そのものはギーシュと同じだ。苦々
しい思いで、前を走るグリフォンを睨みつける。

「それにしても驚いた、まさか婚約者がいたとはな」

「おや、意外かい？ 貴族だからね、そう珍しいことではないだろう。

あ、ぷぷ、もしかしてきみ……やきもち妬いてるのかい？」

「そうではない。むしろ逆だ」

ほのかに身を傾け、耳打ちにはなっていないもののジエヴオーダン
は内緒話のようにギーシュに語りかけた。

「あんな猛獣を嫁にもらつてみる、正気でいられんぞ」

「……君、言う時は本当言うな。自分のご主人様だろ？」

馬を何度も替え飛ばしてきたので、一行はその日の夜中にラ・ロシエールの入り口についた。ジエヴオーダンは怪訝そうに辺りを見渡した。

「港町なのだろう？ どう見ても山岳地だが……」

「えっ、まさか君アルビオンを知らないのか？」

ギーシュが呆れたように言う。ジエヴオーダンは正直、海を見るのはあまりいい気がしないので構いはしなかったのだが。

その時だった。ジエヴオーダンはいち早く気配に気づき、ギーシュの頭を手で押さえつけた。

「伏せろっ！」

「な、なんだ!？」

不意に、崖の上から松明が何本も投げ込まれた。赤々と燃える松明が渓谷を照らし、戦の訓練を受けていない馬を驚かせる。

暴れる馬から素早く降りたジエヴオーダンは、振り落とされたギーシュを引きよせた。と同時に、何本もの矢が闇夜から飛んでくる。

「き、奇襲だ!」

「そのようだ。ギーシュ、隠れている」

ジエヴオーダンはデルフリンガーを引き抜き、飛んでくる矢を打ち払おうとする。と、一陣の風が舞い上がり、小型の竜巻が矢を巻き込んで弾き飛ばした。

「大丈夫か!」

ワルドの助太刀だ。ジエヴオーダンはワルドへ向け軽い一礼で返すと、矢が飛んできたであろう崖の上を見やった。

「野盗か山賊の類か？」

「にしては数が多い……ワルド子爵、ギーシュとルイズを頼みます」

「何？ お、おい君!」

ワルドが呼び止めるのも聞かず、ジエヴオーダンは軽くなった身体を跳ね上げ、崖を登って行く。スサッと飛び上がり崖上に着地すると、その場に立っていた男たちから驚きの声が上がった。

「こ、こいつ登ってきやがった!」

「馬鹿野郎が、袋にしてやれ!」

激昂した男たちが襲いかかってくる。ジエヴオーダンの目が、いびつに歪んだ事にも気付かずに。

崖の上から男たちの悲鳴が聞こえてくる。どうやらジエヴオーダンは派手に暴れているようだ。暗闇に弓矢が飛んでいくのも見える。

「たいした男だ、こんな崖をあかも軽やかに登っていくとは」

ワルドが呟いた。ルイズは不安そうに、崖の上へ視線を送っている。ワルドはそんなルイズの様子を見て、ふむ、と頷いた。

「少し様子を見てくる。助けが必要なら加勢してくるとしよう」

「あ……ワルド、お願い」

「うむ。ルイズたちはここで待っていてくれ」

ワルドがグリフォンに跨り、そのまま崖上へと飛び上がる。

その状況が目飛び込んできた瞬間、ワルドは絶句した。

「ひいつ! ひいいいい!」

「あが……ごあ……」

死屍累々。まさに、そう呼ぶのがふさわしい、燦々たる状況。20人かそこらはいたのであろう曲者たちは、ほとんど皆殺しにされていた。

死にかけてうめき声をあげる1人に、ジエヴオーダンがとどめを刺す。うづくまるその体に深々と剣を突き立て、尻餅について涙を流す生き残りに見せつけるように、さらに剣を突き刺す。

ジエヴオーダンは立ち上がると、股間を濡らした最後の生き残りへ歩み寄った。

「ひい! 助けてくれ! く、くるな!」

「……お前たちは何者だ」

「ただの、物取りだ! そうさ、身なりの良さそうな連中をここで襲つてたんだ……!」

「そうか、少し喋りやすくしてやろう」

左手に握った散弾銃を横向きにして引き金を引く。強烈な衝撃を

伴う散弾が、男の腹に対し横に向けて放たれた。散弾の何発かは腹をかすめ、食い込み、肉の中にこびりつく。

「があああつ！ うぐ……！」

「本当のことを言わんのなら次は貴公の脳液の色を調べるとしよう。さあ……」

もがき苦しむ男の額に、散弾銃の銃口が押し付けられる。まるで感情のない冷たい目が、男を刺すように見下ろした。

「貴公らは、何者だ」

「ひいつ！ や、雇われた！ 貴族派の連中に雇われて、ここでお前たちを迎え撃てと言われてたんだ！」

「では、傭兵か」

「そう、そうだ……でも、でも、俺は違う！ 俺はあいつらに命じられるままやっただけだ！ それに、あんたらまだ生きてるじゃないか！

そんなもん、ノーカウントだろっ！」

「どんな奴らだ、貴様らに依頼をしてきたのは」

「ぐ……！ み、緑髪の女メイジと、仮面の男だ！ 貴族派を名乗ったこと以外は知らない！」

ジェヴォーダンはふうとため息をつく、右手に携えていたデルフリンガーを鞘に収める。

「ひひ、話したんだからよお、見逃してくれるんだろう？」

「いや、だめだ」

瞬間、ジェヴォーダンは男の腹、先ほどの銃弾でついた傷に、その右手を躊躇なく突き入れた。男の口からくぐもった声と鮮血が吹き出す。

そのまま男の身体を持ち上げるように突き上げ……勢いそのままに、腕を引き抜いた。

男の身体は血を撒き散らしながら転がっていき、一瞬でも言わぬ肉塊と化した。そしてゆっくりと顔を上げたジェヴォーダンの右手には……腸だろうか、細長い臓物がだらりとぶら下がっていた。

そしてそれを、まるで興味のない玩具を手にした子供のように、乱雑に打ち捨てた。

ワルドは思わず胃の中身を戻しそうになるのを必死で抑えた。目の前で繰り広げられたあまりに壮絶な光景に、自分の目を信じる事ができない。

この男は、崖を駆け上っていき、自分がグリフォンで到着するまでのほんのわずかな時間のうちにこれだけの死を振りまき……あげく1人の男の、体の中身を引き抜いて殺すなどという、あまりにも残酷な真似を試みせた。

コートの袖を使って刀剣の血を拭う、返り血にまみれたその姿は、おおよそ人のようには見えなかった。まるで……悪魔か、死神のようだ。

ジェヴォーダンは呆然とするワルドに気がつき、その恐ろしい気配を消して近寄った。

「……子爵、まずいことになった。今回の任務、すでに貴族派に漏れている」

「は、いや、なんだと？」

「奴らは物取りではない、貴族派に雇われた傭兵だと語った。手紙の事は知られてはいなかったようだが、ルイズたちにアルビオンにたどり着かれると困るようだ……守りを固めるという事は、そこが最も脆いということでもある」

そしてジェヴォーダンは、先ほどの男に向けたほどではないにしろ、冷たい視線をワルドに浴びせかける。

「この任務の概要を知る者はごく少ない。子爵、敵は内側にいる可能性が高まった」

「なっ、ぼ、僕を疑っているのかね！」

「ああ、全員を均等に疑っている。子爵も、ギーシュも、ルイズでさえ。誰もが有力貴族に通じている。俺は……平民であり使い魔なので関係ないが」

ワルドはぐつと言葉に詰まりながら、精一杯の威厳を込めた声で言い返した。

「……僕がこの任務について知ったのは出発の前日だ。王女様から直々に勅令があった。それから朝からは、君の知る通り行動を共にし

ていた」

「では、子爵はほとんど疑う余地はない。敵の目はどこか他にある。警戒するとしましょう」

そう言いながらも、ジエヴオーダンは語気を全く緩める事はなかった。崖をサクサクと降りていく背中を見て、ワルドは静かに歯噛みした。

12：記憶

ジエヴォーダンが崖下に降りるや否や、ルイズとギーシュはその血みどろの姿に小さく悲鳴をあげた。

「ちよつとジエヴォーダン!? あんた、何をしたのよ!」

「……何もどうもあるまい」

「殺したの!?!」

ルイズは信じられないと言うように、涼しい顔をしたジエヴォーダンを問い詰める。グリフォンで降り立ったワルドも、しまったという顔をした。

「ジエヴォーダン、あんたは……ひ、人を……!」

「こちらを殺そうとしてきた連中だ。何をそんなに驚くことがある」

「……っ!」

「ルイズ、彼は僕たちを守ろうと……」

「黙って!」

ギーシュがルイズをなだめようとするが、彼女は薄く涙を浮かべて、責めるようにジエヴォーダンを見やる。

ジエヴォーダンはといえば、そんな視線をさして気にした様子すらない。ルイズは、悲しみと怒りで頭がいっぱいになって、声を荒らげた。

「殺すことないじゃない! あんたは、なんでそんなひどいこと……!」

さらにルイズが声を上げようとした時だった。突然影が差し、聞き覚えのある羽ばたきの音が聞こえてきて、一行は空を見上げた。

「シルフィード!」

ルイズが驚きの声をあげる。それはタバサの使い魔の風竜だった。降り立った風竜から、これまた見覚えのある赤髪。キュルケであった。

「ダーリン! 会いたかったわー!」

「会いたかったじゃないわよっ! あんた、何しにきたのよ!」

「朝方、窓から見てたらあんたたちが馬に乗って出かけようとしてるもんだから、急いでタバサを叩き起こして後をつけたのよ!」

風竜の上には確かにタバサがちよこんと座り、本をめくっている。本当に寝込みを叩き起こされたのだろう、パジャマ姿だというに気になる様子もない。

「ツエルプストー。あのねえ、これはお忍びなのよ?」

「お忍び? だつたらそう言いなさいよ。言つてくれなきやわからな
いじゃない……それにしても、襲われた様子だったから急いで降りて
きたんだけど、あつという間に終わっちゃったみたいね?」

そうしてキュルケはしなをつくと、グリフォンに跨ったワルドに
にじり寄っていく。

「おひげが素敵よ。あなた、情熱はご存知?」

ワルドは、ちらとキュルケを見やり……片手で押しやった。

「あらん?」

「善意は嬉しいが、これ以上近づかないでくれたまえ」

「なんで? どうして? あたしが好きって言ってるのに!」

取りつく島もないワルドの態度にキュルケは怒りの声をあげる。
どんな男だつて自分に言い寄られたら、どこかに同様の色を見せるも
のだったのだが……最近はジェヴォーダンといい、ワルドといい、そ
れがない男に出くわしてばかりだ。キュルケは不服そうにワルドを
睨んだ。

「婚約者が誤解するといけないのでね」

「婚約者? ……なあに、あんたの婚約者だったの?」

ルイズが頬を染める。キュルケはつまらなそうに言つて、あらため
てワルドの目を見やった。

なんともいえない、冷たい目。ジェヴォーダンの目も冷たいは冷た
いのだが、それにはクールな魅力を感じるものだ。吹き飛ばされた時
なんかは受け止めてくれたり、ひどいことを言うにしても冗談が効い
ていたり、それはそれで好意的に受け止めることができるものばかり。
だがワルドは違う。どこまでも冷たく、感情のない目だ。

つまらない。キュルケはワルドを見限り、今度はジェヴォーダンを
見る。

「つて、あら? ダーリン、血まみれじゃないの!」

「……ダーリンはやめろ」

「あらあん！　じゃあ、あ・な・た？」

「……………」

珍しく、嫌そくな目。何やらえらく気に入らない部分に触れたらし
く、眉間にしわをよせている。

かなり珍しいリアクションに、急にジェヴオーダンが可愛く見えて
くる。キュルケはにまーっと笑った。

「あなた……さき、血をお拭いいたしますわ」

「はあ……」

甲斐甲斐しくハンカチを使ってすり寄ってくるキュルケに、ジェ
ヴオーダンは呆れ切ったため息を吐いた。

ルイズはまた怒鳴ろうとした。ツエルプストーの女に使い魔が取
られるのは我慢ならない。が、そつとワルドがそんなルイズの肩に手
を置いた。

ワルドはルイズを見てにつこりと微笑みかける。

「ワルド……」

ワルドは何も言わずグリフォンにまたがると颯爽とルイズを抱き
かかえた。

「今日はラ・ロシエールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに渡ろ
う」

ワルドはそう告げた。

ルイズはワルドの腕の中、そつと後ろを見た。

キュルケがジェヴオーダンの馬の後ろに乗って、楽しそうにきやあ
きやあ騒いでいる。

彼はさつき、人を殺してきた。まだコートに残る返り血がそれを物
語っている。

ルイズは胸の中がぎゅうと痛くなるのを感じた。自分の使い魔が、
人殺しをした。いくら自分たちを襲ってきた人間とはいえ、殺しをし
た。それがなんだか、とても辛かった。

道の向こうに、渓谷に挟まれたラ・ロシエールの街明かりが輝く。
一行は夜の道を、その明かりへ向けてまっすぐ進んでいった。

*

ラ・ロシエール最上級の宿『女神の杵』亭に泊まることにした一行は、一階の酒場でその疲れを癒していた。

『棧橋』へ乗船の交渉に行っていたワルドは、困ったように席に着いた。

「アルビオンに渡る船は明後日にならないと出ないようだ」

「急ぎの任務なのに……」

ルイズは口を尖らせるが、ギーシユは明日も休めるとほっとしている様子だった。

「船が出せないとは、どういうことだ？」

ジェヴォーダンの解いに、ワルドが答えた。

「明日の夜は月が重なる『スヴェル』の月夜だ。その翌日の朝、アルビオンがもつともラ・ロシエールに近づく」

近くとはどういう意味か考え、月の話を出すと言うことは潮の満ち引きだろうと、ジェヴォーダンは勝手に納得した。おそらく航行の難しい航路をいくのだろう。

ワルドは鍵束を机の上にじゃらりと置いて、みんなに部屋割りを告げる。

「キュルケとタバサは相部屋だ。ジェヴォーダンとギーシユが相部屋、僕とルイズは同室だ」

ルイズがはっとして、ワルドの方を見た。

「婚約者だからな、当然だろう？」

「そんな、ダメよ！ まだ私たち結婚してるわけじゃないじゃない！」

しかしワルドは首を降ってルイズを見つめた。

「大事な話があるんだ。二人きりで話したい」

貴族相手の宿、『女神の杵』亭で一番上等な部屋だけあって、ワルドとルイズの部屋はかなり豪華な作りだった。レースで飾られたベツ

ドには天蓋まで付いている。

テーブルについたワルドは、ワインの栓を抜いて杯に注ぎ、それを飲み干す。

「きみも一杯やらないか？ ルイズ」

ルイズは言われたままにテーブルについた。ワルドがルイズの杯にワインを満たしていく。自分の杯にも注いで、ワルドはそれを掲げた。

「二人に」

ルイズはちよつと俯いて、杯を合わせた。かちん、と陶器の杯が触れあう。

「姫殿下から預かった手紙は、きちんと持っているかい？」

ルイズはポケットの上から、アンリエッタから預かった封筒を抑えた。いったいどんな内容なのだろう？

そして、ウェールズから返してほしい手紙とはどういうものだろう？ それはなんとなく、予想がつく気がした。

ルイズは考え込んで俯く。ワルドはそんな様子を興味深そうに見た。

「……ええ」

「心配なのかい？ 無事にアルビオンのウェールズ皇太子から、姫殿下の手紙を取り戻せるかどうか」

「そうね、心配だわ……」

「大丈夫だよ、きつと上手く行く。なにせ、僕がついてるんだから」

「そうね、あなたがいればきつと大丈夫よね。あなたは昔から、とても頼もしかったもの。で、大事な話って何？」

ワルドはふと、遠くを見るような目をした。

「覚えているかい？ あの日の約束。ほら、きみのお屋敷の中庭で……」

「あの、池に浮かんだ小船？」

ワルドは頷く。

「きみはいつもご両親に叱られたあと、あそこでいじけていたな。まるで捨てられた子猫のように、うずくまって……」

「本当に、もう、へんなことばっかり覚えてるのね」

「そりや覚えてるさ」

ワルドは楽しそうに笑った。

「きみはいつもお姉さん達と魔法の才能を比べられて、出来が悪いなんて言われていた。でも僕は、それはずっと間違いだと思っていた。確かにきみは不器用で、失敗ばかりしていたけれど……」

「意地悪ね」

ルイズは頬を膨らませた。

「違うんだルイズ、きみは失敗ばかりしていたけど、誰にもないオーラを放っていた。魅力と言ってもいい。それは、君が他の誰にもない特別な力を持っているからさ。僕だって並のメイジじゃない。だからそれがわかる」

「まさか」

「まさかじゃない、例えばそう、君の使い魔……」

ルイズの背筋が、すつと寒くなる。

「……ジエヴオーダンのこと？」

「そうだ。君ならわかるだろう、彼は尋常ではない力の持ち主だ。ここに着く前に傭兵の団に襲われたときも……僕も、自分の目を疑った」

ワルドが纏う空気が、ピリピリと鋭くなる。魔法衛士隊の隊長としての、戦士としての空気だ。

「……でもあいつは、人殺しを……」

「ああ、そうだ。僕が彼の元に駆けつけるまでの間に、彼は恐ろしい殺しをしてみせた。……僕も、戦場で弱いつもりはない。並みのメイジじゃないと言ったろ？ だが、あそこまでの数の敵に囲まれて、ああまで平然としているなんて……想像もできないよ」

ルイズが青い顔をし始めたので、ワルドは慌てて話題を逸らした。「それでだ。その時、武器を掴んだ彼の左手に浮かび上がっていたルーン……。あれは、ただの使い魔のルーンじゃない。あれはまさしく、伝説の使い魔の徴さ」

「伝説の使い魔の徴？」

「そうさ。あれは『ガンダールヴ』の徴だ、始祖ブリミルが用いたと言う、伝説の使い魔さ」

ワルドの目が光った。

「ガンダールヴ？」

ルイズが怪訝そうに尋ねた。

「誰もが持てる使い魔じゃない。君はそれだけの力を持ったメイジなんだよ」

「信じられないわ……いや、でも……」

ルイズは俯いた。ワルドは冗談を言っているのかもしれない。

自分はゼロのルイズだ、落ちこぼれ。どう考えたって、ワルドが言うような力が自分にあるとは思えない。

それよりも……ジエヴオーダンの事が気になった。

『伝説の使い魔』。そう言われれば、確かにあの異様な強さにも説明がつく気がする。貴族であるギーシュとの決闘に勝ち、フーケを追い詰めたあの實力。

だが……果たして、そのジエヴオーダンの強さは、そんな使い魔のルーンによってもたらされたようなものだろうか。そうでなければ、ジエヴオーダンはどこにでもいる普通の平民の男だったのだろうか。

ルイズにはどうしても、そうは思えなかった。『伝説の使い魔』程度では、あの男の強さは説明しきれない。そう感じるのだ。

答えないルイズを見て、ワルドが続けた。

「きみは偉大なメイジになるだろう、始祖ブリミルのように。歴史に名を残す、素晴らしいメイジになるに違いない、僕はそう予感している」

ワルドは熱っぽい口調でそう言うと、真剣な表情でルイズを見つめた。

「ルイズ、この任務が終わったら僕と結婚しよう」

「え……」

突然のプロポーズに、ルイズははっとした顔になった。

「僕は魔法衛士隊の隊長で終わるつもりはない。いずれは国を……このハルケギニアを動かすような貴族になりたいと思っっている」

「で、でも……わ、わたし、まだ……」

「もう子供じゃない。きみは十六だ、自分の事は自分で決められる年だし、父上も許してくださっている。確かに……」

ワールドはそこで言葉を切ると、顔を上げ、ルイズに顔を近づけた。「確かに、ずっとほったらかしだった事は謝るよ。婚約者なんて言えた義理じゃないこともわかっている。でも、ルイズ、僕にはきみが必要なんだ」

「ワールド……」

ルイズは考えた。なぜか、ジェヴオーダンの事が頭に浮かぶ。

ワールドと結婚しても、自分はジェヴオーダンを使い魔として傍に置いておくのだろうか？

……なぜか、それはできないような気がした。これが犬や猫、カラスやフクロウだったら、こんなに悩まずに済んだに違いない。

もし、あの奇妙な男をほっぽり出したらどうなるだろう？

あいつはいつか、異なる宇宙とやらに帰ってしまう。自分の大切な、狩りとやらを成就させるために。

なぜだかそれが、とても恐ろしいことのように思えた。自分の使い魔が、自分の知り得ないはるか遠くへ行ってしまうだけでなく、难道か自分の知らない存在になってしまうようで、怖かった。ジェヴオーダンが殺しをしたと知った時、とても悲しかったのも、おそらくそれが理由だったのだろう。

ルイズは顔を上げた。

「でも、でも……」

「でも？」

「……わたしまだ、あなたに釣り合うようなメイジじゃないし……もっともっと修行して……」

ルイズは俯き、少し考えてから続けた。

「あのねワールド。小さい頃、わたし思ったの。いつか、皆に認めてもらいたいって。立派な魔法使いになって、父上と母上に誉めてもらうんだって」

ルイズは顔を上げて、ワールドを見つめた。

「まだ、わたし、それができてない」

「きみの心の中には、誰かが住み始めたみたいだね」

「そんなことないの！ そんなことないのよ！」

ルイズは慌てて否定した。

「いいき、僕にはわかる。わかった、取り消そう。今返事をくれとは言わないよ。でも、この旅が終わったら、きみの気持ちは僕に傾くはずさ」

ルイズは頷いた。

「それじゃあ、もう寝ようか。疲れただろう」

それからワルドはルイズに近付いて、唇を合わせようとした。

ルイズの体が一瞬強張る。それから、ワルドの体をそつと押し戻した。

「ルイズ？」

「ごめん、でも、なんか、その……」

ルイズはもじもじとしてワルドを見つめた。ワルドは苦笑いを浮かべて、首を振った。

「急がないよ、僕は」

ルイズは再び俯いた。

どうしてワルドはこんなに優しく、凛々しいのに……。ずっと憧れていたのに……。

結婚してくれと言われて、嬉しくないわけじゃない、でも何か心がひっかかる。

決して暖かな感情ではないそのひっかかりが、チクリチクリとルイズの心を刺した。

「かーっ、泣かせるねえ。なかなか健気な話じゃあねえか」

そんな2人の部屋がある屋根の上……。一振りの剣がカチカチと、感嘆の声を漏らした。デルフリンガーである。

ジェヴォーダンはデルフリンガーを肩に立てかけ、屋根に腰掛けていた。頭上では瞬く星と、重なりかけた2つの月が甘やかな光を地上

に垂らしている。

「それにしても相棒、盗み聞きとはらしくねえな」

「……ワルドか、ルイズか、あるいは両方か。貴族側に通じてるスパイがいるとすれば、と思ったが、どうやら見当違いだったようだ」

ふーっとため息を漏らして、ジェヴオーダンは空を見上げる。ヤーナムの地とはまるでバラバラな星の位置、どうやらもう空を読むこともできそうにない。

「にしてもよ、相棒。ちょっと聞きたかったんだけど、いいか」

「なんだ」

「相棒、おめえは……殺しが、楽しいのかい」

カチカチとなる鎧。ジェヴオーダンの顔から、わずかな表情が消える。はあと短い息を吐き、肩にかけた剣を見た。

「なぜそう思うんだ？」

「今日の戦いぶりさ。まあ元々、そういう気質なんだろうかなあとは思ってたが、おめえさんにとっては都合がよくないんだろ」

デルフリンガーもいつになく真剣な口調で語る。

「そりゃあ恐ろしいことだろうよ……『狩りに溺れる』なんてのは」
「……………」

ジェヴオーダンの灰色の目が、遠くを見る。鮮明に思い出せる、今日の『狩り』。

「こ、こいつ登ってきやがった!」

「馬鹿野郎が、袋にしてやれ!」

数は20かそこら。半数ほどがボウガンを持っており、もう半数は雑多な刀剣の類や、松明などを手にしている。

最初の2人が、サーベルを振りかざし怒声を発して襲いかかってきた。

姿勢を低くしてそれをかわし……同時に、右から迫ってきた男の腹をかつ裂く。鮮血が吹き出し、内臓がこぼれ落ちる。

斬られた男が絶命するよりも早く、左から迫っていた男の喉元に剣

を突き立てる。

一瞬で白目を向いた男の喉から剣を引き抜くと同時に、返しの刃で後ろから迫った男を袈裟懸けになで斬った。

「う、嘘だろ!？」

「ひっ……」

「じよ、冗談じゃ……!？」

あつという間に3つの死が振りまかれ、傭兵たちは恐怖におののく。だが狩人は、攻め手を緩めることはない。

素早いステップで次の獲物に近づき、胴を切り裂くと同時に後ろの男を蹴り飛ばす。蹴られた男が吹き飛んで、ボウガンを撃とうとしていた男に激突する。暴発したボウガンが、別の男の頭に突き刺さった。

「野郎!？」

素早くボウガンを構えた別の傭兵。だがその瞬間、その額にギザ刃の投げナイフが深々と突き刺さった。

男が倒れ、その後ろにいた別の男は絶望した。高速で迫る恐ろしい狩人の刃が目の前に迫っていた。

「ぼ、ボウガン隊! 前に出る前に!？」

統率を取っていたのであるう、リーダー各の男がそう叫ぶと、ボウガンを手にした傭兵がその男の周りに並び、すさつと姿勢を落とすた。

ジェヴオーダンはそれを見計らい、近くにいた男の胴に剣を思いつきり突き刺す。金属に体を貫かれた男の断末魔が、喉から漏れる血を泡立てる。

「てえっ!？」

ビビビビツと一斉にボウガンが射られ……ジェヴオーダンは、突き刺した男の肢体をさつと前に出した。肉の体が盾となり、次々と矢に射抜かれる。

「……っ!？」

後に残るは、矢の装填されていないボウガンを抱きかかえた、無力な獲物たち。

恐ろしい狩人は、刃を翻して死体を投げ捨てると、その獲物に襲いかかった。

デルフリンガーは、確かに見ていた。狩人の顔を。分厚い防疫マスク越しでもわかる。その顔は、笑っていた。

「……………」

「言ってたな、狩りに溺れないために、俺つちみたいな仕掛けの武器がいるって。そうしないための仕掛け武器で、そうしないために俺を選んだんだろう」

ジェヴオーダンは黙って、空を見上げた。仲睦まじい2つの月。その片割れの赤い光に、かつての師、ゲールマンの言葉を思い出す。

狩りか、血か、それとも悪夢か。狩人は皆、何かにのまれ、そして飢えている。

「戦うなどは言わねえ。必要な時もあるし、相棒だってそこに居場所を感じてるんだろう。だがよ、ただ殺すために殺して、それを楽しむってのは……………」

「わかっている。それこそまさに、狩りに溺れるというものだ」

深くため息をつき、肩にかけてデルフリンガーをくるくると弄ぶ。

鍔がカチカチと震え、抜き身の刀身を揺らした。

「相棒、俺はお前さんを信じてるが…………お前は、自分が戦いの中で絶対に我を忘れないって自信はあるんだろうな？」

「……………」

ジェヴオーダンは、黙ってデルフリンガーの柄を握った。左手のルーンが淡い光を放ち、体がほのかに軽くなる。その力強い闘志の底に、冷たく凍えるような禍々しさを押し殺して、ジェヴオーダンは答えた。

「ああ…………俺は俺のまま、狩りを成就してみせる」

夜風が頬を撫でる。ジェヴオーダンはそのまま、眠らない狩人の夜を、屋根の上で過ごした。

13：偏在

眠らない夜を過ごす狩人にとって、朝は誰よりも早いものである。常に夜と朝の境目を駆け抜けては、白む空に狩りの終わりを感ずるものだ。

が、狩りをするでなく、読む本もなく。ジェヴオーダンにとっては久方ぶりに退屈な夜明けとなり、珍しくうろうろと散歩をするほど。乗馬の疲れがあったからか、またも少しばかり眠気を覚えるまでであった。

いつそ部屋に戻って、どれくらいぶりかもわからないほど久しぶりにベッドに横になってやろうか。真剣にそんなことを考えた頃、思わぬ来客があった。すらりと背筋の伸びた羽帽子の男、あのワルドだ。「おはよう、使い魔くん。ずいぶん早いんだな」

ワルドは驚いたように、しかし友好的に笑った。当然、その表情の全てが嘘だ。こちらが起きていたことも知っているし、好意もないのだろう。

「おはようございます。子爵も随分とお早いのですね。出港は明日の朝と聞いていますが」

ジェヴオーダンは決して気取られぬよう警戒しながら、端的に自分の疑問だけを告げる。ワルドはにっこりと笑い、そしておもむろに、聞き捨てならない言葉を発した。

「きみは伝説の使い魔『ガンダールヴ』なのだろうか？」

「……………」

ジェヴオーダンは答えず、ワルドの目をじっと見る。

その対応にワルドはどう思ったのか、誤魔化すように首をかしげた。

「…………その、フーケの一件で僕はきみに興味を持ってね。僕は歴史と、兵に昔から興味があった。フーケを尋問したときに君に興味を抱き、王立図書館できみのことを調べたのさ。武器を扱いこなし、無敵の強さを誇る伝説の使い魔、『ガンダールヴ』に行き着いた。そういうわけさ」

「マイナーな歴史まで、よくご存知だ」

「はっはっは、まあ僕も、いわゆるオタクというやつさ。オタクついでに、あの『土くれ』をものともせず倒した腕がどんなものなのか知りたいんだ。ちよつと手合わせ願いたい」

ワルドは腰に差した魔法の杖を引き抜いて言う。その顔は笑っているが、目にはほのかな鋭さが走っている。

「……手合わせなどどこですか」

「この宿は昔、アルビオンからの侵攻に備えるための砦だった。中庭に練兵場があるんだよ」

かつて貴族たちが集い、陛下の閲兵を受けたと言う練兵場。今ではただの物置となったそこで、二人は向き合っていた。

「古き時代……王がまだ力を持ち、貴族たちが従った時代。あらゆる時代でもっとも、貴族が貴族らしかった時代。名誉と誇りをかけて、貴族は魔法を唱えあつた。でも、実際にはくだらないことで杖をぬきあつたものさ。たとえば……女を取り合ったりね」

ジェヴォーダンはいまだ、まんじりともせずワルドを睨みつけている。ワルドはそれを気にせず、さらに芝居掛かった口上を続けた。

「立会いにもそれなりの作法というものがある。介添人が、いなくてはならない」

「……そういうことか」

物陰から現れた姿を見て、ジェヴォーダンは全てを理解した。ルイズはそんな彼を見て、驚いた表情を浮かべた。

「ワルド、言われてきてみれば……何をやる気なの？」

「彼の腕前をちよつと試したくなつてね」

ルイズの静止も、ワルドは聞き入れない。話が通じないと見るや、ルイズはジェヴォーダンを見た。

「ジェヴォーダンやめて、これは命令よ」

「……………」

ジェヴォーダンは答えない。答える必要は、もはやなかった。

「では介添人も現れたことだし、始めるとしよう」

「もうっ！ 2人ともばかっ！」

ワルドが杖を引き抜き、フェンシングの構えのごとくそれを前に突き出して腰を落とした。

いつでも始められる。そんな気迫が伝わってくるような臨戦態勢。対するジェヴオーダンは……微動だにすることなく、佇んでいた。

「……？ どうしたんだ、早く抜きたまえ」

「……」

「どうした！ 怖気付いたか!?!」

はあ。ジェヴオーダンは、この世界に召喚されてから明らかにため息の回数が増えたことを感じている。

人が圧倒的に多いこの世界。絶対数が多いということは、残念ながら必然だ。

そうなれば確実に、バカの割合が増える。

「来い」

「何……？」

「このままでいい。さっさと来い」

ジェヴオーダンは後ろ腰に携えたデルフリンガーと散弾銃に手をかける気配すら見せず、ワルドと対峙した。

ワルドも、固唾をのんで見守っていたルイズも驚愕する。それぞれに、別々の意味で。

「……ふ、ははっ。さすがに人を舐めすぎというものだろう使い魔くん。確かに、僕は君を伝説の使い魔と評した。君の強さは実際この目で確かめている限りさ。だからといって、それはあくまで平民としての、使い魔としての話だ」

丸腰でメイジに 敵うことなど。ましてそれが、1対1の決闘となればなおさら。

この時までワルドはジェヴオーダンが何か冗談を言っているのだと半分本気で思っていたのだ。だが、完全に素手のまま姿勢を低く落としたジェヴオーダンを見て、ワルドはどうとう、隠し通していた殺気をほのかにのぞかせるまでに激昂した。

「残念だ、君はもう少し賢いと思ったが」

「ベラベラとよく回る。言っているだろう、来るならさっさと来い」
「……いいだろう、なら後悔させてやる！」

瞬間、ワルドは飛ぶような速さで踏み込んだ。レイピア状の杖が空を切り裂き、一点でもつてジェヴオーダンに飛びかかる。

対するジェヴオーダンは、既のところでもそれをかわす。剣先が頬の高いところをかすめる。ワルドの攻め手は怒涛のもので風を切る音とともに、数え切れぬほどの斬撃がジェヴオーダンに殺到した。

翻るマントが、ワルドの攻めの素早さを物語る。それだけを見れば、まるで伝承の騎士のように、力強く美しい光景に見えただろう。

だが、ジェヴオーダンも凄まじい動きをしていた。それほどの剣さばきを、全てすんでのところで躲しているのだから。

息もつかせぬ斬撃が、しかしどういいうわけかかすり傷ひとつ負わせることも叶わない。だが、ここまではワルドにとっても予想の範疇だった。

ワルドはただの剣士ではない。魔法衛士隊のメイジの戦いは、その魔法の詠唱さえ戦いに特化されている。

杖を剣として振るいながら詠唱を完成させ、魔法を放つ。それこそが衛士隊の、軍人としてのメイジの戦い方なのだ。

「最後にもう一度確認するが、本当に武器を抜かないつもりか？」

斬撃を繰り出しつつ、ワルドは確認する。いくら単なる手合わせとはいえ、丸腰を相手に全力の魔法を放つのは、ワルドにしてみてもバツが悪かった。

だが、答えない相手を前にすれば話は違う。もはやこれほどの不遜を前に、いかなる遠慮も必要ない。

「デル・イル・ソル・ラ・ウインデ……」

ワルドの突きの動きが変わった。一定のリズムと動きを持ってそれを繰り出しながら、低い声でスペルを唱える。

呪文は瞬く間に完成し、そしてそのリズムに合わせて流れるように、『エア・ハンマー』がジェヴオーダンの頭上に繰り出される。

もういいだろう。

ジェヴオーダンがすきつと、身を翻したのは一瞬のことだった。空気のハンマーは空振り、文字通り空気を揺らす。

ワルドは驚きとともに苦虫を噛みしめるような表情を浮かべた。まさか、自分の最速の魔法が回避されるとは！

返す踵で翻り、背後へ回ったであろうジェヴオーダンへ剣を繰り出して……その剣も、空を貫いた。

一瞬ワルドは「えっ」と、素っ頓狂な声を素であげてしまった。一瞬の間、ワルドはジェヴオーダンを見失う。時間は、それで十分だった。

強烈な衝撃がワルドの背中側を襲う。一瞬何をされたかわからず、膝が地面に着く。

ジェヴオーダンの拳で態勢を崩されたのだと気づくまでに一瞬の時間を要し、その間にジェヴオーダンの手はワルドの背中へ急行し……

ワルドの脳裏に、昨夜見たジェヴオーダンの戦いの光景がフラッシュバックした。

素手を人の体内にねじり込む腕力、躊躇なく引き抜かれる内臓。それをするにはまず相手の態勢を崩していて。

まさか。ワルドの後ろ、もう寸前に迫るこの腕は、まさか。

ジェヴオーダンの腕は凄まじい勢いを持ってワルドへ迫り……：既のところですかすめ、彼の羽帽子を取った。

一瞬、何をされたのかわからないでいるワルドの視界に、羽帽子をくるくる回しながらジェヴオーダンが入って来る。

「子爵、手品のようなものです」

「え……？」

呆然とするワルドにジェヴオーダンが言う。その顔は、先ほどまでの邪悪さとは打って変わり、少しいたずらっぽく笑っていた。

「我々狩人の戦いは何かと相手の背後を取ることが多くてね。一度背後に回られれば、振り向いて追撃しようと思うのは当たり前。であればその振り向いた後の背後へ動けるよう、再び返す受け身を取ればいい。それだけで相手の視界からは消え去ることができる」

ワルドはハツとした。ジェヴオーダンは帽子を回しながらさらに続ける。

「狩人の戦いというのはこういうものなのです、子爵。視野外からの一撃、意識しない方法での攻撃、相手の攻撃を誘発させるミスディレクション……様々な手段を講じて相手の命を奪います。それらは騎士道精神などを重んじる貴族からすれば、暗く、卑怯で、許されざる戦いというもの。伝説の使い魔と言いましたか……このような戦い方をするものが、そんなものであるはずがありませんよ」

そしてジェヴオーダンは、ワルドの頭に帽子を戻した。傾いた帽子が、素っ頓狂な表情のワルドの顔を半分隠す。

「戯れをお許しください。卑しい男なのです、私は」

「……………ふ、はは。そうか、そういうことか」

ようやく合点が行ったワルドは、帽子を直しながら立ち上がった。

「正面から戦えば勝つことはできない。そう踏んでこんなことをしたわけか？」

「御察しの通りです、子爵。まあそれに、そんな下賤な技の1つで子爵と手合わせとするのもどうかと思ひまして」

「ん？」

「私は武器を抜いていない。手合わせは、なかったのです。それでよろしいかと」

ワルドはルイズを見た。心配そうにこちらを見るルイズに、いいところを見せるつもりだったが。ジェヴオーダンは負ける気はなく、かといって勝つつもりもなく、自分の貴族としての名誉すら傷つける気はないと、そういうことのようにだ。

「ふふふ、まあいいだろう。これほどまでに1本取られると、帰って清々しいな」

「ご無礼を失礼しました」

「いいんだ、だが君の実力は知れた。正面を切って戦えば僕が勝つというのであれば、まあそれでいいだろう。手合わせは、またの機会としようじゃないか」

ワルドは笑いながらルイズの方へ歩いて行き、「行こう」と促した。

ルイズは1度心配そうにジエヴオーダンを見たが、そのままワルドの手に促され歩いて行った。

二人の姿が見えなくなってから、羽帽子をかすめた手をコキコキと鳴らした。

そして、「奴の背骨を見てやるのはまたの機会にしよう」と、誰にも聞こえないよう小さな声で呟いた。

その日の夜。ジエヴオーダンは2階で、月明かりを頼りに散弾銃を解体して掃除していた。

下の階ではギーシユたちが、酒を飲んで騒ぎまくっている。明日はいよいよアルビオンへ渡る日。なんでも明日、2つの月が重なる夜が、アルビオンがもつともラ・ロシエールに近づくと言ったことだった。

見上げた空、赤い月の後ろに青い月が隠れ、1つだけに見える赤い月がキラキラと輝いている。

そうでないとわかっていても、ジエヴオーダンにはこの光景が不吉なものに思えてならない。思い返す、ヤーナムの月。これでもし赤ん坊の声など聞こえてこようものなら発狂ものである。

そんなわけでそわそわと落ち着かないジエヴオーダンは、いつでも戦えるようにと散弾銃の調整を始めたのだった。

水銀弾がもう残り少ないな。ストックを確認しそんなことを思っている、後ろから声がかけられ、驚いて思わずデルフリンガーを抜いた。

「ひゃっ！ ちよ、ちよつとジエヴオーダン!？」

「ああ、すまん」

本当にとつきの反応だったため、素直にルイズに謝罪すると、それはそれで驚いた顔をされてしまった。

「……驚いたからっていきなり主人に剣を向けないで」

「ああ……いや、すまん」

「まあ別にいいわ。ねえそれより、聞きたいことがあるんだけど」

ルイズは散弾銃を組み立てるジエヴオーダンの隣にきて、しゃがみ

こんだ。

「あんた、ワルドと正面切つて戦つたら勝てないって、嘘でしょう」
「あなたも驚いて、ルイズを見る。リアクションの大きさに、ルイズも驚いて顔を見合わせる。」

「だって私、あんたがギーシユと決闘してるところも、フーケと戦つてるところも見てるわけだしそりゃあわかるわよ……なんであんな嘘ついたのよ」

「そのことを、ワルドに言ったか」

「言わないわ。言うわけないわよ」

「ほっと胸をなでおろす。そんなさまを、ルイズがじとつと見つめた。」

「子爵を信用していないのね」

「あまりな」

「どうしてよ」

「どう答えるべきか困る。まさか正直に『味方に内通者がいるかもしれないからだ』とは言えない。」

「貴族の顔を立てようなんて、あんたが考えるはずないわ。本当のことを教えて」

「それは……」

「何か言い訳をしようとしたその時、異様な気配を感じて振り返る。月明かりが巨大な何かに遮られ、その輪郭が影となって現れた。」

「それは、巨大な岩でできたゴーレムだった。そのゴーレムの肩に、誰かが座っている。その姿を確認したジェヴォーダンの目が、ぎらりと見開かれた。」

『「土くれ」 え……っ!』

「あら、覚えててくれたのね。感激だわ」

「フーケ!? あなた、牢屋に入ってたんじゃないあ……」

「遅れてルイズが、驚いた声をあげた。ジェヴォーダンはデルフリンガーに手をかける。」

「親切な人がいてね、私みたいな美人はもつと世の中の役に立たなきやいけないと言って出してくれたのよ」

嘯くフーケの隣には、黒マントを着た男が立っている。白い仮面で顔は確認できず、だんまりを決め込んでいた。

「今日はねえ、素敵なバカンスをありがとうって、お礼を言いに……」
言いかけたフーケが身を翻す。厳密には、隣のマントの男に引っ張られて。フーケの頭があつた場所に、ギザ歯の投げナイフが突き刺さった。

「ぐ、このお……い……」

フーケの目が釣り上がる。巨大ゴーレムが拳をうならせ、ベランダの手すりを粉々に破壊した。硬い岩でできたベランダにもかかわらず。ゴーレムは、以前にもまして攻撃力をあげているようだ。

「ここらは岩しかないからね。土がないからって、安心しちやダメよ！」

「退くぞー！」

分が悪い。ジエヴォーダンはずいぶん手を掴み、部屋を抜けて一気に階段を駆け下りた。

降りた先の一階もまたすでに戦場と化していた。玄関から現れた傭兵の集団が、一階で飲んでいたワルドたちを襲ったようだ。

ギーシユ、キュルケ、ワルド、タバサが魔法で応戦しているが、いくら魔法があるとはいえ多勢に無勢、苦戦しているようだ。

キュルケたちはテーブルの脚を折って倒し、盾にして傭兵たちと応戦していた。歴戦の傭兵たちはメイジとの戦いに慣れているようで、キュルケたちの魔法の射程外から矢を射かけていた。

暗闇を背にしているのもあり、地の利は向こうにある。魔法を唱えようと立ち上がれば、矢が雨のように飛んでくるだろう。

ジエヴォーダンは低い姿勢でキュルケたちと合流した。

「参ったね」

ワルドの言葉にジエヴォーダンが頷く。

「先日の貴族派の連中でしょう。どうやらここで我々を袋にするつもりだよ」

「貴族派？ こないだ襲ってきてたの、あれ貴族派の連中だったの？」

驚くルイズを横に、キュルケが杖をいじりながら呟く。

「やつらはこつちが魔法を使う精神力が切れたところで、一斉に突撃してくるでしょうね。どうするの?」

「その時は、僕のゴーレムでふせいでやる」

ギーシュが青ざめながらバラの造花を握りしめる。キュルケはため息をついた。

「ギーシュ、あなたの『ワルキューレ』じゃあ、一個小隊くらいが関の山よ。相手は手練れの傭兵たちよ?」

「やってみなくちゃわからない!」

「あたしは戦のことならあなたよりちよつと専門家なの」

「ぼくはグラモン元帥の息子だぞ、卑しい傭兵ごときに遅れをとるわけがない」

折れないギーシュにキュルケは呆れて諦め、ギーシュは立ち上がるうとする。ワルドがシャツの裾を引っ張ってそれを制すると、全員の顔をぐるりと見渡しながら言った。

「いいか諸君。このような任務は、半数が目的地に到達すれば成功とされている」

それを聞いたタバサが広げていた本を閉じ、ワルドを見た。自分、キュルケ、ギーシュと杖で指し、「囀」と呟く。

そして、ワルドとジェヴオーダン、青ざめるルイズを指して「棧橋へ」と呟いた。

「時間は?」

「今すぐ」

ワルドはタバサに確認を取り、すぐに動き出した。

「行くぞ!」

「え? でも! そんな!」

ルイズが信じられないという声をあげる。

「今からここで彼女たちが敵をひきつけてくれる。派手に暴れて目立ってもらうんだ。その間に僕は裏口から棧橋へと向かう、それだけだ」

「でも、みんなを置いていくなんて！」

ルイズがキュルケたちを見る。キュルケはいつものように赤髪をかきあげ、つまらなそうに唇を尖らせた。

「ま、しかたないかな。あたしたちいきなり押しかけちゃったし、あなたたちがなんでアルビオンに行くのかも知らないものね」

「ううむ、ここで死ぬのかな。死んだら、姫殿下とモンモランシーに会えなくなってしまうな……」

「行つて」

タバサが呟く。ジエヴオーダンは頷き、懐から自分のメモ帳を取り出してタバサに手渡した。タバサは頷いて、それを受け取った。

「行くぞ、ルイズ」

「……っ！」

ジエヴオーダんに促され、ルイズもその場を離れる。ジエヴオーダんたちは姿勢を低く保ち、厨房の方にある通用口へと向かった。

キュルケたちが暴れ始めたころ、3人は棧橋へ向けて走った。建物の隙間を抜け、階段を登って行く。

長い階段を抜けると、丘の上に出た。山ほどもある樹が四方八方に枝を伸ばしている。どうやら『棧橋』はこの上にあるようで、上空には『船』が浮いているのが見えた。

「これは驚いた……」

「なに、あんたの宇宙には棧橋も船もないの？」

「どちらもあるのは海の上だ」

「海に浮かぶ船もあるし、空に浮かぶ船もあるわ」

ルイズは事も無げに言う。一行はそのまま樹の根本に駆け寄る。目当ての階段を見つけるとそのまま駆け上り始めた。ボロボロの階段の隙間、足元の闇夜にラ・ロシエールの街明かりが見える。

階段を駆け上がる最中だった。ジエヴオーダンは踊り場で突然立ち止まり、振り返った。ルイズが気づいて振り返る。

「ジエヴオーダン？」

追いかけて来た黒い影がさつと翻る。すかさず、発砲音。散弾が影

を捉え、男が地に落ちた。

先ほどフーケの隣に立っていた、黒マントのメイジだった。倒れたメイジの白い仮面が、カタンと音を立てて落ちる。その遺体が、煙のように消えてしまった。

「これは……？」

消えた遺体を確認するが、やはりマントと仮面だけが落ちていて。その体はどこにもなかった。

「これは『偏在』？へえ、こいつどうやら相当な『風』の使い手だな」
それを見ていたのだろう、デルフリンガーがカチカチと鏢を鳴らした。

「知っているのか、デルフ」

「ああ、風を使って作るゴーレムみたいなもの、有り体に言えば分身だよな。実体はあるけど幻みたいなものだ」

「よく知っているな、インテリジェンスソード君。だが、今は口を閉じていてくれ。偏在が相手となれば1人とは限らない、今は少しでも音を立てず、身をひそめるんだ」

ワルドが低い声で言う。警戒心を強めているのだろう、眼光にはむき出しの殺意が込められていた。

「行こう、棧橋はもうすぐだ」

階段を駆け上った先、1本の枝に沿って、一艘の船が空中に停泊していた。舷側からは羽が突き出し、上からのびたロープで枝に吊るさされている。ジェヴォーダンたちが乗る枝からはタラップが甲板に伸びていた。

ワルドたちが船上に現れると、甲板で寝込んでいた船員が慌てて起き上がる。

こちらを止めようとした船員にワルドは自分たちは貴族だと告げ、船長を呼ぶよう言いつける。ほどなくして、寝ぼけ眼の初老の男が、胡散臭げに現れた。

「これはこれは貴族の旦那。して、当船へいったいどういった御用向きでっ？」

「嬢王陛下の魔法衛士隊隊長、ワルド子爵だ。アルビオンへ、今すぐ出港してもらいたい」

「無茶を！」

「勅命だ。王室に逆らうつもりか？」

「あなたがたが何しにアルビオンに行くのかこっちは知ったこっちゃありませんが、朝にならないと出港は無理ですよ！」

「どうしてだ？」

「アルビオンがもつともラ・ロシエールに近づくのは朝です！ その前に出港したんでは、風石が足りませんや！ 子爵様、当船が積んだ風石は、アルビオンへの最短距離分しかありません。それ以上積んだら足が出ちまいますから。なので、今は出港できません。途中で落っこちちまいます」

だがワルドは、一步も引かず淡々と言った。

「風石が足りぬ分は、僕が補う。僕は『風』のスクウエアだ」

船長と船員は顔を見合わせる。船長がワルドの方を向いて頷いた。

「ならば結構ですが、料金ははずんでもらいますよ」

「積荷はなんだ」

「硫黄で。アルビオンでは今や黄金並みの値段がつきますんで」

「その運賃と同額を出そう」

船長は卑しく笑いを浮かべ頷いた。商談が成立したので、船長は矢継ぎ早に命令を下した。

「出港だ！ もやいを放て！ 帆を打て！」

ぶつぶつと文句を言いながらも、船員達は船長の命令に従い、手際よく出港の準備を進める。

戒めが解かれた船は一瞬空中に沈んだが、発動した『風石』の力で宙に浮かぶ。

帆と羽が風を受け、ぶわつと張りつめ船が動き出した。

「アルビオンにはいつ着く？」

「明日の昼過ぎには、スカボローの港に到着しまさあ」

ワルドの問いに船長が答える。

ジェヴォーダンは舷側から地面を見た。棧橋の隙間から見えるラ・

ロシエールの街明かりが、どんどん遠ざかって行く。

あの中に、キュルケたちが残った宿屋の明かりもあるはずだろう。ジエヴオーダンは奥歯を噛み締めた。

「ジエヴオーダン？ その、大丈夫？」

「……………」

ルイズが心配そうにこちらを覗き込むので、ジエヴオーダンはようやく、随分表情に力が入っていたことに気がついた。ずっと恐ろしい顔をしていたのだろう。

バツが悪くなつたジエヴオーダンは、とりあえず話題をそらすことにした。

「……………あいつらは、キュルケたちは逃げ果せただろうか」

「わかんない。大丈夫だって思いたいけど……………」

「キュルケの方は力がある、タバサは賢く、ギーシユは指令に従って行動できる。おそらく上手くやれば、脱出くらいはできているだろうが……………『土くれ』、あいつは……………」

ジエヴオーダンがもつとも気にしていたのは、そこだった。『土くれ』のフーケ、かつて狩り取ったはずの獲物。それがのうのうと自分の前に現れた。

己の狩りを邪魔されたようで、ジエヴオーダンは怒りを隠せない。ルイズは再び硬くなつたジエヴオーダンの表情を見て、冷や汗を流した。

そんな二人の元へ、ワルドが寄ってきた。

「船長の話では、ニューカッスル付近に潜伏していた王軍は、攻囲されて苦戦中のようにだ」

ルイズがハツとして尋ねる。

「ウエールズ皇太子は？」

「わからん。生きてはいるだろうが……………」

「どうせ、港町は全て反乱軍に押さえられているんでしょ」

「そうだね」

「どうやって、王党派と連絡を取ればいいのかしら」

「陣中突破しかあるまいな。スカボローから、ニューカッスルまでは

馬で一日だ」

「反乱軍の間をすり抜けて？」

「それしかないだろう。まあ、反乱軍も公然とトリスティンの貴族に手出しはできんだろう。隙を見て包囲線を突破し、ニューカツスルの陣へ向かう、ただ、夜の闇には気をつけなければならぬがな」

ルイズは緊張した顔で頷いた。

「そういえばワルド、あなたのグリフォンはどうしたの？」

ワルドは微笑んで口笛を吹いた。下からグリフォンの羽音が聞こえてきて、そのまま甲板に着陸して船員達を驚かせた。

「ふむ、グリフォンでアルビオンへは行けないのか？」

「竜じやあるまいし、そんなに長い距離は飛べないわ」

ジエヴオーダーの解いにルイズが答えた。

「……使い魔くん、礼を言わねばならぬな。階段での襲撃にいち早く気づいたのは君だった」

「俺はやるべきことをしているだけです。それよりも『偏在』、あれは警戒すべき相手です。フーケの側にもいた、貴族派に付いていることは間違いない。襲撃の傭兵のこともあります、今後は子爵も警戒を」

「ああ……そうさせてもらう。到着は朝だ、ゆっくり休んでいてくれ」

ワルドは振り向いて帽子を直す。そして悟られぬよう、小さく舌打ちをした。

14：白の国

船員たちの声と朝日が、船の朝を告げる。見えるのは青い空、白い雲ばかり。どこまでも高い空が、幻想的な景色を作り上げている。

「アルビオンが見えたぞー!」

鐘楼に立った見張りの声が響き渡る。ジェヴォーダンは、舷側から下の景色を覗き見た。が、広がるのは白い雲ばかりで、どこにも陸地などは見えない。

眠っていたルイズが起き上がり、寝ぼけ眼をこすって大あくびをした。

「どこにも見えないようだが……」

「あつちよ」

ルイズが空中を指差すので、ジェヴォーダンはまさかと空を仰ぐ。

雲の切れ間から、大地が覗いている。山岳がそびえ、川が流れ、滝となった飛沫が落ちていく。ジェヴォーダンは息を飲み、しばしその光景に目を奪われた。

「驚いた?」

「ああ……この宇宙に来てからというものの、驚かされっぱなしだった
が……」

「浮遊大陸アルビオン。ああやって空中を浮かんで、主に大洋の上をさまよっているわ。でも月に何度か、ハルケギニアの上によつてくる。大きさはトリステインの国土ほどもあるわ。通称は『白の国』」

大河から溢れた水は滝となり、空に落ちる。その飛沫が白い霧となり、大陸の下半分を覆い隠していた。霧は雲となり、ハルケギニアに雨を降らすのだという。

「素晴らしいな……」

「綺麗でしょ」

二人は、しばし壮大な風景に見とれていた。

そのとき、鐘楼の見張りの大声が響き渡った。

「右舷上方! 雲中より船が接近してきます!」

言われた通りの方を見ると、船が一隻近づいてくる。ジェヴォーダ

ンたちが乗る船よりも一回りも大きく、舷側からは大砲まで突き出している。どうやら、強力な船のようだ。

「いやだわ。反乱軍……貴族派の軍艦かしら」

黒くタールの塗られた船体は、まさに戦闘用の船。ジエヴオーダンは目を凝らし、船の様子を伺った。

「いや、違うだろうな。あの船は旗を掲げていない」

「え？　じゃあ、あれは……」

「あらかた海賊か。いや、今は空賊というべきか？」

そんなことを話していると、船体がガクンと大きく揺れ、旋回を始めた。よろけたルイズをジエヴオーダンがかばう。

船は軍艦から逃れようとしているようだが、すでに遅い。軍艦はすでに並走しはじめており、速度もあちらが上。

ドゴン！　と重たい音が響き、脅しの砲弾が船の進路めがけて消えていった。

黒船のマストに、四色の旗流信号が登る。おそらく、停船命令だろう。

「じえ、ジエヴオーダン……」

「下がっている、ルイズ」

怯えるルイズを自分の影に隠し、ジエヴオーダンは相手の様子を伺う。軍艦から、メガホンを持った男が大声で怒鳴るのが見えた。

「空賊だ！　抵抗するな！」

舷側には弓や銃を持った男たちが並び、狙いを定めている。やがてロープが放たれ、武器を持った男たちが伝ってくる。その数、およそ数十人。

ジエヴオーダンはじつくりと相手を見やる。どこに隙があるか、攻撃のタイミングがあるかどうかを見定めていく。しかし、いつのまにか背後に現れたワルドに、肩を叩かれた。

「やめておけ。敵は武器を持った水兵だけじゃない。あれだけの門数の大砲が、こちらに狙いをつけているんだぞ。おまけに、向こうにはメイジがいるかもしれない」

前甲板に繋ぎとめられていたワルドのグリフォンが、乗り移ろうと

する空賊たちに驚いて喚き始める。直後、グリフォンの頭が青白い雲で覆われる。たちまちグリフォンは甲板に倒れ、寝息を立て始めた。「眠りの雲……確実にメイジがいるようだな」

次々と甲板に空賊たちが降り立ってくる。派手な格好の1人の空賊が、ぐるりとあたりを見渡した。

汗とグリースで汚れて真っ黒になったシャツの胸をはだけ、真っ赤に日焼けしたたくましい胸をのぞかせている。ぼさぼさの黒い長髪を赤い布でまとめ、無精髭の生え散らかした顔には、左目を隠す眼帯が巻かれていた。いかにも、空賊のボスといった風体だ。

「船長はどこでえ」

「わたしだ」

荒っぽい声に、精一杯の威厳を保とうと努力しながら船長が手をあげる。頭は大股で船長に近づき、青ざめた顔をぴたぴたと曲剣で叩いた。

「船の名前と、積荷は？」

「トリステインの『マリー・ガラント』号。積荷は硫黄だ」

空賊たちの間からため息が漏れる。頭の男はにやつと笑い、船長の帽子を取り上げて自分の頭に寄せた。

「船ごと全部買った。料金はてめえらの命だ」

船長が屈辱で震えるが、頭はそれを気にした様子もなく、やがて甲板に佇むワルドとルイズを見つけた。

「おや、貴族の客まで乗せてるのか」

ルイズに近づき、顎を手で持ち上げる。

「こりゃあ別嬪だ。お前、俺の船で皿洗いをやらねえか？」

空賊たちが下卑た笑い声をあげる。ルイズはその手をはねのけ、屈辱に怒りを燃やして男を睨みつけた。

「下がりなさい、下郎」

「驚いた！ 下郎ときたもんだ！」

男が大声で笑う。ルイズはさらに言い返そうとしたのだが、その前にジェヴォーダンが手で遮った。

「ジェヴォーダン？」

「……………」

ジエヴオーダンは、無言で首を振る。ルイズは悔しさを噛み締め、それでもジエヴオーダんに促される通りに押し黙った。

「ほう、お前は船員でも貴族でもないようだな」

頭は今度はジエヴオーダンを見やる。トリコーン帽子と防疫マスクでほとんど見えない顔の、その目をぎらりの覗き込む。

ジエヴオーダンは確信した。この男……

「はっ、すげえ銃だな。不恰好だがなかなかよくできてるじゃねえか。気に入った、こいつは俺がもらっておくぜ」

ジエヴオーダンの獣狩りの散弾銃を強引に引き抜き、まじまじと眺める頭の男。ルイズはさらに怒りを浮かべるが、当のジエヴオーダンは眉ひとつ動かさない。

「……だんまりか？へっ、まあいい。てめえら、こいつらも運びな。身代金がたんまり貰えるだろうぜ」

空賊に捕らえられ、ジエヴオーダンたちは船倉に閉じ込められた。『マリー・ガラント』号の乗組員たちは、自分たちのものだった船の曳航を無理やり手伝わされているようだ。

ジエヴオーダンは剣を取り上げられ、ワルドとルイズは杖を取り上げられた。

杖を取り上げられたメイジほど無力なものもない。鍵をかけられただけでもう手足も出ず、大人しくしているほかなかった。

周囲には、酒樽やら穀物の詰まった袋やら、火薬樽が雑然と置かれている。重たい砲弾も、部屋の隅にうずたかく積まれている。ワルドはそんな積荷を興味深そうに見て回っていた。

ルイズは、先ほどから黙ったままのジエヴオーダンを見て、申し訳なさそうに俯いた。

「ジエヴオーダン。その、私、さっき」

「気にすることではない」

「でも……」

ルイズは続く言葉が出て来ず、再び俯いてしまう。ジエヴオーダン

はといえば、何か考え込んだ様子で、口を開こうとしない。
どうしようか考え込んでいると、ワルドが近づいてきた。

「ルイズ、大丈夫かい？」

「ええ、私は大丈夫」

「そうか……？ 使い魔くん、君の方が様子がおかしいんじゃないか？」

「……子爵、1つ提案が」

すると、それまで押し黙っていたジエヴオーダンが口を開いた。扉のほうにいる見張りに気を配りながら、姿勢を低くして声を細める。

「……俺はタイミングを見て、この部屋を脱出します」

「どこに脱出するつもりだね？ ここは空の上だよ」

「何も船から脱出するわけではありません。あの空賊の頭、すこし気になることがあります。それを確かめます。そのついで、2人の杖も回収できればいい」

「そんなこと言ってもあんた、武器の1つもないじゃない！」

「子爵、あの宿屋で話した通りです。俺たちの戦いは、相手の虚をつくもの。素手でもできることはあります。ただし脱出するのは俺だけにさせてほしい、これも少し、考えのあることです」

「……」

ワルドは少しの間考えたが、やがて小さく頷いた。

「ジエヴオーダン……」

「ルイズ」

心配そうな様子のルイズ。突然ジエヴオーダンは、そのルイズの手をとると、マスクをおろしてその甲に口づけをした。

「……!? な！ な……!?」

あまりに突然のことにルイズは目を白黒させ、続いて顔を真っ赤にさせる。しかしジエヴオーダンは当然のことというように拝謁の姿勢をとり、ルイズに頭を垂れた。

「我が血に賭けて誓う。無事に戻る、信じていてくれ」

「……」

彼なりにこちらを案じて、こうしてくれたのだ。ルイズはゆっくり

時間をかけて理解できた。ルイズは、「わかった」と呟いて、頷いた。ジェヴオーダンはワルドに「ルイズを頼みます」と一声をかけ、懐から、小さな青い瓶を取り出した。

ルイズはそれに見覚えがあった。確か、神経を麻痺させる秘薬とか何とかだったはずだ。

そう思ったとき、扉が開いた。太った男がスプの入った皿を持って入ってくるのと、ジェヴオーダンが小瓶の中身を呷るのはほぼ同時だった。

「飯だ。ただし、質問に答えてからだ」

男は腰掛けたままのルイズの前に立ちはだかる。

「お前たち、アルビオンになんの用なんだ？」

「……………」

ルイズは答えない。ただぽかんと口を開け、虚空を眺めていた。

「…………？ おい、聞いてんのか？」

「旅行だ」

返す質問にワルドが代わりに答える。ルイズははっとして、それから皿を持った男の顔を睨んだ。

「トリステイン貴族が、今時のアルビオンに旅行？ 一体何を見物するつもりだい？」

「そんなこと、あなたに言う必要はないわ」

「たった今ぼけつとしてたくせに、随分強がるじゃねえか」

「そ、それは……………」

ルイズは眉をひそめる。だってそりゃあ、呆然もする。突然隣にいた使い魔の姿が見えなくなったのだから。

「へっ、まあ好きにしろよ」

男は皿を置き、部屋を出て言った。しばらくしてルイズは、ようやく信じられないという顔でワルドと目を合わせた。

「ワルド、ジェヴオーダンが……………」

「わかっている、何かしたのだろう。僕にも彼の気配がうつすらとしか見えなくなっていた、あれは一体……………」

ワルドも驚いた様子で、それから2人は一緒に扉の方を見た。まさ

か2人とも、ジェヴォーダンが見張りの男と一緒に部屋を出て行ったとは、夢にも思っていないかった。

さて、飛び出した方がいいがどうしたものか。

青い秘薬の効果も切れ、ジェヴォーダンは物陰で息を殺していた。目先の通路では、未だ空賊と思わしき男たちが行き来している。

ジェヴォーダンは目を細めた。その空賊たち、1人1人の気配をじっくりと感じ取る。その体に、細い、青白い光が見えないかどうか確認する。

結果は先ほどの頭の男と同じ通り。月光の導きは、見えない。彼らは殺すべき敵ではないという判断だ。

そんな風になっていると、2人の空賊がばたばたと走ってきた。

「とにかく、皇太子に……」

ジェヴォーダンはそれを聴き漏らさなかった。その空賊が走っていくのを確認し、その背後を音もなくついていく。細い通路を通り、階段を登り、やがて2人の空賊は1つの部屋に入って行った。

おそらくは、船長室だろう。ジェヴォーダンは躊躇なく、その扉を開け放った。

「な、なんだお前!」

突然の来客に、2人の空賊と、ダイナーテーブルの上座に腰掛ける海賊の頭は驚きの声を上げた。テーブルの上には、先ほどジェヴォーダンから奪った散弾銃や剣、杖が。

空賊の頭の傍には大きな水晶のついた杖が。こんななりで、どうやらメイジらしい。ジェヴォーダンの予想は確信に変わった。

「お前、どうやって出やがった。まあいい、わざわざ乗り込んでくるとはとんだ間抜けだったようだな」

空賊が杖を構える。ジェヴォーダンの瞳が、ギラリと光った。

それからしばらくして。船倉の2人は、することもなく座ってい

た。

ワルドは壁にもたれ、何か考え込んでいる様子。ルイズは、出て行ったジエヴオーダンのことで気が気じゃなかった。

その時、再びドアが開かれた。ジエヴオーダンかと思い、ルイズは顔をあげる。が、入ってきたのは痩せすぎた空賊の男だった。2人を見渡し、楽しそうに笑う。

「おめえらは、もしかしてアルビオンの貴族派かい？」

ルイズは答えない。ワルドも黙ったままだ。

「おいおい、だんまりじゃわからねえよ。でも、そうだったら失礼したな。俺たちは貴族派の連中のおかげで商売させてもらってるんだ。王党派に味方しようとする酔狂な連中がいて、そいつらを捕まえる密命を帯びているのさ」

「じゃあこの船はやっぱり、反乱軍の軍艦なのね」

「いやいや、俺達は雇われているわけじゃあねえ、あくまで対等な関係で協力し合っているのさ。で、どうなんだ？ 貴族派なのか？ そうだったらきちんと港まで送ってやるよ」

ルイズはきつと目を尖らせ、真っ向からその空賊を睨みつけた。

「誰が薄汚いアルビオンの貴族派なものですか。バカ言っちゃいけないわ、わたしは王党派への使いよ。まだ、あんた達が勝ったわけじゃないんだから。アルビオンは王国だし、正当なる政府はアルビオンの王室よ。わたしはトリステインを代表してそこに向かう貴族なのだから、つまりは大使ね。だから、大使としての扱いをあんたたちに要求するわ」

まっすぐにそう行つてのけるルイズを見て、空賊は笑った。

「正直なのは確かに美德だが、あんたらただじゃ済まないぞ」

「あんたたちに嘘ついて頭下げるくらいなら、死んだほうがマシよ」

「……頭に報告してくる。その間にゆつくり考えるんだな」

空賊は去っていく。ルイズはふうーっと息をつき、それからワルドが肩を叩いた。

「いいぞルイズ、さすがは僕の花嫁だ」

「……最後の最後まで、わたしは諦めないわ。地面に叩きつけられる

瞬間まで、ロープが伸びると信じるわ」

それでもルイズは、複雑な思いだった。果たして、これで良かったのだろうか。

そういえば、あいつなんでジェヴオーダンがいないことに何も言わなかったんだろう。そんなことを考えていると、再び扉が開く、先ほどの瘦せすぎた空賊が、険しい顔で言った。

「出る、頭がお呼びだ」

狭い通路を通り、細い階段を登る。連れて行かれた先は、船長室だった。

豪華なダイナーテーブルの上座、先ほどの派手な格好の空賊が腰掛けている。その手に握られた水晶のついた杖を見て、ルイズは顔をしかめた。

空賊の男たちも、頭の男も、何も言わない。ただじつくりと、ルイズたちを見つめている。見定められているのだろうか。

「……大使としての扱いを要求するわ」

ルイズは、何かを言われる前にと先回りしてそう繰り返した。

「そうじゃなかったら、一言だってあんたたちなんか口をきくもんですか」

頭はそれを聞き、ふむうと声を漏らした。

「王党派と言ったな？」

「ええ、言ったわ」

「何をしにいく？」

「あんたらに言うことじゃないわ」

頭はそれを見て、いつそう鋭い目でルイズを睨んだ。

「貴族派の優勢は誰が見ても明らかだ。王党派など、明日には消えてしまう。それでもお前たちは王党派につく大使だと。そう言い切るのだな？」

「そうよ。何度も言わせないで。私たちにはやるべきことがあるの、たとえどんなに不利な状況でも、決して心折れず、挑み続けてやるわ」
「……そうか、よかった。ジェヴオーダン、どうやら本当に君の言う通

りなんだな」

部屋の影から、すつと長身の男が出てくる。ルイズはそれが自分の使い魔の姿であるとわかって目を疑った。

「信じていただけたでしょうか。トリスティンの貴族は気ばかり強くてどうしようもない連中ですが、彼女はこれだけ芯もある人物なのですよ」

「ああ、どこぞの国の恥知らずと同じように思うなど、失礼というものだな」

頭はそう言つて、大笑いしながら立ち上がる。ルイズは呆然とした様子で、2人を見ていた。

「じゃ、ジェヴォーダン？ 何、これ？ どういうこと？」

「すまんルイズ。騙して悪いが、どうしても確かめたいことがあつてこいつを借りたぞ」

ジェヴォーダンがそう言つて、手に持った小さな指輪を掲げた。ルイズはハツと息を飲み、自分の手をまさぐった。

「そつ、それ！ 姫殿下の、『水のルビー』！ いつの間に！」

「殿下、1つ忘れておりました。確かに彼女は芯のある貴族ですが、特に扱いやすい主人でもあるのですよ」

「わつははは！ 使い魔が主人に言うことではないな！ 君、ひどい目にあわされるんじゃないのかね？」

ルイズは自分の顔に血が登っていくのを感じた。あいつ、部屋を出る前に妙なことをしやがった。いきなり手の甲にキスをして……あの時だ！

怒りがマグマのように込み上げてきていたが、それと同時に、とても気になることがあった。

「……『殿下』？」

ジェヴォーダンは、確かにそう言った。海賊の頭が「おつと」と漏らす。と同時に、周りに控えた空賊たちがニヤニヤ笑いをおさめ、一斉に直立した。

「失礼した。貴族に名乗らせるなら、こちらから名乗らなくてはな」

頭は縮れた黒髪のカツラをはいだ。眼帯を外し、髭ををびりつとは

がす。あつというまに、凜々しい金髪の若者が現れた。

「私はアルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令官……本国艦隊といつても、すでに本艦『イーグル』号しか存在しない、無力な艦隊だがね。まあ、その肩書きよりこちらのほうが通りがいいだろう」

そして、若者は居住まいをただし、威風堂々と言い切った。

「アルビオン王国皇太子、ウエールズ・テューダーだ」

ルイズは口をあめぐりとあけ、ワルドは興味深そうに皇太子を見つめた。空賊の頭だと思っていた人物が、いきなり若き皇太子に様変わりしてしまっただから当然だ。

ウエールズはにっこりと魅力的な笑みを浮かべると、ルイズたちに席を進めた。

「アルビオン王国へようこそ、大使殿。さて、御用の向きをうかがおうか」

あまりのことに、ルイズはぼうっと呆けて立ち尽くした。

「その顔は、どうして空賊風情に身を“やつし”ているのだ、といった顔だね。いや、金持ちの反乱軍には続々と補給物資が送り込まれる。敵の補給路を断つのは戦の基本、しかしながら堂々と王軍の軍艦旗を掲げたのではあつというまに反乱軍の船に囲まれてしまう。空賊を装うのもいたしかたなかったのだが……」

そう言つて、ウエールズはジェヴオーダンを見る。

「どうやら、彼には通用しなかったようだ。私の変装をすっかり見破られていたようだ」

「じゃ、ジェヴオーダン！ そうなの!?!」

「……確証はなかった。だからこそ確かめる必要があつたのさ」

「彼は、もし本当に僕たちがただの空賊なら武器を奪い、僕を仕留めるつもりでいたらしい。確かにこういう集団は、頭を押さえられればどうにも動けなくなる。しかし、一瞬でそれだけの判断をし、実際にここまでたどり着いてしまうなんて……恐れ入ったよ」

ルイズは思わず気を失いそうになるのを必死で抑えた。いったいどこまで周到に考えていたのだろう、この男は。まして、その一環で自分まで騙されるとは。

「いや、大使殿には誠に失礼をした。きみたちが王党派かどうか、確かめる必要があつてね。外国に我々の味方の貴族がいるなどは夢にも思わなかつた。だが確かめるよりも早く、彼が来て証明をしてくれたのでなおさら助かつたというものだ」

ルイズは心の準備が一切できておらず、まして自分の使い魔がとんでもない働きをしたという事実もなかなか理解できず、口をぽかんと開くばかりだつた。その様子を見かねて、ワルドが優雅に頭を下げて言った。

「アンリエッタ姫殿下より、密書を言付かつて参りました」

「ふむ、姫殿下とな。きみは？」

「トリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵」

そしてワルドは、ルイズたちを指して2人を紹介した。

「そしてこちらが姫殿下より大使の大任を仰せつかつた、ラ・ヴァリエール嬢とその使い魔の青年でございます、殿下」

「なるほど！ 君の様に立派な貴族が私の親衛隊にあと十人ばかりいたら、このような惨めな今日は迎えていなかっただろうに！ では、その密書とやらは？」

それを聞いて、ルイズがようやく我に帰る。慌てて胸のポケットから、アンリエッタの手紙を取り出した。

恭しくウエールズに近づいたが、途中で立ち止まり、少しためらうように口を開いた。

「あ、あの……失礼ですが、本当に、皇太子さま？」

ウエールズはそれを聞いて大笑いした。

「まあ、さつきまでの顔を見れば、無理もない。僕はウエールズだよ、真正正銘、皇太子さ。どれ、証拠をお見せしよう。ジェヴォーダン君、それをかしておくれ」

水のルビーを受け取ると、自分の薬指に光る指輪に近づけた。2つの宝石は共鳴しあい、虹色の光を振りまいた。

「この指輪は、アルビオン王家に伝わる『風のルビー』だ。きみが持っていたのは、アンリエッタが嵌めていた『水のルビー』。水と風は、虹を作る。王家の間にかかる虹さ」

「……大変、失礼をいたしました」

ルイズは一礼し、手紙をウエルズに手渡した。

ウエルズは、愛おしそうに目を細め、その手紙を見つめる。花押に軽く接吻すると、それから慎重に封を開き、中の便箋へ目を落とした。

しばらくの間、真剣な眼差しで手紙を読んでいたが、ふっと顔をあげ、どこか遠くを見るように呟いた。

「姫は、結婚するの？ ああ愛しいアンリエッタが。私の可愛い……従妹は」

ワルドは無言で頷いた。再びウエルズは手紙に視線を落とし……やがて最後の一行を読むと、微笑んだ。

「了解した。姫は、あの手紙を返して欲しいとこの私に告げている。何より大切な、姫から貰った手紙だが、姫の望むことだ、私もそれを望もう」

ルイズの顔がぱつと輝いた。

「しかし、今、手元にはない。ニューカッスルの城にあるんだ。姫の手紙を、空賊船に連れてくるわけにはいかぬのでね」

そしてウエルズは、また笑顔を浮かべた。

「多少面倒だが、ニューカッスルまでご足労願いたい」

15：手紙

ジエヴォーダンたちを乗せた軍艦イーグル号は、アルビオンの狭く細い海岸線を雲に隠れるようにして航行する。3時間ほど進んだ頃、大陸から突き出た岬が見えてきた。

岬の突端には、高い城が静かに佇んでいる。荘厳なその姿に、思い出すのはカインの古城。あれがニューカッスルの城だと、ウェールズは説明した。だが、イーグル号は城へは向かわず、大陸の下側にもぐりこむように航路をとる。

「なぜ、下へ？」

ウェールズが城のはるか上空を指差す。遠く離れた岬の突端からは、巨大な船が降下してきている。しかし雲の中を航行してきたイーグル号は、向こうからは雲に隠れて見えていないようだ。

巨大な船だった。ゆうにイーグル号の倍もあるうかという巨船は、いくつもの帆をなびかせて降下してくる。と、唐突にニューカッスルの城へ向けて、並んだ砲門を一齐に発射した。強烈な振動がイーグル号までにも伝わってくる。砲弾は城壁を砕き、城を粉々に打ち砕いていく。

「叛徒どもの、船だ。かつての本国艦隊旗艦、『ロイヤル・ソヴリン』号だ。叛徒どもが手中に収めてからは、『レキシントン』と名を変えている。やつらが初めて我々から勝利をもぎとった戦地の名だ、よほど名誉に感じているらしい。あの忌々しい艦は、空からニューカッスルを封鎖しているのだ。あのように、たまに嫌がらせのように城に大砲をぶっ放していく」

巨大な戦艦は、城の上空、雲の切れ間に悠々と佇んでいる。艦上にはドラゴンが飛び交い、禍々しさも合間つてまるで悪の居城だ。

「備砲は両舷合わせ、108門。おまけに竜騎兵まで積んでいる。あの艦の反乱から、すべてが始まった。因縁の艦さ。さて、我々のフネはあんな化け物を相手にできるわけもないので、雲中を通り、大陸の下からニューカッスルに近く。そこに我々しか知らない秘密の港があるのだ」

雲中を通過して大陸の下へ。頭上に陸地があるため、日が遮られて真つ暗になった。おまけに雲の中であり、視界はほぼゼロ。頭上の陸地に座礁しかねない反乱軍は下には近づかないのだとウェールズは語る。

「地形図を頼りに、測量と魔法の明かりだけで航海することは、王立空軍の航海士にとってはなに、造作もないことなのだが。貴族派、あいつらは所詮、空を知らぬ無粋者さね」

そう言つてウェールズは愉快そうに笑つた。

そうしてしばらく航行すると、頭上に黒々と穴が開いている部分に出た。

「一時停止」

「一時停止、アイ・サー」

掌帆手の命令が復唱される。イーグル号は裏帆を打ち、ぴたりと穴の真下で停船する。

「微速上昇」

「微速上昇、アイ・サー」

ゆるゆるとイーグル号は穴に向かって上昇していく。イーグル号の航海士が乗り込んだマリィ・ガラントが後に続く。

ワルドが頷いた。

「まるで空賊ですな。殿下」

「まさに空賊なのだよ、子爵」

穴に沿つて上昇すると、頭上に明かりが見える。そこに吸い込まれるようにイーグル号は登つていった。

ニューカッスルの隠れ港。そこは、真つ白い発光性のコケに覆われた、巨大な鍾乳洞の中だった。岸壁の上には大勢の人影が見える。イーグル号が鍾乳洞の岸壁に近づくと、一斉にもやいの縄が飛んだ。停泊したイーグル号にかけられたタラップを、ウェールズはルイズたちを促しながら降りる。

すると背の高い年老いたメイジが嬉しそうに近寄つてきた。

「ほほ、これはまた、大した戦果ですな。殿下」

老メイジは現れたマリー・ガラント号を見て顔をほころばせる。

「喜べ、パリー。硫黄だ、硫黄！」

ウェールズが叫ぶと、集まった兵隊からうおーつと歓声が上がった。

「おお！ 硫黄ですと！ 火の秘薬ではござらぬか！ これで我々の名誉も守られるというものですな！」

老メイジは、おいおいと泣き始めた。

「先の陛下よりおつかえして六十年……こんな嬉しい日はありませんぞ、殿下。反乱が起こってからは、苦渋を舐めつぱなしでありましたが、なに、これだけの硫黄があれば……」

にっこりとウェールズは笑った。

「王家の誇りと名誉を叛徒どもに示しつつ、敗北することができらるろう」

「荣誉ある敗北ですな！ この老骨、武者震いがいたしますぞ。してご報告なのですが、叛徒どもは明日の正午に攻城を開始するとの旨、伝えて参りました。まったく、殿下が間に合つてよかつたですわい」
「してみると間一髪とはまさにこのこと！ 戦に間に合わぬは、これ武人の恥だからな！」

心底樂しそうに笑い合うウェールズたち。だが、敗北という言葉を聞いていたルイズは顔を青くした。

敗北とはつまり、死にゆくことであるのに。

しかしウェールズたちは恐怖など露ほども感じさせず、ルイズたちをパリーに紹介している。彼らは、死ぬのが怖くはないのだろうか。「これはこれは大使殿。殿下の侍従を仰せつかっております、パリーでございます。遠路はるばるようこそこのアルビオン大国へいらっしやった。たいしたもてなしはできませんが。今夜はささやかな祝宴が催されます。是非とも出席くださいませ」

城内のウェールズの居室。城の一番高い天守の一角にあるウェールズの居室は、王子の部屋とは思えない質素な部屋だった。

木でできた粗末なベッドに、椅子とテーブルが一組。壁には戦の様

子を描いたタペストリー。

王子は机の引き出しを開き、宝石の散りばめられた小さな箱を取り出した。彼は首からネックレスを外すと、その先についた小さな鍵を小箱の鍵穴に差し込んだ。

開いた箱の内側には、アンリエッタの肖像が描かれていた。

「宝箱でね」

中身は一通の手紙だった。まぎれもなくそれが王女の手紙であるらしい。ウエールズはそれを取り出し、愛おしそうに口付けたあと、開いてゆつくりと読み始めた。何度も何度も、そうやって読み返したのである。手紙はすでにボロボロだった。

読み返すと、ウエールズはその手紙を丁寧にたたみ、再び封筒に納める。その手紙を、ルイズに手渡した。

「これが姫からいただいた手紙だ。このとおり、確かに返却したぞ」「ありがとうございます」

ルイズは深くこうべを垂れ、うやうやしそうにその手紙を受け取った。

「明日の朝、非戦闘員を乗せたイーグル号がここを出港する。それに乗って、トリステインに帰りなさい」

ルイズはしばし手紙をじっと見つめ、やがて決心したように口を開いた。

「あの、殿下……さきほど、荣誉ある敗北とおっしゃっていましたが、王軍に勝ち目はないのですか？」

ルイズは躊躇いがちに問うた。しごくあっさりとうエールズは答える。

「ないよ。我が軍は三百、敵軍は五万。万に一つの可能性もありえない。我々にできることは、はてさて勇敢な死に様を連中に見せつけることだけだ」

ルイズは、悲しそうに俯いた。

「殿下の、討ち死になさる様も、その中には含まれるのですか？」

「当然だ。私は真つ先に死ぬつもりだよ」

明日にでも死ぬと言うのに、皇太子はいささかも取り乱したそぶり

はない。

ルイズは深々と頭を下げた。そして決意のまま、口を開いた。

「殿下……失礼をお許しください。恐れながら、申し上げたいことがございます」

「なんなりと、申してみよ」

「この、ただいまお預かりした手紙の内容、これは……」

「ルイズ」

ジェヴォーダンは思わずルイズの言葉を遮る。それはここにいる全員がわかっていても、決して口にしてはならぬ類のことだ。

だが、ルイズは止まらない。きつと顔を上げると、ウエールズを真っ直ぐ見つめた。

「この任務をわたくしに仰せつけられた際の姫さまのご様子、尋常ではございませんでした。そう、まるで恋人を案じるような……それに、先ほどの小箱の内側には、姫さまの肖像が描かれておりました。手紙に接吻なされた際の殿下の物憂げなお顔といい、もしや、姫さまと、ウエールズ皇太子殿下は……」

そこまでルイズが言ったところで、ウエールズは小さく、微笑んだ。

「きみは、従妹のアンリエッタと、この私が恋仲であったと言いたいのかね？」

「……そう想像いたしました。とんだご無礼をお許しください。してみると、この手紙の内容とやらは……」

ウエールズは額に手を当てて、かすかに悩むような素振りを見せた後、変わらず柔らかく、言った。

「恋文だよ。君が想像しているとおりのものさ」

ジェヴォーダンは、心の中で盛大にため息をついた。ことは自分の予想していた通りだったのだ。

その後ウエールズが語ったことは、ほぼジェヴォーダンの予想と何も相違ない。この手紙の中でアンリエッタは、婚姻の際の誓いでなければならぬ始祖ブリミルへの誓いを語っていること。この手紙が白日の下に晒されれば彼女は重婚の罪を背負うこと。そうなれば、ゲルマニア皇室との婚約は反故になってしまうであろうこと。そしてそ

うなれば……トリスティンは単身で、恐るべき貴族派と戦わねばならなくなる。

「とにかく、姫さまは、殿下と恋仲であらせられたのですね」

「昔の話だ」

冷静なウエルズに反するように、ルイズは熱を持ってウエルズにたたみかけた。

「殿下、亡命なされませ！ トリスティンに亡命なされませ！」

ワルドがよってきて、静かにルイズの肩に手を置いた。しかし、ルイズは止まろうとしない。

「お願いでございます！ 私たちと共にトリスティンへいらしてくださいませ！」

「それはできんよ」

ウエルズは笑いながら言った。

「殿下、これはわたくしの願いではございません！ 姫さまの願いでございます！ 姫さまの手紙には、そう書かれておりませんでしたが？ わたくしは幼きころ。恐れ多くも姫さまのお遊び相手を務めさせていただきました！ 姫さまの気性は大変よく存じております！

あの姫さまが自分の愛した人を見捨てるわけがございません！ おっしゃってくださいいな、殿下！ 姫さまは、たぶん手紙の末尾であなたに亡命をお勧めになっっているはずですよ！

「……そのようなことは、一行も書かれていない」

「殿下……」

ルイズはウエルズに詰め寄る。ウエルズは、苦しそうに答えた。

「私は王族だ。嘘はつかぬ。姫と、私の名誉に誓って言うが、ただの一行たりとも、私に亡命を勧めるような文句は書かれていない」

口ぶりから、ルイズの指摘が当たっていることは明らかだった。しかし、ウエルズとて引かない。

「アンリエッタは王女だ。自分の都合を、国の大事に優先させるわけがない」

ウエルズの意志は、果てしなく硬い。彼はアンリエッタを庇おう

としているのだ。臣下のものに、アンリエッタが情に流された女と思われぬように。

ウエルズは、ルイズの肩に手を置いた。

「きみは、正直な女の子だな、ラ・ヴァリエール嬢。正直で、真つ直ぐで、いい目をしている。忠告しよう、そのように正直では大使は勤まらぬよ。しつかりしなさい」

ウエルズが微笑む。白い歯がこぼれる、魅力的な笑みだった。

「しかしながら、亡国への大使としては適任かもしれぬ。明日に滅ぶ政府は、誰より正直だからね。なぜなら、名誉以外に守るものが他にないのだから」

それからウエルズは、机の上の水盆のようなものについた針を見やった。形から、どうやら時計であるようだった。

「そろそろ、パーティの時間だ。きみたちは、これから我が王国が迎える最後の客だ。是非とも出席してほしい」

ルイズたちは部屋を出る。ワルドは残るようだった。

ジェヴォーダンはふと、ワルドを見やった。ウエルズへと一礼している。引つかかるものを感じながらも、部屋を後にした。

残ったワルドへウエルズが尋ねる。

「まだ、なにか御用がおりかな？ 子爵殿」

「恐れながら、殿下にお願いしたい議がございます」

「なんなりとうかがおう」

ワルドはウエルズに、自分の願いを語って聞かせた。ウエルズはそれを聞いて、にっこりと笑った。

「なんともめでたい話ではないか。喜んでそのお役目を引き受けよう」

パーティは、城のホールで行われた。簡易の玉座にはアルビオンの王、年老いたジェームズ一世が腰掛け、集まった貴族や臣下を目を細めて見守っていた。

明日の亡国とは思えない、華やかなパーティであった。王党派の貴

族たちはまるで園遊会のように着飾り、テーブルの上にはこの日のためにとっておかれたのであろう、様々なご馳走がならんでいる。

ジエヴォーダンたちは会場の隅に立ち、華やかなパーティを見つめていた。

王党派の貴族たちは、こんなときにやってきたトリスティンからの客が珍しいらしく、かわるがわるルイズたちの元へやってきては、料理を勧め、酒を勧め、冗談を言う。そして最後に、アルビオン万歳！と怒鳴って去っていくのだった。

悲しい。ただ悲しいと呼ぶべき、滅びゆく人々の姿。ジエヴォーダンですらそう感じるその姿が、ルイズにはより深く突き刺さったのであろう。たまらずといった様子で、ルイズは飛び出していった。

ジエヴォーダンは、自分は適任ではないと感じた。こういう時、かける言葉など自分にはない。ワルドを促すと彼は頷き、ルイズを追いかけた。

ジエヴォーダンはため息をついた。こういった場に来るたび、自分はどうも疎外感を感じてしまう。

そんなことを考えていると、座の真ん中で歓談していたウエルズが近づいてきた。

「やあジエヴォーダン、楽しんでるかな」

「……ええ、まあ」

ジエヴォーダンは取り繕うように空返事をする。

「先ほどは、機転の利いた行動に感謝するよ。君がいたから僕たちは、君たちが敵でないと知ることができたんだからね」

「ご安心ください、核心あつての行動ですので、失敗するということはなかったはずですよ」

「ふふ！ 面白い男だな、君は！」

ウエルズはそう言って笑う。先ほどと変わらない、魅力的で屈託のない笑顔だ。

「あなたは、本気で明日、真っ先に死ぬつもりで？」

「もちろんさ。なんだ、案じてくれるのかい？」

「いいえ、誇りと名誉のため、死にゆくこと、これを止めるつもりはあ

りません。ただ……」

ジェヴオーダンは、なんと言うべきか迷う。そして思いつくままに語ってみようと、顔を上げた。

「殿下、ひとつ、お話をよろしいでしょうか。俺がくぐり抜けてきた、戦いの話です」

「おお！ それは是非とも聞きたい。君ほどの男だ、どれほどの死地を切り抜けてきたのかね？」

「武勇伝と呼ぶべきものではありませんが……殿下、例えばの話です。『死ねない戦い』というものがあつたとしたら、どう思いますか？」

「ふむ、守るもののため、引くわけにはいかない戦いということか？」
ジェヴオーダンは静かに首を振る。

「そうではありません。死ねないとは、言葉の通りです。殿下がこれより死地へ赴き、名誉に死んだとします。すると、目が醒める。それは悪夢で、自分はこれから死地へ赴くのです。そして名誉に死に……また悪夢に、目が醒める」

「……！」

「幾度となく悪夢が繰り返され、もう今見ているのが悪夢なのか現実なのか、それすらもわからない。逃げることも叶わない。ただひたすら、死に、目覚め、また死ぬ。終わることを望めどそれは叶わず、何度でも、死ぬ」

「それは……まさしく悪夢というものだな」

「ええ殿下、紛れもありませんよ。『悪夢』なのです。私はそんな戦いに身を置いてきました」

「まさか、不死だとも言うつもりかね？」

驚いた顔でウェールズが言う。ジェヴオーダンは低く笑った。

「例え話ですよ、殿下。ですがそれに近い日々であったことは確かです。殿下、死にゆく事これを名誉とする戦いは、美しいものです。俺には叶わなかったものだ。他の誰もこんな事は言わないだろうが、俺は少し……あなたが羨ましい」

ウェールズは一瞬、ポカンと口を開け、それから大笑いした。それはそれは高らかに、見事なまで大笑いだった。

「はっはっはっ。いやすまない、可笑しくて笑ったのではないんだ、ははは。君の言う通り他にそんなことを言うものはいない。そうか、羨ましいか、そうか……」

大笑いするウェールズを見て、ジエヴオーダンは心底気が沈むのを感じた。これほどいたたまれない気持ちになったことなど、ついぞあつただろうかと。

死ねなかつた自分にはわからない、死にゆく者の美しい悲しみ。こんなもの、知らない方が良かったとさえ思えてくる。

「ジエヴオーダン、君と話せて本当に良かった。感傷だが、君とは別の形で出会いたかつたものだ」

「……俺もです、殿下」

「……ひとつ、頼まれてくれるか」

「なんなりと」

ウェールズは目をつむって言った。

「彼女に、アンリエッタにはこう伝えてくれ。ウェールズは、勇敢に戦い、勇敢に死んでいったと。それで十分だ」

「……我が血に賭けて、伝えます」

ウェールズは静かに頷くと、再び座の中心に入っていった。

これ以上、ここに残る意味もない。

ジエヴオーダンは近くにいた給仕に道を尋ね、寝室へ戻ることにした。寝るわけではないが、少し休みたい。そんな気分だった。

部屋へ向かう暗い廊下。前方から、誰かが歩いてくるのが見えた。暗がりの中、月明かりに照らされて現れたのは、妙に冷たい目をしたワルドの姿だった。

「きみに、言っておかねばならぬことがある」

何やら、冷えた声。節々には、まるで警戒するような態度が伺えるような。

「……何だ？」

「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げる」

ジエヴオーダンは自分の耳を疑った。この男は、一体何を言っているのか。

「こんな時に、こんな所でか?」

「是非とも、僕たちの婚姻の媒酌を、あの勇敢なウエルズ皇太子にお願いしたくなつてね。快く引き受けてくれた。決戦の前に、僕たちは式を挙げる」

聞いただけで、ジエヴオーダンは頭痛のする思いだった。世の中には阿呆がいるが、これは飛び切りの阿呆というものだ。

「貴公、気でも触れたか……?」

「心外な物言いだな。皇太子殿下も、死に際に名誉な事だと喜んで下さっているのだ。これはまたとない機会というものだ」

「戦火はすぐ手前に迫っている。ルイズに危険が迫らないとも限らないのですよ?」

ワルドはさらに眼光を鋭くしてジエヴオーダンを睨みつける。指摘はすべて気にくわれない様子だ。

「何も平民の君に理解できなくても構わぬが、貴族は名誉や誇りを重んじるものだ。重ねていうが、皇太子殿下は名誉なこととお喜び下さった。君に理解できる必要はない」

心底、呆れて物も言えない。ジエヴオーダンは心の中で大きくため息をつき、ワルドに対する考えを改めねばならなかった。

「きみも出席するかね?」

まさか、とジエヴオーダンは首を振った。

「ならば、明日の朝すぐに出発したまえ。私とルイズはグリフォンで帰る」

「長距離は飛べないのでなかったか」

「滑空するだけなら話は別だ。問題ない」

どうやら、全て計算尽くのようだ。ジエヴオーダンは頷くと、ワルドはフンと鼻を鳴らした。

「では、君はここでお別れだな」

「そのようですね……いや」

「ん?」

言うだけ言って歩き去ろうとしたワルドは、ジェヴォーダンの言葉に足を止める。

ジェヴォーダンは、その薄い顔にさらに薄ら笑いを浮かべて、ワルドを見やった。

「存外、すぐまたお会いできるかもしれませんよ……子爵殿」

「……っ、し、失礼する」

その薄ら笑いに、ただならぬ不気味な何かを感じ取ったワルドは、足早にその場を去った。

まさか、気付かれているのか？ 一瞬ワルドの背筋を冷たいものが伝うが、それならば出席しないと回答するのもおかしな話だ。

杞憂だろう。ワルドは振り返りもせず足早に歩き、やがてジェヴォーダンの視界から消えた。

「クク……阿呆な犬が……まあだが、あんな阿呆が貴族派のスパイであろうはずもないか……」

そしてワルド、ジェヴォーダン双方の予想は、残念ながら悪い方に命中していたのだ。

16：恐怖

アルビオンの隠れ港の中。

ニューカッスルから逃げゆく人々に混じって、ジエヴオーダンもイーグル号に乗り込むための人々に混じり、列に並んでいた。拿捕されたマリー・ガラント号にも、人々が乗り込むようだ。

「それにしても意外だな」

デルフリンガーが呟く。

「相棒、ほんとに先に帰る気かよ？　しかも娘つこに一言もかけねえなんてさ」

「仕方なからう。これを逃すと、俺もいつアルビオンから出られるかわからん。ルイズのことは確かに気にかかるが、子爵が付いていればひとまずは大丈夫だろう」

「なんだ、あれだけあの子爵様を疑ってたのに」

ジエヴオーダンが最後まで内通者ではないかと踏んでいたのは、他ならぬワルド子爵。しかし、ジエヴオーダンは首を振った。

「残念だが、子爵はアリバイ付き。その上あれほどの阿呆ときた。貴族というやつはどいつもこいつも、栄誉だ名声だなんだと一つ覚えで頭にくる」

貴族というものの考え方には、心底愛想が尽きている。ジエヴオーダンにしてみればもはや貴族というものに対する共通認識である。ルイズのように芯と誇りある貴族の例を全く見ることができないのだから、仕方がない。

「違くないな。しかし相棒、先に帰ってたってどうする気だい？」

「どうもこうもない。ルイズは婚姻を終わらせて帰り、まずは姫殿下への任務達成の報告、その後は……ふむ、果たしてそのまま使い魔を続けられるかどうか」

「なんでまた？」

「あの子爵が、俺をルイズの側に置くと思うか？　難癖をつけて引き剥がすだろうな。ヤーナムへ帰る方法を探すにしろ、学園に残って使い魔を続けられる方がよっぽど都合がよかったのだがな」

「はっはっは、まあ違くないや。もしつまみ出されるようなら、その時は相棒、傭兵でもやるかね？」

「傭兵？」

素っ頓狂な声で聞き返す。

「そう、剣一本担いであつちの戦場からこつちの戦場へ。その日暮らしだ、悪くないもんだぜ。なあに、俺と相棒なら、並大抵のやつには遅れを取らんよ」

デルフリンガーが鐳をカチカチと鳴らす。どうやら笑っているようだ。

「見てくれは錆び剣だがな。格好は付かんぞ」

「手厳しいねえ。まあそんな傭兵も悪くはないだろ。ところで相棒、この前、ちよつと思ひ出したことなんだが……」

「なんだ？」

「ああ。相棒、『ガンダールヴ』とか呼ばれてたよな？」

「ああ、伝説の使い魔だとかいう。だが、どうだろうな。実際に伝えられているガンダールヴの姿と俺とでは、かなり差があるように思える。本来はいかなる武具をも使いこなす、始祖ブリミルの詠唱の守り手だそうだが……」

「ああ、それだそれ。その名前がなあ……いやあ、ずいぶん昔のことだな。なんかこう、頭の隅に引つかかかってるんだが……」

ああ、だのふむ、だの、デルフリンガーは何度も唸ってみせる。ジェヴォーダンも、釣られて思わずうーむと唸る。

「どうだろうな。俺に現れた力はあらゆる武具を使いこなすというより、純粹に自分自身の力の増強に感じられるものだったからな。しかし、俺にはガンダールヴよりブリミルの方が気になる。始祖だなんだと言うが、大抵そういうのは上位者の無頼だからな。それが……」

『上位者』？」

唐突にデルフリンガーが、ジェヴォーダンの言葉を遮った。

その声色の違いに、ジェヴォーダンも思わず言葉を止める。

「なんだ？」

「上位者、上位者？ ガンダールヴ、ああ、あー……あれえ、なんか、

思い出しそうな……」

ブツブツとそんなことをつぶやき始めるデルフリンガー。ジェヴォーダンが聞き返そうと思った時、艦に乗り込む順番がジェヴォーダンにも回ってきた。タラップを登ると、さすがは難民船といったところで、人がぎゅうぎゅうに押し込まれていて甲板に座り込むこともできない。

ジェヴォーダンは次々乗り込んでくる人の波にもまれながら、必死にデルフリンガーに声をかける。

「デルフ、お前何か知ってるのか、上位者について」

「何だろう、えらい頭の隅にひっかかる。上位者、ガンダールヴ、ブリミル……えーと、あーっと」

うんうんと唸るばかりのデルフリンガー。人垣の中で足を踏まれ、ジェヴォーダンは小さく舌打ちをする。舷縁にのりだして、抜き身のデルフリンガーを手に持った。

「気のせいじゃないのか？ お前の記憶はあまり当てにならない。だいたい頭の隅というが、お前の頭はどこにあるんだ？」

「んー、たぶん柄」

それを聞いてジェヴォーダンはフンと鼻で笑う。そして、何気なく呟いた。

「なんだ、柄に上位者の精霊でも宿ってるとも言うつもりか」

ジェヴォーダンにしてみれば軽い冗談のつもりだった。頭の中に何かがひっかかるなどと言われて、自分に思い当たるものとすれば精霊くらいしかない。そんな程度の軽い言い回しのつもりだった。

そんなジェヴォーダンの手の中で、デルフリンガーがひととき大きくガチリと鳴いた。

そんな頃、始祖ブリミルの像が神々しく鎮座する礼拝堂で、ウエルズ皇太子は新郎と新婦の登場を待っていた。周りに他の人間はいない。皆、戦の準備に駆られているのだ。

ウエルズは皇太子の礼装に身を包んでいた。王家の象徴たる明るい紫のマント、帽子にはアルビオン王家を象徴する7本の羽がつい

ている。

扉が開き、ルイズとワルドが現れた。ルイズは、ワルドに促されてただ歩くのみ。呆然とした様子だった。

ルイズは戸惑っていた。今朝突然ワルドに起こされ、何もわからずここまで連れてこられた。

とまどいはした。が、ルイズは死に戦へ赴くアルビオンの人々の様に当てられ、半ば自暴自棄な気持ちになっていた。それに、昨晚から姿の見えないジェヴォーダンの事も気にかかっていた。

ワルドから、あいつが先にトリステイン行きの船に乗り込んだと聞いた。たった一声もかけず、あいつは行ってしまった。その突き放すような事実がルイズをひどく落ち込ませた。

ワルドは「今から結婚式をするんだ」と言つて、アルビオン王家から借り受けた新婦の冠をルイズの頭に乗せた。冠には魔法の力で永遠に枯れぬ花があしらわれ、清楚で美しいつくりだった。

そしてワルドはルイズの黒いマントを外し、やはりアルビオン王家から借り受けた純白のマントを羽織らせた。新婦のみが身につける、乙女のマントだ。

だが、そこまでされてもルイズは心ここに在らずに呆然としているのみ。その沈黙を、ワルドは肯定の意と受け取った。

始祖ブリミルの像の前、ウエールズに向けて、魔法衛士隊の制服に身を包んだワルドが一礼する。

「では、式を始める」

王子の声がルイズの耳に届く。が、その声はどこか遠くのもののように臃げだった。

「新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして妻とすることを誓いますか」

ワルドは重々しく頷き、杖を握った左手を胸の前に置いた。
「誓います」

ウエールズはにつこりと頷き、続いてルイズを見やる。

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブ

ラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

ウエルズが誓いのための詔みことりを読み上げる。ここへきてようやくルイズは、今が結婚式の最中であることに気がついた。

相手は、憧れていた子爵、ワルド。2人の父が交わした婚約。幼い心の中、ぼんやりと想像していた未来。

ワルドのことは嫌いではない。恐らくは、好きなのだろう。

ならば、何故こんなにも……恐ろしいのだろう。

どうしてこんなにも、恐怖に震えているのだろう。

滅びゆく王国を目にしたから？ 望んで死に向かう王子を目にしたから？

違う。悲しい思い出が生むのは悲しみだ。気持ちを落ち込ませこそしても、それが恐怖にすり替わることなど、ない。

ワルドのことが怖いのだろうか。それも違う気がする。頼もしく、そして憧れていたワルドが隣にいて、恐怖を感じるはずがない。

違う。

私は今、何か別の理由で怖いのだ。それはこの結婚式や、これまでの状況とはなんの関係もない。今、この瞬間が怖いのだ。

何故怖いのか。何が怖いのか。ルイズはその虚空を、捉えた。

ジエヴオーダンの事を思い出す。あいつが出てきた、あの夢。あの最後、降りてきた赤い月。あの時に感じた、頭の中で蠢いていたものはなんだったか？

あいつは今日、私に何も声をかけずに行ってしまった。

そんなはずはないのだ。

舷縁にいた幾人かの人々は、ジエヴオーダンと共に啞然としていた。ジエヴオーダンの手の中、握られた剣が、突然青白く光り輝きだしたのだ。

「デルフ、お前……!？」

驚きの声を上げるジエヴオーダンの手の中、まばゆく光るデルフリンガーが、ガチリと鐸を鳴らした。

『思い出した!』

今やデルフリンガーに浮いていた錆は跡形もなく消え、まさに今研ぎ澄ましたがごとき美しい刀身が露わになる。その刃はほのかに青白く、ちらちらと光が走るのを見て取れる。そしてこれまでとはまるで雰囲気の違いはつきりとした口調で、デルフリンガーは語りだした。

『思い出したぞ! 六千年も前のことですから頭から抜け落ちていたが、私はお前に握られていたぞ、ガンダールヴ! いや、今代はこう呼ぶべきだな、月の香りの狩人よ!』

ジェヴオーダンは驚きのあまりデルフリンガーを取り落としそうになった。この剣は、つい先ほどまで間抜けな声で喋るだけだったこの剣は今、なんといった?

「貴様、俺を……!?!」

『まあ待て狩人よ。私が表に出られるのはほんの僅かな時のみ、その間に伝えねばならぬことは山ほどあるが……どうやら時間は無いようだ。貴公、瞳を開くぞ、見えるか』

「何、っ!?!」

頭の理解が追いつかないままに、ジェヴオーダンは左眼に違和感を覚える。そしてその歪んだ視界が像を結び、そこに映した景色がなんなのか理解した時……ジェヴオーダンは、舷縁から跳ねた。

『私の精霊が貴公を導く。行け、月の香りの狩人よ! 主を護るのだ!』

「新婦?」

ウエールズの問いにルイズは答えない。ただ答えず、俯いているのみだ。

「緊張しているのかい? 仕方がない。初めての時は、ことごとんであれ緊張するものだからね」

にっこりと笑いながら、ウエールズは言う。

「まあ、これは儀礼に過ぎぬが、儀礼にはそれをするだけの意味があ

る。では繰り返そう。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、そして夫と……」

だが、そんなウエルズという言葉の途中、ルイズは顔を上げた。そして遮るように、首を振った。

「新婦？」

「ルイズ？」

2人が怪訝そうな顔でルイズを覗き込む。ルイズは、悲しそうな表情で再び首を振った。

「どうした、ルイズ。気分でも悪いのかい？」

「違うの、ごめんなさい……」

「日が悪いなら、改めて……」

「そうじゃない、そうじゃないの。ごめんなさい、ワルド。私、あなたとは結婚できない」

その言葉に、ウエルズは首を傾げた。

「新婦は、この結婚を望まぬのか？」

「そのとおりでございます。お二方には、大変失礼をいたすことになります。わたくしはこの結婚を望みません」

ワルドの顔に、さつと朱がさす。ウエルズは困ったように首を傾げ、そして残念そうにワルドに告げた。

「子爵、誠に気の毒だが、花嫁が望まぬ式をこれ以上続けるわけにはいかぬ」

しかしワルドはそんなウエルズに見向きもせず、ルイズの手をとる。

「……緊張してるんだ。そうだろルイズ。ほら、手だつてこんなに震えている」

「違うのワルド、これは……」

ルイズの身体は、恐怖にふるふると震えていた。先程からひと呼吸置きたびに、何かあつてはならない恐怖を身体が吸い込んでいるように感じられて、仕方がない。

本当は今すぐにもこの場から逃げ出したいのだ。その一心で、ルイズはワルドの問いかけを拒んだ。

だがワルドは、今度はルイズの肩を掴んだ。その目が釣り上がり、いつもの優しげな表情が消えた。

「世界だルイズ。僕は世界を手に入れる！ そのために君が必要なんだ！」

豹変したワルドにさらに恐怖を覚えながら、ルイズは首を振った。

「……わたし、世界なんかいらぬもの」

だがワルドは引かない。両手を広げると、ルイズに詰め寄った。

「僕には君が必要なんだ！ 君の能力が！ 君の力が！ ルイズ、いつか言ったことを忘れたか！ 君は始祖ブリミルに劣らぬ、優秀なメイジに成長するだろう！ きみは自分で気づいていないだけだ、その才能に！」

「ワルド、あなた……！」

ルイズの声が震える。これは、ルイズの知っているワルドではない。優しかったワルドがこんな顔をして、叫ぶように詰め寄るなど。我を忘れたような剣幕で怒鳴り散らすなど。

これではまるで、獣ではないか。

恐怖で身のすくむルイズ。そんなルイズへのワルドの剣幕を見かね、ウエールズが間に入ってとりなそうとした。

「子爵……きみはフラれたのだ。いさぎよく……」

「黙っておれ！」

が、ワルドはその手を跳ね除ける。ウエールズはワルドの言葉に驚き、立ち尽くした。ワルドはルイズの手を握り、なおも凶暴な表情を浮かべルイズへ詰め寄る。

「ルイズ！ 君の才能が僕には必要なんだ！」

「わたしは、そんな、才能のあるメイジじゃないわ」

「だから何度も言っている！ 自分で気づいていないだけなんだよルイズ！」

ルイズはワルドの手を振りほどこうとしたが、その力は強く、握りつぶされるような痛みに顔を歪める。ルイズは涙を浮かべ、はつきりと言いつつ切った。

「そんな結婚、死んでも嫌よ！ あなた、わたしをちつとも愛してない

じゃない。わかったわ、あなたが愛しているのは、あなたがわたしにあるという、在りもしない魔法の才能だけ。ひどいわ。そんな理由で結婚しようだなんて、こんな侮辱はないわ！」

ルイズはジタバタと暴れ、手を振りほどこうとする。ウエルズが見かねてワルドの肩に手を置き、引き離そうとする。しかし、今度はワルドに突き飛ばされた。

突き飛ばされたウエルズも、これには顔を赤くする。立ち上がると、杖を引き抜いた。

「うぬ、なんたる無礼！ なんたる侮辱！ 子爵、今すぐにラ・ヴァリエール嬢から手を離れたまえ！ さもなくば、我が魔法の刃が君を切り裂くぞ！」

それを聞いてか聞かずか、ようやくワルドはルイズから手を離れた。そして、まるでそれまでのやりとりなどなかったかのように、いつもの優しい笑顔を被って、ルイズに微笑みかけた。

「こうまで僕が言ってもダメかい？ ルイズ。僕のルイズ」

ルイズは怒りに震える声で言い放った。

「嫌よ。誰があなたと結婚なんかするもんですか」

ワルドの表情が、消えた。そして物思いにふけるように、天を仰ぐ。「この旅で、君の気持ちを掴むために、ずいぶん努力したんだが……」

両手を広げ、まるで挑発するように、やれやれとばかりにワルドは首を振った。

「こうなってはしかたない。ならば目的の1つは諦めよう」

「目的？」

ルイズが聞き返す。ワルドは口元を歪め、禍々しい笑みを浮かべた。

「そうだ。この旅における僕の目的は3つあった。その2つが達成できただけでも、よしとしなければな」

「達成？ 2つ？ ……どういうこと？」

要領を得ないワルドの言葉。心の中で、考えたくもない想像が膨れ上がるのを感じる。ワルドは右手を掲げ、人差し指をたてた。

「まず1つは君だ、ルイズ。きみを手に入れることだ。しかしこれは

果たせないようだ」

「当たり前じゃないの！」

次にワルドは中指を立てた。

「2つ目の目的は、ルイズ、きみのポケットに入っているアンリエッタの手紙だ」

ルイズはハツとした。

「ワルド、あなた……」

「そして3つ目……」

アンリエッタの手紙。その言葉に、すべてを察したウエールズが杖を構えて呪文を詠唱する。

しかし、ワルドは二つ名である閃光のごとく素早く杖を引き抜き、呪文を完成させた。風のように身を翻し……ウエールズの胸を青白く光る杖の先が貫いた。

「き、貴様……『レコン・キスタ』……!」

ウエールズの口からどつと鮮血が溢れる。ルイズは悲鳴を上げる。ウエールズの胸を光る杖でえぐりながら、ワルドは呟いた。

「3つ目……貴様の命だ、ウエールズ」

ワルドが杖を引き抜き、ウエールズの身体はどつと地に倒れ伏した。

「貴族派! あなた、アルビオンの貴族派だったのね! ワルド!」

ルイズはわななきながら怒鳴った。ワルドは冷たい、感情のない声で言った。

「そうとも。いかにも僕は、アルビオンの貴族派『レコン・キスタ』の一員だ」

「どうして! トリステインの貴族であるあなたがどうして!」

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の連盟さ。我々に国境はない」

ワルドは再び、杖を掲げた。

「ハルケギニアは我々の手で1つになり、始祖ブリミルの降臨せし『聖地』を取り戻すのだ」

「昔は、昔はそんな風じゃなかったわ。何があなたを変えたの? ワ

ルド……」

「月日と、数奇な運命の巡り合わせだ。それが君の知る僕を変えたが、今ここで語る気にはならぬ。話せば長くなるからな」

ルイズは思い出したように杖を握り、それをワルドに向けて振り下ろそうとした。しかしそれはワルドに難なく弾き飛ばされ、地面へと転がる。

「助けて……」

ルイズは青ざめて後ずさる。立とうとしたが、腰が抜けて動けない。ワルドは首を振った。

「だから！ だから共に、世界を手に入れようと言ったじゃないか！」風の魔法が放たれる。『ウィンド・ブレイク』。ルイズは紙切れのように吹き飛ばされた。

「いやだ……助けて……」

「言うことを聞かぬ小鳥は、首を捻るしかないだろう？　なあ、ルイズ」

ここにいるはずのない者へ、縋るように助けを求める。

「助けて……お願い……」

まるで呪文のように、ルイズは繰り返す。ただ恐怖のままに。

楽しそうに、ワルドは呪文を詠唱した。雷の魔法、『ライトニング・クラウド』だ。

「残念だよ……この手で、きみの命を奪わなければならないとは……」
全てを焦がす強力な雷の魔法だ。まともに食らえばひとたまりもない。

全身が痛い。ショックで心が千切れそうになる。ルイズは子供のように怯えて、涙を流す。

「助けて！ 私……」

ルイズは叫んだ。

ワルドの詠唱が完了する。そして、ワルドはその杖をルイズへ振り下ろそうと大きく掲げ……

突如、扉の開く音と共に、一陣の風が舞い込んだ。

驚愕したワルドは詠唱を中断して扉の方に構えた。大きく開かれ

た扉からは外気が入り込み、灯っていた燭台の火が吹き消える。

やにわに影を落とした礼拝堂の中、ワルドは冷や汗を流してあたりを見回す。そこにいるはずのないものの、姿を探して。

だが、それらしき姿を見つけるよりも先に、ワルドの耳に、聞きなれぬ軽いメロディが入ってきた。

「っ!!」

慌てて振り返るが、そこに探していた姿はない。ウェールズの亡骸と、かすかに額に入った切り傷から血を流すルイズが気を失っているだけである。

否。そのルイズの傍、見慣れぬ小さな小箱から、そのメロディは流れていた。

そしてその小さなオルゴールの傍には、見覚えのある青い小瓶。ワルドの背中に冷たいものが流れる。

いや、それは汗の感触でないように思えた。それだけでない。なにやらその冷たい感触が、自らの内側にまで食い込んでいるように感じられる。

次第にそれが鋭い痛みを結び、ワルドは自分の体が刺し貫かれていることによく気がついた。消えゆく感覚が、背後にいるものの息づかいを確かに伝えていた。

「貴様……!」

だが、ワルドの苦虫を潰したような声は別の場所、礼拝堂の柱の陰から響いた。

気配を消したジェヴオーダンが背後から致命の一撃を食らわせたワルドは、力なく倒れ、やがて煙のように消えてしまった。気配が薄れていたジェヴオーダンも、秘薬の効果が切れて姿をあらわす。

「……迂闊だった。俺らしくもない見落とした。貴公が裏切り者だったとはな」

「気付いているかと思っていたが。だがまあ、結果として正解だったようだ。何故ここがわかった？ 下賤な狩人め」

「下賤？」

ジェヴオーダンがゆらりと揺れる。目深に被ったトリコーンのせ

いで顔が見えない。

「言うに事欠いて、下賤だと?」

「下賤と言わずしてなんとという? おおかた主人の危機が眼に映ったのだろうか、その拳句とはいえ不意打ちなどと。だがまあ、きみが言っていたことだ。それが君たち狩人のやり方なんだろう?」

ジェヴオーダンは答えず、デルフリンガーを腰だめに構えた。ワルドも杖を構えて、臨戦態勢を取る。

「ルイズはこれでも、貴公を信じていた。幼い頃の憧れの貴公をな」
「信じる信じないはそちらの勝手だ。騙して悪いが、こちらも任務なんだな。貴様にもここで……」

ワルドは飛び上がり、そして呪文を発した。風の呪文『ウインド・ブレイク』。

「死んでもらう!」

強力な一陣の突風。しかしジェヴオーダンは一步も動かず……それを、剣で受け止めた。

否。剣が魔法を吸い込んだ。先程ルイズを軽く弾き飛ばした一撃は、今度は逆にデルフリンガーの中に、軽く飲み込まれてしまった。

「何……!?!」

『残念だったな、若造。その程度の魔法であれば、このガンダールヴの左腕、デルフリンガーが吸い込んでくれよう』

声色の違うデルフリンガーはそう高らかに宣言し、続いてジェヴオーダんに語りかけた。

『狩人よ。ガンダールヴの強さは、心の震えで決まる。怒り、悲しみ、愛、喜び。なんでもいい、ただ心を震わせるがいい。お前の心の震えが、狩りを成す』

「……わかつている」

そしてデルフリンガーを構え、ジェヴオーダンはワルドに向き直る。歩み寄りながら、小さく口を開いた。

「貴様にはわかるまい」

ワルドは、青ざめる思いでその冷たい声を聞いた。ジェヴオーダンの声は、これまで聞いたことの無いような、仄暗い気配をまとつてい

た。

「取り残される、裏切られるものの孤独や恐怖など。それを見ている事しかできなかつた、痛みや怒りなど」

思い出す、人食い豚の腹の中から取り出した、血濡れのリボンのこと。あの時自分のした行いへの後悔。そして、行き場のない沸き立つ怒り。

「貴様にはわかるまい」

顔を上げたジエヴオーダンの眼が、薄明かりの中で光る。

その目を見たワルドは、ぶわつと全身に鳥肌が立つのを感じた。

その目は彼がハルケギニアに訪れて始めて見せる、興奮した、血走った目だった。

「つ……何を訳の分からぬことを……だが、その剣は厄介だ。こちらも本気で行かせてもらおう。何故、風の魔法が最強と呼ばれるのか。その所以を教えてやる……!」

精一杯の威勢とともに、ワルドは杖を構える。

「ユビキタス・デル・ウインデ……」

呪文が完成すると、唐突にワルドの身体が分身する。

1つ、2つ、3つ、4つ……本体と合わせ、5人のワルドがジエヴオーダンを取り囲んだ。

「ただの分身と思うな。風のユビキタス、『偏在』……風は偏在する。風の吹くところ、何処となくさ迷い現れ、その距離は意志の力に比例する」

ワルドの分身は懐から白い仮面を取り出し、顔につけた。

「やはり、フーケの隣にいたのも、棧橋で襲ってきたのも、貴様だったのだな」

「いかにも。そして偏在は1つ1つが意思と力を持っている。言っただろう? 風は『偏在』する」

そしてワルドたちはゆらりゆらりと揺れ動きながら、ジエヴオーダンへと迫る。

5体のワルドがジエヴオーダンに躍り掛かる。さらにワルドは呪

文を唱え、杖を青白く光らせた。

「杖自体が魔法の渦の中心だ、その剣で吸い込むことはできぬ！」

そしてワルドたちは、一斉にジエヴオーダンの飛びかかった。だが、ワルドはそれを待つジエヴオーダンの動きを、全く読むことができなかった。

ジエヴオーダンは、一步も動かなかったのだ。

5体のワルドの『エア・ニードル』が、次々にジエヴオーダンの身体に殺到し、射し貫き、穿った。

鮮血が吹き荒れ、もつれるワルドたちに降りかかる。ワルドは唾然とした。少しも避けようとすらないなどと。

まさか、5体の自分に襲われて放心でもしていたか。だがそんなことはどうでもいい。殺すことができたのだから。

「はははははは！ 訳ないな、ガンダールヴなどと！ はははははははは！」

勝ち誇る、ワルドの笑い声が、オルゴールの音色と混ざって薄暗い礼拝堂にこだまする。ジエヴオーダンが顔を上げた。

「はははは、は……あ……？」

「初めて獣に殺された時、怒りに燃えたよ」

まるで、何事もないかのようなジエヴオーダンの声。5体全てのワルドの表情が、恐怖に歪んだ。

「武器を受け取ったあと、『仕返し』してやった。繰り返し何度も、何度も、殺してやった」

その顔が、マスク越しにぐにやりと歪む。冷たいオルゴールの音が、鼓膜を冷やす。

「今そんな気分だよ」

それが笑っているのだと気付いた時、全てのワルドは、ジエヴオーダンの手でバラバラに切り裂かれていた。

17：胞子

「ぐ、あああ……ッ！」

薄暗い礼拝堂に響き渡る、ワルドの悲痛な叫び。

砕け散った偏在たち。本体のワルドは一瞬の隙に引いたのだろう。左腕だけが地面に落ち、残った身体にも無数の薄い切り傷を帯びていた。

ジェヴォーダンの全身が、刺し傷から流れ出る血と、ワルドの返り血に濡れる。ワルドは刮目した。

「何故だ?! 何故死なない!!」

理解できないものに対する、悲痛な叫び。そして次にジェヴォーダンに起きた現象を目にして、ワルドは恐れのままに息を飲んだ。

自分が負わせたはずの、『エア・ニードル』の刺し傷。それが、みるみるうちに塞がっていく。

それもただ塞がるのではない。ワルドの返り血を、その傷口から吸い込むようにして消えていく。言うなれば、傷口から吸血しているかのようなのだ。

ワルドは恐怖のまま、もがくように後じさった。

「貴様は、人間じゃないのか……!?!」

完全に傷の消えたジェヴォーダンが振り返る。その手に、小さな何かを握って。

「人間さ。俺たちは血によって生まれ、人となり、また人をやめる。血によって生きる俺が人でなくて何になる」

「……な、なんだ? それは何だ、何をする気だ……」

ゆっくりと歩み寄ってくるジェヴォーダンに、ワルドは幼子のようにばたついて逃げようとする。

「俺からも聞こう。お前は人間か? それとも……獣か?」

ジェヴォーダンがその手に持っていたのは……この地へ訪れてからでんで使う機会のなかったもの。狩人を語る上で外せない小さな小さな道具。

「やめろ! くそお!」

1つの事は終わった。のであれば、残された問題がまだある。
ジェヴオーダンは倒れ臥すルイズに駆け寄った。

「おいルイズ、しっかりしろ」

そのまま抱き寄せるが、目を覚まさない。ジェヴオーダンは冷静に、ルイズの手首に指をあてた。

そこからとくん、とくと脈の音が聞こえたので、ジェヴオーダンはほっと胸を撫で下ろす。

ルイズは胸のあたりで、手を硬く握っている。その下の胸ポケットのボタンが外れ、中からアンリエツタの手紙が顔を覗かせている。どうやらルイズは……意識を失ってでも、この手紙だけは守るつもりでいたようだ。

「大したものだよ、全く……」

ひとまずは、ルイズが生きていてくれた。それだけでも、ジェヴオーダンにとっては安心できた。

だがそんな安堵を、デルフリンガーの声が引き裂いた。

『狩人よ、まずいことになった』

青白く光るデルフリンガーがカチカチと鳴る。緊迫したような声だった。

「なんだ」

『気づかないか。彼女の血だ』

「何？ 出血しているのか、くそッ。だがあいにくいま止血できるよ
うなもの……」

その先の言葉は、出てこなかった。ジェヴオーダンは電撃のような
衝撃をうけ、息を飲んだ。

ルイズは確かに血を流していた。弾き飛ばされた時に切つてしま
ったのだろう、額に入った小さな切り傷から赤い線が伸びている。

その、血。流れ落ちる瑞々しい赤色。ジェヴオーダンは、心拍数が
凄まじい勢いで上がっていくのを感じた。

バカな。バカな。バカな。

そんなはずはない。何故こんなことが起こりうるんだ？ 一体ど
うして、そんなことになるんだ？

ハアーツ、ハアーツと、息が荒くなる。目が熱く、血走るのを感じる。

その血の匂いには、嗅ぎ覚えがあった。

思わずその一滴を指に取る。赤い、赤い血だ。

『……………人よ……………』

誘惑を、抑えられない。

その滾るような穢れた血の匂いが、開いたジェヴオーダンの口にも入ってきて……………

『狩人よ!!』

デルフリンガーの叫び声にジェヴオーダンがピタリと止まる。指先の血が、いつの間にもやら降ろされたマスクの下の口、そのほんの目の前であつて……………

「っ!」

ジェヴオーダンは思わずそれを振り払った。全身にびっしりりと汗をかいているのがわかる。いや、今は自分のことはどうでもいい。重要なのは目の前のルイズのことだ。

「……………っ! おい、デルフ! いや、『導き』か!? どっちでもいい、答えろ! これはどういう事だ!」

『すまない狩人よ、それは私にもわからない』

「ふぎけるな!!」

『ふぎけてなどいない! 残念だが真実だ。私は断片的なものではない。この剣が一つの悪夢に通じているのは確かだが、そこではこんな事は語られていなかったのだ』

「……………!? おい、待て! 貴様の話が全く見えてこないぞ。” 剣が悪夢に通じている” だと? お前、一体……………」

もはやパニックにすら近かった。あまりに多くのことが同時に発生している。

ルイズの血。そこに嗅ぎつけた、穢れの匂い。それは彼女がカインハーストの血族であり、女王ヤーナムの直系であることを、暗に物語っているのだ。

何故この地にヤーナムの血が? どうして王族ではない、ラ・ヴァ

リエール家の三女であるルイズに？

そもそもいま普通に話しているこのデルフリンガーの様子も普通ではない。唐突に月光色の煌めきを見せたと思えば、明らかにこれまでの様子と違う語り口調に、魔法を吸い込む特異な力。あげく、自分が悪夢に通じているなどと。

『狩人よ、聞いてくれ。私にもあまり時間がない。それまでに、君に話さなければならぬ事が山のようにある。君は、この剣の悪夢に飛び込むのだ。今はそうする他にない』

「なんだと？ ルイズをここに置いておけないぞ」

『それは実に残念なことだ。外のわめきが聞こえるだろう？ 皇太子のいない王軍はすでに敗退したようだ。すぐに敵はここまでやってくる』

「……俺にルイズを見捨て、一人で剣の中に逃げ込めと言うか」

ジェヴォーダンは、ルイズをそつと椅子の上に寝かせた。そして、そのルイズを守るように立ち、剣と銃を構える。

『何をする気だ？』

「ルイズを守る」

『……そうか。それならば仕方がない。貴公は“ガンダールヴ”で、この貴族の娘は貴公の主人なのだからな。多くを語れぬは残念だが、貴公が答えに殉ずるのであればそれもいい』

「馬鹿な事を言うな」

『何？』

「敵を全て蹴散らす。貴様の話を聞くのはその後だ」

『……王の話によれば、敵は五万の軍勢だそうだな？』

「たった五万の雑兵どもだ。これまで俺が相手してきたどんな物と比べても、易かろう」

デルフリンガーはますます震えを強くした。

『……貴公、よい狩人だな。狩りに優れ、無慈悲で、血に酔っている。よかろう、それでこそガンダールヴというものだ』

そうして、ジェヴォーダンはデルフリンガーを構えて礼拝堂の入り口を睨んだ。

聞かなければならない事が山のようにある。それまでは、どの道死ねないのだ。

いずれ現れる敵を待ち構る。

しかし、そのとき……。

ぼこつと、ルイズが横たわったとなりの地面が盛り上がった。

「っ、敵か。下から来たな」

ジエヴォーダンは剣を構えて地面を睨む。ぼこつと床石が割れ、茶色の影が姿を現した。

「……!? き、貴様は!」

その茶色の生き物に、ジエヴォーダンは見覚えがあった。あのギーシュの実に素晴らしい使い魔、ヴェルダンテだ。

ウエルダンテは椅子に横たわったルイズを見つけると、嬉しそうにその身体をまさぐった。

「き、貴様何故こんなところにいる!? ギーシュはどうした!」

「おっ、その声は! 僕ならここにいますぞ!」

呼ばれて飛び出るとばかりに、土まみれのギーシュが穴からひよっこり顔を出した。

「きみたち、ここにいたのかね!」

「ギーシュ! お前、何故ここにいるのだ!」

「いやなに、『土くれ』のフーケとの一戦に勝利した僕たちは、寝る間も惜しんできみたちのあとを追いかけたのだ。なにせこの任務には、姫殿下の名誉がかかっているからね」

「ここは雲の上だぞ、どうやって来たというのだ」

すると、ギーシュのとなりに見覚えのある赤髪が顔を出す。

「タバサのシルフィードよ」

「キュルケ!」

「アルビオンに着いた方がいいが、なにせ勝手のわからぬ異国だからね。でも、このヴェルダンテがいきなり穴を掘り始めた。後をくっついていったら、ここに出た」

巨大モグラは、ルイズの指に光る『水のルビー』に鼻を押し付けフガフガ言っている。ギーシュはなるほど頷いた。

「なるほど、水のルビーの匂いを追いかけて、ここまで穴を掘ったのか。僕の可愛いヴェルダンは、なにせとびつきりの宝石が大好きだからね。ラ・ロシエールまで穴を掘ってやってきたんだよ、彼はあつ!?」

突然、ジエヴオーダンはギーシユの肩を掴む。何事かとギーシユが震えおののいていると、ジエヴオーダンは感激したように言った。「石を見つけてくるだけでなく、俺たちの窮地をすら救ってくれとは……素晴らしい……本当に素晴らしい使い魔じゃないか、ギーシユ……!」

「……! わかってくれるか! わかってくれるのか! きびはいいやぶだなああ!」

感涙するギーシユを煩そうに睨みながら、キュルケは頬に着いた土をハンカチで拭う。

「聞いてダーリン? あたし、もうちよつとであのフーケを捕まえるところだったんだけど、逃げられちゃった。あの女、メイジのくせに最後にや走って逃げたわ。ところでダーリン、ここで何をしているの?」

ジエヴオーダンは静かに首を振った。

「すまないが説明は後だ。敵がすぐそこまで来ている、逃げるぞ」

「逃げるって、任務は? ワルド子爵は?」

「手紙は手に入れた。ワルド子爵は裏切り者で……もう始末した。あとは帰るだけだ」

「なあんだ。よくわかんないけど、もう終わっちゃったのね」

ジエヴオーダンはルイズを抱きかかえ、それをギーシユに預けた。そしてふと、キュルケに振り返る。

「1つ、頼まれてくれるか」

キュルケはこの瞬間をしばらくの間忘れることはないだろう。一瞬何を言われているのかわからなかったが、それが浸透してくると同時にばあつと笑顔が花開いていく。

ダーリンが。自分に。頼みごと。自分を頼って。頼みごと。

「きやあああ! もちろんよダーリン! なんでも言っっちゃようだ

い、私もうダーリンのためならなんだってしちゃうわ、燃え上がっちゃうわっ、オホホホ!!」

「ルイズに『すぐ戻る』とだけ伝えてくれ」

だがその頼みの内容を聞いて、今度は笑顔が消えた。

「行く気なの?」

「貴族派を相手するわけではない。やらなければならない事ができた。剣を置いていく、それをルイズに預けてくれるだけでいい」

「そう。こういう時間きすぎるのはヤボだからやめとくわ、ダーリンにやる事があるっていうならそれが一番大事なもの」

キュルケは切なそうに笑った。ジェヴオーダンは、少しだけキュルケに申し訳なくなつた。彼女を甘く見ていたのかもしれない。

数多くの出会いを持つ。それは、数多くの別れを経験する事でもあるのだ。大抵はその別れから目を背け、感覚を麻痺させてしまう。そうでなければ、あとは自分が強くなるしかない。

キュルケは強くあつたのだ。なら、彼女の出会いと別れ全ては、軽いものではなかつたはずだ。

「……すまないな」

「いいの。さあ、もう行くわよ」

「いや、少し待ってくれ」

そしてジェヴオーダンは、斃れたウエールズに近づく。ウエールズは、すでに事切れていた。

「……勇敢な王子よ。貴公のことは決して忘れない。俺は、自らの狩りを全うするでしょう。我が血に賭けて」

ジェヴオーダンはウエールズの瞼を下ろし、そして丁寧に彼の亡骸を寝かせ、その手を組ませた。

その時、かれが指にはめた大粒のルビーに気がついた。

アルビオン王家に伝わるという風のルビー。それを外し、未だ眠るルイズの胸ポケットに、手紙と共に収めた。

「……デルフ、行くぞ」

『ああ』

そして、デルフリンガーを持つジェヴオーダンの手から、不気味な

光が放たれた。

境目から発せられるようなその黒い光に、ギーシュとキュルケは思わず目を背けた。

光が止み、カランと音がして2人は顔を上げる。そこには一本の長剣が転がるだけで、ジェヴォーダンの姿はどこにもなかった。

「か、彼はどこへ行ったのだね？」

「……さあ。何となくだけど、私達じゃ想像もつかないことだと思うわ」

キュルケは剣を手取る。確かインテリジエンスソードだったはずのその剣は、今やいかなる気配も感じさせないただの直剣にしか見えなかった。

「……行きましょう」

キュルケの一言と共に2人が穴に潜ったとたん、礼拝堂に王軍を打ち破った貴族派の兵士やメイジが飛び込んできた。

「どうやらそろそろ終わりみたいだな」

貴族派の兵士の1人が、煙に包まれるニューカッスルの城を見てそうこぼした。

アルビオンで無駄に長引いていた戦火もこれで収まるだろう。『レコン・キスタ』が新たな時代を築き上げる。その礎がここから始まる。

「だが、俺ら一般の兵士なんかにまでおこぼれがあるもんかね」

「さあてねえ。貴族と平民の差なんか、今さらどんなに広がったって変わりやしねえや。俺たちは戦さ場で飯が食えりや……つと、なんだ？」

ふと、兵士の1人が聞きなれない音に反応した。どうやら、崩れた城壁の方から聞こえたようだ。

「生き残りかもしれないな。行くぞ、ついてこい」

男が呼びかけ、数人の傭兵がそれについていく。

崩れた城郭の角を曲がると、その声の主はすぐに見つかった。

「アア……アア」アアアア……」

ルイズは夢を見ていた。

故郷のラ・ヴァリエールの領地の夢。忘れ去られた中庭の池。

そこに浮かぶ小舟の中が、ルイズの唯一の世界。誰にも邪魔されない、秘密の場所だった。

もうここに、ワルドは来ない。優しい子爵。憧れの貴族。幼い頃、父同士が交わした結婚の約束。

ルイズを抱え上げ、ここから連れ出してくれたワルドはもういない。いるのは、薄汚い獣。勇敢な皇太子を殺害し、この自分にすら牙を剥いた残忍な獣……。

ルイズは小舟の上で泣いていた。

ふと、傍に小さなオルゴールがあるのに気がついた。

自分の使い魔もまた、ここへは迎えに来ないだろう。いや、彼は

……

その時、聞き覚えのない音がして、ルイズは顔を上げた。

霧の向こうまでずっと続く水面から、絶え間なく鳴り響く奇妙な音。チリリリン、チリリリンと、規則的なリズムで鳴る、ベルのような音。

ルイズは小舟を降りた。足が濡れることなどためらわず、誘われるように音のする方へ向かった。

霧の向こうにあったのは、小さな背の高いテーブルと、その上に置かれた奇妙な黒い装置だった。規則的なベルの音は、その装置から出ているようだった。

それが「黒電話」と呼ばれるものであることなど、ルイズは知るはずもない。それなのにルイズは、とても自然に、初めからそれがなんであるか知っていたかのように、受話器を取る。

使い方を知るはずもない。なのに、身体が勝手に動く。ルイズは受話器を耳に当てた。

「……はい」

ルイズは注意深く、声をかけた。返事はすぐにかえってきた。

『それは、声ではなかったように思える。』

名状しがたい怪奇な音が、しかしするりと頭の中に流れ込んでくるように心地がいい。ルイズはその音から、言語を超越して意味を聞き取ることができた。

「ええ、ひさしぶり」

『私は大丈夫。ジエヴオーダーが、助けてくれた』

『……本当は、すごく怖かった。あの礼拝堂で、私、私……』

『うん。きつと目覚めたら、全部忘れちゃうんだと思うけど、でも……でも思い出した』

ルイズの目から、ポロリと涙がこぼれた。切ないような、苦しいような、感情が溢れて止まらない。

「ごめんね。ずっと、寂しかったよね。一人に、させちゃったよね」

『……いいえ。私は、貴族……いいえ。私はルイズよ。逃げたりしない、ちゃんと向き合わなければならぬわ』

『……礼拝堂で、教わったわ』

そしてルイズは、とうとう確信に触れた。

礼拝堂で感じた恐怖の正体。あの時気付いた、真実の1つ。

「あそこにいた『姿のない』ものが教えてくれた。私の使い魔は、彼じゃない」

『ルイズは受話器を強く、強く握りしめて、言った。』

「私の使い魔は、あなたなのね。サイト」

暗い音が、重たく響き渡る。

閉じていた眼を開けると、どうやら悪夢の中に入ったようだ。

どこか町の中にいるらしく、建物に挟まれた道の真ん中に立っている。だが悪夢らしく、建物は全て複雑に隆起した地形に押しつぶされ、もとの姿を見る事は叶わないほどの吹き溜まりを形成していた。

「……おい、『導き』。悪夢に着いたのだから説明してもらおうか」

ジェヴオーダンが手に持ったデルフリンガーに声をかける。鏢がカチカチと鳴り、どうにも懐かしい声が聞こえてきた。

「あー、相棒。その、悪いんだが……」

ジェヴオーダンはガクツと肩を落とす。その気の抜けた語り口、声。どれも、ジェヴオーダンの期待したものではなかったのだ。

「戻っちゃったのか、デルフ」

「時間切れだったみてえだな。俺に『悪夢の奥へ』とだけ言って、引っ込んじまったよあいつ」

深いため息が漏れる。この世界に来てからというものこういう事を何度経験したものか。ようやく手がかりを見つけたと思えば、ずるりと手の間をすり抜けていく。まるで、馬鹿にでもされているようだ。

「まあ仕方ない。この悪夢の中に何かあるのか、それを見てやろう」

「ああ、何にせよ奥へ行けって言ってたんだからな。あと、もう一個伝言だ」

「なんだ？」

「『タルブの村へ行け』だそうだ」

「……そうか」

もはや、気になることをいちいち追求する気にもならなかった。タルブというのは、確かトリスティンからそう遠くない平原の名前だったはず。そこに何かあるというのか。

どちらにせよ悪夢を抜けることがこの場は先決だった。ジェヴオーダンは周囲を見回し、道の奥へ進む。

奇妙な町だった。ジェヴオーダンがこれまでどこでも見たことがないような奇妙な意匠にまみれている。

どうにも建物は直線的で、道路はタイルではなく黒い岩石のようなもので成っているようだ。

道のはじめに立つ看板のようなもの。妙に平べったい馬車のようなもの。4つ付いたタイヤはゴム質で出来た妙な形。異質な風景であり、妙な不安感に駆られる。

だが、悪夢の中とはいえ人の姿が見られない。狩人も、それに仇なす獣も。深い静寂が、ここに何者もないことを音なく物語っているようだ。

「静かだな……ん？」

そしてその奥、瓦礫に囲まれた道の最中にそれはあった。

道の真ん中に浮かぶそれは、どうやら鏡であるらしかった。

物理法則を無視してふわふわと浮かぶそれに、ジェヴオーダンは見覚えがあった。自分が召喚される時、目にした鏡だ。

「入れ、ということか」

ためらいなくその鏡に近づき、手を伸ばす。指先が光の中に沈み、やがて吸い込まれるように鏡の中へと溶けていく。

ぐるりと景色が暗転したかと思えば、またすぐに何処かの空間へと飛び出した。

「……………」

そして、言葉を失った。様々な意味で予想外の展開だった。

「なんでえ、娘がこの部屋じゃねえか？」

デルフリンガーの言葉通り……荒れ果ててこそいるが、それはトリステイン魔法学校の、ルイズの部屋そのもの。見覚えのある家具類、間取りなど、物語るものはいくつもある。

暗い奇妙な街を抜け、鏡をくぐるとルイズの部屋へ。奇妙な感覚に思わず眉をひそめる。

「……」
「……」

足に絡む藁束を蹴飛ばしながら、扉へと向かう。外へ出ると、これ

また荒れ果てた瓦礫の山。だが見覚えのあるそこは、ヴェストリの広場の前だった。

「なんだあ、こりゃ？ 間取りも場所もめっちゃくちゃねえか」

「悪夢、こういうものだ。ここでは物理法則が通用しない。さて、そろそろお出ましのようだな」

デルフリンガーを構える。目線の先、ヴェストリの広場の瓦礫に動くものがあつた。

ガチャガチャと、こすれあう青銅。鎧のように見えるそれは、しかしバラバラに寸断されている。

にもかかわらずそれは浮かび上がり、やがてうつろに人型を形成した。まるで幽体が鎧を着込んでいるかのよう。

ジエヴォーダンを見つけたのだろう。鎧たちはフワフワと浮かびながら、向かってきた。

「歩かねえんなら、人型になる意味はねえわな」

「……だな」

ジエヴォーダンの目が、鋭く光る。

そして、あつというまだった。足元に転がる青銅の兜を見て、デルフリンガーが鐸を鳴らす。

「なんでえ、随分弱つちいじゃねえか」

「ギーシユのワルキューレだ、中身が何であれ元が元だ」

「ギーシユって、あの鼻っ面の青いガキだろ？ なんでそんな奴のワルキューレが、こんなところにいるのさ？」

デルフリンガーは、ギーシユとジエヴォーダンの間に起きた一悶着を知らない。そのためこれがギーシユの魔法で生まれたものだと知らなかった。

だが、今はそんなことはどうでもいい。ジエヴォーダンには、もつと別の疑問があつた。すなわち、『これは誰の悪夢なのか？』。

悪夢の世界と言うからには、誰かがこの世界を見ていたはず。だが、鏡をくぐりルイズと出会ったのも、ここでギーシユと戦ったのも、自分であるはずだ。

ならば自分の悪夢であるのかと言えば、それも違う。それは、この

ワルキューレを見ればわかることだった。

バラバラに切り裂かれていたワルキューレたち。その切り口は、鋭い剣によるものだった。ジェヴォーダンはこの時、ノコギリ鉋で応戦した。その切り口は、ノコ刃によつて切り裂かれたような切り口になるはずだ。

「相棒、どうした？」

「……なんでもない。先へ進もう」

ヴェストリの広場の向こう、既にそこに歪んだ景色が見て取れる。ぐちゃぐちゃに絡み合った街並みは、ほのかに既視感のあるもの。そこに踏み込むと、デルフリンガーが驚きの声を上げた。

「ブルドンネじゃねーか！　なんだ、なんでこんなところに通じてるんだー！」

「お前を買った店のある通りだったか。だが、純粋なブルドンネ通りでもないな。トリステイン魔法学院と融合しているようだ」

ブルドンネ通りの吹き溜まりを抜け、その先には学校の裏手にあるはずの、宝物庫の塔が見えていた。

ジェヴォーダンにとつては、ある意味で曰く付きの場所。ここでルイズとキュルケが自分を争って戦い、そしてあの土くれが現れたのだ。取り逃がした雪辱は、忘れえるはずもない。

だからこそ、目の前の地面がもこりと膨らんだ時、ジェヴォーダンは身体中の血が叫ぶのを感じた。

「これはー！」

一瞬にして立ち上がった、見上げるほどの巨大なゴーレム。しかしその姿はどうにもおぼつかず、グズグズの状態で胴には穴さえ空いている。しかし、明らかに異様なことが起きた。その体から炎が上がったのだ。

『土くれ』のゴーレム、なのか……!?!」

炎に卷かれたゴーレムが拳を振り上げる。とっさにデルフリンガーで弾き、剣を地面に突き立てて勢いを殺す。

皮膚にジリジリと迫る熱気。燃え盛る炎に卷かれたゴーレムが、うなりを上げて襲いかかってくる。

「っ！」

とつきに、膝だけで体勢を落とす。掠める熱気に目を細めながら、その腕とすれ違うように斬り付ける。と、ゴーレムの腕からは血が吹き出し、悲鳴が上がる。

やはりそうだ。悪夢で暮石の内に肉が詰まっていたのと同じ、これも生きている。

であれば、殺せる。

「どうやら、何度解体されても足りないようだな！」

小さなトニトルスを、懐から引き抜く。ルーンが熱を持つと同時に、ゴーレムが動いた。

凄まじい勢いで振り下ろされる拳。だが、唸りを上げる拳も渦巻く炎も、今のジエヴオーダンには『止まって見える』。

身をかすめて拳を躲しながら、雷撃が放たれる。稲光がゴーレムを打ち砕き、土くれが辺りに撒き散らされた。

上半身を失ったゴーレムがよろける。その断面からは、血と炎が吹きこぼれた。

あつけない。そう思っていたジエヴオーダンの身体を、衝撃が襲う。

「っ……っ！」

ゴーレムの残った下半身が放った蹴りを受け、ジエヴオーダンの身体は宝物庫の壁に叩きつけられた。全身の骨が軋み、激痛に視界がゆるぐ。

だがそれだけの事。一瞬で気を取り戻し、そして跳ねた。

ゴーレムの脚が応戦しようとその脚を振り上げると、燃え盛る血と土が撒き散らされる。だがそれら全てを躲しながら、一気に距離を詰めていく。

その脚の間を、スライディングで抜けながら脚に斬撃を。血が噴き出すが、構わず何度も斬り付ける。

たまらずゴーレムは脚を上げる。そしてそのまま狩人を踏みつけ……しかし、次の瞬間には縦に深い切れ込みが走る。

ゴーレムは重心を崩したのだらう、ぐらりとよろけた。狩人の血

走った目は、それを見逃さなかった。

すかさず反対の脚に、目にも留まらぬ連撃が加えられる。残ったゴーレムの重心が失われるまで、何度も何度も。

ゴーレムはあっさりと、その体勢を崩した。尻餅をつくように倒れれば、吹き飛んだ上半身の断面が地面からでも届く位置に降りてくる。そこにジエヴオーダンは、すでに待っていた。

「……中身を晒せ、醜いゴーレム」

その手が、ゴーレムの断面に突き込まれる。炎に包まれる事など、意にも介さず。

手を、引き抜く。それだけでゴーレムの燃えたぎる血も、その中身も、なにもかも辺りに撒き散らされた。

ゴーレムは、停止した。完膚なきまで粉々に打ち砕かれて。

「……はあ」

あとには積もる土くれと、血みどろの狩人だけ。ジエヴオーダンは雫をパンパンと払い、狩りの余韻に浸っている。

だが、所詮はまがい物。フーケそのものを倒したわけではないし、悪夢にフーケがいようはずもない。これも、ただ悪夢が見せるだけのもの。

まだ、この悪夢には何かがあるはずだ。こんなものを見せる為だけにあるような空間とは思えない。まだ、先があるはずだ。

悪夢には、様々な見覚えのあるものが吹き溜まる。それが自分の知りうる姿であれば、ある程度歪んだ形をしても察しはつく。

しかし、崩れた宝物庫の塔の中に別の景色が見えて、流石にその認識を変えることになった。

「本当にとんでもねえな、悪夢ってのは……アルビオン城、だよな？」
「そのようだ。なるほど、次はそこか」

崩れた宝物庫のがれきを登り、中に入る。間取りの大きさも、外から見た塔の大ききでさえもめちやくちや。周囲はまさに、アルビオンの城そのもの。だが当然そこに、人の姿などありはしない。

そして、すでになんとなくどこを指すべきなのかは察しがついていた。この悪夢は、そもそもそこから始まっているのだ。

「んで、どこへ行くんだ？」

「礼拝堂、ワルドを倒したあの場所だ」

崩れた瓦礫をかき分け、ようやく姿を現した礼拝堂の扉をゆっくりと開け放つ。

ついさっきまでいたはずの、礼拝堂。だがそこにはルイズも、斃れたウエルズもない。

だが、先客があつた。それはつい先ほど打ち倒したばかりの、醜い獣の姿。

「ワルド……いや、その偏在か」

その目から赤い光をこぼしながら、偏在は剣を振り上げる。

全部で4体。だが、すでにこんなものはジエヴオーダンの敵ですらない。

散弾銃が火を噴き、飛び上がっていた偏在を撃ち落とす。その偏在が地面に落ちるよりも早く、2体の偏在が斬り裂かれる。

残った一体は、ジエヴオーダンの背後から迫っていた。その姿が偏在の視界から消えた。

偏在は狩人を探して振り返るが、その視界には誰もいない。直後、その背中に衝撃を受けて、膝をつく。

背後に回ったジエヴオーダンが、偏在の背中にその手を突き入れていた。腕を振りかぶり引き抜けば、偏在は血を撒き散らしながらゴロゴロと転がっていく。

その手に握られた一本の背骨が、偏在と共に消えていった。

「さすがだな、相棒。あつさりしたもんだ」

「一度倒した相手だ。遅れをとるはずもない。さて……」

静まり返る礼拝堂。続く道は、どうやらここで終わっている。

「一体、俺に何を見せたいんだ……？」

悪夢の果て、ジエヴオーダンは次の呼びかけを待つばかりだった。

トリステインの王宮はブルドンネ街の突き当たりにある。王宮の

前には、当直の魔法衛士隊の隊員たちが幻獣に跨り闊歩している。戦争の噂は2、3日前から流れ始めていた。アルビオンを制圧した貴族派『レコン・キスタ』が、トリステインに侵攻してくるといったものだった。

そのせいで衛士隊の空気もピリピリしたものになっていた。王宮の上空は、幻獣、船問わず飛行を禁じられ、門をくぐる人物のチェックも厳しかった。

それ故、王宮の上に1匹の風竜が現れたとき、警備の魔法衛士隊は色めきだった。

マンティコアに騎乗したメイジたちが風竜めがけていつせいに飛び上がる。風竜には5人の人影があり、しかも竜は巨大モグラまでくわえている。

隊員たちが飛行禁止区域であることを大声で告げてもそれを無視し、風竜は王宮の中庭へと着地した。

マンティコアにまたがった隊員たちが一斉に周囲を取り囲んだ。腰からレイピア状の杖を引き抜き、いつでも呪文を詠唱できる臨戦態勢に入る。

「杖を捨てろー!」

ごつい体にかめしい髭面の隊長が、大声で侵入者たちに告げる。

ルイズたちは一瞬むつとした表情を浮かべたが、タバサが首を降つて「宮廷」と告げると、しかたないとばかりにうなづいて杖を地面に捨てた。

キュルケが胸の谷間から杖を引き抜く動作で隊員たちを釘付けにしながら、小声で愚痴をこぼす。

「随分な扱いねえ……お姫様の極秘任務とやらなんでしょ? もうちよつと扱い良くてもいいんじゃない?」

「……………」

「ちよつとル〜イ〜ズ〜、あなたまだぶすくれているの? ダーリンは確かに『すぐ戻る』って言ったのよ。絶対大丈夫よ!」

ルイズは杖を捨てても、デルフリンガーはぎゅつと抱きしめて離さ

なかった。

ルイズたちが乗った風竜が王宮に着く少し前。
揺れる風竜の背の上、ルイズは目を覚ました。

ルイズは自分が、キュルケに抱きかかえられていることに気づいた。風竜の尻尾の付け根のあたりに、自分を抱えたキュルケは座っている。物憂げな表情でどこか空を見つめていたが、やがて目を覚ましたルイズに気が付いた。

「あら、起きたのね。大丈夫？ どこか怪我してないかしら」

「キュルケ……？ 私、何か……」

何か、大事な夢を見ていた気がする。

頬に風があたり、もうこれが夢ではないことを告げている。してみると、自分は助かったのだ。

ルイズの心の中を、熱い何かが満ちていく。

あの裏切り者の、ワルドに殺されそうになった時何か起きた。自分は失神して、それから、それから……。

とてもとても大事な夢を見ていた気がするのに、それがなんであつたかどうしても思い出せない。思い出そうと思考をぐるぐると巡らせているうちに、そこにあるべきはずの影が一つ、足りないことに気がついた。

「……！ ジェヴオーダンは、あいつはどこ!？」

「ちよつとルイズ、落ち着いて。ダーリンは遠くには行つてないわ」

「ど、どこ!?! どこいったの!？」

「(ハハ)や」

答えたのはギーシユだった。彼が手に持っていたのは、外でもないデルフリンガー。だが、ルイズの知っているその姿とはすでに大きく違っていた。錆びついてボロボロだったはずの剣は新品のようにピカピカで、うっすらと青白い光を帯びている。

「ど、どういふこと？ あいつが、どこつて？」

「彼は、どういうわけか知らないけど剣の中に消えちゃったの。預かっていて欲しいって言われたわ、すぐに戻るとも言ってた。しなければいけないことが、できたそうよ」

「……………」

わけが、わからなかった。

当然と言えば当然だ。剣の中に消えたとはどういうことなのか。そも、あいつがしなければいけないことなんて、一体？

ルイズはギーシユから剣をぶんどると、その柄の部分を引き抜く。デルフリンガーはいつもこうやって、話すことができるようになったはずだ。

「デルフリンガー、答えなさい。あいつはどこにいったの」

「だめさ。僕たちも話しかけてみたんだが、何も答えてくれない。何も言わないんだよ」

「何よ、なによ、それ」

ルイズは剣を掴んだまま、わなわたと震える。いろんな気持ちがいっぺんに湧き上がってきていた。

自分が気を失っている間に、少なくともあいつに、何かがあったらしい。

どうしても思い出せない、大切な夢。自分たちは助かった。でも王軍は、おそらく負けたのだろう。

ウェールズも、死んでしまった。

助かった喜びと悲しみと、そしてそれを最も分かち合いたい、使い魔の不在。ルイズは不安ではちきれそうになった。

裏切り者のワルド。死んでしまった皇太子。勝利を収めた貴族派『レコン・キスタ』。

王女に、伝えなければならぬこと。ルイズは胸元の手紙に手を当てて、そこにある別のものの感触に、ポケットの中を探った。

出てきたのは、大粒のルビーの指輪だった。忘れようはずもない、それが誰のものであったのか。

「……………バカ」

ジェヴオーダンは、行けと言っているのだ。少なくとも彼が戻って

くるまでの間、わずかとはいえ、1人で。

「ルイズ、あなた……」

「バカ……バカ……バ、カ……」

ルイズの目から、大粒の涙がポロポロとこぼれ出した。不安も恐怖も寂しさも、何もかもひっくりくるめたような熱い涙だった。

あいつはまた、1人で行ってしまった。ワルドとの結婚式の時だった、あいつは自分になんの言葉もなく行ってしまった。もう最後に顔を見たのがいつだったのか、それすら思い出せないほどだ。

「なんで、どうして……1人で行ってっちゃうのよ……」

ルイズの涙が、風のルビーに落ちる。ルイズの指にはめられた水のルビーとの間に、涙で小さく虹の光がかかった。

「今現在、王宮の上空は飛行禁止だ。ふれを知らんのか？」

隊長の大声が響き渡る。ルイズは少しの間悩んだが、どうやら自分が行かなければ話にならない様子だった。

桃色がかったブロンドの髪を大きくたなびかせ、とんつと軽やかに竜の上から飛び降りる。そしてマンティコア隊へ向けて、毅然とした声で名乗った。

「わたしはラ・ヴァリエール公爵が三女、ルイズ・フランソワーズです。怪しいものではありません。姫殿下に取り次ぎ願いたいわ」

隊長は口ひげをひねり、ルイズを見つめた。ラ・ヴァリエール公爵夫妻といえば、高名な貴族だ。隊長は掲げた杖を下ろした。

「ラ・ヴァリエール公爵さまの三女とな」

「いかにも」

「……なるほど、見れば目元が母君そっくりだ。して、要件を伺おうか？」

「それは言えません。密命なのです」

「では、殿下に取り次ぐわけにはいかぬ。要件も尋ねずに取り付いた日にはこちらの首が飛ぶからな」

困った声で、隊長が言った。そしてそのまま、目線はルイズの手元

に移る。

そこには、無骨な巨大な剣。どう考えても貴族の持ち物とは言えないだろう。更に言えば、杖は命令通り捨ててもこの剣は捨てずにその手に持ったままだ。その妙な姿を見て、隊長が目配せをする。一行を取り囲んだ魔法衛士隊たちが、再び杖を構えた。

「申し訳ないが、ひとまずあなた方を捕縛させてもらおう。貴公が本当にラ・ヴァリエール公爵さまの子女であるかどうかも、確かめねばならないからな」

「っー」

ルイズが顔をしかめる。隊長の一言で隊員たちが一斉に呪文を唱えようとした、その時だった。

宮殿の入り口から、鮮やかな紫のマントとローブを羽織った人物が、ひよっこりと顔を出した。そして魔法衛士隊に囲まれたルイズの姿を見て、慌てて駆け寄ってくる。

「ルイズー」

駆け寄るアンリエッタの姿を見て、ルイズの顔がぱあつと輝いた。

「姫さまー」

2人は一行と魔法衛士隊が見守る中、ひっしと抱き合った。

「ああ、無事に帰ってきたのね。うれしいわ。ルイズ、ルイズ・フランソワーズ……」

「姫さま……」

ルイズの目から、こらえていた涙が再びぼろりとこぼれた。

「件の手紙は、無事、このとおりでございます」

ルイズはシャツの胸ポケットから、そつと手紙を見せた。アンリエッタは小さく息を飲み、そして頷いて、ルイズの手をかたく握りしめた。

「やはり、あなたはわたくしの一番のおともだちですわ」

「もったいないお言葉です、姫さま」

しかし、一行の中にウェールズの姿が見えないことに気づいたアンリエッタは、たちまち表情を曇らせた。

「……ウェールズさまは、やはり父王に殉じたのですね」

ルイズは目をつむり、神妙に頷いた。

「……して、ワルド子爵は？ それに、あなたの使い魔さんも。姿が見えませんが、別行動を取っているのかしら？ それとも、まさか……敵の手にかかって？ そんな、お2人に限って、そんなはずは……」ルイズは表情を曇らせる。そして、言いにくそうにアンリエツタに告げた。

「ワルド子爵は、裏切り者でした、姫さま。ジエヴオーダンは……」
「裏切り者？」

アンリエツタの顔に陰がさす。そして、そんな自分たちを興味深そうに見つめる魔法衛士隊に気がつき、アンリエツタは説明した。

「彼らはわたくしめの客人ですわ、隊長どの」

「さようですか」

アンリエツタの言葉に隊長は杖を納め、隊員たちを促しふたたび持ち場へと戻っていった。

それを見届けると、アンリエツタは再びルイズに向き直った。

「道中、何があつたのですか？ ……とにかく、わたくしの部屋でお話しましょう。他のかたがたは別室を用意します。そこでお休みになつてください」

そうしてルイズたちは、王宮へと入っていく。ルイズはデルフリンガーをきゅつと抱きしめた。切なさを乗り越える覚悟が、勇気が少しでも欲しかった。

礼拝堂のジエヴオーダンが異変に気づいたのは、背筋を冷たい気配がサーつと駆け巡ったからだだった。

「……？」

「相棒、どうした？」

「いや、なんでもない。それよりも、だ」

行き止まりとなっていた礼拝堂。床に空いていた、ヴェルダンテが開けた穴も見当たらない。どうやら本当に道が終わっているようだ。

「デルフ。お前の『導き』もなしか」

「ああ、特に何も言ってこねえなあ。なあ相棒、あんたはここが、悪夢の世界だつて言ったかい？」

「そうだ。どうやらお前の中に眠っていたらしい、何者かの悪夢の記録だ」

「俺の中？ どうしてそんなものが俺つちの中にあるってんだ」

「そんなこと、俺が聞きたい」

変化を待つしかないジエヴオーダン。しかし、デルフリンガーはとうやら腑に落ちないらしい。ふーむと唸り、再び鏢をガチガチと鳴らした。

「なあ相棒、悪夢ってのは『誰かが見たもの』だつて？ だったらこの世界は、俺を持ってた誰かが見たものだっていうのかい？」

「……あるいは、お前が見たものつてことも考えたんだがな。どうやらそれもアテが外れた。お前はギーシユのゴーレムを知らないからな」

「だったらやっぱり、俺を握ってた奴の悪夢かい？ でもよ、それつて変だろう。ここまで辿つてきた道は、まるでおめえの記憶みたいじゃないか」

「……そう、だな」

薄々、ジエヴオーダンはこれが自分の悪夢なのではないかと思いつめていた。

だが、違う。ところどころ相違点がありすぎる。はじめに目にした、あの奇妙な街並みは一体なんだったのか。ギーシユのワルクユールが、ノコギリではなく剣で切り裂かれたような壊れ方をしていたのは何故なのか。フーケのゴーレムは何故、炎に巻かれていたのか。

様々な点で自分の記憶と、似ているが違う。一体これが、誰の悪夢なのか。何故デルフリンガーの導きは、自分にこれを見せたいのか。

「……なあ、相棒」

「ああ、わかってる」

だが、考えてる暇がなくなったのが早かった。

先ほど感じた、冷たい気配。それがより色濃くなって近づいてきた。迎え撃つためにデルフリンガーを抜く。だが、当のデルフがガチ

ガチと震えた。

「相棒、ちよつと待ってくれ。この気配は、なんか妙じゃないか」

「確かに、大物の気配だ。これまでのようには……」

「違う、そういうこと言ってるんじゃない。これはなんか……とんでもないもののような……」

その時だった。重たく、冷たい音が彼方から響き渡る。その出どころはどうやら礼拝堂の外のようなようだ。

何者かがやってきた。自分たちのいる、この礼拝堂に近づいてきているようだ。

「……相棒、なあ」

「なんだ、デル公」

「逃げよう」

「なんだと？」

「逃げたほうがいい。何か、まずい予感がするんだ。何か思い出しそうなんだよ、でもすぐく、まずい気がするんだ」

気配がどんどん近づいてくるのがわかる。散弾銃を左手に構え、迎撃の準備は整っている。デルフリンガーだけが、いつまでたつてもガチガチと震えたままだった。

「相棒、相棒よう」

「うるさいぞ！ 敵なら倒せばいい、大抵のものは俺にはどうにかなる！」

「違う、そういうものじゃないんだ。ああ、ああ、あれは……」

そして、衝撃は突然だった。

礼拝堂の壁が轟音と共に崩れ、外から烈風が飛び込んできた。

「!？」

その強烈な風と共に、ジエヴオーダンに飛びかかってきた『影』。

強烈な突進を間一髪で受け止める。が、あまりの衝撃に弾き飛ばされた。着地と同時に受け身を取り、飛び込んできた影を見据える。と同時に、デルフリンガーがひとときわ大きくガチリと震えた。

「思い出した、ああ、思い出した！」

「デル、フ？」

「相棒だめだ、あれには近づいちゃならねえ。逃げるんだ、相棒」

その異様な影は、全てが『赤』だった。

身にまとうものも、皮膚も、髪の毛の一本に到るまでも血みどろのよう
な『赤』。その気配ですら、赤くオーラを纏って見えるほどの『赤』。

その姿は、まだ少年のように見えた。赤黒い影に纏われてその表情
までは窺い知れないが、片手には長剣を持ち、ゆっくりと体を起こし
てこちらを向いた。

ジェヴォーダンには、絶句した。少年の姿にはではない。その手に握ら
れた、これまた真っ赤に染まった長剣。

「あれは『闇霊』だ。あれに関わっちゃならねえ、相棒。近づいちゃだ
めなんだ」

それは血にまみれたような赤の、デルフリンガーそのものだった。

19：夜

アンリエッタの居間。小さいながらも精巧なレリーフの施された椅子に腰掛け、アンリエッタはルイズの言葉をじつくりと紐解くように耳を傾けていた。

道中、キュルケたちと合流したこと。

アルビオンに向かう船で、空賊に襲われたこと。

ジエヴォーダンの機転で、その空賊がウエールズ皇太子だったとわかったこと。

ウエールズ皇太子に亡命を勧めたが、断られたこと。

そして、ワルドと結婚式をあげるため、脱出船に乗らなかつたこと。結婚式の最中、ワルドが豹変し……ウエールズを殺害し、ルイズが持つ手紙を奪い取ろうとしたこと。

しかし、実際には手紙は取り返してきた。『レコン・キスタ』の野望のため、トリステインとゲルマニアの同盟を挫くという企みは未然に防がれたのだ。

にも関わらず、その報告を聞き遂げたアンリエッタは……悲嘆の表情を浮かべた。

「あの子爵が、裏切りもの……まさか、魔法衛士隊に裏切り者がいた、なんて……」

アンリエッタは、ボロボロになった手紙を見つめ、俯いた。はらはらと、その頬に大粒の涙がったう。

ルイズは黙って、アンリエッタの手を握った。

「姫さま……」

「わたくしが、ウエールズさまのお命を奪ったようなものだわ。裏切りものを、使者に選んでしまった……なんて、わたくしはなんていうことを……」

「姫さま、皇太子は亡命のお誘いを断られました。もとより、アルビオンに残るおつもりだったのでしよう」

「……ならば、ウエールズさまは……わたくしを愛して、おられなかつたのね」

「……姫さま、やはり、手紙で皇太子に亡命をお勧めになったのですね？」

悲しげに手紙を見つめ、アンリエッタは頷いた。

ルイズはウエールズの言葉を思い出す。彼は「アンリエッタは亡命など勧めていない」と否定していた。やはりそれは、嘘だったのだ。

「ええ。死んでほしくなかったんだもの。愛していたのよ、わたくし」

それからアンリエッタは、呆けた様子でつぶやいた。

「わたくしより、名誉のほうが大事だったのかしら」

ルイズは、あまりにもいたたまれない気持ちでいっぱいになった。愛するものを失った悲しみ、それは果たしていかほどのものか。

ウエールズは名誉を守ろうなどと、アルビオンに残ったのではない。ルイズにはそれがわかっていた。それでも、それをどうアンリエッタに告げたらいいのか。ルイズには、正しい言葉など思いつかなかった。だから、ただただいたたまれなくて、切なくて、胸が張り裂けそうなほどだった。

「姫さま……わたしがもつと強く、ウエールズ皇太子を説得していれば……」

「いいのよ、ルイズ。あなたは立派にお役目どおり、手紙を取り戻してきたのです。あなたが気にする必要はどこにもないのよ。それにわたくしは、亡命を勧めてほしいなんて、あなたに言ったわけではないのですから」

それからアンリエッタは、にっこりと笑った。

「わたくしの婚姻を妨げようとする暗躍は、未然に防がれたのです。わが国はゲルマニアと無事同盟を結ぶことができるでしょう、そうすればアルビオンも簡単に攻めてくるわけにはいきません。危機は去ったのですよ、ルイズ・フランソワーズ」

アンリエッタが努めて明るい声を出しているのを、ルイズは感じ取っていた。

せめて、何かできないのか。あいつなら、こんな時どうするだろうか。

そう思って、預かりものの存在を思い出した。

「姫さま、これをお返しいたします」

そう言つて、ポケットからアンリエッタにもらった水のルビーを取り出す。しかし、アンリエッタは首を振った。

「それはあなたが持つていなさいな。せめてものお礼です」

「こ、こんな高価な品をいただくわけにはいきませんわ!」

「忠義には、報いるところがなければなりません。いいから、とつておきなさいな」

ルイズは頷いて、そして恭しくそれを指にはめた。

そして、預かりものはこれだけではなかった。ルイズは今度は、ポケットから風のルビーを取り出した。

「姫さま、これ……その、皇太子さまから、預かったものですわ」

本当は、いつのまにか自分のポケットに手紙と一緒に入っていたものだ。誰がこれを自分に託したのか。それは容易に想像がつく。

アンリエッタはその指輪を受け取ると、大きく目を見開いた。

「これは……ウエールズさまが、わたしに?」

「はい。最後に、これを姫さまに、託されました」

精一杯の嘘。それでも、慰めになるのなら。

アンリエッタは、風のルビーを指に通した。男手のものだったのでゆるゆるだったが……小さく呪文を呟くと、指輪のリングがすぼまり、薬指にピタリとおさまった。

アンリエッタは、その指輪を愛おしそうに撫でた。そしてルイズを見て、悲しく、寂しく、はにかんだ笑みを浮かべた。

「ありがとう、優しいルイズ……わたしは、生きようと試みなければならぬわね。あの人の分まで」

それでもアンリエッタの表情に、ほんの少しだけ光が戻ったような気がして、ルイズも小さく笑みを浮かべた。

そして、少し余裕ができたからだろうか……アンリエッタも、気にかかっていたことを口にした。

「そういえば……あなたの、使い魔さんだけけど」

アンリエッタは、ルイズの抱える剣を見つめる。アンリエッタの脳裏には、最悪の構図が浮かんでいた。

「その、ルイズ……わたくしも、励ましてもらってばかりではいられないの。どうか、わたしには打ち明けてはくださらない？」

「……え、あ、姫さま？ 何か、勘違いされています。あいつは生きています、たぶん……」

「たぶん？」

ルイズはなんと説明したらいいものか、返答に困った。なにぶん自分も、使い魔がいったいどういう状況にあるのか、把握しきれていないのだ。

「そもそもどうやらワールドを倒したあと、何かあつたみたいで。あいつは今、剣の中にいるらしいんです」

「剣の、中？ ルイズが持つてる、その剣の？」

「はい、あの礼拝堂でワールドを倒して、それで……」

ルイズの脳裏に、ピリツと何かが思い浮かぶ。

「……？」

礼拝堂で、自分は気絶して。それでそのあと……どうなったんだっただか。

ずっと気を失っていて、そこで確か、何か……何かが、いたような気がするのだ。ジエヴォーダンでもない、ワールドでもない。何か、誰かと話をした。そんな夢を見たような……。

しかし、どうしても思い出せない。どうして、思い出せないんだろう。

固まったルイズを、アンリエッタが心配そうに覗き込んだ。

「ルイズ……あなたにも、何か大変なことが起きたのね」

「……私にも、わからないんです……」

ルイズは、その胸に物言わぬ剣を抱いて、か細い声でそう呟いた。

かつて名城と謳われたニューカッスルの城は、惨状を呈していた。城壁は度重なる砲撃と魔法攻撃で、瓦礫の山となり、無残に焼け焦げた死体は地面を埋め尽くして山と積まれている。

攻城に要した時間はわずかであった。が、反乱軍『レコン・キスタ』の損害は、さまざまな想像の範囲を超える結果となった。

三百の王軍に対して、損害は二千。けが人も合わせれば、四千。戦死者数だけみれば、どちらが勝者なのかわからないほどだ。

アルビオンの革命戦争の最終決戦、ニューカッスルの攻城戦は、100倍以上の敵軍に対して、自軍の10倍にも登る損害を与えた戦い……伝説となったのであった。

だがこれは、戦での損害のみだ。

今や、アルビオンには人の影はない。ニューカッスルの城の跡地ですら、積み上がるのは死体の山ばかり。

王軍に対して受けた損害は、四千。だが、その「後」に受けた損害は、およそ四千……これは、負傷者を含まない死者の数だ。

アルビオンに突如出現した、巨大な獣……それが、ニューカッスルを占拠した反乱軍の兵士たちに襲いかかったのだ。

『黒風の獣』と名付けられたその獣によって、王軍は壊滅的な出血を強いられることとなった。まるでそれは、攻城によって打ち倒された王軍の怒りが、似姿となって現れたようだ、兵士たちの間でまことしやかに囁かれるほど。

だが、結果として『黒風の獣』は打ち倒された。獣を倒したのは、結局のところ兵士の「数」であった。四千もの死者を出し、それでもなおその分手傷を負わせ、なんとか追い込んでいき……そしてとどめに、ニューカッスルから船で渡ってきて合流したフーケも加勢して、獣を『撃退』するに至ったのだ。

『撃退』とは要するに、殺すにまでは至らなかったということ。風を巻き起こす青黒い獣は、フーケの巨大なゴーレムに怯み、退いた。そして城からそう離れていない森の中へと姿を消していったのだ。

それでも、虐殺の限りを繰り返した獣を退けたフーケの存在は、兵士たちの士気を湧き上がらせた。歓声の中で、フーケは面白くなさげに振り返り血を拭った。口にまで飛び散った血が妙に甘ったるくて吐き気を催す。

「つたく……なんだって、私がバケモノ退治なんかにつき合わされな

「ければいけないんだい」

「だが確かに、凶悪なまでに恐ろしい獣であった。」

様々な魔法生物を相手にしたことがあるが、こんなものは初めてだ。凄まじい速さで動き回り、疾風のようなものを起こして人を軽々と弾き飛ばす。聞くに耐えない醜い雄叫びをあげたかと思うと、今度は悪鬼のごとく荒れ狂う。

負傷していたのか左腕を欠いていたのだけが救いというもので、それがなければ今だってどうなっていたかわからない。それほどの、凶悪な獣だった。

『……獣め』

脳裏に、嫌な奴の顔が思い浮かぶ。

人を獣呼ばわりしてくれた、あのいけ好かない青年。そもそも奴を殺すことが、このアルビオンにおいてフーケの最大目標だったというのに、どうやらそれも叶わずとなってしまったようだ。

ワルドの協力あってすれば、はたしてどうとでもなったはずなのに……そういえば、ワルドの姿を見ていない。まさかあんな獣にやられちゃいないだろうか……。

そんな風に考えていたおり、突然後ろから、快活な、澄んだ声が響き渡った。

「おお！ ついにあの醜悪な獣を退けてくれたのかね！ かねてから聞いていた噂通りの実力だよ、ミス・サウスゴータ！」

それは、かつて捨てた貴族の名。冷えた表情を精一杯の笑みでごまかし、フーケは振り返った。

「ワルドに、わたしのその名前を教えたのは、あなたなのね？」

ルイズたちが魔法学園に帰還した3日後、正式にトリスティン王国王女アンリエッタと、帝政ゲルマニア皇帝ログエリウス3世との婚姻が発表された。式は一ヶ月後に行われるはこびとなり、それに先立ち、軍事同盟が締結されることとなった。

同盟の結婚式はゲルマニアの首都、ヴィンドボナで行われ、トリステインからは宰相のマザリー二枢機卿が出席し、条約文に署名した。アルビオンの新政府樹立の公布が為されたのは、同盟締結式の翌日。両国にすぐに緊張が走ったが、アルビオン帝国初代皇帝、クロムウエルはすぐに特使をトリステインとゲルマニアに派遣し、不可侵条約の締結を打診してきた。

両国は協議の結果、これを受けた。両国の軍事力を合わせてもアルビオンの艦隊には対抗しきれない。未だ軍備の整わぬ両国にとってこの申し出は願ったりであった。

ハルケギニアに、表面上の平和が訪れた。普通の貴族や平民たちにとっては、いつもと変わらぬ日々が待っていた。それは、トリステイン魔法学院でも例外ではない。

だがこの時まさに、濁り水はゆつくりと流れていた。まさに魔法学園、ルイズの教室の、その剣の中で。

そんなことなどつゆ知らず、アルビオンから帰ってきたルイズたちが教室に入っていくと、すぐにクラスメイトたちに囲まれた。ルイズたちは学園を数日間開けていた間に、なにか危険な冒険をして、とんでもない手柄を立てたらしいともっぱらの噂だった。

実際、魔法衛士隊の隊長と出発する姿を何人かの生徒たちが見ていたのである。クラスメイトたちは、それを聞きたくてうずうずしていたのだった。

「ねえルイズ、あなたたち、授業を休んでいったいどこ行っていたの？」

腕を組んで、そう話しかけたのは香水のモンモランシー。

クラスメイトたちは、押しても引いても自分のペースを崩さないキュルケに業を煮やし、ギーシュとルイズに矛先を向けたのである。

ギーシュは取り囲まれてちやほやされ、調子に乗ったらしい。あっはっはと笑って足を組み、人差し指を立てたので、ルイズに頭をひっぱたかれた。

「なにをするんだね！」

「口が軽いと魔法を失敗させて吹っ飛ばすわよ、ギーシュ」

凄まじい剣幕である。ギーシュは黙る他なかった。そんな様子を見ていたクラスメイトたちはますます「なにかある」と確信したらしい。ルイズを取り囲んで質問せめに合わせた。

「ルイズ！ いったい何があったんだよ！」

「何もどうもないわよ。ちよつとオスマン氏に頼まれて、王宮にお使いにいつていただけ。ギーシュ、キュルケ、タバサ。そうよね？」

キュルケは意味深に微笑を浮かべ、ギーシュは頷き、タバサは本を読んでいた。

取りつく島もないため、クラスメイトたちはつまらなさそうにため息をつき……そして今度は、また別の話題でルイズに詰め寄った。使い魔の不在である。

「おいルイズ、お前の使い魔はどこにいったんだ？」

「……！ そ、それは……」

何やらお忍びで学院を出て行き、帰ってきてみれば、ルイズの使い魔の姿が見えない。普段ルイズをバカにしている生徒たちにとってこれほどの話題は存在しなかった。

「おいゼロのルイズ！ お前さては、あの平民に逃げられたんだろ！」

「やっぱりあの木こり、召喚できなかつた代わりに呼んできただけだったんだな？」

「お忍びで出てったのは、もしかしてお役御免ってわけ？」

教室で口々に浴びせかけられる、様々な嘲笑や嘲りの言葉。当然、わめき散らして否定するのを期待してのことだったが……ルイズは、全くの無反応だった。

ルイズの同級生たちは、これまた不思議がった。皆の知るルイズというのは、魔法の使えない劣等生だというのにプライドばかり高く、こういう侮辱を無視できるような性格ではなかったはずだった。

実際には、ルイズは使い魔がどこへ行っているのか、それはわかっていてもどうすることもできずにいる。だがそんな事情などクラスメイトたちが知りうるはずもない。

「ねえルイズ、聞いているの？ ちよつとー、ゼロのルイズー、お耳までゼロになっちゃったのかしら？」

他の生徒たちが様子を見る中、見事な巻き毛を揺らして、モンモランシーが嫌味つたらしく言った。

「まさか、本当に使い魔に逃げられちゃったわけ？ あっはははは！
まあでも、魔法のできないあなたですもの、使い魔を呼ぶべくたつて仕方ないわよね！ それとももしかして、あの平民の方から愛想尽かされちゃった!? それはちよつと可愛そうだけど、でもまあ仕方ないわよねー！ なんてつたつてあんたは、魔法成功率ゼロ、の……」
だが、その嫌味は最後まで続かなかつた。モンモランシーの沈黙に、他の生徒たちはなんだなんだとルイズを覗き込む。そして、驚愕した。

俯いたルイズの目元からこぼれ落ちる、大粒の涙。これまでどれ程バカにされようと、嘲りをうけようと、決して見せたことのない涙。声押し殺して泣くその姿に、モンモランシー含め全員が、とてつもない過ちを犯したのだと確信した。

続くように、教室中にバアんと、誰かがテーブルに手を叩きつける音が響き渡る。驚いてそちらを見やった生徒から、「ひっ」と小さな悲鳴が上がる。

モンモランシーは、恐るおそる振り返る。髪の毛が逆立つほどの怒りのオーラを身にまとったキュルケが、モンモランシーを睨んだ。キュルケがああのもにも惚れ込んだらしいという噂がずいぶん前に立っていたのを、今更になって思い出した。

「……香水のモンモランシー」

焚き木が鳴るような声が静まった教室にこだまする。「はいっ」とモンモランシーが、声にならない音で返事をした。

「それ以上ジエヴオーダント、それとルイズを侮辱して御覧なさい……私の炎なら、香水なんて雫一つ残さず蒸発させてやるわよ」

「……は、ひ」

もはや涙を浮かべて震えるモンモランシー。だが、一番驚いているのは、涙で顔を濡らしたルイズだった。

あのキュルケが、自分をかばってあんなことを言うだなんて。涙を忘れて、キュルケを見つめた。

そして怒れるキュルケの隣に腰掛けるタバサが、「どうどう」と彼女の顎を撫でる。キュルケはボソツと「誰が牛よ」と呟くと、何事もなかったかのように爪をいじりだした。

緊張から解放されたモンモランシー、およびルイズをバカにした生徒たち。しかし、さらに意外な方面から追撃が飛んできた。

「私も、香水なら一瞬で凍りつかせる」

他にもない、キュルケをなだめたタバサだった。いつも本を読み、あるいは黙って教室を出てサボっているばかりのタバサが、滅多に発することのない言葉。それは二つ名の「雪風」に恥じない、凍えるような殺気をたたえた脅しかけの言葉だった。モンモランシーはもはや、意識すら失いそうなほどである。

キュルケもルイズも驚いてタバサを見やる。タバサは言うことは言ったとばかりに、読書を再開した。

モンモランシーは震える声で、ギーシュに継り付いていった。

「ギーしゅううう……」

「も、モンモランシー、怖かったろう。僕がついているさ。ただ、その……」

ギーシュは非常に罰が悪そうに、もごもごと呟く。

「あのー、あまり彼を悪く言わないでほしいというのは、実は僕も同意見でだね。その、彼をただの木こりだったと言うことにしてしまうとだね、僕は木こりに負けたメイジってことに、なってしまっただがね……」

無念、モンモランシーは発狂した。見事に真後ろにばったりと倒れて気絶した彼女にギーシュがすがりつき、「ごめんよおお目を開けてくれモンモランシイイ」などと叫んでいる。

ギーシュは放っておいて、ルイズはキュルケとタバサを見た。二人ともすっかり自分の世界に入り込んで、こちらの視線にも気づかない。だが少なくともルイズは、胸に熱いものがこみ上げるのを感じていた。

だが、この日の騒動はこれで終わっていなかった。授業も終わって

すっかり夜も更けた頃、ルイズは自室で着替えを済ませながら物憂げにため息をついていた。

今までであれば、脱いだ着替えをテキパキと片付け翌朝の洗濯に備える使い魔の姿がそこにあるはずだった。奴は眠りもせず机に伏して、朝まで黙々と何かを学ぼうとしていた。そして、ルイズが目覚めるまでには朝の準備を完璧にこなして、ルイズの寝るベッドのシーツを引っぺがすのだ。

だがその姿は、今やこの部屋にはない。

かつて、ジエヴオーダンが壁にノコギリを突き刺してできた穴。今となつては、使い魔がこの部屋に残した痕跡はこれぐらいになつてしまった。

「……………」

一体どうして、あいつは行つてしまったのだろうか。そりゃあ、キュルケから聞いた話だけでも何か起きたことはわかる。自分が気を失っている間に、どれだけのことが起きたのだろう。思いをはせても、わかることは一つとしてない。

壁についた傷を指でゆっくりと撫でる。あいつが使い魔として召喚される前は当たり前だった静寂が、何故か今は恐ろしく寂しく感じられた。

「……ジエヴオーダン」

思わずそう呟くのと、ルイズの部屋の扉がバターンと開かれるのは同時だった。

「ひゃあっ!?!」

「ルイズ、邪魔するわよー」

そこにいたのは、昼間自分をかばってくれたキュルケ……と、その小脇に抱きかかえられたタバサ。タバサは抱えられたままでも分厚い本に目を落としていた。そしてキュルケがもう片方の腕に抱えたバスケットからは、ワインの瓶が頭を出していた。

「きゅ、キュルケ!? 何よ突然!」

「何よとはなによ、遊びに来てあげたんじゃない。相変わらず色気のない部屋ねえ、ダーリンが帰ってきた時のこと考えて少しくらい綺麗

にしておきなさいよ」

そもそも鍵をかけていたはずなのに……というルイズの疑問をよそに、キュルケはルイズの部屋にバスケットをぼんと置くと、タバサと共に当たり前のようにくつろぎはじめた。

「はあー、最近やつとちよつと涼しくなってきたわね。あ、ルイズ、あなたの部屋余分に皿置いてたりしない？ クックベリーパイくすねてきたんだけど取り皿忘れちゃったわ」

「えっ……あ、うん、多分あると思うけど……その、なんで？」

「はい、ワイン。ゲルマニア産よ。ワインはゲルマニアに限るわあ、トリストインのワインはダメなもの、酸っぱいばかりで品がないからね」

キュルケはルイズの言葉に答えず、バスケットからどんどんというんなものを取り出していく。ワインにパイ、いくつか果物にクッキー、チョコレートまである。

ルイズは思わず喉を鳴らした。重ねて言うが、夜中である。年頃の、それも貴族である少女からすれば、あまりにも悪いことである。

「きゅ、キュルケ、いくらなんでもダメよ。今何時だと思ってるの」

「明日は虚無の曜日よ。あとついでに言うなら、長旅で少しひもじい思いもしたじやないの。これくらいはいいのよ、これくらいは。それともこのクックベリーパイ、あなたはいららないのお？」

「うっ……わ、悪い！ 悪い子よキュルケ！ あ、あ、あんまりよ、こんな悪いことして、ゆゆゆゆゆ、許されないわよ！」

口でそう言いながらも、ルイズはすつと席に着いた。完全にパイとワインの誘惑が優っている。

「はい、これで共犯。さ、ワイン開けましょ」

「開いてる」

驚いてタバサを見れば、ワイングラス片手にとくにクッキーに手をつけている。キュルケがその頭を小突いて「ほどほどにね」と囁いた。そしてルイズにグラスを差し出すと、そこにとくとくとワインを注いでいく。

「……あの、キュルケ？ どうして私の部屋に？」

「タバサ、あんた結構いったわね」

「2人の分は残してある」

「2杯分の間違いじゃなくって……？　　まだまだあるからいいけどね」

「きゆ、キュルケ？」

正直、ルイズはかなり困惑していた。そりやそうである。確かにここ最近妙に付き合が増えた感じがしていたとはいえ、相手はあのツエルプストー。ヴァリエール家とは因縁の家系であり、お互いそれは熟知した上でいがみ合っていた関係である。

今日の教室でのことといい、今のことといい、何かおかしい。一体どう言うつもりでこんなことをしているのか。

怪訝に何度も繰り返すルイズの質問を、キュルケがその度にはぐらかす。ルイズは妙に不安な気持ちのまま、とはいえ部屋の静寂が2人の……主にキュルケではあるが……騒ぎ声にかき消されることに、妙な安心感も覚えていた。

「それでね、あの男ったらひどいわけ。私を相手に待ち合わせに30分も遅れて来たのよ？　それでも堂々とするならまだしも、情けない声で平謝りしてくるもんだからもうたまんなくて、私置いて帰ってきちゃったわ。それでね、その次の男が……」

「あの……ねえ！　キュルケ、タバサ」

しかし、どうしても黙ってはおけない。ルイズが声を張り上げると、ようやくキュルケはマシンガントークを止めた。タバサも、本からルイズへと視線を移す。

「その、今日、きよ、教室で、わ、わた、わたしをかかかかか、庇ってくれたのは、その……な、なんで？」

「……………」

「……………」

キュルケもタバサも、ぽかんと口を開けた。そして2人とも……ふっと、微笑んでみせた。

「ま、これはあれね。腐れ縁って事でいいんじゃないかしら？　ダーリンをあんまり酷く言われると私だって腹たっちゃうものね」

「貸し借り」

タバサのひと言にキュルケがズルツと机に額をぶつける。そして「そういうことは言うもんじゃないのよおお」と、その頭をぐしゃぐしゃに撫で回した。タバサは気分良さげに目を細めていて……なんか、猫みたいだ。

「まあ、何、あれよ。気にしたらダメよあんなの。これだけ色々あればあんたの事も分かってくるってもんだわ。だからあんたはいつも通り、ない胸はつていなさいな」

「ただ、誰が、胸ゼロかあ……」

言い返しながらもルイズは自分の顔が真っ赤になっているのを、かつかとした熱で感じる。今まで感じたことのないような、くすぐつたいような不思議な気持ちに胸を満たして……自然と涙が、溢れていた。

「さーて、まあそれは確かに気を使っつてのは1つ。でもそれじゃ半分よ。いい加減私たちくらいには教えなさいよ、ダーリンの事とか、何が起きてたのかとか、全部ね」

「あいつの、事？」

「ただの人間なんかじゃないんでしょ、彼は。初めて彼を部屋に呼んで、瞳の中を見せられた時からわかってたことよ。彼が普通じゃないってことくらいね」

「……………うん。そうね。あいつは……………」

タバサが本を閉じて傍に置く。そして、ルイズの長い長い話が始まった。

夜は更けていく。それぞれの夜の中、アルビオンの森には名状しがたい不気味な雄叫びが響き渡った。

20：慈悲

貴族派の勝利したアルビオンに訪れた、静かな夜。

どちらが勝とうと同じ事だ。戦が終われば、勝利の狂熱も敗北の絶望もさほど後を引かず、やがて静寂だけが訪れる。

そんな静まり返るアルビオンの、とある安宿の一室。静寂とは裏腹に、熱にうなされる者がいた。

原因不明の高熱によつて床に伏した彼女は、その熱と悪夢にうなされ続けていた。

口の中に飛び散った、あの甘ったるい血の味が消えない。傷口に降りかかった返り血が、身体の中で蠢いているかのようだ。

その狂熱の中で、確かな渴きを感じていた。何に對しての渴きなのか、ほのかに気づいていてもそれを認める気にはなれない。

薄ぼんやりと見える宿の一室が、まるで血だまりに沈んでいくかのようだ。

これは悪夢なのだろうか？ それとも熱に浮かされた自分が見ている幻覚なのか？

考えあぐねていると、その血だまりの中で蠢くものがあつた。いや……血だまりから、まるで産まれるかのようにそれは現れた。

大きな、黒い獣のようなものだつた。まるでこちらの様子を伺うかのようにゆっくりと近づいてくるそれは、まるでアルビオンを襲つたあの黒い獣のようでもある。そしてその獣は、振くれた爪の生えたその手を、ゆっくりとこちらへ差し伸べてみせた。

彼女は、薄つすらと確信していた。ああ、これはきつと救いの手を差し伸べているのだ。

この身の渴きが、熱に浮かされた渴望が、一体なんであるのかはわかっているのだ。

きつとこの獣の手を取ればそれが手に入る。飽くなき渴きに任せ……血を貪れるのだ。

置いてきた『あの子』の事も、護らなければいけないことも忘れて。慌てふためく貴族どもの間抜け面も忘れて。

ああ、それは何て甘美で、それは何て魅惑的で、そしてそれは何て……。
たいそう悪い、冗談なのだろう。

次の瞬間、その獣は燃え盛る炎に包まれていた。それは決して驚くべきような事ではない。彼女自身が跳ね除けたのだ。

自分自身のため、そして何より『あの子』のため、こんなところでそんな狂熱に身を任す事など、できるはずがない。初めから論外なのだ。

2度と自分の前にその姿を現わすな。醜い『獣』め。

そう心の中で唱えた時、ふと思いつく顔があった。ああ、もしかしてあの男はこんな気持ちだったのだろうか。狂熱と渇きに身をまかせ、愚かで醜い何者かを、許すことができなかつたのだろうか。

パチパチと音を立てて燃え尽きていく獣を、ぼんやりと見つめる。が、ふと、視界の隅に何かが映った。白くて細い、線のようなもの。

何だろうと目を凝らすと、それは小さな小さな、手のようなものだった。ベッドの淵から伸びたそれが、しっかりとベッドを掴むと、その手の持ち主が身体を持ち上げる。

果たしてこの存在を、なんと形容すべきだろうか。髑髏？ ミイラ？ それともしなびた、人間の赤子？

その小さく白い『何者か』がベッドの淵から登ってくる。ふと視界をずらせば、それは1体ではない。

それどころではない。何体も、何体も、何体も何体も何体も何体も何体も何体も。

彼女はその白いもの達に取り囲まれ、そして気が遠くなっていくのを感じた。自分は今、熱に浮かされたまま、どうなってしまうというのか。

深く沈みゆく意識の中、その暗闇から……今度は人間大の、手のようなものが伸びた。

『……ああ、狩人様を見つけたのですね』

甘やかな声。その手の主のものだろうか。暗闇から伸びた手はゆつくりと、彼女の顔の方へと伸びる。

人間の手のように見えたそれは、人間の手ではなかった。その指の節には、何か丸い球体のような絡線が仕込まれていて、それはまるで、人形のような。

その手が、額に触れた。そして意識は、まるで暗い海に突き落とされたかのように、さらに深くへと沈み込んで行った。

『これよりこの地の月の悪夢へ。どうか狩人様を、お救いください』

「ッ!!」

強烈な衝撃にジエヴオーダンは顔を歪める。

赤黒い少年は、攻め手を一步も緩めずジエヴオーダんに斬りかかっていた。疾風のような斬撃が、しかし岩石よりも重たい。

受け止め、かわし切るので必死だった。隙を見て散弾を放つても、気づけば射程の外にいる。

強い。今まで相手してきたどんな相手とも性質の違う強さだ。技や殺しに訴えかける狩人のやり方や、ただただ暴力的な獣のやり方も違う。

余りにも感情的で、1つ1つは素人臭い。だがその全てに乗る、感情の重みが違う。

怒っている。この赤黒い少年は、何か猛烈な怒りをジエヴオーダンにぶつけているのだ。

「くそっ……!」

もちろん、何1つ思い当たる節がない。ジエヴオーダンはようやく見切れてきた動きの中、返す刃で少年を弾き飛ばした。

わずかに生まれた隙を見逃さず、ジエヴオーダンは鋭く突きを繰り返した。仕留めるつもりで放った一撃。しかし、少年はその突きへ向け、間合いを詰めてきた。

「なっ!」

見切られた。突き出されたデルフリンガーの切っ先を弾き落とされ、足先で踏み落とされる。そして少年の手に握られたデルフリンガーが、ジエヴオーダンのみぞおちより上、胸骨のあたりを砕きなが

ら身体を貫通した。

「ごっ……ッッ!!」

強烈なまでの致命の一撃。喉奥で血が泡を立てる。冷たく激しい痛みが体内を突き抜け、しかしジエヴォーダンを冴えさせる。少年を蹴飛ばすと、突き刺さった剣ごと弾き飛んだ。

「げほおっ、ごあ”あ”ッ!!」

血は足りている。傷は塞がる。だが、溶岩のように湧き上がる怒りと、冴える狩人としての冷静さがせめぎ合いを始めるのを感じる。

殺せ。なんとしても殺せ。だが荒ぶるな。手段はある。冷静になれ。

だが、なお踏み出そうとするジエヴォーダンを、カチカチと鏢を鳴らしてデルフリンガーが止めた。

「ダメだ相棒、ムダだぜ。いくら戦つてもどうしようもない」

「黙っている……お前も俺も、奴の内臓をぶちまけることにだけ集中していればいいんだ」

「違う相棒、殺せはするだろうさ。問題はその後だ。あいつはまたやって来る、何度殺しても、何度でもだ」

「……………」

「元を断つまでどうすることもできないんだ、相棒。あいつは相棒への怒りだけでここまで来た。相棒の持つてるものが欲しいんだ。それを奪い取れるまでこいつは何度だって侵入して来るぞ」

赤黒い影は起き上がり、まだなお向かって来るつもりのようなのだ。赤黒いデルフリンガーを構え、そして飛びかかってきた。それを同じく、デルフリンガーで受け止める。

体格はジエヴォーダンの方が大きくても、得物の大きさは全く同じのはずだ。にも関わらず質量からして違うかのような攻撃に、ジエヴォーダンは顔をしかめる。

「逃げるんだよ相棒！ たとえ殺せたって無駄なんだ、本体はピンピンしてんだよー!」

「逃げられる状況と思うか!? どちらにせよやるしか無いんだ、今はそれだけに集中しろ!」

いなしながらも散弾を放つ。なんとか体勢を崩せるだけでも大幅に違うというのに、まるで動きを読まれているかのようにかわされてしまう。

恐らく埒があかない。ジエヴオーダンは銃を腰に納め、デルフリンガーを両手で構える。少年も、同じように構えてその体勢を低くした。

そして、それ故に少年の左手から、何か光が漏れているのに気がついてしまった。

「……………!?!」

そしてその一瞬の隙を、少年の方は見逃さなかった。激しい踏み込みで一気に近づかれ、真一文字の斬撃が飛んでくる。

だが、ジエヴオーダンも一瞬の判断でそれを受け止めた。刀身を手で押さえ込むように受け止めたため、握り込んだ掌から血が滴り落ちる。

それだけの無理をしても確かめたかった、少年の左手。そこにあったのはやはり、ギラギラと輝く、ガンダールヴのルーンだった。

「貴様、一体……………!?!」

ここまで来れば、もはや類似では済まされない。

自分自身と同じ武器、同じルーン。理屈はわからないが、この男も「ガンダールヴ」だ。

それがどういう事なのか？ ジエヴオーダンはそれをよく知っていた。

重く、冷たい音が響き渡る地下墓。ジエヴオーダンは聖杯によってここに降り立ち、目の前のランタンに火を灯した。

聖杯を拝領せよ。ゲールマンの教えに従いやってきたこの地で、ジエヴオーダンは様々なことを学んだ。

足元をよく見て歩かなければならない。敵は1人とは限らない。いつだってどこからか銃口がこちらに向いており、そして鐘の音が聞こえれば敵はどこまででも追跡してくる。

あまりにも悪意に満ち溢れたこの地で、狩人たちも黙ってやられて
いるわけにはいかない。自分たちなりの対抗手段というものを見て
けて、脅威と相對する。

その1つである、小さな鐘。狩人同士が助け合うための指標でもあ
るそれを、ジェヴオーダンは小さく鳴らした。音が波紋となつて響き
渡り、地下墓にこだまする。

程なくしてそれはやってきた。「協力者」たちだ。

重たい音と共に現れた、自分とは違う狩人の姿。言葉を交わすこと
もなく、ジェヴオーダンとその狩人は一礼を交わした。

否、言葉を交わすことはできなかつた。協力者たちは鐘の音の召喚
に応じてやってくる、これまた異質の存在たちだ。

一説には、これは数多に拡散する世界の1つからやってくる、並行
世界の自分なのだという。自分と同じように何かしらの理由でヤー
ナムへやってきて、血の医療によつて記憶を失い、狩人となったもの。
単なる他の狩人とは違い、それは拡散した世界で自分と同じ時間にい
る、「もう1人の自分」とも呼ぶべきものだと。

そして、こうして協力者を募れば必ずやってくるもう1つの影。不
吉な鐘の音が呼び起こす、「敵対者」たち。

彼らもまた、並行世界の自分自身なのだろう。同じようにヤーナム
へやってきて、何が彼らを狂わせ、そんな剥き出しの悪意へと向かわ
せたのだろうか。

いや、そんな事はどうでも良い。どうせそんなもの、人とは呼べな
い。

ジェヴオーダンはノコギリ鉋をバチンと閉じ、協力者は仕込み杖を
展開させ、重苦しい音の響く地下墓へと進んでいった。

伝説の使い魔だという、ガンダールヴ。それが複数人いるなどと言
うことが考えられるのだろうか。

いや、現実問題この少年の左手にあるのがガンダールヴのルーンで
ある以上、紛れもなくこの少年もガンダールヴだ。そして自分自身も

ガンダールヴであること、それは間違いない。

そして、この悪夢。まるで自分のなぞってきた道を辿るかのよう
な、それでいてどこか違和感を覚えていたこの悪夢。

間違いない。この少年は。

「お前は、俺か……！」

「……わかつたら、相棒。殺しても無駄だ。そいつはお前がお前の居
場所にいる限り、何度だってそれを奪いにやってくるんだ」

赤黒い、影のような少年が顔を上げる。デルFRINGガーは『閻霊』と
呼んでいた。その顔は激しい怒りに歪んでいるが、それでも、ほんの
10代程度の幼い少年であるように見えた。

「まだ、子供じゃあないか……！」

自分が辿ってきた道を、本来歩んでいた別の少年。いや、自分と少
年だけではない。数多に拡散する世界の、並行するいくつもの「自分」
の、その1人。

この悪夢も、きっとデルFRINGガーを手に取った全ての「自分」た
ちが歩んだ道だったのだろう。皆一様にトリスティンを抜け、フーケ
を倒し、アルビオンへ訪れ、そしてこの場所へ集約してしまうのだ。
「くっ……」

少年が受け身を取り、再び距離が開く。自分と同じものなのであろ
う、デルFRINGガーを低く構えて、そしてまた跳んできた。

受け止めなければ。この怒りは彼1人のものではない、自分のもの
でもある。たとえ殺しても無駄だとしても、受け止めなければいけな
い。

「うおお……っ!?!」

だが、突如として衝撃が走った。天井が崩れ、それとともに何か落
ちてきた。

疾風のようなものが真後ろに現れた。赤黒い少年の影でもない、見
覚えのない暗い影。そいつは手に、切り詰めた小型のショートソード
のようなものを持っていた。

ジェヴォーダンはその影が自分に向け殺意を持って飛び込んでき
た事に気付いた。だが、目の前からはあの少年も迫っている。

避け……切れない！

一瞬の判断だった。少年の斬撃を右手のデルフリンガーで受け止め、背後からの一撃には体を捻り、その剣が繰り出した突きを左腕で受け止めた。前腕を剣が貫通し、血が噴き出す。

そうして両方の攻撃を無理くり受け止め、全員の動きが止まった。ジエヴォーダンのコートが、残った衝撃でたなびく。

ジエヴォーダンは言葉を失った。痛みのせいでも、怒りによってでもない。ただ驚きのあまりに、目を見開いていた。

背後から襲いきた刺客。目深に被ったフードからゆつくりと顔のぞかせ、”彼女”はニヤリと微笑んだ。

「また会ったねえ、使い魔さん」

「土、くれ……!?!」

全く予想外の事態だった。この悪夢にあつたのは、少なくとも数多くの「自分」の記憶であり、自分はそのに対する闖入者の立場だったはずだ。

だが目の前にいる彼女は、『土くれ』のフーケは、自分を知っている。つまり自分の知る、自分の世界のフーケだ。それが何故、こんな悪夢の中にいるのか。

「どこだかもわかりもしないところに放り出されて、何か音がするから来てみれば……まさかこんな所で顔を合わせようだなんてね」

「貴様、何故この悪夢にいる!」

「悪夢だって？ アンタがそのペンキ被りに襲われてるもんだから助太刀してやろうと思っただけさ！ アンタにはたつぷり礼があるんだ、これが悪夢なもんかい！」

ジエヴォーダンの腕から剣を引き抜き、左手に杖を持ち、短くルーンを唱える。地面から盛り上がった土が、徐々に人型を形成する。

が、その変体は歪な形のまま終わった。不定形の泥人形のような物が形成されただけで、それはフラフラとジエヴォーダンへ向かってくる。

「な、なんだ？」

敵意があるのは間違いないのだろう。しかし、そのゴーレムなのか

どうかともわからない不定形の泥人形は、少年の剣を止めるジエヴオーダンにたどり着くこともなく崩れ落ちてしまった。

「チツ……どうせこれが夢なんだったら、魔法くらい自由に使わせて欲しいもんだね。なんだって錬金以外は上手くいかないんだい」

そして今度は、杖を手を持ったショートソードへ向ける。やや歪なその剣が、金属とは思えないような複雑な変形をしたかと思うと、今度はレイピア状の刺剣のようなものに変化した。

「精神力はとめどなく出てくるんだけどねえ。まあいいや、なんだか身体が軽くて、こつちの方が手っ取り早いからねえ！」

フーケが刺剣を突き出してくる。だが少年の方も待っていない。迫り来る斬撃をいなしながら、返す刃でフーケの刺剣を弾こうとし、しかしその速度の方が勝り、肩のあたりを貫かれる。

「ぐっ?！」

予想を上回る、速さと力強さ。刺し傷であるため出血は少ないものの、これまでのフーケを思えば考えられない一撃。その身のこなしも、あのゴーレムの上で戦った時には考えられなかったものだ。

だがそれよりも……その動きは、ジエヴオーダンにとってどうしても既視感のあるものだった。

まさか。だがそれしか考えられない。

迫り来る2つの斬撃をなんとかかわしながらも、ジエヴオーダンはフーケへと問いを投げた。

「土くれ! 貴公、アルビオンで何か獣と戦ったか!」

「は、はあ?！」

少年を弾き飛ばし、フーケの攻撃を受け止める。身長差があるため、フーケがジエヴオーダンの懐に潜り込むような形で、剣戟を受け止められてしまう。

「それが、なんだってんだい!」

「その獣の、『血液』を、身体に取り込んだか!」

「……っ!？」

飛び込んできた少年の攻撃を、2人ともはね飛ばすようにかわす。少年はフーケも邪魔だと判断したのだろうか、今度はフーケへ向けて飛

び込むような斬撃を加えるが、フーケはそれをひらりとかわす。

「お前、なんでアルビオンにあんな獣が現れたって知ってるんだい？」

「入れたんだな、身体に血を」

「……返り血を浴びた時に、そりゃあ傷口に触れたりもしたかもしれないけど。それが？」

少年とフーケが、ジエヴォーダンを挟むように立つ。フーケは注意深くジエヴォーダンの言葉を聞き、少年も気配を伺って立ち止まる。一瞬の静寂が訪れた。

「……クツクツ……ハハ、アーツハツハツハツハツハツ!!」

その静寂を破ったのは、ジエヴォーダンの……高らかな、笑い声だった。

「な、なんだい……？」

「クハハハハハ!! そうか! ”そう来る”か! こいつは愉快だ、実に愉快じゃあないか! まるで笑劇だ!^{ファルス} 獣と蔑んでいた貴公が狩人など!」

全て合点がいった。そんな風な笑い方だった。高らかではあるが馬鹿にしたようではなく、どちらかといえばジエヴォーダン自身が自虐し、気の抜けてしまったかのようなそんな笑い声。

フーケも拍子抜けするそんな高笑いの後、ジエヴォーダンは少年に向き直った。フーケに、背を向けるようにして。

「え……？」

「土くれ、この少年を倒す。話はそれからだ、手を貸せ」

「は、はあ!」

今まさに飛びかからんと構えていた少年だったが、今度の先手はジエヴォーダンが優った。予備動作の無い動きから一気に踏み込んだため、少年も反応が遅れる。

「な、なんで私がお前に!」

「お前はその血で人を超えたのだ! もはやお前は獣ではない、狩人だ! ならば仇なす獣を狩る、それだけだ!」

それでもフーケは、刺剣をジエヴォーダンへと突き出す。よろけていた少年を弾き飛ばしてフーケの刺突を受け止め、今度はフーケの方

へ向き直った。

「誰がお前なんかに手を貸すものかよ、人をコケにしてくれやがって！」

「……錬金はできるんだったな」

「人の話を……は、何？ 錬金？」

ジェヴオーダンの背後から少年が斬りかかる。それをいなしながら、ジェヴオーダンは懐から取り出した注射器を自らの太腿のあたりに突き刺した。

フーケも攻めの手を緩めないが、ジェヴオーダンは2人を同時に捌いてみせる。そしてさらにフーケへと叫んだ。

「俺の言う通りの物を錬金しろ、その方がお前の手にも馴染むはずだ！」

「だ、誰がお前の指図なんか！」

「お前が錬金するのは、引き寄せあう星の『隕鉄』だ！」

「……!？」

この男、とんでもないことを言い出す。そんなもの、スクウエアクラスの土のメイジだって錬金できるかわからない。

「バカ言ってるんじゃないよ！ 私は……」

「いいや、今のお前にはできる」

「う……!」

「いいか、錬金するのはふた振りの短刀だ。だが引き寄せあい、重ね合わせる事で1つの刃になる、振くれた剣だ」

フーケは、ドクンと自分の内面に何か予感のような物が渦巻くのを感じた。

何故だろう。この男の言っている物が、簡単にイメージできる。際限なく湧き上がる精神力のおかげで、なぜかどんな困難な魔法も、唱えられてしまう気がしてくる。

「いいか、お前が狩人たるならば、その『仕掛け武器』を生み出し、使いこなしてみせろ！」

「——っ!!」

ジェヴオーダンが少年の斬撃に押され、わずかに体勢を崩す。それ

と同時にフーケは、杖を引き抜き自らが持つ刺剣へと向けていた。きつとそのふた振りの剣は、こんな風に無骨で、左右で不釣合いで、振られていて、でも鋭く、そして慈悲を孕んだ殺意に満ちていて……。「ぐっ……！」

姿勢の崩れたジエヴオーダンがよろけ、少年が赤黒いデルフリンガーを構える。また身体を貫くほどの突きを繰り出すつもりだろう。今度こそは、血も足りるかわからない。

だが、ジエヴオーダンは覚悟などしなかった。もっともつと強い、予感のままに呟いた。

「やれ、”フーケ”」

次の瞬間、少年の横を鋭い影が、きりもみを描くように通り抜けた。それがフーケが編み出した、ふた振りの振くれた刃によるものだと、ジエヴオーダンはすぐに理解できた。

何度にもわたって切り裂かれる少年。膝をついたその背後で、フーケが2つの剣を近づける。

そして、引き寄せあうそれを振り抜き、火花を散らして重ね合わせる。

そこには一振りの、重苦しく振くれた刃があった。

「気安く呼ぶんじゃないよ」

次の瞬間、赤黒い少年の体に、フーケがその右手を突き込んでいた。